

# 桜井畑遺跡 A・C 地区

甲府勤労者総合福祉センター建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



1990. 3

山梨県教育委員会  
山梨県商工労働部

## 序 文

本報告書は、甲府労働者総合福祉センターの建設に先立ち発掘調査された山梨県甲府市和戸町字桜井畑地内に所在する桜井畑遺跡（A地区・C地区）についてその成果をまとめたものであります。

甲府市東部地域にあたる本遺跡付近は、古墳時代後期以降に甲府盆地における中枢地のひとつとなった春日井町付近を中心に形成された勢力と深く係わりをもった地域であり、盆地北縁の山麓に形成された積石塚群や、春日居町寺本廃寺などに瓦を供給した川田瓦窯址の存在もその関連性を示すものと考えられております。この地域は、律令時代には『和名抄』に記載された山梨郡表門郷に属していたと推定されておりましたが、本遺跡に近接した大坪遺跡の調査で「甲斐国山梨郡表門」と刻まれた土器が出土し、あらためてその位置が確認された地域でもあります。また、中世においては甲斐武田氏が永正16年に古府中の鷹岡ヶ崎館に移転するまでの約半世紀余りにわたって居を構えた川田館が存在しており、甲斐国の古代から中世に至る歴史を考えるうえで非常に重要な地域であると思われれます。

桜井畑遺跡（A地区・C地区）は、平等川によって形成された沖積地の微高地上に立地し、すでに報告いたしました桜井畑遺跡（B地区）から200m余り西に位置しております。B地区においては古墳時代から奈良・平安時代に至る竪穴式住居址が18軒発見され、当時の集落の一部を明らかにすることができました。今回報告いたしますA地区では、調査の結果、古墳時代前期の方形低墳墓3基、土壇1基、奈良・平安時代の住居址7軒、掘立柱建物1棟、瓦溜遺構1基、溝8本、土壇3基、中・近世の竪穴状遺構1基、掘立柱建物址1棟、土壇墓3基、溝5本などが発見されておりますが、これらの遺構の内容は竪穴住居を主体とした一般集落であるB地区とは著しく異なった在り方を示しております。これらのことから、同一微高地上の居住域と墓域などの空間利用の状況や、古代の郷の内部にみられる寺社や行政的な施設の配置なども問題視され、また中世の川田館周辺の状況も垣間見ることができました。

本報告書が、古代史及び中世研究の一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜りました関係機関各位、地元の方々ならびに直接調査、整理にあられた方々に厚く御礼申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯 貝 正 義

## 例 言

1. 本書は、山梨県甲府市和戸町字桜井畑1303番地他に所在する桜井畑遺跡（A地区・C地区）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、甲府勤労者総合福祉センター建設事業（リパース和戸）に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が県商工労働部の令達を受けて実施した。
3. 発掘調査、出土品の整理および報告書の作成は山梨県埋蔵文化財センターが行ない、同機関坂本美夫、中山誠二が担当した。執筆は、第1章、3、4章、第5章2節～4節、第6章を中山が、第2章を坂本が、第5章第1節を外山秀一が行なった。
4. 写真撮影は、遺構を中山誠二、遺物を塚原明生（日本写真家協会）が行なった。
5. 遺跡の微地形分析および土層中の花粉分析、プラント・オパール分析については、(財)帝京大学山梨文化財研究所に委託し、同研究所古植物・地理研究室長外山秀一氏に分析結果の報告をいただいた。
6. 本報告書に係わる出土品および記録図面、写真などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまでの間、下記の機関、方々からご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。（敬称略、五十音順）  
小野正敏、河西学、榑原功一、工業普通、坂井秀弥、鈴木稔、田辺征夫、谷口一夫、都出比呂志、萩原三雄、平野修、藤沢良祐、宮沢公雄、三好美穂  
甲府市教育委員会、山梨県勤労青年センター、東勝寺、川田地区自治会

# 凡 例

1. 本書の挿図縮尺は原則として次のとおりである。

## 遺 構

遺跡位置図 1/50,000、遺構配置図 1/500・1/600、住居址 1/60、カマド 1/30、掘立柱建物址  
1/60・1/40、瓦溜遺構 1/40、溝状遺構 1/200、方形低墳墓 1/200、土墳墓 1/30

## 遺 物






土器実測図 1/3、石臼 1/6、瓦拓本 1/6、小型瓦 1/3

2. 遺構挿図内の水系レベルは海拔高を示す。





3. 遺構、遺物の記述、挿図について

①出土土器については出土地点を優先し、その遺構に確実に供伴すると判断されるものに他に混入品も含めて同一遺構出土遺物として図示する。

②図版中のスクリーン・トーンは以下のような内容を示す。

遺構		は焼土範囲		は地山		
遺物		は須恵器		は陶磁器		は瓦断面

## 『桜井畑遺跡A・C地区』正誤表

訂正箇所	誤	正
序文 L8	春日井町付近	春日居町付近
P3 L8-9	東西 km、南北 km	東西19km、南北33km
P4 第2遺跡	15. 春日井町国府	15. 春日居町国府
P6 L26	カマド南側 cm四方	カマド南側40cm四方
P7 L37	N-□° - E	N-25° - E
P28 第14図		 軒平瓦A類
P28 第14図		 丸瓦C類
P67 第36図	第36図 川田館跡位置 図と水路	第36図 川田館跡位置図 と水路 (田代・榊原1988より)
P69 L10	白居直元	白居直之

# 目 次

序		
例 言		
凡 例		
第 1 章	調査の実施と経過	1
第 1 節	発掘事務経過	1
第 2 節	調査の実施	1
第 2 章	遺跡概況	3
第 1 節	遺跡の位置と地理的環境	3
第 2 節	遺跡周辺の歴史的環境	3
第 3 章	遺 構	5
第 1 節	古墳時代の遺構	5
(1)	方形低墳墓	5
(2)	土 墳	6
第 2 節	奈良・平安時代の遺構	6
(1)	住居址	6
(2)	掘立柱建物址	7
(3)	瓦溜遺構	8
(4)	溝状遺構	8
(5)	土 墳	9
第 3 節	中・近世の遺構	10
(1)	竪穴状遺構	10
(2)	掘立柱建物址	10
(3)	土墳墓	10
(4)	溝状遺構	10
第 4 節	C地区の遺構と遺物	11
(1)	本調査区	11
(2)	試掘調査区	12
第 4 章	出土遺物	13
第 1 節	縄文時代	13
(1)	土 器	13
(2)	石 器	13
第 2 節	古墳時代	13
(1)	土 器	13
1)	古式土師器の分類	13
2)	主な遺構の出土遺物	14
第 3 節	奈良・平安時代	16
(1)	土 器	16
1)	土器分類	16

A. 土師器の分類	16
B. 須恵器の分類	18
2) 土器の製作技法	19
A. 土師器	19
B. 須恵器	20
3) 主な遺構の出土土器	21
(2) 土製品	27
A. 土錘	27
B. 玉	27
C. フィゴの羽口	27
(3) 瓦	28
1) 瓦の分類と構成	28
2) 瓦の製作技法	30
3) 主な遺構の出土瓦	32
(4) 金銅製品	33
(5) 鉄製品	33
(6) 琥珀製品	33
第4節 中・近世	33
(1) 土器	33
1) 土師質土器	33
2) 瓦質土器	35
3) 陶磁器	35
4) 主な遺構の出土土器	36
(2) 石製品	40
1) 石臼	40
2) 碁石状石製品	40
3) 凹石	40
(3) 古銭	40
第5章 考察	41
第1節 桜井畑遺跡の立地条件の変化	41
第2節 古墳時代の遺構と遺物	48
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物	59
第4節 中・近世の遺構と遺物	66
第6章 まとめ	68
<参考・引用文献>	69
<別表> 1 土器観察表	72

## 挿 図 目 次

第1図	A～C地区周辺地形図	2	第19図	5号溝土師質皿法量分布	36
第2図	遺跡位置図	4	第20図	11号溝出土土師質皿法量分布	38
第3図	古墳時代の土器分類	14	第21図	1号竪穴出土土師質皿法量分布	40
第4図	奈良・平安時代の土師器の分類	17	第22図	桜井畑遺跡周辺の微起伏	42
第5図	須恵器の分類	18	第23図	桜井畑遺跡周辺の微地形	43
第6図	土師器の調整技法	20	第24図	プラント・オバール分析結果	44
第7図	2号住食膳具法量分布	21	第25図	甲府盆地の弥生後期後葉古墳初頭土器分類	48
第8図	5号住食膳具法量分布	23	第26図	弥生後期後葉～古墳初頭土器分類2)	49
第9図	7号住食膳具法量分布	23	第27図	甲府盆地内前期主要古墳及び方(円)形低墳墓	51
第10図	1号竪立柱建物址出土土器法量分布	24	第28図	東山古墳群と上の平遺跡	52
第11図	1号溝出土土師質皿法量分布	25	第29図	上野遺跡と出土土器	53
第12図	2号溝出土土師質皿法量分布	26	第30図	姥塚遺跡低墳墓群	55
第13図	9号溝出土土師質皿法量分布	27	第31図	方形低墳墓の編年の位置	56
第14図	瓦の分類	28	第32図	I期環口径：底径比分布	59
第15図	瓦の名称	29	第33図	II期環口径：底径比分布	59
第16図	各遺構の鉄製品出土重量	32	第34図	III期環口径：底径比分布	60
第17図	金銅製品	32	第35図	IV期環口径：底径比分布	60
第18図	土師質・瓦質土器分類	34	第36図	川田館跡位置図と水路	67

## 表 目 次

表1.	瓦の分類とその構成一覧	30		
表2.	土器観察表			
	1号低墳墓	72	4号溝	75
	2号低墳墓	72	5号溝	75～76
	3号低墳墓	72	6号溝	76
	1号住居址	72	9号溝	76
	2号住居址	72～73	10号溝	76
	3号住居址	73	11号溝	76～77
	4号住居址	73	12号溝	77
	5号住居址	73～74	1号竪立柱建物址	77
	6号住居址	74	4号土墳	77
	7号住居址	74	1号墓	77
	1号溝	74～75	1号竪穴	77
	2号溝	75	A地区遺構外出土土器	78
	4号溝	75	C地区出土土器	78



## 図版目次

- 図版 1 A地区道構配置図  
図版 2 C地区試掘坑配置図  
図版 3 1号低墳墓  
図版 4 2号低墳墓  
図版 5 2号低墳墓遺物出土状況  
図版 6 3号低墳墓  
図版 7 3号低墳墓セクション図  
図版 8 1号・4号・6号住居址  
図版 9 2号・3号住居址及びカマド  
図版 10 5号・7号住居址  
図版 11 1号～4号・6号溝  
図版 12 5号・6号・8号溝・1号瓦溜遺構  
図版 13 7号・9号～12号溝  
図版 14 1号掘立柱建物址  
図版 15 2号掘立柱建物址  
図版 16 1号～4号土坑  
図版 17 1号整穴・1号～3号墓  
図版 18 C地区集石及び溝状遺構  
図版 19 C地区試掘坑及びセクション図  
図版 20 1号低墳墓出土土器  
図版 21 2号低墳墓出土土器(1)  
図版 22 2号低墳墓出土土器(2)  
図版 23 2号低墳墓出土土器(3)  
図版 24 3号低墳墓出土土器  
図版 25 1号住居址出土土器  
図版 26 2号住居址出土遺物  
図版 27 3号住居址出土土器  
図版 28 4号・6号住居址出土土器  
図版 29 5号住居址出土土器(1)  
図版 30 5号住居址出土土器(2)  
図版 31 5号住居址出土土器(3)  
図版 32 5号住居址出土土器(4)  
図版 33 5号住居址出土土器(5)  
図版 34 5号住居址出土土器(6)  
図版 35 5号住居址出土土器(7)  
図版 36 7号住居址出土土器(1)  
図版 37 7号住居址出土土器(2)  
図版 38 1号溝出土土器(1)  
図版 39 1号溝出土土器(2)  
図版 40 1号溝出土土器(3)  
図版 41 1号溝出土土器(4)  
図版 42 1号溝出土土器カマド  
図版 43 2号溝出土土器(1)  
図版 44 2号溝出土土器(2)  
図版 45 4号溝出土土器  
図版 46 5号溝出土土器(1)  
図版 47 5号溝出土土器(2)  
図版 48 5号溝出土土器(3)  
図版 49 5号溝出土土器(4)  
図版 50 5号溝出土土器(5)  
図版 51 5号溝出土土器(6)  
図版 52 6号・10号溝出土遺物  
図版 53 9号溝出土土器(1)  
図版 54 9号・12号溝出土土器  
図版 55 11号溝出土土器(1)  
図版 56 11号溝出土土器(2)  
図版 57 11号溝・3号墓出土土器  
図版 58 1号掘立柱建物址出土土器(1)  
図版 59 1号掘立柱建物址出土土器(2)  
図版 60 1号整穴・1号墓・4号土坑出土土器  
図版 61 A地区遺構外出土遺物  
図版 62 C地区出土遺物  
図版 63 C地区1号集石内出土石臼  
図版 64 小型瓦(1号溝・2号住)  
図版 65 1号住居址出土瓦(1)  
図版 66 2号住居址出土瓦(1)  
図版 67 2号住居址出土瓦(2)  
図版 68 3号住居址・7号住居址出土瓦  
図版 69 瓦溜遺構出土瓦(1)  
図版 70 瓦溜遺構出土瓦(2)  
図版 71 瓦溜遺構出土瓦(3)  
図版 72 瓦溜遺構出土瓦(4)  
図版 73 瓦溜遺構出土瓦(5)  
図版 74 出土瓦(2号溝・4号溝・2号  
低墳墓・A-3グリッド・表土)  
図版 75 出土瓦(9号溝・11号溝)  
図版 76 C地区出土瓦  
図版 77 中世墓出土銭

## 写真目次

- 図版 78 遺跡周辺航空写真
- 図版 79 1. 1号・3号低墳墓・5号・9～12号溝 2. 1号・3号低墳墓 3. 1号低墳墓主体部 4. 1号低墳墓壘出土状況
- 図版 80 1. 2号低墳墓北東コーナー 2. 2号低墳墓周溝内遺物出土状況 3. 3号低墳墓東周溝内造出し状施設
- 図版 81 1. 3号低墳墓 2. 3号低墳墓北周溝堆積状況 3. 3号低墳墓周溝内遺物出土状況
- 図版 82 1. 1号・6号住居址 2. 4号住居址 3. 2号・3号住居址
- 図版 83 1. 2号住居址カマド 2. 3号住居址カマド 3. 5号住居址遺物出土状況 4. 5号住居址遺物出土状況  
5. 5号住居址完掘状況
- 図版 84 1. 1号掘立柱建物址 2. 1号掘立柱建物址ピット12内土器一括出土状況 3. 2号掘立柱建物址
- 図版 85 1. 瓦溜遺構(西から) 2. 瓦溜遺構(北から) 3. 2号土壇
- 図版 86 1. 1号～3号溝 2. 1号溝金銅製品出土状況 3. 1号溝・2号・3号住居址
- 図版 87 1. 5号溝(東から) 2. 5号溝(西から) 3. 5号溝内耳土器出土状況 4. 6号溝
- 図版 88 1. 9号～12号溝 2. 1号墓 3. 2号墓
- 図版 89 1. 1号竪穴 2. C地区第4トレンチ 3. C地区集石遺構・溝
- 図版 90 1号低墳墓(1-8)、2号低墳墓(9・10)出土土器
- 図版 91 2号低墳墓出土土器
- 図版 92 3号低墳墓出土土器(1-7)、1号住居址出土土器(8-11)、2号住居址出土土器(12・13)
- 図版 93 2号住居址(1-10)
- 図版 94 3号住居址出土土器・置きカマド(1-3・5)、4号住居址出土土器
- 図版 95 5号住居址出土土器(1-27)
- 図版 96 5号住居址(1-34)
- 図版 97 5号住居址灯明具
- 図版 98 7号住居址(1-14)、1号溝(15・16)
- 図版 99 1号溝(1-19)
- 図版100 1号溝(1-12)
- 図版101 2号溝(1-18)
- 図版102 2号溝(1・2) 2号低墳墓(4・5・13-19)
- 図版103 5号溝(1-9) 2号低墳墓南溝(10-12) 5号溝(13-20)
- 図版104 5号溝(1-33) 6号溝(34-36) 9号溝(37-43)
- 図版105 9号溝(1-9) 10号溝(10・11) 11号溝(12-23)
- 図版106 11号溝(1) 3号墓(2) 12号溝(3-8) 1号竪穴(9-18)
- 図版107 1号掘立柱建物址(1-18) 1号掘立柱建物址灯明環(上から) A-4グリッド土鏝(19)  
A-8グリッド(20)
- 図版108 小型瓦 八葉素弁軒丸瓦 1号墓出土鉄
- 図版109 第1群瓦・第3群瓦
- 図版110 瓦溜遺構出土第2群瓦
- 図版111 鉄製品及び鉄滓

# 桜井畑遺跡 A・C 地区

甲府勤労者総合福祉センター建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990. 3

山梨県教育委員会  
山梨県商工労働部

# 第1章 調査の実施と経過

## 第1節 発掘事務経過

昭和60年	試掘調査の実施
昭和63年4月21日	A地区発掘通知を文化庁に提出する。
昭和63年4月18日	A地区発掘調査を開始する。
昭和63年12月3日	遺跡見学会を実施する。
昭和63年12月12日	A地区発掘調査終了する。
昭和63年12月15日	県文化課、労政課、県埋蔵文化財センターによる計画変更の打ち合わせ。
昭和63年12月23日	A地区遺物発見通知を甲府警察署に提出する。
平成1年2月13日	C地区発掘通知を文化庁に提出する。
平成1年2月6日	C地区発掘調査を開始する。
平成1年2月23日	C地区発掘調査終了する。
平成1年3月14日	C地区遺物発見通知を甲府警察署に提出する。

## 第2節 調査の実施

### 1. 調査方法及び発掘区の設定

A地区は現在の山梨県勤労青年センターグランド西側の5800㎡の地域であり、C地区はその西側3800㎡の地点を呼ぶ。

調査区の設定は既に報告書が刊行されている桜井畑遺跡B地区を含めて全体に共通したメッシュをかけ、グリッド設定を行なった。A地区の基点となる点は、B地区A-1グリッド南西の杭から西へ200m、南へ40mのポイントで、A地区の場合10mグリッドを基本とする。調査区南西端の基点より東に向けてA～H、北に向けて1～8の杭番号を設定した。グリッドの表わし方はその南西端を基点にA-1グリッドという様に表示する。

発掘区内の調査は排土を現場内で処理する必要があったため、段階的に調査を行なった。まず調査区西側3分の1を調査し、その後残る調査区の北側の調査を実施した。A地区南東地区については遺構の分布が極めて薄いと判断されたためトレンチ調査を行なった。

C地区は南側の150㎡の地域が本調査区で、他は盛り土保存地域となるため試掘調査区とし、16個所の試掘坑と3個所のトレンチの調査を行なった。

### 2. 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

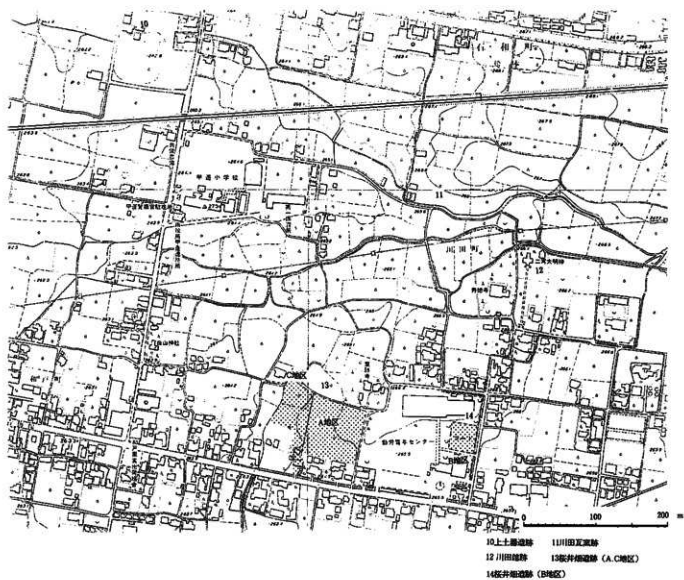
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 坂本美夫・中山誠二

調査員 高野俊彦 今福利恵

作業員及び整理員 武井美知子 平沢節子 平沢則子 倉田勝子 池谷富士子 名取つる子 河野泰子 福田妙子 渡辺百合子 金井いく代 岸本美苗 弦間千鶴 一瀬よし子 中林初子 藤巻君江 出月満寿江 矢崎米子 壽田淳子 秋山よしみ 渡辺淑子 矢崎ます子 広瀬和弘 平沢元彦 雨宮豊子 矢崎悦子 矢崎喜美江 馬場かをり 田代佐穂 宇野和子 宇野文子 長田和子 志村文子 山口修平 深沢修 田中政之 宮沢宏明 出月多津子 有坂浩 大嶋徹也 武田真弘 中原章文 中田真弓 新聞俊則 古賀進郎 丸山隆文 若林一毅 矢崎俊二 金井京子 斉藤多喜子 斉藤つね子 江川勝子 渡辺礼子 小林としみ 小林美津代 長田明美 長田可祝

荒川奈津江 角田寛子 長尾美子 後藤良美 松野和美 内藤真千子 出月遊亀子 長田久美  
 子 宮川東 深沢瑞江 宮沢直子 遠藤映子 柏木松江 和田宏美 石川操 柳沢伸 石川幸  
 斎藤泰人 本山雄一郎 五味正年 篠原孝雄 水上実 河西拓也 弦間享 杉山悟 斎木一明  
 深田あわじ 米山八重子 土屋ふじ子 塩島なほみ 渡辺徳子 長田豊子 小林敬子 米山と  
 くの 中沢美智子 中沢典子 池谷千代子 斎藤百代（順不同）



第1図 A～C地区と周辺地形図

## 第2章 遺跡概況

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

桜井畑遺跡A地区及びC地区は、甲府市和戸町字桜井畑地内に所在する。甲府盆地北縁の八人山、大蔵経寺山の南方に位置し、大山沢川、平等川によって形成された沖積地の中の微高地上標高約264mの地点に立地する。

遺跡の所在する甲府市は甲府盆地の中央やや北よりに位置する。東を牧丘町、山梨市、春日居町、石和町、南を中道町、豊富村、玉穂村、西を昭和町、竜王町、敷島町、須玉町、北を長野県南佐久郡川上村と接する東西 km、南北 kmの南北に細長い市域を持つ。市域のほぼ中央付近を境に北側と南側とでは地勢が大きな違いを見せる。北側は湯村、岩窪町～東光寺町～川田町といったあたりから山間地的様相を強め、北側背後の秩父山系へと続く。南側は一度して緩やかな傾斜面となり、次第に盆地底部へと低くなっていく。南側の緩斜面は市域を流れる諸河川が形成した複合扇状地、沖積地である。市域西側を北西から南東方向に流れる釜無川、荒川、中央付近を北から南方向に流れる相川、濁川、市域東側を北東から南西方向に流れる平等川、笛吹川などがある。これらの河川は甲府市南端付近でつぎつぎと合流し、さらに南下して富士川となり太平洋にそそぐ。

遺跡の所在する和戸町のある甲府市東部地域についてみると、北側は秩父山系の前衝である八人山、大蔵経寺山が連なり、その南側に大山沢川と平等川によって形成された扇状地と沖積地が広がる。特に遺跡付近には平等川によって造られたと考えられる微高地が北東から南西方向に向かって帯状にいくつか形成されている。遺跡はこの内の平等川右岸に形成された微高地上に存在する。

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

遺跡の存在する甲府市東部地域は、これまで50カ所に近い遺跡の存在が確認されている。時代は縄文時代から古代、中・近世に至るものである。その中でも特に古墳時代以降に顕著な存在を見せる地域である。

縄文時代の遺跡は、本遺跡北側の大蔵経寺山山裾に点在し、甲府市域内では地蔵堂遺跡、石和町内で畔作遺跡、大蔵経寺前遺跡、松本塚の越遺跡などで前期から中期の遺物が発見されている。本遺跡（A・B地区）からも今回の調査で遺構は発見されなかったが、縄文時代中期の土器片が出土しており、盆地内の微高地上の居住を知ろうと注目される。

弥生時代の遺跡の分布は明確でなかったが、桜井町上土器遺跡および本遺跡から弥生時代後期の土器片が出土しており、周辺地域に集落址などの存在する可能性が高い。

古墳時代になると、盆地北縁地域の勢力が次第に力を増してくる6世紀以降に古墳築造が活発となる。古墳の分布は、沖積地の標高260m付近に琵琶塚古墳、太神さん古墳の存在が知られているが、その内容にいまひとつ確実性を欠き、現時点では積極的な評価はできない。本遺跡北側の山麓から山麓地域に見られる古墳は、横根山根古墳と数基の古墳を除いて、他はすべて積石塚古墳である点に特長がある。この積石塚古墳は西より横根古墳群、桜井古墳群、鞍掛塚古墳（石和町）、大蔵経寺山古墳群（同）などがある。規模的には大型墳の見られない古墳群であるが、総数は164基を数え、県内屈指の数である。本地域の積石塚の初現は5世紀代の時期をめくって現在検討されており、今だに明確な結論が出されていない。しかし、大蔵経寺山古墳群中の無名墳、横根古墳群第39号墳の副葬品等から、遅くとも6世紀はじめ頃までには古墳が造られていたと考えられる。その終焉についても明らかではないが、古墳周辺から収集された遺物のなかに8世紀代と考えられるものが認められ、追慕ないし供養祭祀の行なわれていたことが窺える。

本地域の古墳は、規模のうえからすればそれほど大きなものはない。しかし、後述するように互生座と供給先との関係からすれば、春日居町地域と深い関わりを持つ地域と考えられ、春日居古墳群との関係を想起することができる。春日居古墳群は副葬品、規模とともに新たな権威的存在である寺本奥寺跡などから一つの大勢力を形成し、大化改新に「春日居勢力の評」として建評されたと考えられ、本地域もその領域内に入るものといえよう。



1. 横沢古墳群 2. 3. 坂井古墳群 4. 飯掛塚古墳 5. 大塚塚山古墳群 6. 御堂山古墳 7. 春日井古墳群  
 8. 大坪遺跡(新石器土器出土地点) 9. 大坪遺跡 10. 上土器遺跡 11. 川田瓦窯跡 12. 川田館 13. 坂井細遺跡(A・C地区)  
 14. 坂井細遺跡(B地区) 15. 春日井町国府 16. 寺本廃寺跡 17. 勸修寺園衛 18. 甲斐国分寺跡 19. 甲斐国分寺跡

第2図 遺跡位置図

集落については古墳時代～平安時代を含めて概観すると、古墳の立地とは対称的で、ほとんどが山麓全面に広がる平坦面上に位置し、極めて密度の高い分布を示している。特に注目されるのは生産遺跡が幾つか組み込まれている点である。川田瓦窯址、上土器遺跡、大坪遺跡などがそれである。川田瓦窯址は寺本廃寺へ、上土器遺跡は甲斐国分寺への瓦供給生産址、大坪遺跡は土器生産址と考えられている。

奈良～平安時代は国司を頂点とする山梨郡、八代郡、巨摩郡、都留郡の4郡制による支配体制が確立する。本地域は『和名抄』に見られる山梨郡表門郷の遺称とされる和戸の地名があり、本遺跡より1.4km西方の大坪遺跡から「甲斐国山梨郡表門」の刻書土器が出土し、本地域が山梨郡地域の中の表門郷に属す地域であったことが確認されている。

中～近世の遺跡は、古墳時代以来の範囲を超え、山裾から沖積地の広い地域に密に分布が見られるようになる。中でも、本遺跡に近接する川田町字御所の二の宮神社付近の地は、甲斐武田氏が守護大名から戦国大名に変貌する時期の拠点となった川田館の存在が想定されている。永正16年(1519)、古府中の藤縄ヶ崎の地に館が移されるが、その移転の原因に水害説と体制強化説とがみられ、未だ決着していない。今回の調査で、中～近世の溝が検出され、13世紀～18世紀前半の時期と推定される陶器、土器類の存在が確認され、移転の原因やそれ以降の居住のあり方を考えるうえで参考となろう。

主要遺跡との位置関係を見ると、北西0.35kmに川田瓦窯址、同0.7kmに上土器遺跡、西1.2kmに大坪遺跡、北0.25kmに川田館跡推定地、北東0.29kmに寺本廃寺、国府、南東5.7kmに国分寺、南東3.1kmに国衛等の遺跡や遺称が残り、西2.9kmに『続日本後紀』に表れる酒折宮とも推定されている「酒折宮」が鎮座するなど、本地域は「春日居勢力」の一翼として古代史に大きな比重をもった地域と言える。

## 第3章 遺 構

本章第1節から第3節ではA地区で検出された遺構について古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の時代順に記述し、第4節ではC地区の遺構について述べる。

### 第1節 古墳時代の遺構

#### (1) 方形低墳墓

##### 1号低墳墓(図版3・79)

(位置) D～F-7・8グリッドに位置する。東溝および北溝は調査区北側に展開する。

(形状・規模) 調査された周溝から長辺18m、短辺16m前後の方形プランを呈すると考えられる。周溝規模は、幅2～4.5m、深さ50cmを測る。

(埋葬主体部) 方台部のほぼ中央付近に1×2m、深さ60cmほどの長方形の土壇が検出されている。土壇南側は、深さ40cmほどのテラスとなる。覆土から本遺構にともなう土壇と判断されるが、埋葬遺体や出土遺物はなく、主体部の詳細は不明である。

(出土遺物) 周溝部分覆土中から土器が出土している。南溝のほぼ中央部より壺形土器2個体、西側のコーナーより大型壺胴部が出土している。

##### 2号低墳墓(図版4・5・80)

(位置) 調査区北西のA～D-5～8グリッドに位置する。東側で9～12号溝、南側で5号・6号溝によって切られる。

(形状・規模) 北側周溝および西側コーナーが調査区外に展開する。一辺が28mほどの方形プランを呈する。周溝の規模は、幅5～6m、深さ40cmを測る。

(埋葬主体部) 確認できなかった。

(出土遺物) 西側および南側周溝内部より出土した壺形土器6個体(図版21・22 1～4・6・9)、長頸壺3個体(図版21 5・7・8)が供伴土器と考えられ、図版中の他の遺物(12～41)は平安時代から中世にかけて重複する遺構(1号獨立柱建物址、5・6・9～12号溝)に随伴するものと判断される。

壺形土器のうち1～4・6は胴部から頸部が屈曲し複合口縁を持つもので、9は単純口縁を特徴とする。底部まで残存する壺の中で3・4・6は焼成前の底部穿孔を施す。

##### 3号低墳墓(図版6・7・79～81)

(位置) 調査区ほぼ中央部D～G-3～7グリッドに位置する。

(形状・規模) 長軸33m40cm、短軸27m50cmの長方形プランを呈する。周溝は全周し、ブリッジを持たない。

周溝の幅は4～6m、深さ約1m前後を測るが、北東コーナー部分は1号低墳墓の存在に規制されて周溝幅が狭まる。また、北東周溝中央部分で溝がくびれ、この部分の周溝内5.5×2mの範囲で土壇状の落ち込みを持つ。南側周溝内中央部に2×3mほどの台形の低い造り出し状の施設が存在する。同様の施設は、北側周溝内にも認められるが、その落ち込みや形状は南周溝内のものと比較すると明瞭ではない。

台状部は、22m×17mの方形を呈し、墳丘の盛り土が10cmほどの厚さで残存する部分が認められる。方台部西側から南側縁辺部に、墳丘基底面より20cmほど低いテラス状の遺構が検出されている。

(出土遺物) 周溝南東コーナーおよび南周溝造り出し施設の周辺に土師器の高坏、小型丸底形土器、壺胴上部、須恵器の蓋などが出土している。土師器の高坏は6点、小型丸底形土器4点出土しており、墓に伴った祭祀行為に関連した遺物と推定される。須恵器の蓋は、他の土師器と比較しても時期差があり、墓に伴う継続的な供献行為のものか、混入かは判断できない。



## (2) 土壌

### 4号土壌(図版16)

(位置) 調査区北東部のH-7グリッドに位置する。

(形状・規模) 長軸3m80cm、幅1m60cmほどの楕円形に近い形状を呈する。深さは最深部で50cm程で、底部は起伏を持つ。

(出土遺物) 覆土上層部より古墳時代前期の土師器壺口縁部が出土している。

## 第2節 奈良・平安時代の遺構

### (1) 住居址

#### 1号住居址(図版8・82)

(位置) A・B-4・5グリッドに位置し、6号住居址に切られる。

(形状・規模) 平面プランは長軸5m40cm、短軸3m10cmの隅丸長方形を呈する。壁高は、確認面より3~5cmを測る。

(カマド・床面) カマドは確認できない。床面は、砂層を踏み固めたものである。

(その他の施設) 住居址南東コーナーを中心に平瓦を敷きつめた部分があり、瓦敷の直上に焼土が散在する。同様の施設は2号住居址にも認められる。

(出土遺物) 出土遺物は、土師器の壺4点、環3点、椀1点、蓋1点、高環1点、灰釉小型瓶1点がある。6の高環は混入品と考えられる。瓦敷きに使用された瓦は、平瓦7点、行基葺きの丸瓦1点である。

#### 2号住居址(図版9・82・83)

(位置) B-4グリッドに位置する。1号溝を切る。

(形状・規模) 1号溝と重複するため東西方向は不明であるが、南北3m80cmの方形を呈すると推定される。

(カマド・床面) 瓦組みのカマドが住居址東壁の南に偏って確認された。両袖は、平瓦、丸瓦を突き立て、火燃部の天井部前面を丸瓦で構築している。掘り方は、両袖部分が火燃部より10cmほど深く掘り込まれ、袖の安定を図っている。カマド内からは、壺の底部と焼土が検出された。

(その他の施設) カマド南側に cm四方の範囲で丸瓦と平瓦を敷きつめた施設が検出された。この施設にもなって、土師器の環が3点瓦敷き面におかれている状態で出土している。

(出土遺物) 出土遺物は、土師器の環11点、壺底部1点、手捏ね土器1点、フイゴの羽口1点がある。カマドに使用された瓦は、丸瓦10点、平瓦9点、瓦敷き施設では丸瓦1点、平瓦6点である。

#### 3号住居址(図版9・82・83)

(位置) A-4グリッドに位置する。

(形状・規模) 南北3m、東西3m50cm余りの隅丸長方形を呈すると推定されるが、東側を1号溝と重複するため、東西方向の規模の詳細は不明である。

(カマド・床面) 北東コーナーにカマドが残存する。西側袖のみが残存し、火燃部分から壺が出土している。壺の下部から焼土部分が検出された。掘り方は、60×70cmの楕円形を呈し、深さは床面より10cmを測る。床面は、砂層面を踏み固めたものでやや軟弱である。

(その他の施設) 住居址ほぼ中央部分に60×70cmのピットが検出された。

(出土遺物) カマド内より土師器の鉢1点、壺2点、蓋1点、須恵器の蓋2点が出土している。

#### 4号住居址(図版8・82)

(位置) B-5グリッドに位置し、1号溝と重複する。

(形状・規模) 長軸4 m90cm余り、短軸2 m80cmの長方形プランを呈する。掘り込みは確認面より2～3 cmと非常に浅い。

(カマド・床面) カマドなし。床面は砂層上面を踏み固めたもので、中央部がやや堅緻である。

(出土遺物) 床面直上より土師器の坏4点、壺口縁部1点、甕底部1点、皿1点、蓋1点、須恵器の底部1点および鉄滓が出土している。

#### 5号住居址(図版10・83)

(位置) A-5グリッドに位置する。

(形状・規模) 長軸をほぼ南北方向にとり、東壁2 m80cm、西壁2 m40cm、南壁1 m90cm、北壁1 m60cmの隅丸台形を呈する。深さは南側で約30cm、北側で5 cmを測る。

(カマド・床面) カマドの施設はない。床面は、砂層上面で軟弱である。遺物の出土状況から、灯明皿の収納施設としての小屋状の施設と考えられる。

(その他の施設) 住居中央部に直径約1 m前後、深さ5 cmほどの浅い窪み部分をもつ。

(出土遺物) 窪穴の中央部に、土師器坏が大量に、数枚単位で重なった状態で検出されている。土師器の坏は、復元実測可能なもので78個体で、うち45個体には、内面に煤状炭化物の付着が認められることから、多くは灯明皿として利用されたものと推定される。他の遺物としては、緑釉の香炉蓋1点、琥珀製の小玉1点、フィゴの羽口2点が出土している。

#### 6号住居址(図版8・82)

(位置) A・B-5グリッドに位置し、1号住居址と重複する。

(形状・規模) 東壁3 m、西壁3 m30cm、南壁2 m90cm、北壁2 mの隅丸台形状を呈する。深さは確認面下約5 cmを測る。床面は1号住居址床面よりわずかに下がる。

(カマド・床面) 東壁中央部よりやや北側に焼土がわずかに認められるが、カマドの施設は確認できない。床面は砂層上面を踏み固めたものでやや軟弱。

(その他の施設) 直径40cmほどの隅丸台形を呈するピットが、南東コーナーより1 mほど内側に存在する。

(出土遺物) 土師器の壺口縁部2点が出土している。

#### 7号住居址(図版10)

(位置) A-4グリッドに位置し、調査区の西側にのびる。

(形状・規模) 東西は不明であるが、南北4 m10cm程の隅丸方形プランを呈すると考えられる。深さ約20cm。

(カマド・床面) カマドは確認されていない。床面は砂層上面を踏み固めたもので、ピットは確認されていない。

(出土遺物) 2号住居址と同類の丸瓦が2点出土している。

### (2) 掘立柱建物址

#### 1号掘立柱建物址(図版14・84)

(位置) A・B-5・6グリッドに位置する。2号低墳墓を切り、5号・6号溝によって切られる。

(形状・規模) 南北11m、東西6 mの2間×4間の建物址である。主軸はN-□°-Eをさす。柱穴間の距離は西列(P1～P5)で2 m40cm、2 m80cm、2 m60cm、2 m、東列(P9～P13)で2 m60cm、2 m80cm、2 m60cm、2 m、北列および南列ではほぼ2 m50cmの間隔をとる。身舎部分は2間×3間の側柱を持ち、ピット3と11の間に浅い東柱が1穴存在する。身舎部分の南側には1間(2 m)の庇部分を有する。ピットの規模は建物址部分で一辺90cm～1 m40cmの方形乃至不整形円形を呈し、ピット内に直径30～50cmほどの柱穴が存在する。深さは40～80cmを測る。庇部分のピット(P5・P13)の規模は、平面は建物身舎部分の側柱の規模と近似するが、

深さは20～30cm程度で浅い掘り込みである。

（出土遺物） 建物側柱の南東コーナーに存在するビット12の覆土上面に土師器の坏および小型坏が32点集中して検出されている。これらのうち21点には内面に煤状炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたものと判断される。遺物の出土状態から建物の高築時における祭祀行為の痕跡とも考えられる。ビット内出土遺物より建物廃棄時の時期は平安時代前期の9世紀後半頃と考えられ、建物使用時期はこれより古い時期と考えられる。

### （3）瓦溜遺構（図版12・85）

（位置） B-1・2グリッドに位置する。

（形状・規模） 瓦の集中する地点は、長軸2m90cm、短軸1m80cmの楕円形の浅い窪地部分にある。窪地の深さは、最深部で確認面より30cmを測る。

（出土遺物） 平瓦および玉縁口縁を有する丸瓦が、多量に重なりあうように集中して出土している。平瓦のうち図版73-17は、隅切りを持つ平瓦である。

### （4）溝状遺構

#### 1号溝（図版11・86）

（位置） 調査区西側のA・B-1～5グリッドに位置する。北端部は2号低墳墓や5号・6号溝との重複関係が激しく、確認困難であった。2号・3号・4号住居址、2号・3号溝に切られる。

（形状・規模） 溝幅は、70cm～2mで、調査区西側を南北方向に緩やかに蛇行しながら流下する。溝の深さは、40～50cmを測る。

（溝内施設） A・B-3・4グリッド付近でテラス状の平坦部を持つ。B-4グリッド付近に直径5cmほどの杭列が5穴発見されている。

（出土遺物） 溝覆土内より多量の土器が出土している。土器には土師器の壺、坏、皿、蓋、手捏ね土器、置きカマド、須恵器の高台付皿、壺などがある。溝の使用時期は出土土器から奈良時代から平安時代前期と考えられる。

#### 2号溝（図版11・86）

（位置） A・B-2グリッドに位置し、1号溝と重複する。

（形状・規模） 幅1m、深さ約30cm、長さ17mの溝が調査区南西部に東西方向に走る。溝の西側は調査区西側にさらに展開し、東端部は徐々に浅くなって確認困難になるが、本来はさらに東方向にのびていた可能性がある。

（溝内施設） 1号溝重複部分に直径50cmほどのピットが2個存在する。溝東端部で1号土壇と重複する。

（出土遺物） 土師器の皿形土器4点、坏14点、蓋1点、鉢1点、台付壺1点、壺2点、須恵器の蓋1点が出土している。出土土器から平安時代前期の9世紀後半のものとされる。

#### 3号溝（図版11・86）

（位置） A・B-2グリッドに位置し、2号溝から5mほど南に平行してのびる。

（形状・規模） 長さ17m、幅1m、深さ30cmほどの溝が東西方向に走る。西側は調査区外へ展開し、東側も2号溝同様にさらにのびる可能性がある。

（出土遺物） なし。

#### 4号溝（図版11）

（位置） C-4グリッド。

（形状・規模） 幅90cm～1m、深さ25cmほどの溝が、L字形にのびる。溝の南端はC-4グリッド中央部分で途切れる。

(出土遺物) 平安時代の環4点、皿1点、行基葺きの丸瓦1点が出土している。

#### 7号溝(図版13)

(位置) C-7グリッドから南側にのびる。北端部は、11号溝と重複する。

(形状・規模) 溝幅約1m、深さ30cmを測る。長さは北端部がC-5グリッド北側で切れるが、南端部分は明確ではない。

(出土遺物) なし。

#### 9号溝(図版13・88)

(位置) 調査区中央部よりやや西側(C-1~8グリッド)を南北方向に走る。2号低墳墓を切り、5号溝に切られる。

(形状・規模) 幅1m50cmから3m余り、深さ10~30cmの浅い溝である。

(溝内施設) 溝底部はほぼ平坦。

(出土遺物) 溝の底部直上より土師器の環が多量に出土している。

#### 10号溝(図版13・88)

(位置) C-4~7グリッド、9号溝西側に平行して存在する。2号方形低墳墓を切り、5号・11号溝に切られる。

(形状・規模) 幅1~1m50cm、深さ60cm前後の溝である。

(出土遺物) 溝覆土内より平安時代の土師器環1点、中世の常滑甕破片、灰釉陶器片各1点が出土している。

#### 13号溝(図版1)

(位置) D~G-2~4グリッドに位置し、9号溝と重複する。

(形状・規模) 幅1mを測る。西端は9号溝と合流し、東端部は調査区外にさらに延びる。

(出土遺物) なし。

### (5) 土壌

#### 1号土壌(図版16)

(位置) B-2グリッドに位置し、2号溝と重複する。

(形状・規模) 一辺1mほどの隅丸三角形を呈する。深さは2号溝底部より10cmほど深く掘り込まれ、断面は楕円状を呈する。土壌底部全体に炭化物が薄く堆積する。

(出土遺物) なし。

#### 2号土壌(図版16・85)

(位置) 2号掘立柱建物址の西側、B-7・8グリッドに位置する。

(形状・規模) 長軸1m10cm、短軸1mの方形プランを呈する。深さは20cmを測り、底部はほぼ平坦である。

(出土遺物) なし。

#### 3号土壌(図版16)

(位置) 1号掘立柱建物址東側、B-6グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径1mほどの円形プランを呈し、深さ1m30cmを測る。井戸状施設とも推定される。

(出土遺物) なし。

### 第3節 中・近世の遺構

#### (1) 堅穴状遺構

##### 1号堅穴(図版17・89)

(位置) B-8グリッドに位置する。2号掘立柱建物址に切られる。

(形状・規模) 長辺2m40cm、短辺2mの隅丸方形を呈する。深さは確認面から30cm程を測る。

(出土遺物) 覆土内より中世の土師質土器8点、内耳土器1点のほか、基石形の扁平で黒色の小石が22点出土している。

#### (2) 掘立柱建物址

##### 2号掘立柱建物址(図版15・84)

(位置) B・C-7・8グリッドに位置し、2号低墳墓と1号堅穴を切る。

(形状・規模) 2間(5m10cm)×3間(5m10cm)の側柱を持つ掘立柱建物址である。柱穴間の距離は西列ビット1~4で1m75cm、1m85cm、1m20cm、東列ビット10~13で1m80cm、1m90cm、1m20cm、北列ビット1・6・10で2m60cm、2m、南列ビット2m30cm、2m40cmを測る。

柱穴は径30~50cm、深さ10~30cmほどの円形プランを呈する。

(出土遺物) なし。

#### (3) 土墳墓

##### 1号墓(図版17・88)

(位置) 調査区南西部のB-1グリッドに位置する。

(形状・規模) 土堀り込みはほとんど削平されているが、底部の規模から長軸1m20cm、短軸65cmの楕円形を呈すると考えられる。

(出土遺物) 人骨は、頭部の一部分、歯、脚部の骨などが残存しているが、遺存状況は悪い。頭部付近より中世の土師質土器、古銭が6枚出土している。古銭は、嘉祐通宝1点、元豊通宝1点、元祐通宝2点、開元通宝1点、咸平通宝1点、唐銭が1枚、北宋銭が5枚となっている。

##### 2号墓(図版17・88)

(位置) 6号住居址北側、B-5グリッドに位置する。

(形状・規模) 長辺90cm、短辺45cmの長方形プランを呈する。壁はほとんど削平され、5cmほどの深さで遺存している。

(出土遺物) なし。

##### 3号墓(図版17)

(位置) C-6グリッドに位置し、2号低墳墓を切る。

(形状・規模) 長軸2m、短軸1m30cmほどの楕円形を呈する。

(出土遺物) 中世の播鉢が出土している。

#### (4) 溝状遺構

##### 5号溝(図版12・87)

(位置) A・B・C-6グリッドに位置し、西端は調査区外にのびる。2号低墳墓、1号掘立柱建物址、9・10・11号溝を切り、6号溝と合流する。

(形状・規模) 幅50cm前後、深さ15cmほどの溝が南北方向に走り、C-6グリッド内で北側に屈折し9号溝と

重複する。溝上部には、小礫が覆い、暗渠排水施設と考えられる。

(溝内施設) 溝西端部で直径1m40cm、深さ1m20cmほどの深い水溜め施設が設けられる。5号溝北側に平行して3ヶ所の集石部分が確認されているが、これらも溝に付随した水抜き施設の一部と推定される。

(出土遺物) 溝上部を覆う小礫に交じって、中世陶器片や内耳土器、播鉢、石臼などが多量に出土している。その他、馬の歯の小片が出土している。

#### 6号溝(図版12・87)

(位置) A・B-5・6グリッドに位置し、5号溝と合流する。

(形状・規模) 幅50cm～1m20cm、深さ45cmほどの溝が5号溝から南方にのび、B-5グリッド内で西方に方向をかえる。A-5グリッドより西側で溝が2本に分岐し、さらに西流する。

(出土遺物) 中世の土師質土器、染付、磨石等が出土している。

#### 8号溝(図版12)

(位置) A・B-6グリッドに位置し、5号溝、6号溝の中間に平行して流れる。

(形状・規模) 幅50cm～1m30cm、深さ10cmほどの溝で、東西方向に流れる。2号低墳基の南周溝と重複するため、溝東端部は確認できない。西端部は調査区西側に展開する。

(出土遺物) なし。

#### 11号溝(図版13・88)

(位置) 調査グリッドのC列に南北方向に走る。2号低墳基東周溝、10号溝を切り、12号溝と重複する。

(形状・規模) 幅3m、深さ20～40cmの溝で、南端部分はほぼ10号溝と重複しながら南下する。

(溝内施設) 溝内に石垣状の施設が残存する部分がみられる。C-7グリッド内に小礫の集石遺構が検出されている。

(出土遺物) 中世の土師質灰環、蓋、内耳土器、灰釉陶器、天目茶碗などが出土している。

#### 12号溝(図版13・88)

(位置) C-7・8グリッドに位置し、11号溝と重複する。溝南端はC-7グリッドで収束し、北は調査区外に展開する。

(形状・規模) 幅1m50cmほどの溝で、深さ25cmを測る。

(出土遺物) 土師質土器の坏、内耳土器、中国陶磁器などが出土している。

## 第4節 C地区の遺構と遺物

A地区西側3800㎡の範囲を試掘し、遺構確認調査および一部本調査を行なった。試掘部分は、トレンチ3本、一辺2mほどの試掘坑16ヶ所で、本調査部分は調査区南側の第4トレンチである。グリッドの設定は、A地区のグリッドを西側に延長したもので一辺10mを基本とするが、グリッドの名称はC地区内で完結する。A地区のA-1グリッドは、C地区のF-4グリッドにあたる。

本地区内では第4、第7、第8、第9、第15、第16試掘坑、第1～4トレンチで遺構が確認されている。

### (1) 本調査区

#### 第4トレンチ

調査区南側のE-2～5グリッドに位置する本調査部分である。トレンチ中央部分より溝状遺構1本と集石をともなう竪穴状遺構が1基確認された。

#### 1号溝(図版18・89)

(位置) E-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 幅80cm、深さ30cmほどの溝が東西方向に走る。溝の東端は1号集石南側で途切れ、西側調査区外にのびる。

(出土遺物) なし。

#### 1号集石(図版18・89)

(位置) E-3・4グリッドに位置する。

(形状・規模) 集石下の堅穴部分は長辺2m60cm、短辺2m10cmほどの隅丸方形プランを呈する。土壌中央部分に直径70cmほどの円形の浅いピット状の落ち込みを伴う。集石は、拳大から人頭大の礫が床面よりやや浮いた状態で検出され、堅穴南側に集中している。

(出土遺物) 集石に混じって近代の陶器(第図版62 1~4)、石臼(図版63 1~7)、屋根瓦(図版76 1)が出土している。

### (2) 試掘調査区

#### 第4試掘坑

E-11グリッドに位置する。東西方向に走る溝の一部が確認されている。遺構確認面は表土から90cm程で溝の最深部は表土から1m35cmを測る。溝底部直上より古墳時代前期の土器片が出土している。溝の時期、方向からA地区2号方形低墳墓西側に存在する別の低墳墓周溝の可能性が高い。

#### 第7試掘坑

E-10グリッドに位置する。試掘坑西側に隅丸方形の浅い(深さ10cm前後)落ち込みが確認された。遺構は第8グリッドにのびる。

#### 第8試掘坑

E-10グリッド、第7試掘坑西側に位置する。試掘坑南側に浅い落ち込みが確認された。第7グリッドからのびる遺構と同一遺構と考えられ、隅丸方形の住居の一部と推定される。

#### 第9試掘坑

D-10グリッドに位置する。試掘坑南西コーナー部に直径50cmほどの円形ピットが確認された。

#### 第15試掘坑

D-6グリッドに位置する。試掘坑北西コーナーに直径50cmほどの円形ピットが確認された。

#### 第16試掘坑

C-6グリッドに位置する。東西方向にのびる溝が確認されている。溝の深さは確認面より50cm程で、溝覆土上部に拳大から人頭大の礫が配されている。溝の上場に接して直径35cmほどのピットが存在する。

#### 第1トレンチ

A・B・C-8グリッドに位置する。第2・第3トレンチにのびる幅3m50~4m、深さ1mほどの溝が走る。トレンチ東側に住居址と考えられる落ち込みが存在する。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 縄文時代

桜井畑A地区内で縄文時代の遺構は確認されていないが、わずかに土器片および石鏃が出土している。

#### (1) 土器 (図版61 1~3)

土器は、縄文時代中期初頭の土器片3点である(図版61 1~3)。いずれも半截竹管による集合沈線文を施す土器である。

#### (2) 石器 (図版61 4・5)

石鏃は、2点共に黒曜石製の円脚鏃で、4が長さ1.7cm、幅1.3cm、5が長さ2.7cm、幅2cmを測る。

### 第2節 古墳時代

#### (1) 土器

古墳時代の出土土器は、おもに方形低墳墓周溝内のもので、1点の須恵器蓋を除いてすべて古式土師器に属する。これらの遺構からは遺構の重複で他の時期の遺物を多く混入しているが、図示したもののうち該期の遺物についてのみ対象として記述する。

##### 1) 古式土師器の分類 (第3図)

古式土師器のほとんどが、墓に伴うものであるため、器種は日常雑器よりかなり限定される。器種は、壺、小型壺、高坏が多く、甕などの煮沸具はきわめて少ない。ここでは出土した古式土師器の内ある程度器形が判明しているものについて分類する。

a. 壺 (1~5) 土器全体が残存するものは少ないが、器高は少なくとも20cmをこえるもので、小型壺とは明確に分けられる。口縁部の形態によってA・B・C・D・E・Fの6類に分類される。

壺A (1) 単純口縁を有する壺で、頸部が「く」の字形に屈曲する。内外面ともにハケによる調整痕を残す。

壺B (2) 二重口縁壺で、口縁部に棒状浮文を施す。このタイプの壺は東海地方東部から甲府盆地にかけての弥生時代後期後葉~古墳時代前期に特徴的なもので、東海地方の「大塚式」の壺もこの延長線上にある。

壺C (3) 二重口縁壺で、頸部が細く、口縁がラップ状に大きく外反する。胴部は球胴に近いが、上下がやや扁平をなす。

壺D (4) 二重口縁壺で、頸部が大きく、口縁部の外反は壺Cと比較して弱い。頸部が屈曲し、スタンド・カラー状に立ちあがる。二重口縁部の連結は、頸部上部を外方に折り曲げて面を作り、その上に外反口縁を載せるものである。頸部の幅は、長いもので6cmを測る。胴部はほぼ球胴を呈する。

壺E (5) 二重口縁壺で頸部から口縁部の接合が有段とならずに、屈折する。

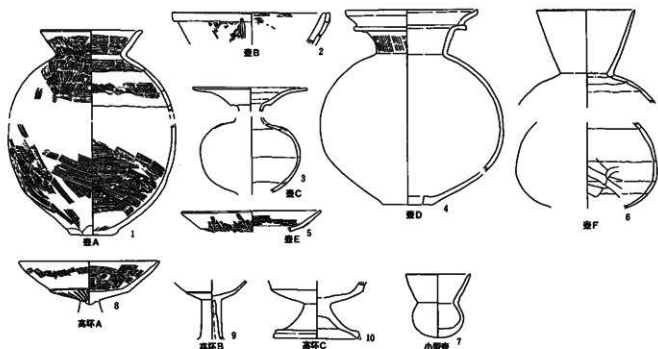
壺F (6) 口縁部が肩部から屈曲する長頸壺である。胴部は球胴を呈し、底部は丸底に近いものと推定される。本類は、形態的に東海地方西部の瓢壺に起源を持つと考えられ、大きさによって大型のもの、小型のものが存在するが、本類は大型のものである。

b. 小型壺 (7) 頸部が長い、器高が10cmほどの小型壺で、いわゆる小型丸底土器である。

c. 高坏 (8~10) 完全な形の土器全体が遺存するものではなく、ほとんどが坏部と脚部にわかれ、接合しない。坏部および脚部形態からA・B・Cの3つに分類される。

高坏A (8) 大きく外方に開き、坏の下半部に稜を有する高坏である。坏部と脚部の連結は、坏下部に突起を設け、そこに筒状の脚部を差し込むものである。脚部が欠損しているが、柱状ないし朝顔状に外反する脚を持つと考えられる。坏部の調整は、ハケおよびミガキなどがある。





第3図 古墳時代の土器分類

高坏B(9) 柱状の脚部を有する高坏で、坏の下半部が鋭を持って屈折する。坏部と脚部の連結は、高坏Aと同じ。

高坏C(10) 脚部が朝顔状に開き、脚部下部において有段となる。坏部の下半で屈曲する。

この他に、鉢、台付甕の破片が出土しているが、全体を類推できる資料はなく、ここでは分類をせず、個々の遺構のなかで記述していく。

## 2) 主な遺構の出土遺物

### 1号方形低墳墓(図版20・観察表72頁)

壺B類、壺C類、壺E類のほか鉢、台付甕脚部が出土している。図示した土器の他に直径70cmの大型壺胴部が周溝北西コーナーから検出されている。

壺B(2) 2は口径25cmの二重口縁を持つ大型壺で、周溝北東コーナー出土の大型壺破片と接合する可能性もある。

壺C(1・3・8) 1・3が、土器の胎土などから同一個体と判断される。内面に輪積痕がわずかに残り、口縁部内面および胴部外面に赤彩された痕跡がある。器面は風化が激しく、調整痕が明確ではない。口径は18cm、胴部最大径15.5cm、推定高18cm前後の壺である。8は口縁部が欠損するが頸部の細い特徴から本類に属する可能性が高い。壺の大きさは、1・3と比べややおおぶりで、胴部最大径23cm、頸部径6.5cm、現存する高さ20cmである。内面に輪積痕を残し、外面に赤彩された痕跡がある。底部は焼成前の穿孔が施されている。焼成前穿孔土器は、他に1点壺底部破片が存在する。

壺F(4) 4は口縁部が欠損しているが、本類に属すると推定される。胴部最大径14.5cm、現存高12cmを測る。底部は丸底で、外面底部付近にヘラケズリが施される。内外面の調整は、ナデによって仕上げられている。

鉢(6) 朝顔状に開く小型の鉢で、底部径4cmを測る。外面の調整はハゲがみられる。

高坏(7) 脚部が4.5cmと短く朝顔状に開く。上部は鉢状を呈すると考えられるが欠損のため詳細は不明。

台付壺(9) 底部径10cm程の脚部を持つ台付甕である。内外面にハケ調整をそのまま残す。

出土遺物から遺構の時期は古墳時代前期の4世紀後半と推定される。

## 2号方形低墳墓(図版21~23・観察表72頁)

壺A類、壺D類、壺F類のほか、手型土器などが出土している。

壺A(9) 頸部が「く」の字状に屈曲する単純口縁を有する壺で、内外面にハケ調整のまま残す。口径15cm、底部径7cm、高さ31.5cm、胴部最大径25.7cmを測る。内面に輪積痕がわずかに残る。

壺D(1~4・6) いずれも周溝西溝内より出土している。口径は20cm前後、やや扁平の球胴をもつ二重口縁壺である。胴部最大径は20cm~28.5cm程で、頸部の立ち上がりは3.5~6cmを測る。口唇部は断面が尖り気味に積みあげられている。器面調整は風化が激しいものもあるが、3では胴部外面にヘラケズリ、肩部にミガキ、内面にハケが確認できる。6は頸部にハケが縦方向に施される。胴下半部が残存しているものについてはすべて焼成前の底部穿孔が確認される。

壺F(5・7・8) 埴状の長い頸部を持つタイプの壺で、周溝南溝から発見されている。口径は、15~18cm、口縁部は胴部屈折部から10cm程立ちあがる。口縁内外面は風化が著しいが、縦方向のミガキによって丁寧に仕上げられ、胴部内面には輪積痕、ヘラケズリが認められる。

本遺構からは、他に平安時代の土師器、須恵器、瓦、中世の陶器・土師質土器・内耳鍋などが覆土内から出土しているが、これらは本遺構に重複する遺構からの混入品と考えられる。

共存遺物の時期から遺構は古墳時代前期の4世紀後半に位置付けられるが、壺などの形態は1号低墳墓とわずかに差異が認められ時期差が想定される。

## 3号方形低墳墓(図版24・観察表72頁)

主に周溝東溝から出土している。器種は、壺の胴部破片1点と高坏A類・高坏B類、小型壺4点が存在する。

壺(11) 壺胴上部で、最大径は27cm程を測る。口縁部および胴下半部が欠損しているため、全体の器形は判断できない。風化が激しく調整技法は明確ではない。

高坏A(1) 口径21.6cm、坏部の深さ6cm程の高坏で、脚部を欠損する。坏下半部で稜を有し、屈折する。坏部と脚部の連結は、坏部に突起を作り、そこに筒状の脚部をはめこむ。坏部の形態から朝顔状に開く脚部を持つものと推定される。坏部内外面にハケ調整痕を残し、坏下半部にミガキが認められる。

高坏B(2・3・5) 2は坏部下半が有稜となる点は1と共通するが、坏はこぶりで、脚部が筒状となる。脚部の直径は3cm、長さ6cmの筒状を呈し、脚部下半で広がる。坏内面底部に直径3cm程の範囲で“離れ砂”状の粗砂の付着がみられる。

高坏C(4) 坏部下半で屈折し、有段の脚部を特徴とする。脚部高は5.5cmを測り、上部が朝顔状に開き、下方で有段部を持つ。

小型壺(7~10) 9は、口径10cm、胴部最大径8cm、口縁高4.5cm、胴部高5.5cmの丸底壺である。器厚は、口縁部で0.5cm、底部で1.4cm程と厚くなる。10は底部付近が欠損する。器厚は0.4cm程で、9より薄い。

須恵器坏壺(12) 口径13cm、器高4cmの須恵器坏壺である。内面にロクロ整形痕を残す。

本遺構出土の土器群は、高坏の形態では数時期にわかれ、4世紀末から5世紀中葉の年代幅の中で捉えられる。須恵器については、ややこれより後出するもので、同遺構の継続的な祭祀、あるいは他の遺構からの混入品と理解される。

## 4号土壌(図版60・観察表77頁)

覆土上面より、壺の口縁部1点、台付壺の脚部1点が出土している。

壺E(12) 口径22cmの二重口縁である。内外面にハケ調整がみられる。

その他の出土遺物（図版62・観察表78頁）

C地区第4試掘坑、第2トレンチより高環B類の脚部が確認されている。

### 第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、調査区西側に集中して確認されている。該期の遺構は、住居址7軒、掘立柱建物址1基、溝状遺構8本、土壇3基、瓦溜遺構1基が存在する。これらの遺構から出土した遺物は、土器、土製品、瓦、青銅製品、鉄滓などがある。

#### (1) 土器

出土土器は、土師器と須恵器が認められるが、該期の灰釉陶器は認められない。

##### 1) 土器分類

#### A. 土師器の分類（第4図）

土師器の分類にあたっては、器種→大きさ→各部位の形状→整形および器面調整→底部整形の順で分類基準の優先順位を決定した。

##### a. 小型環 口径10cm、器高3cm以下の環の一群を小型環とする。

小型環A（1） 口径7cm前後、器高3cm程の小型環で、口径に対する底径比が55%～62%で、形態的には高環A類に類似する。ロクロ成形で底部は糸切りである。胴部最下部に、糸切りによる粘土切り離し時にできた粘土溜りが認められる個体もある。

小型環B（2） 口径と底径比が40%程の小型環で、A類より口縁部が広がるものである。外面下半部をヘラケズリ調整する。

##### b. 環

環A（10） 口径15cm、底径11cm、器高5cm程のいわゆる「盤状環」である。器面調整としては内外面横ナデが多みられ、底部はヘラ切りである。

環B（16） いわゆる「甲斐型環」の中でも古相を示す一群である。口径10～12cm前後、底径4.5～7cm程の断面が箱形を呈する環で、口径：底径比が44～64%の間に集中する。口唇部端が尖るものからやや丸縁のものを含む。調整技法は、外面がヘラケズリ、内面はみこみ部暗文から器体部暗文へと時期的に変化する。底部整形は、静止糸切り後ヘラケズリ、回転糸切り後ヘラケズリ、全面ヘラケズリのものがある。

環C（17） 「甲斐型環」の新相を示す一群。口径11～15cm、底径3～6cm前後の環で、口径：底径比が20～45%に集中する。口縁部は肥厚し、玉縁状を呈する。調整は、外面下部に斜めヘラケズリを施し、底部は回転糸切り、回転糸切り後ヘラケズリまたは全面ヘラケズリである。内面の放射状暗文は認められない。

環D（18） 形態的には環Cの特徴を有するが、内面黒色土器である。内面に螺旋状暗文を施す。

##### c. 大型環 口径15cm、器高5cm以上の環形土器を大型環とした。

大型環A（11） 形態が環A類と類似する断面が箱形の大型環である。外面には縦方向のミガキが認められる。

大型環B（12） 口縁部が屈折外反する大型環である。外面下部に斜めヘラケズリ、内面胴部に放射状の暗文が認められる。

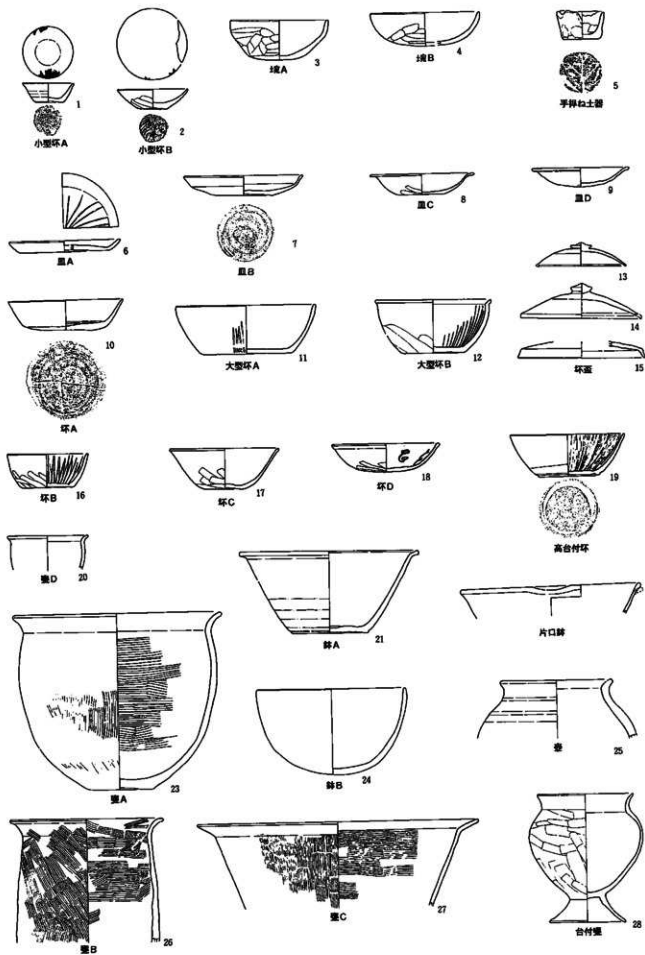
##### d. 高台付環（19） 底部に削り出し高台を有する環で、胴部の断面形態は大型環A類に類似する。大半は口径15cm、高さ5cmをこえる大型品である。胴部内面に放射状暗文を施すものもみられる。

##### e. 皿 高さ3cm未満の浅い器を皿とする。

皿A（6） 底部から直接口縁部に向けて立ちあがるもので、口唇部は丸縁である。内面みこみ部に放射状の暗文が認められる。底部はヘラ切り。

皿B（7） 胴部中程から下半で屈折し、稜を有する皿である。口縁部は丸縁。底部の整形は回転ヘラ切りまたは回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリである。

皿C（8） 底部が平底で、玉縁口縁部が屈折気味に外方へ開く。外面下方に斜めヘラケズリを施すものもある。

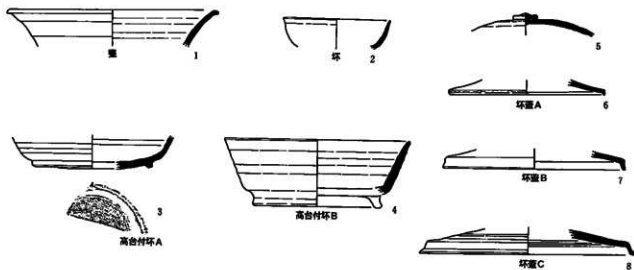


第4図 奈良・平安時代土師器の分類

- る。底部は回転糸切り後ヘラケズリである。
- 皿D(9) 底部が丸底状を呈し、やや内湾気味に立ちあがる。口唇部は玉縁。底部は糸切りないし手持ちによるヘラケズリである。
- f. 碗(3・4) 器壁が厚く、胴部の立ち上がりが内湾する。外面のほぼ全体にヘラケズリが認められる。
- g. 鉢 口径20cm、高さ10cm以上の鉢形土器である。
- 鉢A(21) 平底で、胴部が朝顔状に外反しながら立ちあがるもの。口縁部がやや外方に屈曲し外反する。底部は、削り出し高台状を呈する。整形はロクロ整形で、器面調整としてヘラケズリが施される。
- 鉢B(24) 丸底で、内湾しながら立ちあがる鉢である。
- h. 片口鉢(22) 全体が復元できる固体はないが、口縁部に片口を有する鉢である。
- i. 坏蓋 天井部がロクロ整形の蓋で、摘みを有する。内面の天上部分に放射状の暗文を有する個体もある。
- 坏蓋A(13・14) 縁部のかえりが短いもの。
- 坏蓋B(15) 縁部のかえりが長いもの。
- j. 壺(25) 口径15cm程の広口壺で、整形はロクロによる。
- k. 甕 形態、整形段階の手法によってA～D類に分類する。A～C類は非ロクロ系の甕であり、D類はロクロ系の甕である。
- 甕A(23) 口径より器高が小さい短胴甕。内外面にハケ調整を行なう。
- 甕B(26) 口径より器高が大きい長胴甕。器面調整は、全面ハケ、全面ヘラケズリ、ハケとヘラケズリを併用するものなどバリエーションがみられる。
- 甕C(27) 口縁部が外方に屈折する鉢形の甕。内外面ハケ調整である。
- 甕D 器壁にロクロ整形痕が明瞭に認められる甕で、口径10cm程の小型品と、20cm程の中型品がある。非ロクロ系の甕と比べ、胎土の肌理が細かく、坏や鉢に近い仕上げを行なっている。
- l. 台付甕(28) 外面ヘラケズリの台付甕である。
- m. 手捏ね土器(5)

## B. 須恵器の分類(第5図)

須恵器の出土量は、土師器に比べ非常に少なく、器種も甕、坏蓋、高台付坏に限定される。



第5図 須恵器の分類

- a. 高台付環 底部に貼り付け高台を有する環。  
 高台付環(3) 底部がやや丸底状を呈し、付け高台より張りだす環。胴部はロクロ整形痕を残す。  
 高台付環B(4) 底部は平底で、高台断面が四角形を呈する。胴部整形はロクロによる。
- b. 坏蓋 完形品がないため、描みの有無によっては類型化できないが、縁部のかえりの部分の形態がそれぞれ異なる。  
 坏蓋A(6) 縁部のかえりがやや内側に短く付くもの。  
 坏蓋B(7) 縁部のかえりがやや外側に長く付くもの。  
 坏蓋C(8) 縁部のかえりがやや外側に付き口唇部でさらに外屈するもの。
- c. 甕 完形品は存在しない。甕の口縁部、胴部破片がわずかに認められる。
- C. 緑釉陶器 すかしのある緑釉製香炉蓋が1点出土している。

## 2) 土器の製作技法

ここでは、1)と重複する部分もあるが土器の製作技法を中心に説明したい。各土器の部位の名称と実測図の表現方法については第6図によって図示する。完形品がない形態については、他遺跡から出土したものをモデルとして使用する。

### A. 土師器

a. 環 環の整形技法は、基本的にはロクロによるナデがほとんどで、整形痕をそのまま器面に残すものと、さらにヘラケズリやミガキによる暗文などの調整を施したものがみられる。この調整技法は小型環の場合も基本的に同じである。

環A類ではその整形痕をそのまま残し、他の調整はほとんど行なわれていない。底部の整形は、本類では回転を利用したヘラ切りである。

環B類はロクロ整形の後に、外面下半部に横ないし斜め方向のヘラケズリが行なわれる。内面の調整は、ペン先状工具によるミガキによって文様の効果を出した「暗文」が認められる。暗文は、本遺跡ではみこみ部中央部を中心にした放射状暗文がほとんどで、螺旋状暗文はみられない。暗文の範囲は内面底部のみこみ部分に及ぶものと、内面胴部に限定されるものに2分される。また、甲斐型環の古手のものには、内面みこみ部と胴部の立ちあがり部の境目に溝状の凹みがめぐる場合がある。底部の整形は、回転糸切り後に周辺部を手持ちによるヘラケズリを行なうものと、全面ヘラケズリがある。

環C類は、ロクロ整形の後に外面下半部に斜めヘラケズリを行なう。内面には、暗文は認められない。底部の整形は、回転糸切り後未調整、回転糸切り後ヘラケズリ、全面ヘラケズリなどがある。本類は環B類と比較して器面の肌が粗く、仕上げがややおとる。

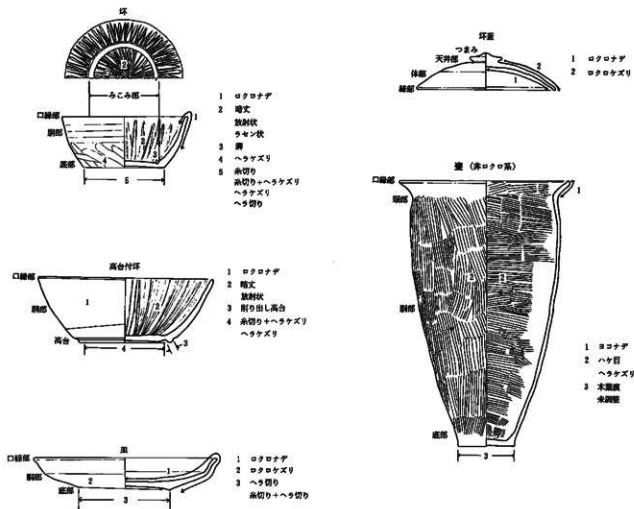
環Dは、整形、調整技法は環C類とほぼ同じであるが、内面が黒色で螺旋状暗文が施される。

b. 大型環 大型環は環と同様の整形技法がもちいられ、ロクロ整形を基本とする。大型環A類では、ロクロのナデを行なったのち、外面に縦方向の暗文を施す。大型環B類では、外面下半部にヘラケズリ、内面に放射状暗文が認められる。

c. 皿 環と同様、整形はロクロによるナデが主体である。

皿A類は、内面底部に放射状の暗文を施す。皿B類は、外面縁の上半をナデ、下半をロクロケズリを行なっている。底部は回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリを行なう。皿C・D類は、外面下半部にヘラケズリを持ち、底部の整形は手持ちによるヘラケズリ、回転糸切り後ヘラケズリ、回転糸切り後未調整などの手法が認められる。

d. 高台付環 粘土巻きあげ法によって成形を行ない、調整はロクロによるナデが主体である。内面に放射状暗文が認められる。底部の整形は、まず回転糸切りまたはヘラ切りを行なったのち、周辺部をヘラによって高台部



第6図 土師器の調整技法

分を削り出している。

e. 鉢 ロクロ整形を基本とする。鉢A類は、底部が削り出しによる高台状を呈するものもある。鉢B類では底部に木葉痕を持ち、外面にわずかにヘラ調整痕を残す。

f. 環蓋 ロクロ整形を基本とする。外面はロクロケズリ及びナデ、内面はヨコナデを施す。内面に暗文を施すものもある。つまみはボタン状を呈し、頂上部分が盛り上がる。

g. 壺 外面にロクロ回転を利用したナデ裏が明瞭に残る。

h. 甕 甕A～C類（非ロクロ系） 口縁部は横ナデ、内外面にハケ調整ないし、ヘラケズリを行なう。底部は未調整のもの、木葉痕を持つものがある。

甕D類（ロクロ系） 内外面にロクロ整形痕をそのまま残す。口縁部付近の破片のみであるため、底部や胴下半部の調整などについては不明である。

i. 台付壺 口縁部は横ナデ、胴部外面は全体にヘラケズリを行なっている。

## B. 須恵器

a. 高台付鉢 胴部はロクロケズリ、ロクロナデを明瞭に残し、底部は回転ヘラ切りの技法をもちいる。高台は

貼り付けによるもので、環との接地面は外面のみヨコナダをほどこし、なめらかな仕上げをしている。

b. 坏蓋 外面天井部から胴部にかけてはロクロ回転を利用したヘラケズリ、内面はヨコナダを施す。縁部のかえりは基本的にはヨコナダである。つまみは土師器坏蓋と共通でボタン状を呈し、頂部がわずかに盛り上がる。

c. 甕 口縁部の破片のみが出土しているが、内外面にロクロ整形痕を明瞭に残す。

### 3) 主な遺構の出土遺物

#### 1号住居址(図版25・観察表72頁)

本住居址からは土師器の椀、坏、坏蓋、甕Bの他、土師器の高坏、灰軸の仏器などが出土している。この内6の高坏および7の灰軸は他の遺構からの混入品と判断される。

椀(1) 口径14.6cm、高さ4.5cm程の丸底の椀形土器。器壁が厚く、外面調整はヘラケズリである。

坏A(2) 口径15cm、底径8cm、高さ4cm程の坏で、口唇部はやや丸味を帯びる。外面下部はヘラケズリ、底部はヘラ切りである

大型坏A(4) 底径14cm程の大型坏と考えられる。

甕B(8~11) 9・11はヘラケズリによる器面調整を主体とする。器形は頸部で屈曲し、胴部がやや膨らみを持つ。10は口縁部が外方に開くもので、ハケ調整を施す。

出土遺物から本住居址の時期は奈良時代(1期)の住居と考えられる。

#### 2号住居址(図版26・観察表72~73頁)

覆土内およびカマド南側の互敷き施設の直上から坏A、坏B、大型坏B、高台付坏、甕、手握ね土器などが出土している。

坏A(10) 口径15.6cm、器高3.7cmの盤状坏。底部回転ヘラ切り。

坏B(1~7) 口径11~13cm、高さ4.5~5cm程の坏。口径:底径比は44~64%で、5を除き他はすべて、口径<底径×2となる。外面下半部を斜めヘラケズリ、内面に放射状暗文を施すものもある。暗文は、みこみ部に及ぶものと胴部に限られるものがある。底部整形は、回転糸切り後ヘラケズリが多い。6は底部に「寺」と墨書されている。4は、遺物取り上げ時には「万」または「方」の字の墨書が確認されていたが、取り上げ後は判読不可能である。

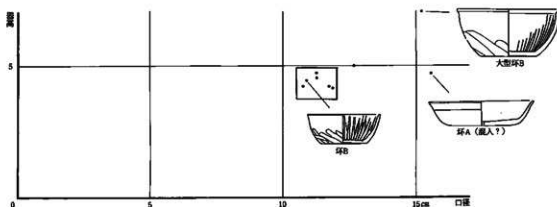
大型坏B(9) 口径15.2cm、高さ7cm程の大型坏で、口縁部が外屈する。

外面下部を斜めヘラケズリ、内面を放射状に暗文を施す。

高台付坏(8) 底部のみが残存する。内面みこみ部分に放射状暗文が認められる。

甕(13) 長胴甕の胴下半部。内外面にハケ調整を行ない、底部は木葉痕を残す。

手握ね土器(12) 底部に木葉痕を残す。



第7図 2号住居膳具法量分布



出土土器から平安時代前期（Ⅱ期）、9世紀前半の住居と考えられる。

### 3号住居址（図版27・観察表73頁）

須恵器の坏蓋A、土師器の鉢A、坏蓋A、甕B・C、置きカマドが出土している。

須恵器

坏蓋（1・2） 1は摘みを有する蓋であるが、縁部の形態は不明である。2は、坏蓋A類に属すが、上半部が欠損している。

土師器

坏蓋A（3） 縁部のかえりが非常に小さく、上半部は欠損している。

鉢A（4） 器高15cm程の深鉢状の鉢である。器面調整は外面下部をヘラケズリ、他の内外面はナデ調整を行なっている。

甕B（5） 口縁部が外屈する甕で、口径は28cmを測る。器面調整は内外面ともにヘケ調整。

甕C（6） 口径38cmの外形の甕。内外面ヘケ調整。

置きカマド（7） 胴部最下部のみ出土。底径は60cmを測る。

出土土器から平安時代前期（Ⅲ期）、9世紀後半に比定される住居と考えられる。

### 4号住居址（図版28・観察表73頁）

土師器の坏C、皿A、坏蓋A、甕、須恵器の瓶が出土している。

坏C（1～4） 口縁部はすべて欠損しているが、底径および底部調整などから本類と判断した。外面下半部は斜めヘラケズリ。

坏蓋A（5） 縁の径が12cm程の有摘みの蓋。縁のかえりは極めて小さい。

皿A（7） 内面底部に放射状の暗文を有する皿。

甕（6・8） 全体が復元できる甕体はないが、内外面をヘケ調整した非ロクロ系の甕である。

須恵器瓶（9） 自然釉を残す瓶で、胴部下半部が残存している。

皿などからは9世紀代、坏からは10世紀後半代の時期が比定できるが、出土土器の時期にバラツキがある。

### 5号住居址（図版29～34・観察表73～74頁）

灯明として使用された坏、皿が79個体、緑釉の香炉蓋1点がある。

坏C（1～30・43～64） 玉縁口縁を特徴とする甲斐型坏で、器面は整形段階でロクロによるナデ、胴下半部にヘラケズリを施す。口径：底径比は20～45%で、いずれも口径>底径×2に集中する。底部は、回転糸切り後ヘラケズリ、ヘラ切りなどがみられる。ほとんどの内面に煤状炭化物が付着し、灯明として使用されたものと考えられる。

皿C（31～33・42・65～68・70・73・76・79） 高さ3cm以下の平底の皿。整形および調整技法は坏とほとんど同じである。31～33は内面に煤状炭化物が明瞭に残る。

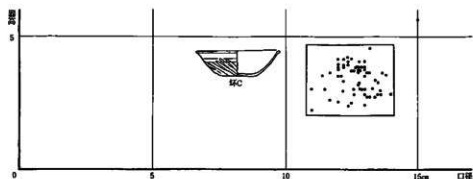
皿D（34～41・69・71・72・74・75・77・78） 丸底の皿。37～41は内面に煤状炭化物が付着する。

緑釉香炉蓋（80） 天井部にすかしと陰刻による文様を持つ。体部から縁部にかけて沈線が1条めぐり、摘みは、塔の相輪状に高く付けられる。推定径は約14cm。

出土遺物から平安時代前期（Ⅳ期）、10世紀後半の竪穴である。遺物の出土状況から、本遺構は灯明皿などを未使用時に保管した小屋状の施設と考えられる。

### 6号住居址（図版28・観察表74頁）

土師器の甕の口縁部が2点出土しているが、小破片のため時期などの比定は困難である。



第8図 5号住食膳具量分布

7号住居址 (図版36. 37・観察表74頁)

土師器の坏B、高台付坏、蓋坏、甕、須恵器高台付坏などが検出されている。

坏B (1~13) 口径10~12.5cm、底径6cm前後の坏で、口径：底径比が48~64%に集中する一群である。外面調整は斜めヘラケズリを持つものと整形痕をそのまま残すものがある。内面は、器体部に放射状暗文が認められる。底部は、回転糸切りないし静止糸切りの後周辺部をヘラケズリする。

高台付坏 (14・17) 口径16cm程の大型品で、外面にロクロ整形痕、内面に放射状暗文を施す。

盖坏A (19) 縁部径が16cm程の蓋で、ボタン状の溝みを持つ。内面に放射状の暗文がみられる。

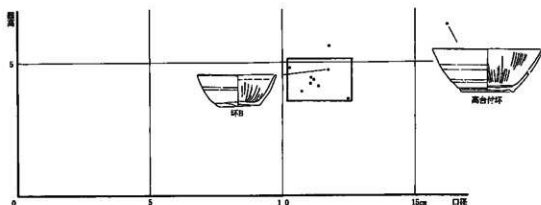
盖坏B (16) 縁部が長く、やや外側に広がる蓋。

壺C (23~27) 口縁部が外屈し鉢状を呈するもので、内外面をハケ調整する。大きさは器体によって中小型から大型品が存在する。

壺D (20・22) ロクロ整形痕をそのまま残した壺で、器面は壺Cと比べなめらかである。小型品と中型品がある。

須恵器高台付坏 (15) 底部が欠損しているが本類のなかでもA類に属する可能性がある。

出土土器からⅢ期9世紀後半に位置づけられるが、土器様相は2号住よりも新相を示す。

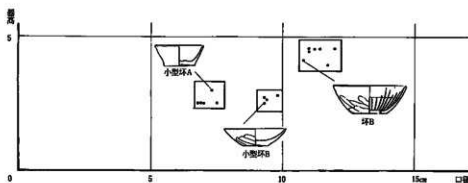


第9図 7号住食膳具量分布

1号掘立柱建物址 (図版58. 59・観察表77頁)

柱穴内より小型坏A・B類、坏B類、高台付坏などが出土している。15・16の土師質土器については他の遺構からの混入品と考えられる。

小型坏A (1~6) 口径7cm、底径4cm、高さ2.5cm前後の坏。いずれも灯明皿として使用されたと考えられ、



第10図 1号掘立柱建物址出土土器量分布

内面口縁部に煤状炭化物が付着する。内外面はロクロの整形痕を残し、底部は回転糸切り後未調整である。口径：底径比は55～62%である。

**小型環B (7～9)** 口縁部が小型環A類と比較して大きく外方に開くタイプで、製作技法は基本的に同じ。7のみは外面下半部に斜めヘラケズリを施す。口径：底径比は40%である。

**環B (10～14・17～19・21～32)** 口径10～12cm、底径5～6cm前後、4cm程の環が20点ほど存在する。整形技法はロクロナデを基本とし、その後外面下半部に斜めヘラケズリを施す。10・14・19・23の内面には、胴部に放射状暗文を施す。底部整形は、回転糸切り、回転糸切り後ヘラケズリ、ヘラ切りなどがみられる。口径：底径比は44～59%。13個体に煤状の炭化物が付着し、灯明用として使用された痕跡を持つ。

**高台付環 (20)** 底部破片のみであるが、内面に放射状暗文が認められる。底部は回転糸切りで、削り出しによる高台を持つ。

出土土器は平安時代9世紀後半の土器群であるが、遺物の出土状態は建物の廃棄時にとまなう祭祀行為と考えられるため、建物の利用時期はこれよりやや古く考えられる。

#### 1号溝 (図版38～42・観察表74～75頁)

土師器の環A・B類、皿A類、大型環A類、碗、環壺、高台付環、鉢B類、高環、手握ね土器、壺、甕A・B・C・D類、置きカマド、須恵器の高台付環A類、甕などが出土している。34の天目茶碗は中世の遺構からの混入品と考えられる。

#### 土師器

**環A (37～44)** 口径13～15.5cm、底径9～11cm、高さ3～4cmの盤状環である。内外面ともにロクロナデの整形痕が残し、底部は回転ヘラ切りである。口径：底径比は55～65%。

**環B (19・21・23)** 底部は回転糸切り後周辺部ヘラケズリ、またはヘラケズリ。

**皿A (36)** 口径19cm、底径9cm、高さ2.3cm程の皿。

**大型環A (17・18・20・22)** 口径15cm、器高5cm以上の深みのものが多く、整形技法は基本的には環Aと共通する。底部から胴下部への立ちあがりは22のように明確に屈曲するものと、やや丸味を持つものがある。17・22は外面に縦方向のミガキが施される。口径：底径比は50～68%である。

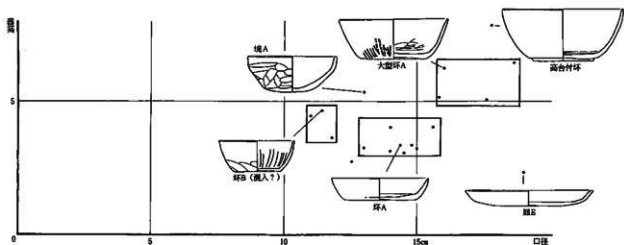
**碗 (47～50)** いずれも器壁が厚く、外面にヘラケズリ痕を明瞭に残す。

**環壺 (24～27)** つまみが残存するものは24のみ。つまみは頂上部の盛り上がりが高く、つまみと天井部の接地部が有段となる。胴部はロクロ整形で、縁部のかえりの形態は26・27がA類、25がB類である。

**高台付環 (28・29・32)** 3点の内、29のみが完形に近い。整形はロクロナデで、底部は回転糸切りである。

高台は削り出しによる。大型環と比較して深みである。

**鉢B (51)** 口径20cm、高さ12cm程の丸底の鉢で、全体的に丸味を持つ。底部に木葉痕を若干残す。



第11図 1号溝出土 壺・皿血量分布

高壺 (55) 高壺脚部が朝顔状に外反して広がる。脚部の底径は10cm程で、外面に縦方向のヘラケズリを持つ。壺 (8) 頸部にくびれを持ち、短口縁の壺である。整形時のロクロによるナデが外面に残る。器壁は1cmと厚手で、胎土に長石、石英の細粒をわずかに混入する。

壺A (6) 完形品は6の1点のみである。外面胴部に縦ハケ、内面胴部に横ハケを施す。口縁部はナデ。底部は木葉痕を残す。

壺B (1・3・5・7・13・14・16) 口径は20~23cm程の長胴壺である。口縁部はいずれも頸部から緩やかに外反する。胴部は基本的に円筒形を呈するが、わずかに肩部の張りを残すものもみられる。1は外面に縦方向のハケ、3は外面にハケとヘラケズリ、内面にハケ、5・14は内外面にヘラケズリ、7・13は内外面ハケによる調整を行っており、調整技法は単一ではない。

壺C (9) 口縁部が広く外反する壺で、内外面をハケ調整を行っている。

壺D (11) 内外面にロクロ整形痕を残す壺である。口径24cm。

置きカマド (56) 口径44cm、底径59cm、高さ35cm程の置きカマド。外面にハケ、内面に粘土積み痕を残す。底は欠損し、その痕跡のみである。胴部横に直径3~4cm程の円孔を持つ。

手捏ね土器 (52~54) 内外面に指頭痕、ヘラケズリを残すミニチュア土器。53・54は底部に木葉痕がみられる。

#### 須恵器

高台付壺A (30・31) 底径12cm前後の高台付壺で、底部が高台部よりやや張りだす。ロクロ成形痕をそのまま残す。

壺 (33) 口径21.2cmの壺口縁部。内外面にロクロ成形痕を残す。

本溝内の出土遺物は、奈良時代から平安時代初期に限定されており、8世紀代から9世紀初頭に使われた水路状の遺構と考えられる。

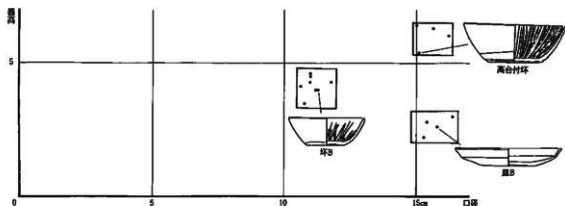
#### 2号溝 (図版43. 44・観察表75頁)

土師器の壺B類、皿B・C類、高台付壺、壺A類、鉢A類、台付壺、壺C類、須恵器の壺蓋が出土している。

#### 土師器

皿B (1・3・4) 胴部中央付近に明瞭な稜を残す皿である。胴下半部はロクロ回転を利用したヘラによるロクロケズリで、屈折部の稜もこのヘラ整形による。胴上部はロクロ回転のナデで、口唇部がわずかに積みあげられる。底部は回転ヘラ切りまたは回転糸切り後回転ヘラケズリが認められる。いずれも口径が15cm以上、高さが3cm以下のものである。

皿C (2) 皿ほど胴部の稜が明確ではない。整形および、調整技法は皿B類と共通する手法である。ロク



第12図 2号溝出土環・皿法量分布

ロ回転のナデによる口唇部の揃みあげが顕著である。

環B (5~14) ロクロ整形の後外面下半を斜めヘラケズリする環。8の内面にのみ暗文が認められる。底部の整形は回転米切り、回転米切り後ヘラケズリ、ヘラケズリなどがある。口径10.5~12cm、底径4.5~6cmに集中し、口径：底径比は42~56%である。

高台付環 (15~18) 口径15~16cm、底径7~8.5cm、5cm以上の大型環で、底部に削り出し高台を持つ。粘土の積み上げは巻き上げ法で、整形はロクロ回転によるナデである。16は内面胴部に放射状暗文が認められる。坏蓋A (19) 有揃みの蓋であるが、揃み部が欠損している。縁部のかえりは短く、口径は17.4cmを測る。口径から高台付の蓋と推定される。

鉢A (22) 口縁部が外側に屈折する鉢で、口径24cm、底径10cm、高さ10.7cmを測る。胴部の整形はロクロによるもので、底部はヘラによって削り出し高台状を呈する。

壺C (23・24) 内外面をヘケ調整、口縁部をヨコナデ調整を行なっている。

台付壺 (21) 口径12.8cm、高さ17cm程の台付壺で、外面にヘラケズリが認められる。

#### 須恵器

坏蓋 (20) 縁部の口径が22cmと大型の蓋である。胴部はロクロ整形で、縁部のかえりが長く、段状に屈曲する。

以上の土器群は、平安時代前期、9世紀後半の土器と考えられる。

#### 4号溝 (図版45・観察表75頁)

土師器の環B類、皿B類が出土している。

環B (2~5) 底径5~6.6cmの底部片のみである。胴下半部に斜めヘラケズリ、底部は回転米切り、回転米切り後ヘラケズリによる。

皿B (1) 胴部のくびれは緩やかで、稜線が弱い。ロクロケズリの後にナデによって仕上げられている。

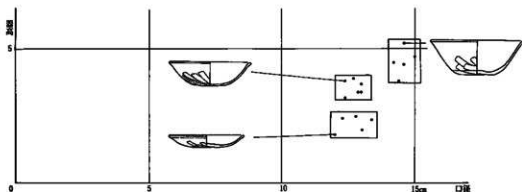
#### 9号溝 (図版53. 54・観察表76頁)

土師器の環C・D類、皿C・D類、片口鉢、壺B類、坏蓋B類、須恵器の環、高台付環のほか、灰釉陶器片、青磁片が出土している。

#### 土師器

環C (1~4・6~13) 口径は12~15cm、底径2.5~6cm程でやや大ききバラツキがみられる。ロクロ整形によるもので、外面下半部を斜めヘラケズリを施す。底部の整形は回転米切り後未調整または回転米切り後ヘラケズリである。口径：底径比は20~40%。

環D (5) 整形および調整技法は基本的に環C類と同じであるが、内面が黒色で、螺旋状の暗文を胴部に持つ。底部は回転米切り後ヘラケズリである。



第13図 9号溝出土土・皿流量分布

皿C (14~16・18) 外面胴部下半部に斜めヘラケズリをもつ。口唇部は玉縁状を呈する。底部整形は回転糸切り後ヘラケズリ。

皿D (17) 底部が丸底状を呈する。

片口鉢 (21) 口径24cm程の片口鉢。

甕B (19) 口縁部が肥厚し、「く」の字状に屈曲する。外面口縁部はナデ、胴部ハケ、内面口縁から胴部にかけてハケ調整を行なう。

坏壺B (20) 縁部のかえりが外方に長く屈折する。天井部は欠損。

#### 須恵器

高台付坏 (23・25) ロクロ整形痕を明瞭に残す坏で、高台は付け高台による。

坏 (24) 底部欠損のため有台、無台の判断ができない。胴部は椀型を呈し、口径11cmを測る。

灰軸陶器 (26) 灰軸陶器の底部破片で、器種は皿と考えられる。高台は貼りつけによるもので、台部が高い。内面底部に円形の凹線が2条めぐる。

青磁 (22) 青磁の口縁部。口縁部は波状を呈し、胴部に花文様を持つ。

本遺構は出土量の多い土師器から平安時代前期後半の10世紀後半に位置づけられる。

#### 10号溝 (図版52 観察表76頁)

甲斐型坏1点と常滑型、灰軸陶器片が出土しているが、中世陶器は11号溝に伴う混入品と考えられる。坏B(6)は口径11.4cm、底径6.6cmの坏。外面を斜めヘラケズリ、内面器壁部に暗文がほどこされる。

#### (2) 土製品

##### A. 土 錘 (図版61)

A-4グリッドより土錘が1点出土している。

形態は樽形の管状土錘で、長さ3.5cm、幅1.3cmを測る。長軸にそって直径2.5cmの孔が貫通する。同様の土錘は本遺跡B地区10号住居址で1点発見されている。

##### B. 玉 (図版40)

1号溝内より土製の小玉が1点出土している。直径1.3cm、長さ1cmの扁平な小玉、両端に小孔が穿たれるが、未完通である。

##### C. フィゴの羽口

12点のフィゴの羽口が出土している。出土地点は、2号住居址1点、5号住居址2点、5号溝3点、10号溝1点、11号溝1点、A-4グリッド1点、表土3点である。小破片が多く、このうち実測可能な個体は5号住居址の2点、A-4グリッド1点、表土1点の計4点のみである。

2号住居址(図版26・14) フィゴの先端部破片が出土している。外面は高熱によって灰色に熱変している。  
 5号住居址(図版35) 82は長さ9cm、直径7cm、貫通孔径約2.5cmの羽口で、先端部が灰色に熱変している。  
 81は胴部破片で、直径約8cmと推定される。

5号溝 先端部破片が出土している。1点は先端が、灰色となり、気泡状に熱変する。

10号溝 先端部破片が出土している。

11号溝 胴部破片が出土している。

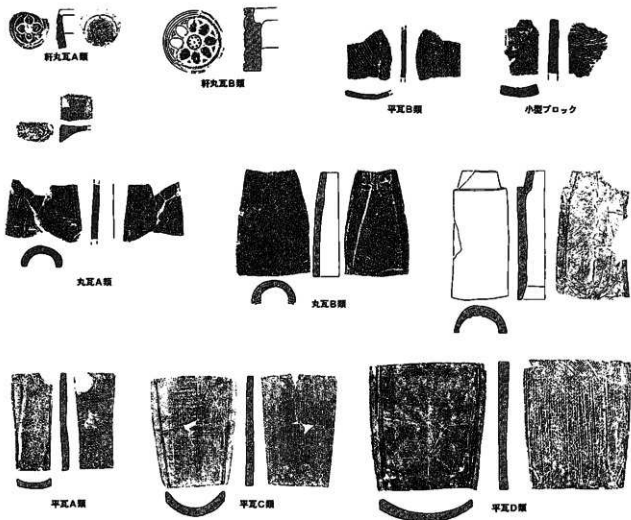
A-4グリッド(図版61) 出土したフィゴの中で最も遺存状態の良い好な個体である。長さ12cm、直径5.5~6.5cm、貫通孔径は2.2cmを測る。胴部中央付近から先端部にかけて灰色に熱変し、最先端部では気泡状に溶変する。

表土(図版61) いずれも胴部破片であるが実測可能な個体は1点である。14は先端部に近く、灰色に熱変する。

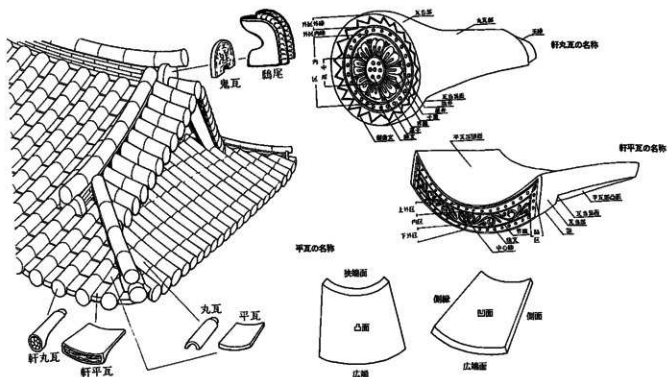
### (3) 瓦

#### 1) 瓦の分類と構成

本遺跡出土の瓦は、いずれも本瓦葺きの瓦群で、その形態や製作技法から下記のように数種類に分類される。ここでは、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦の器種ごとに形態分類を行ない、屋根葺きの段階で組み合わせると考えられる瓦を1~3群に統合した(表1)。



第14図 瓦の分類



(京都国立博物館1988および複製1972より作成)

第15図 瓦の名称

a. 軒丸瓦

A類 直径7.2cm程の小型の軒丸瓦である。瓦当面には素弁四葉蓮華文が施され、外区に2重の沈線がめぐることが、中房部分は表現されていない。瓦当面の文様はスタンプ状の范で押され、陰刻される。瓦当面のみで、丸瓦部分と接合するものは発見されていない。

B類 素弁八葉蓮華文軒丸瓦。瓦当面の直径16.5cm、厚さ4.4cm。同類の瓦は、甲府市上土器遺跡、一宮町甲斐園分寺跡、八代町久保遺跡で出土している。

b. 軒平瓦

A類 小型の軒平瓦。瓦当面には内区に唐草文、下外区にわくどりの痕跡がある。顎の部分は有段とならずになめらかに瓦体部へと移行する。凹面に布目、凸面にヘラケズリがなされる。

c. 丸瓦

A類 小型の行基式丸瓦。丸瓦面に長軸方向のヘラケズリ、裏面に布目痕を残す。

B類 行基式丸瓦。

C類 有段玉縁。丸瓦面に縄目痕、裏面に糸切り痕と布目痕を残す。

d. 平瓦

A類 B～D類と比べ、幅狭1枚作りの平瓦。凹面に布目、凸面短軸方向に縄目の敲き目がみられる。1枚作りのため大きさに個体差が大きい。

B類 厚さが9mmほどの薄手1枚作りの平瓦。凹面に布目と横骨痕、凸面長軸方向に長い縄目が残る。

C類 中型1枚作りの平瓦。凹面に布目痕、横骨痕を残し、周辺部にヘラケズリする。凸面は長軸方向に長い縄目を残す。このタイプには隅切りを行なったものがわずかに存在する。

D類 1枚作り大型の平瓦。凹面に布目痕、糸切り痕の他わずかに横骨痕を残す。凸面には糸切り痕、長軸方向に長い縄目痕が残り、表面に砂粒が付着する。

e. 道具瓦

平瓦A類をさらに焼成前に細かく切断した瓦で、ブロック状の小さな個体である。平瓦や丸瓦の固定や補強に



使われた道具瓦と推定したが、詳しい使用方法は不明である。

以上分類した瓦が、屋根瓦葺きの段階でそれぞれどのように組み合わせるのかについて、その出土状態から復元すると下表のように1～3群に構成群に区分されると考えられる。2群の瓦については県内の調査例から一宮町園分寺に葺かれた瓦群と極めて類似している。但し、軒丸瓦は園分寺創建以前の国府寺に葺かれたとする説があり〔佐野1981〕、本群の丸瓦、平瓦との年代が必ずしも一致するものではないが、園分寺周辺との関連性を重視し、とりあえず第2群中に含めるものとする。1群については、これまでの寺院址や瓦窯址関係の遺跡からは全く発見されておらず、今回の調査例が初見である。3群瓦については、同類の様式は春日居町寺本慶寺などでも発見されているが、製作技法上の特徴はこれまでの発見例とは異なった在り方を示している。

表1 瓦の分類とその構成一覧



## 2) 瓦の製作技法

瓦の製作技法の違いは、上記の分類にあたって大きな指標となるため、類型化の作業にあたってひとつの基準としたが、ここではさらに詳しく各瓦の製作技法上の特徴について記し、その復元を推定できる範囲で行いたいと思う。

### a. 第1群瓦

酸化焰焼成を基本とした小型の瓦群である。

軒丸瓦A類は外区に2重の沈線がめぐり、内区に素弁4葉蓮華文を持つ。スタンプ状の范で押され、文様部分は凹みで表現される。瓦当面の直径は7.2cmと極めて小型で、厚さは1.5cm程である。胎土には、長石、雲母、赤色スコリア粒子が含まれ、焼成は基本的に酸化焰焼成されるため、色調が茶褐色を呈する。このタイプの軒丸瓦は、瓦当面のみで、丸瓦部分が欠損しているため全体の作りについては不明であるが、瓦当面および丸瓦A類によってその製作技法はある程度類推復元することができる。

軒平瓦は1点のみで、全体の3分の1程を残して欠損している。瓦当面の文様は三叉文を含む唐草文と推定され、下外区にわくどりの痕跡がわずかに認められる。文様は軒丸瓦と逆に陽で表現される。瓦当面の上下幅は3.1cm程で、平瓦本体部分の厚さは7mmと極めて薄い。平瓦の凹面には布目、凸面にはヘラケズリ痕が明瞭に認められ、1枚作りした平瓦に瓦当面を接合している。顎の部分は有段とならず、緩やかなカーブを描く。

丸瓦の破片が多く出土しているが、全体を復元できる資料は発見されていない。破片資料から判断するかがり有段玉縁は全く認められず、行基式と判断される。丸瓦面には長軸方向のヘラケズリ、裏面には布目痕が見られることから、直径5.5cm程の木型(きね)に粘土を巻きつけ、ヘラ整形を行なったのち、半載し2枚の丸瓦を取っている。丸瓦の厚さは0.8～1.2cm程で、長さは不明である。布目痕の密度は1cmあたり、6×6本ないし6×8

本程度の粗布である。

平瓦の主体はA類である。全長は25~29cm、狭端幅8.3~11.5cm、広端幅10~14cm、厚さ1.5~2cmを測る。大きさの個体差が激しく、他の平瓦と比較して幅が狭いことが大きな特徴である。1枚作りで、凹面には布目、凸面には縄目の叩き目が認められる。凸面の縄目から縄を巻き付けた幅3cm、長さ10cm程の叩き板を整形時の粘土の叩きしめに使用していることがわかる(縄目1)。布目痕の密度は1㎤あたり、6×6本、ないし8×8本で、丸瓦と共通する。

#### b. 第2群瓦

軒丸瓦B類は、外区に2重圍がめぐり、内区に素弁八葉蓮華文、中房に1+8の蓮子が施される。瓦当面は風化が顕著であるが、わずかに木製瓦当范の年輪痕が認められる。瓦当面の直径は16.5cm、厚さ4.4cmを測る。胎土中に長石、赤色スコリア状粒子が含まれ、焼成は還元焰焼成である。瓦当面と丸瓦部分との接合は、瓦当面裏側の上半に弧状の窪み部を作り、丸瓦をそこに差し込む印籠づけ方式である。側面は、ヘラケズリされる。これと対になる軒平瓦は検出されていない。

丸瓦は有段玉縁のC類である。本類は桶巻き2枚作りで、裏面には製作時の糸切り痕と、布目痕のほかに横骨痕が明瞭に残される。丸瓦面には縄叩き目が長軸方向に施される(縄目2)。製作に使用された桶は直径は10.5cm程のほぼ円筒形で、この桶に糸切りによって取りだされた粘土板を巻き付けて成形する。瓦の前面裏側には、前にある丸瓦の玉縁部との連結をスムーズにするため斜めにヘラケズリがなされる。瓦の大きさは、長さ33~34cm、幅14~16cm、玉縁部分先端の直径は10cm程である。胎土には長石、石英、赤色スコリア状粒子が含まれる。色調は茶褐色あるいは灰色で、個体によって酸化焰焼成されたものと、還元焰焼成されたものに分れる。布目の粗さは1㎤あたり、6×7本、8×8本、15×15本など粗布を使用するものと細布を使用するものに分けられる。

平瓦は1枚作りのD類である。凹面には製作時の糸切り痕、布目痕とともに横骨痕がわずかに認められ、側面と凹面周縁部にヘラ削りなどを行なっている個体も多い。製作に使用された凸台は、横骨痕が見られることから、桶状のものを利用して成形されたと考えられ、1枚作りの場合にも木型を利用するものと桶を横に覆かせて使用する2つの方法があったと推定される。梓板痕の存在をもつただちに桶巻き作りとは断定できないことは、佐原真氏によっても指摘されている〔佐原 1972〕。凸面には糸切り痕と長軸方向に長い縄叩き目が見られ、丸瓦と同様の外面調整がされている。凸面には、砂粒が付着する例がおおく、縄目を付ける際の工具と粘土面との離れ砂の意味をもつものと推定される。瓦の大きさは長さ34cm、狭端幅22cm、広端幅25cm程を測る。出土瓦の内1点のみが隅切りを行なった隅瓦と考えられる。胎土および焼成は丸瓦と共通した特徴を持つ。布目の粗さは、1㎤あたり、6×6本、6×8本、8×8本など比較的粗い布を使用している。

#### c. 第3群瓦

還元焰焼成された灰色から黒灰色の瓦群である。本群に対応すると考えられる軒先瓦は発見されていない。

丸瓦は行基式のB類で、2枚作りのものである。丸瓦面は成形時にヘラケズリおよびヘラナデが行なわれ、表面はなめらかとなる。裏面には布目痕が残り、先端部がヘラケズリされている。瓦の側面切り離し部は、内側1cm程の厚さできれいに切り離された痕跡を持ち、その外側では切り離し時に割り取られたように凹凸の激しい面をなす。したがって、土管状の粘土円筒から2枚の瓦を作るのに糸切りが行なわれず、別な方法で2分割されている。ある程度まで乾燥した粘土円筒に内側から瓦の厚さの2分の1~3分の2程度に刃物をいれ、これを分割線として分割する方法がもちいられている。瓦の大きさは、長さ26~27cm、広端幅12~13cm、狭端幅7.5~8cm程である。胎土中に長石、石英、蜜母などが多く含まれている。布目の粗さは1㎤あたり、8×8本、6×10本、8×10本程度である。本類の場合布の縦じ合わせは瓦の長軸方向には走らず、ほとんどが狭端面より1~2cmほど下へ横方向に走ること特徴としている。

平瓦は中型1枚作りのC類である。凹面に糸切り痕、布目痕、横骨痕などが見られ、周辺部がヘラケズリされている。凸面には長軸方向に長い縄叩き目が付けられる(縄目3)。直径15cm程の桶を横に覆かし製作時の凸台とし、この上に布をかぶせ、粘土魁から糸切りによって切り出した粘土板を載せて成形する。

側面は、ヘラケズリによって整えている。大きさは長さ28~30cm、広端幅15~17cm、狭端幅13~14cm、厚さ2cm前後である。製作された瓦を斜めに切断して作られた隅瓦も2点存在する。胎土には長石、石英が含まれている。布目の粗さは1cmあたり、6×8本ないし8×8本の粗布が多い。

出土状況および製作技法上の類似点から判断して、薄型の平瓦B類も3群の瓦群となる可能性が高い。破片資料の1点だけであるので大きさは不明であるが、凸面には長軸方向に縄目痕、凹面には布目痕を残す。この布目痕の粗さは1cmあたり6×7本である。

### 3) 主な遺構の出土瓦

#### 1号住居址 (図版65)

丸瓦B類が1点、平瓦A類が7点ほど出土している。これらの瓦は2号住の一部でも見られるように床面直上部分に敷きつめられた状態で発見されている。

#### 2号住居址 (図版66・67)

丸瓦B類が8点、平瓦B類が1点、C類が9点出土している。平瓦C類のうち2点は、隅瓦である。

住居址内の出土状況は、カマド組に使用されたものと、その南の瓦敷き施設に使用されたものがあるが、いずれにしろ住居内の炊事に関係した施設に転用された瓦といえる。

#### 3号住居址 (図版68)

丸瓦B類の破片が1点出土している。

#### 7号住居址 (図版68)

丸瓦B類が2点出土している。

#### 瓦溜遺構 (図版69~73)

第2群の丸瓦C類と平瓦D類のほとんどがこの遺構から出土している。

出土地点	出土重量(g)	出土地点	出土重量(g)
1号住	3.7	9号溝	336.4
2号住	47.0	12号溝	31.2
3号住	22.3	1号墳墓	4.7
4号住	579.3	2号墳墓	152.4
5号住	56.7	3号墳墓	390.1
7号住	33.9	1号掘立	29.6
9号住	73.1	1号土壇	131.1
1号溝	232.8	B-1Gr	19.7
5号溝	526.4	B-3Gr	31.8
6号溝	10.4	表採	11.5

第16図 各遺構の鉄製品出土重量



第17図 金銅製品

#### (4) 金銅製品 (第17図・図版100)

本遺跡のA地区1号溝の覆土中より箸状の長い青銅製品が2点出土している。

製品は青銅製で、表面に鍍金を施している。長さ28.2cm、最大幅2.1cm、厚さ0.2～0.3cmを測り、上端が三角形状を呈する。形態的には、木製斎串にも類似しているが、その機能については不明である。

#### (5) 鉄製品 (図版111)

本遺跡A地区からは、総重量2,801.5グラムの鉄が出土している。このうち、2,767.6グラムが鉄滓、12.8グラムが釘、21.1グラムが不明製品である。

鉄滓以外の鉄製品は7号住居址から出土しており、2点が釘、1点が釘又は鉄線状の製品である。釘は長さ6cm、厚さ0.5cmほどで、頭の部分がやや斜めにつぶれ、先端部が尖る。

鉄滓は、多くの遺構で散在的に検出されるが、4号住居址で579.3グラム、1号溝で232.8グラム、5号溝で526.4グラム、2号低墳墓周溝内で152.4グラム、3号低墳墓周溝内で390.1グラムと出土量が多い。形状は不定形のものほとんどで、直径2～10cm程度の大きさの鉄滓が多い。表面は凹凸が激しく多孔質で、色調が茶褐色から暗紫灰色を帯びる。断面に炭の薄片が混入している個体や、小礫と接合しているものも見られる。

#### (6) 琥珀製品 (図版35)

5号住居址において、琥珀製の小玉1点が出土している。大きさは長さ1.5cm、幅1.2cm、厚さ1cmの無花果状を呈し、上部に穿孔された痕跡が認められる。

## 第4節 中・近世

中・近世の遺構は、奈良・平安時代の遺構群と同様に調査区西側に集中して確認されている。該期の遺構はA地区では竪穴状遺構1基、掘立柱建物址1基、土壇墓3基、溝状遺構4本、C地区では集石遺構が検出されている。これらの遺構から検出された遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、石臼、古銭、石製品、瓦などである。

### (1) 土器

#### 1) 土師質土器

本遺跡土師質土器は、皿形土器、内耳土器、罎釜、鉢、播鉢が存在する。

#### A. 分類

##### a. 皿形土器

33点の土師質皿は、灰色に近い淡褐色から黄褐色を呈し、胎土に雲母・長石・スコリア状粒子を含むものが大半で、焼成は良好である。流量から、口径6～9.4cmの小皿が3類、口径10～14cmの皿が5類に分類される。

皿A みこみ中央部分からならかにやや内湾しながら立ちあがり、口唇部が丸味を帯びる。

皿B 底部から直線的に立ちあがり、口唇部がやや尖り気味となる。

皿C 底部からの立ちあがりやや内湾し、口唇部が丸味を帯びる。

皿D 胴下半部がヘラケズリされ、有稜となる。口唇部は丸味を帯びる。

皿E 口縁端部が揃まれ、やや外反する。

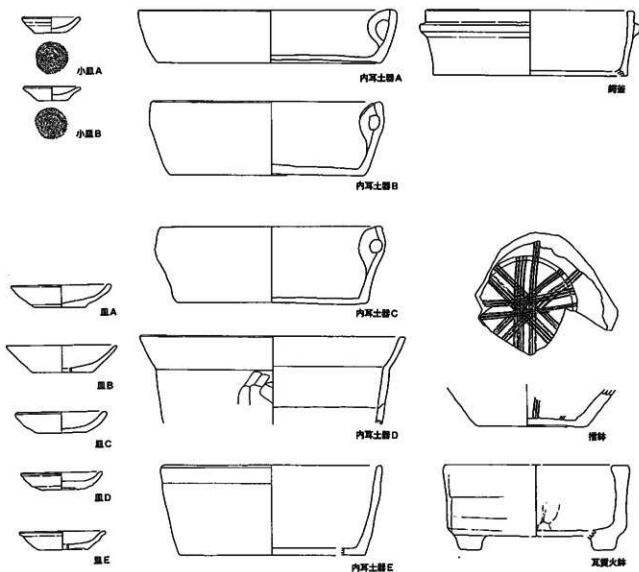
小皿A 底部からの立ち上がりが内湾し、口唇部が丸味を帯びる。

小皿B 底部からの立ち上がりが直線的ないしやや外反し、口唇部が丸味を帯びる。

小皿C 胴部が回転ヘラケズリ整形されるため、胴中央部に稜が存在する。

#### b. 内耳土器

内耳土器と判断される個体は全部で22個体出土している。外面が暗褐色、内面が茶褐色のものが多く、胎土中に雲母・長石の細粒子を含む。焼成は酸化焙焼成のものがほとんどであるが、1点だけ還元焙焼成された瓦質を呈する個体が存在する。基本的な形態は、平底で円筒形の胴部を持つが、深さや口縁部の特徴などから5類に分



第18図 土師質、瓦質土器分類

類される。

内耳A 深さが7cm以下と浅く、底部からやや内湾しながら立ちあがる。口唇部がやや丸味を帯びるもの(A1類)と面取りされたように平らなもの(A2類)が存在する。

内耳B 深さ10cm程で、胴上部でやや膨らみ、口縁部が直立する。

内耳C 深さ10cm程。胴上部の膨らみが顕著で口縁部がやや内傾する。

内耳D 深さ12cm以上の深身のもので、胴上部がくの字状に屈折し、口縁部がやや内湾気味に開く。

内耳E 直立口縁をもつ深身の内耳土器で、円筒状を呈する。

c. 銅釜

5号溝から3個体の銅釜破片が出土している。底部は内耳土器と同様に平底となり、円筒型の胴部を持つ。口縁下2cm程の部分に銅状の隆帯が通るのを特徴とする。内耳土器の相違は編をささえる手段が決定的に異なり、桐原健氏の指摘するとおり内耳は囲炉裏に、銅釜は竈に対応した鍋であることである。淡褐色を呈し、胎土中に雲母・長石・赤色スコリア状粒子を含む。

d. 鉢

11号溝から出土した破片が1点存在する。胴部上半は八の字状に大きく開き、口唇部は内傾して尖る。外面茶褐色、内面灰色を呈し、胎土中に長石・赤色スコリア状粒子を含む。

#### e. 播鉢

器面が茶褐色から橙色を呈する播鉢で、酸化焰焼成の良質の製品である。底部から八の字状に大きく開きながら立ち上がり、口縁部がやや外反する。口唇部はやや内傾して面をなす。内面の播鉢部分は、みこみ部分から八等分するように放射状に柵目が施される。口唇端部がやや窪むような面取り手法は明らかに瀬戸・美濃系の鉄軸播鉢の影響と考えられる。

#### 2) 瓦質土器

還元焰焼成を受けて、灰色の瓦質を呈するもので、火鉢、内耳形土器、播鉢などが存在する。

##### a. 火鉢

5号溝より破片1点のみが出土している。全体の形状は四角形を呈し、各隅に脚を持つものと推定される。口縁部は幅広く面取りされている。胎土中に細かい長石粒を含む。

##### b. 内耳土器

還元焰焼成を受けたため瓦質を呈する個体であるが、製作技法や形状は土師質のものと変わらない。出土した内耳土器の中でも極めて少なく、焼成時の火回りの関係で酸欠となり灰色に焼きあげられた個体とも考えられ、焼成の基本はあくまでも酸化焰焼成であると推定される。

##### c. 播鉢

製作技法は土師質の播鉢とほとんど変わりが無いが、焼成のみが異なる。

#### 3) 陶磁器

本遺跡A・C地区からは中・近世の陶磁器類62点が出土している。これらは灰陶陶器、鉄軸陶器、染付、青磁、白磁等に分類されるが、特に生産地域の関わりの中で見ると、瀬戸・美濃系、肥前系、常滑系、志戸呂系、中国陶磁器などが存在する。ここでは該期の物資の流通を知る意味でも各陶磁器の生産地を中心に据えて記載してみたい。

##### ア. 瀬戸・美濃系

出土した陶磁器中瀬戸・美濃系の陶器は他と比較しても多く、37点を数える。これらの地域に系譜を持つ陶器は、灰軸の丸皿・端反皿・仏華瓶、鉄軸の茶碗・播鉢・片口鉢、志野丸皿、アメ釉を特徴とするオロ茶碗などがある。なお編年にあたっては、藤沢良祐氏の大塚編年（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』1986）を中心に比定作業を行なう。

a. 灰軸丸皿 底部からやや内湾気味に緩やかに立ち上がり、付け高台の丸皿と、底部から直線的に立ち上がり削り出し高台をもつ2つのタイプが存在する。5号溝、11号溝で出土。

b. 灰軸端反皿 口縁端部が外反する灰軸皿。内面のみこみ部に印花文が描かれるものもある。5号溝、11号溝で出土。

c. 灰軸仏華瓶 口縁部、底部が欠損し胴部破片のみである。やや下膨らみをもつ体部で、胴部中程に沈線が3条めぐる。1号住居址出土であるが、混入品と考えられる。

d. 鉄軸碗 美術工芸的には「天目茶碗」の名で呼ばれる鉄軸掛けの碗形陶器。体部がやや丸味をおびる。口縁部はほぼ直立するが、口縁端部が丸味を持つものと短く外折する2つのタイプに分けられる。鉄軸は胴最下部と高台部を除いて全体におよぶ。1号低墳墓周溝内（混入）、1号溝（混入）、5号溝、11号溝などから出土している。

e. 鉄軸播鉢 口縁端部が直立し、2cm程の縁帯が形成される。胴部は直線的に開き、底部付近が削られ有段となるものと、直線的に立ち上がる個体がある。内面の柵目は土師質の播鉢と比べやや密となっている。5号溝出土。

f. 鉄軸片口鉢 口唇部がやや内傾した面をなし、1カ所に注ぎ口が付けられている。胴部は直立し、外面胴下

半部をのぞいて鉄釉が施される。5号溝出土。

g. 志野丸皿 胴部がやや内湾気味に立ち上がり口縁端部がわずかに外反する。削り出し高台である。5号溝出土。

h. 志野大皿 高台部の径が21cmの大皿であるが、体部上半は欠損している。5号溝出土。

i. オロ茶碗 内外面にアメ釉を施した碗で、高い付高台をもつ。5号溝出土。

#### イ. 志戸呂系

胴部にロクロ整形痕を残し、口唇端部がやや細身となりながら縮みあげられる鉄釉の碗。5号溝で1点のみ検出されている。

#### ウ. 肥前系

肥前系の磁器としては、染付皿、染付瓶、染付碗などが存在する。

a. 染付皿 胴部中央部にわずかに稜をもつ皿で、高台は直立して高い。内面に水墨画風の絵を描いた染付皿である。2号低墳墓（混入）、5号溝、6号溝出土。

b. 染付瓶 ならかな肩部を有する瓶あるが、他の部位は欠損している。5号溝出土。

c. 染付碗 量み付きの部分以外は乳白色の地に淡い藍色の染付文様が描かれる碗。2号低墳墓南周溝内出土。

#### エ. 常滑系

常滑の大甕の口縁部が3点検出されている。3点共に口縁部形態が異なり、製作年代もそれぞれ異なると考えられる。

#### オ. 中国系

9号・12号溝より中国青磁および白磁が3点出土している。9号溝出土青磁は皿の口縁部破片で、波状の口縁をもつ。12号溝出土青磁は碗ないし皿の底部で、直立した高台を有する。白磁は四耳壺の底部破片で、削り出し高台をもち、底部が2.5cmと厚い。

#### カ. その他

C地区集石より19世紀代の近世陶器が4点出土している。器種はそれぞれ異なり、盃、火鉢、皿、甕である。いずれも瀬戸系の焼き物と考えられる。

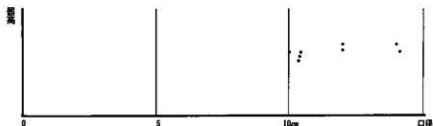
### 4) 主な遺構の出土遺物

#### 5号溝 (図版46～51 観察表75～76頁)

土師質の皿・内耳土器・銅釜・播鉢、瓦質の内耳土器・火鉢・播鉢、瀬戸・美濃系の灰釉丸皿・灰釉端反皿・灰釉香炉・鉄釉碗・鉄釉播鉢・鉄釉片口・志野丸皿・志野大皿・志野碗・オロ茶碗、常滑大甕、志戸呂碗、肥前染付皿・染付瓶など多種類の生活雑器が出土している。その他2号低墳墓南周溝内の中世出土遺物(図版23-36～39)は、出土位置から本来本溝に伴うものと考えられ、この項で記述する。陶磁器の年代から13～18世紀前半にわたる遺物が含まれているが、16～17世紀代の製品が最も多い。

#### 土師質土器

皿A (2・8) 口径は2点の間で開きがあるが、2が12cm、8が10.4cmである。いずれもロクロ整形による皿で、底部に回転糸切り痕が明瞭に残る。2は内面に煤状炭化物が附着し灯明皿として使用されたと判断される。



第19図 5号溝出土 土師質皿法量分布

- 皿B(6・7) 2点とも器壁が薄く、直線的な立ち上がりを持つ皿である。推定径は6が12cm、7が14cmを測る。
- 皿C(5) 口径10cm、高さ2.4cmの皿で、胴部が内湾しながら立ち上る。底部は回転糸切り。
- 皿D(3・4) 口径10.4cm前後、高さ2.2cm程の皿で、外面胴下半部にヘラケズリ時にできた稜が存在する。
- 内耳土器A(50~52・57~60) いずれも口縁端部が面取りされたA1類で、口径33cm前後、底径28~30cm、高さ6~7cmを測る浅い内耳土器である。50はやや内湾気味となる。57~60の個体については内耳部分が欠損しているため全体の形状は明らかではないが、高さや胴部の立ち上がりが本類の特徴を備えているといえる。
- 内耳土器B(53・54) 胴上部の膨らみを特徴とする内耳土器で、口縁部が直立する。上部破片のみで全体の大きさは不明であるが、推定口径26~28cm程である。
- 内耳土器C(49) 口径28cm、底径24.3cm、高さ9.5cmの内耳土器で、胴上部が膨らみ、口縁部がやや内傾する。
- 罎蓋(61~63) いずれも破片資料であるが、62では胴部と底部との屈曲部が認められ、内耳同様の平底鍋と考えられる。推定径はそれぞれ異なり、20cm代から30cmを超えるものも存在する。調理する内容物の量や種類によって使い分けが行なわれたのであろう。
- 播鉢(42・47) 胴下半部の破片2点が出土している。底径は42が16.7cm、47が24cmを測り、内面の櫛目の単位は8本である。

#### 瓦質土器

- 内耳土器(55) 形態的には土師質内耳土器B類に近い。口縁端部が面取りされ、やや内傾する。
- 火鉢(48) 方形火鉢のコーナー部分の破片で、底部に脚を持つ。器高は10.7cmであるが、一辺の長さは不明である。口縁端部が面取りされる。
- 播鉢(43・45) 瓦質播鉢の胴下半部破片資料である。内面の櫛目単位は6~7本。

#### 瀬戸・美濃系

- 灰軸丸皿(図版23・38) 図版23・38は大窯第3小期16世紀中葉。
- 灰軸端反皿(11) 内面に印花文を施す端反皿で、大窯編年第2小期(16世紀初頭)の製品。
- 灰軸香炉(16・17) いずれも灰軸香炉であるが、16は袴腰型、17は筒型を呈する。底部はロクロ回転を利用したヘラケズリ、胴部にロクロ整形痕を残す。17は大窯系17世紀後半の製品。
- 鉄軸碗(23~24・27・31~34) 客窯から大窯の時期にまたがる鉄軸の碗である。23は輪高台系の天目茶碗で、客窯後期I期(15世紀)の製品である。24・31・32は大窯系17世紀後半の製品で、口縁端部がやや丸味を持ち、軸の発色が淡茶色を呈する。27・34は大きさが異なるが、いずれも大窯系17世紀末の製品である。33は削り出し高台で、大窯編年第4小期(16世紀後半)の製品である。
- 鉄軸播鉢(36・44・46) 36の播鉢口縁部は大窯編年第6小期(16世紀末葉)の製品。44・46の播鉢底部は大窯編年第5小期(16世紀後半)の製品。44は内面に16本単位の櫛目が密に施される。底部は回転糸切り。
- 鉄軸片口(35) 胴部は回転ナデの調整痕が残り、口縁端部がやや内傾する面をなす。鉄軸は外面胴上半部に施され、内面の軸は薄い。口唇部および胴下半部は無軸となる。大窯第3小期(16世紀前半)の製品。
- 志野皿(18・19・21) 18・19は口縁端部が外反し端反り皿の形状を持ち底部は削り出し高台となる。21は内面みこみ部分に刻みによる文様を施し、底部は削り出しとなる。17世紀初頭の製品。
- 志野大皿(40) 付け高台を持つ志野大皿底部破片である。17世紀代。
- 志野碗(20) 削り出し高台を有する志野碗の底部破片。17世紀代。
- オロ茶碗(28~30) いずれもオロ茶碗の胴下半部破片で、外面にロクロ整形痕を残し、その上からアメ軸が掛けられる。18世紀前半の製品。

#### 常清系

- 大壺(37・38) いずれも常清大壺の口縁部破片で、37は折り返し口縁風に肥厚した口縁を有し、38は受け口状の屈曲した口縁を持つ。37は15世紀後半から16世紀前半、38は14世紀中葉の製品である。

#### 志戸呂系



鉄軸茶碗(26) 口縁端部が細身となり、やや外反する。16世紀後半の天正年間以降の製品と考えられる。

#### 肥前系

染付皿(39) 胴部中央部でやや屈曲し胴上半部が外反する皿と考えられる。畳み付き以外に乳白色の釉が掛けられ、藍色の濃淡で水墨画風の染め付けを行なっている。17世紀代。

染付瓶(41) 胴部に乳白色地の釉を持ち、淡い藍色の染め付けを行なっている。18世紀。

染付碗(図版23・37) 畳み付きの部分以外は乳白色の地に淡い藍色の染付文様が描かれる。17世紀代。

中国白磁(図版23・36) 口径11.7cm、底径5.3cm、高さ3cmの白磁で、内面みこみの外縁部をのぞいて全体に釉掛けがなされる。15世紀後半の製品。

その他(9・10・12~15・25) 9は口径13cmの灰釉の丸皿であるが、製作地域が不明である。12は削り出し高台を特徴とし、暗緑色の灰釉皿である。25は淡青色の釉を持つ碗で胎土は白色を呈する。生産地、製作時期については不明。10・13~15は淡茶色の釉薬を全面に施し、高い高台を特徴とした灰釉碗で、古伊万里の可能性もあるが、明確な比定はできない。類似資料は東京都芝離宮出土品中に存在している。

#### 6号溝(図版52 観察表76頁)

土師質皿、灰釉皿、唐津系の緑釉皿、肥前染付皿などが出土している。

#### 土師質土器

土師質皿A(1) 口径12.2cm、底径6.5cm、高さ2.9cmの皿。

#### 瀬戸・美濃系

灰釉皿(2) 口縁端部が短く外反する皿で、大窯編年第2小期(16世紀初頭)の製品。

#### 唐津系

緑釉皿(3) 内面みこみの外縁部をのぞいて緑色の釉が施される皿。

#### 肥前系

染付皿(4) 染付皿の底部破片で、17世紀代の製品。

#### 11号溝(図版55~57 観察表76・77頁)

土師質皿、土師質内耳土器、土師質湯鉢、灰釉丸皿、灰釉端反皿、鉄釉碗、鉄釉碗皿などが出土している。この他土師器の坏蓋や須恵器甕破片が出土しているが混入品と考えられる。

#### 土師質土器

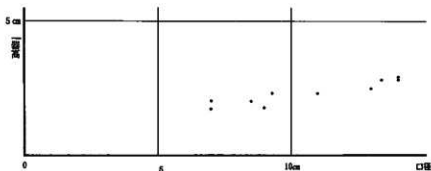
皿A(1・2) 口径14cm、高さ2.8cm前後の皿。底部調整は回転糸切りで、内面が緩やかに立ち上る。

皿C(8) 口径13.4cm、高さ2.8cmの皿。

皿D(3) 口径13cm、高さ2.5cmの皿で、胴下半部の回転ヘラケズリによる稜が存在する。底部は回転糸切り。

皿E(9) 口縁端部が揃まれ短く外反する。

小皿A(4・7) 4は器壁がやや薄く、底部は静止糸切り。7は器壁が厚く、ロクロ整形痕を残す。



第20図 11号溝出土土師質皿法量分布

小皿B(10) 胴部の立ち上がりが外反する小皿。底部は回転糸切り。

小皿C(5・6) 口径9cm前後の小皿で、胴中央部に稜が存在する。底部は回転糸切り。内耳土器B(22・24・25・28・30) 口縁端部が面取りされたものと、やや尖り気味となる個体が存在する。

内耳土器C(23) 口径27.2cm、底径22.6cm、高さ10.4cmの内耳土器で、口縁部が内傾する。

内耳土器E(27) 内耳部分が欠損した胴部破片であるが、深さ10cmを超え、やや開き気味に直線的に立ち上る。口縁端部は丸味を帯びる。

権鉢(21・31・32) 31・32は同一個体と考えられ、淡茶褐色の良質の製品である。口縁端部はやや内傾し、面取りされた部分がわずかに窪む。外面には輪轡み痕が残り、口縁部に回転ナデの調整痕がみられる。内面の榫単位は7〜9本で、みこみ部中央を中心に放射状に掻き目が施されている。

#### 瀬戸・美濃系

灰釉丸皿(14・15) 15は口径10.6cm、底径4.8cm、高さ2.4cmの高台付の丸皿で、底部に重ね焼きの痕跡がみられる。14は大窯第2小期(16世紀初頭)、15は大窯第4小期(16世紀中葉)の製品。

灰釉端反皿(16・17) いずれも大窯第2小期の端反皿。

鉄釉覆皿(18) 底部に回転利用の削り出し高台を持つ皿で、胴部から口縁部にかけて強く外反する。鉄釉は器面全面をおおう。大窯第3小期。

鉄釉端反皿(19) 口縁端部がわずかに外反する鉄釉掛けの皿。大窯第3小期の製品。

鉄釉碗(20) 口縁端部が短く外反する碗の破片。大窯第4小期の製品(16世紀中葉)。

#### 12号溝(図版54、観察表77頁)

土師質皿、小皿、内耳土器と中国陶磁器が出土している。

#### 土師質土器

皿B(1〜3) 口径14cm、高さ2.6〜3.4cm程の皿で、内面が緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。底部は回転糸切り。

皿C(4) 1〜3と比べやや小ぶりの皿。

内耳土器E(7) 円筒状の深身の内耳土器であるが、胴上部が欠損している。

#### 中国陶磁器

白磁四耳壺(5) 厚手の底を持つ四耳壺の底部破片。13世紀代の白磁製品。

青磁碗(6) 底部が回転でヘラケズリされ、付高台を持つ碗。表面の観察から、全体に2次焼成を受けたと考えられる。14世紀末から15世紀前半の製品と考えられる。

#### 1号壺穴(図版60、観察表77頁)

土師質皿、小皿、内耳土器などが出土している。

皿C(7・8) 口径11cm、高さ2.6cm前後の皿で、胴部はやや内湾する。底部は回転糸切り。

小皿A(3〜6) 口径7〜8.5、高さ1.3〜2.2cm程の小型皿で、底部は回転糸切りである。

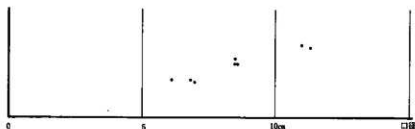
小皿B(1・2) 口径6〜7cmの非常に小型の皿で、胴部は直線的に立ち上る。

内耳土器(9) 口径27.4cm、底径23.4cm、高さ11.3cm程の内耳土器片であるが、内耳部分が欠損している。

#### 1号墓(図版60、観察表77頁)

土師質皿Aに分類される皿が2点出土している。10は口径12cm、高さ2.5cm、11は12.6cm、高さ2.8cmを測る。外面ロクロ整形で、底部は回転糸切りである。

#### C地区集石(図版62、観察表78頁)



第21図 1号壜穴出土土師質皿法量分布

19世紀代の近世陶器が4点出土している。器種はそれぞれ異なり、盃、鉢、皿、甕である。いずれも瀬戸系の焼き物と考えられる。

## (2) 石製品

### 1) 石臼 (図版63)

すべてC地区集石遺構内よりまとまって出土している。出土した石臼は粉挽き臼および茶臼の上臼欠損品である。推定される径の最大のは33cm、最小のもので22cm程である。厚さは8cm内外のものが多いが、3cm程の薄型のものや、10cm程の厚型のものも存在する。溝の間隔は狭いもので0.8cm、広いもので2.5cmと差が大きい。おそらく粉挽きの内容物に応じて石臼の使い分けが行なわれていたものであろう。下臼との接合部分である中央の受け部は、貫通孔を持つもの、貫通せずにくぼみとなるものの2種類が存在する。

### 2) 碁石状石製品 (図版106)

1号壜穴法遺構から径1.5~2cm、厚さ0.5cm程の碁石状の黒色扁平石が22点出土している。表面の肌理は非常に滑らかであるが、人為的に加工された痕跡はみられない。

### 3) 凹石 (図版52)

6号溝中から直径7cm程の凹石が出土している(図版52-5)。凹部分は深さ1.5cm程で、内面は磨られたように滑らかな面をなす。裏面中央部にわずかに敲打痕が認められる。

## (3) 古銭 (図版77・108)

1号墓より6枚、2号墓より3枚、1号溝より3枚、2号住居址より6枚の銭貨が出土している。この内1号溝、2号住居址出土品については付近に存在した中世墓に伴うものと考えられるが、確実な遺構は検出できなかった。

### 1号墓出土銭 (1~6)

人骨頭骨付近より土師質皿と共伴してまとまって出土している。古銭は嘉祐通宝1点、元豊通宝1点、元祐通宝2点、開元通宝1点、咸平通宝1点、唐銭が1枚、北宋銭が5枚である。

### 2号墓出土銭 (7~9)

元豊通宝1点、治平元宝1点、皇宋通宝1点が出土している。いずれも北宋銭。

### 1号溝出土銭 (10~12)

江武通宝(明銭)2枚、判読不明銭1点が出土している。

### 2号住居址出土銭 (13~18)

至道通宝1点、元豊通宝1点、開元通宝1点、永樂通宝1点、元祐通宝1点、判読不明銭1点である。唐銭1点、北宋銭3点、明銭1点である。

## 第5章 考 察

### 第1節 桜井畑遺跡の立地と土地条件の変化

#### 1. はじめに

桜井畑遺跡（以下当遺跡）は、甲府盆地中北部を南西流する平等川右岸の標高265～266mに位置する。当遺跡およびその周辺地域（以下当地域）には、旧笛吹川ならびに平等川をつくる沖積低地が発達する。発掘調査は、甲府勤労者総合福祉センター建設予定地のA地区とC地区、勤労青年センター内のB地区において実施された。

本稿では、まず約1/9,000の空中写真（写真1）を用いて当地域の微地形を分類し、また1/2,500の国土基本図から地表面の微起伏の状況を明らかにした。さらに、A・C地区とB地区の4地点で採取した試料のプラント・オパール分析をおこなった。そしてこれらの結果に基づき、当遺跡の立地と土地条件の変化<sup>1)</sup>について考察した。

#### 2. 微地形と遺跡の立地

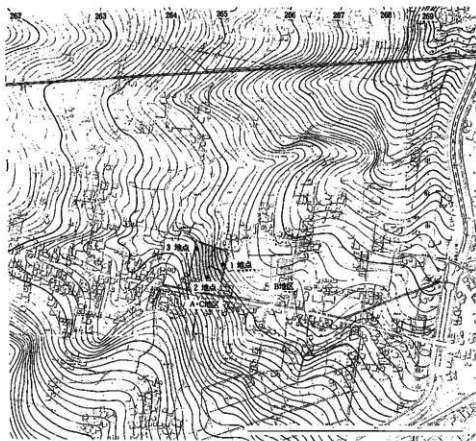
甲府盆地の地形は、釜無川と笛吹川、荒川およびそれらの支流がつくる山麓部の急傾斜扇状地（山麓扇状地）と釜無川左岸地域の緩傾斜扇状地（盆地底型扇状地）<sup>2)</sup>、そして濁川ならびに平等川流域の沖積低地<sup>3)</sup>に大別される。当地域の土地条件は前二者にくらべると比較的安定していると考えられ、盆地内でも条里型土地割の分布が最も明瞭な地域である<sup>4)</sup>。

このように、一見低平にみえる当地域は、10cmごとの等高線図（22図）<sup>5)</sup>を描いてみると、著しい起伏の状態を示しており、微高地と微凹地が複雑に入り組んでいる。これを微地形分類図（23図）と比較すると、塊状あるいは細長く分布する自然堤防状ならびに中州状の微高地とそれをきって帯状に発達する旧河道が認められ、当地域は河川による堆積と侵食作用を頻繁に受けてきたことがわかる。

当遺跡のうち、A・C地区は両河川をつくる自然堤防状の微高地から旧河道にかけての緩傾斜地にあたり、地形の漸移帯にあたる。また、B地区は自然堤防状の微高地に位置している（第23図）。

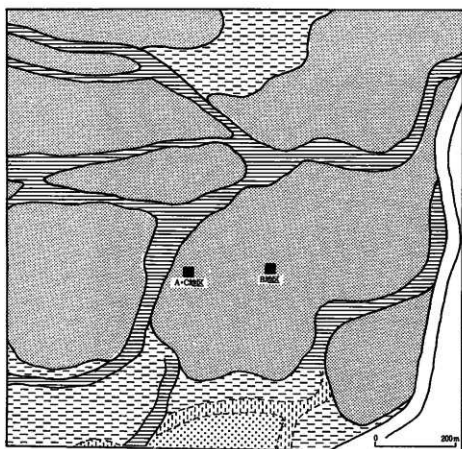


写真1 桜井畑遺跡周辺の空中写真



第22図 桜井畑遺跡周辺の微起伏

(10cm等高線)



第23図 桜井畑遺跡周辺の微地形

### 3. プラント・オパール分析

#### 1) 地層の堆積状況と試料の採取

A・C地区では試掘調査と並行して、他方B地区では本調査時において、プラント・オパール分析用の試料を採取した。試料の採取は、A・C地区で3地点、またB地区では古墳時代後期後半とみられる5号壜穴式住居址<sup>9</sup>内でおこなった。なお、各試料採取地点における地層の堆積状況は、以下のとおりである(第24図)

まず、A・C地区の第1地点(以下A・C-1地点)の地表面下約150cmまでの地層は、上位よりI~V層に区分される。すなわち、I層-耕土、II層-黄茶灰色砂質シルト、III層-褐灰色砂混じりシルト、IV層-褐灰色砂質シルト、V層-黄褐灰色シルト質粘土で、V層には植物片が混入する。

次に、第2地点(以下A・C-2地点)の地表面下約160cmまでの地層は、6層に細分される。それらは、上位よりI層-耕土、II層-黄茶灰色砂質シルト、III層-褐灰色砂質シルト、IV層-褐灰色砂混じりシルト、V層-褐灰色砂質シルト、VI層-茶褐灰色粘土質シルトからなり、VI層からは植物片が検出された。

さらに、第3地点(以下A・C-3地点)の地表面下約140cmまでの地層は、I~VII層に区分され、I層-耕土、II層-茶褐灰色砂混じりシルト、III層-茶褐色砂質シルト、IV層-暗褐灰色砂質シルト、V層-茶褐灰色砂混じりシルト、VI層-茶褐灰色砂質シルト、VII層-茶褐灰色シルト混じり細砂で構成される。

また、B地区の第1地点(以下B-1地点)の地表面下約150cmまでの地層は、I~VII層に分けられる。すなわち、I層-耕土、II層-暗褐色砂混じりシルト、III層-暗茶褐色砂質シルト、IV層-茶褐色シルト混じり細砂、V層-明茶灰色細砂、VI層-明茶灰色シルト質細砂、VII層-明茶灰色砂混じりシルト質細砂からなり、V~VII層は酸化鉄をふくむ。

A・C地区では、全般的に砂質あるいは砂混じりのシルト層で構成されているのに対し、B地区では、下位の礫混じり砂層と上位の砂質または砂混じりのシルト層を主体としている。

分析用の試料は、A・C-1地点でII層より2、III層より4、IV層より3、V層より2の計12を、A・C-2地点でI層より1、II層とIII層より各2、IV層より4、V層より3の計12を、またA・C-3地点でII層とIII層より各1、IV層とV層より各3、VI層より2、VII層より1の計11を、さらにB-1地点でII層~IV層とVI層より各2、VII層より1の計9をそれぞれ採取した。

#### 2) 分析の方法

定量分析法による試料の処理は、藤原(1976)<sup>11</sup>に基づき、絶対乾燥-重量測定・仮比重測定-ガラス・ビーズの混入-ホモジナイザーによる分散-ストークス法による細粒物質の除去-乾燥の順序でおこない、オイキッ液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍ないし600倍の偏光顕微鏡下で、イネ科草本類の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズとプラント・オパールとの比率から、試料1gおよび1ccあたりのプラント・オパールの個数を算出した。さらに、イネ(*Oryza sativa*)とヨシ属(*Phragmites*)、タケ亜科(*Bambusoideae*)ならびにウシクサ族(*Andropogoneae*)の地上部全ての重さ(乾物重)を、層厚1cm・面積10aあたりの検出量で示した。分析の結果を第24図に示す。

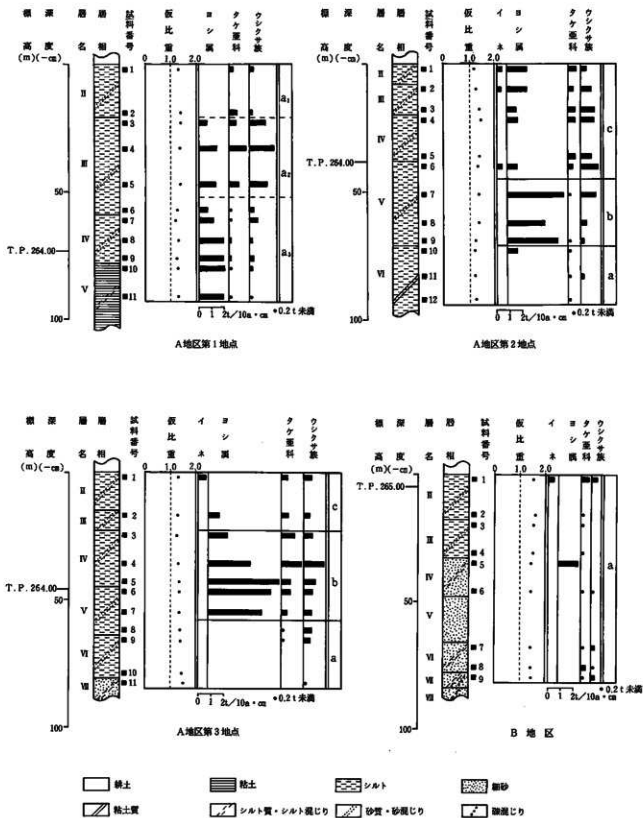
#### 3) 結果

##### A・C-1地点

検出量は全般的に少なく、プラント・オパール群集帯(以下PO帯)はa帯のみであるが、各プラント・オパールの出現傾向の僅かな違いにより、下位よりa<sub>1</sub>帯・a<sub>2</sub>帯・a<sub>3</sub>帯に細分した。a<sub>1</sub>帯(試料6~11)ではヨシ属が比較的安定して出現し、a<sub>2</sub>帯(試料3~5)になるとタケ亜科やウシクサ族がやや増加する。a<sub>3</sub>帯では検出量は全般的に減少する。

##### A・C-2地点

PO帯は、下位よりa帯・b帯・c帯に区分される。a帯(試料10~12)では検出量が全般的に少ない。b帯(試料7~9)になるとヨシ属が高出現する。c帯(試料1~6)ではヨシ属は減少し、タケ亜科やウシクサ



第24図 プラント・オバール分析結果

族が少ないながらも安定した出現傾向を示す。その他、イネが僅かに検出される。

#### A・C-3地点

P0帯は、下位よりa帯・b帯・c帯に区分される。a帯(試料8~11)では検出量は全般的に少ない。b帯(試料3~7)になるとヨシ属が高出現し、またタケ亜科やウシクサ族も僅かに増加する。c帯(試料1・2)では、ヨシ属では減少し、イネが試料1で僅かに検出される。

#### B-1地点

検出量は全般的に少なく、P0帯はa帯のみである。試料5でヨシ属が一時的に増加するほかはタケ亜科やウシクサ族が僅かに認められるのみである。イネは試料1で検出される。

### 4. 考察—土地条件の変化—

筆者は、本調査に先立つ試掘調査において、A・C地区の3地点で、地層の観察とプラント・オパール分析用の試料の採取をおこなった。それは、当地区が微高地からその西側の旧河道や南側の後背低地にかけて緩く傾斜した地形の漸移帯にあたり、水田址の検出の可能性が考えられたからである。

しかしながら、分析の結果、いずれの地点においてもイネは非常に少なく、水田の可能性は低いことがわかった。その一方で、A・C-1地点でヨシ属がほぼ全層準から検出され、またA・C-2地点とA・C-3地点ではともにb帯で急増するという結果が得られた。現地形から判断する限り、比較的高燥な土地条件と考えられるところにおいてヨシ属のプラント・オパールが検出されることに疑問が生じたが、発掘調査が進むなかで一つの解答が得られた。以下、発掘調査の成果を踏まえながら、各地点の土地条件の変化を検討することにした。

A・C-1地点では、イネは未検出で、ヨシ属が下部のa<sub>1</sub>帯で少ないながらも安定して検出され、a<sub>2</sub>帯になるとそれに加えてタケ亜科とウシクサ族がやや増加し、a<sub>3</sub>帯ではそれらは全般的に減少する。なお、A・C-1地点のa<sub>1</sub>帯すなわちヨシ属の安定した検出をみるV層層準の下限については定かではないが、ヨシ属の出現傾向から判断すると、その下部あるいは下位に溝状遺構もしくは旧河道や小谷などの凹地の存在することが推定される。当地点では、こうした凹地が埋積されるとともに、近辺では比較的高燥な環境を好むタケ類やウシクサ類などの植物群が生育し、その後やや不安定な状況になったとみられる。

次に、A・C-2地点の地層は主にシルト層で構成されるが、プラント・オパール分析の結果、それらの出現傾向は著しい変化を示す。すなわち、a帯では検出量は全般的に少ないが、b帯になるとヨシ属が急増し、c帯では各プラント・オパールが少ないながらも安定して検出される。以上のことから、当地点の土地条件は、高燥で不安定な状況から低湿で安定な状態に変わり、そして比較的高燥でやや安定なそれへと変化したものと推定される。なお、b帯におけるヨシ属の一時的な増加は、A・C-1地点と同様に溝状遺構などの凹地の存在を示唆するものであるが、当地点は発掘調査の区域外であるためその詳細については不明である。さらに、c帯になると、僅少ではあるがイネの検出をみる。これは、A・C-2地点から南側に拡がる後背低地においてイネが栽培され、その影響が少なからず分析の結果に反映されているのではなかろうか。かかる地域が、微高地上に居住した人々の生産域になっていたのかもしれない。

さらに、A・C-3地点の層相は、概ねシルト層からなる。分析の結果は、A・C-2地点と同様の傾向を示すことから、同じような土地条件の変化を経てきたものと考えられる。遺構の分布図(図版1)でみるように、試料採取地点は2号方形周溝墓の周溝の部分にあたる。周溝底は地表面下約120cm(標高約263m80cm)で、溝の深さが40cm前後である<sup>9)</sup>ことから、溝はb帯層準の上部まで埋積されていることになる。すなわち、試掘調査では周溝内の堆積物を分析したことになり、それがヨシ属の検出結果となってあらわれたと判断される。なお、追認をするために3号方形周溝墓の周溝底で採取した地層の定性分析をおこなった結果、ヨシ属のプラント・オパールが多数検出された。このことから、周溝底は当初ヨシ類の生育する比較的低湿な環境にあり、溝はこうした植物遺体によって徐々に充填される。また、周溝墓の北溝と西溝からは奈良から平安時代の小型の瓦(鏝・宇瓦、平・丸瓦)が検出されており<sup>9)</sup>、溝が埋積される過程においてこれらの土器が混入あるいは搬入されたとみるこ



とができる。

以上のことから、A・C-2地点とA・C-3地点では、ともにa帯層準にみられるように微高地を形成するような不安定な状況があり、その後微高地の一部をきって溝状遺構がつくられ、比較的低温な環境のもとでヨシ類が生育したものと判断される。このうち、A・C-2地点の溝状遺構は、b帯で急増したヨシ属がc帯で急減することから、一時的に埋積を受けたものと考えられる。また、A・C-3地点のb帯では、ヨシ属が減少する一方でタケ亜科とウシクサ属が増加傾向を示すことから、周溝は徐々に埋積を受けたのではないだろうか。

これに対して、B-1地点は自然堤防状の微高地に立地している。地層の堆積状況は、上位のシルト層と下位の細砂層を主体とする。分析の結果、プラント・オパールの検出量は全般的に極めて少なく、当地点は長期にわたり不安定な土地条件であったことが推察される。また、試料5でヨシ属が僅かに増加するが、これはⅢ層層準のシルト層をきって古墳時代前期以降の住居址が築かれている<sup>30</sup>ことから、ヨシ類が住居内で利用されていたことを示唆するものである。

ところで、A・C地区の層相区分とプラント・オパールの出現傾向に基づいて分類された群集帯に若干の違いが認められる。すなわち、A・C-1地点では、Ⅲ層の試料6(a帯)から5(a帯)にかけてプラント・オパールが僅かに増加する。また、A・C-2地点のV層の試料6(c帯)と7~9(b帯)では、ヨシ属の検出結果に大きな違いがある。同様のことは、A・C-3地点のV層においても認められ、試料6・7(b帯)と8(a帯)でヨシ属の出現傾向が異なる。このことは、試料の比重と分析結果の解釈という点とともに、地層を細分する際にさらに詳細な検討が必要であることを示している。

## 5. おわりに

当遺跡のうちB地区は自然堤防状の微高地の中央部に位置し、またA・C地区は微高地から旧河道ならびに後背低地にかけての緩傾斜地になっている。事前調査においては、A・C地区はこうした地形の漸移帯にあたることから、水田址の可能性が考えられた。しかしながら、分析の結果、イネの検出はA・C-1地点を除くいずれにおいても上位の層準で僅かに検出されるのみであり、しかも比較的高嶺な土地条件と考えられる当遺跡においてヨシ属がA・C-2地点とA・C-3地点のb帯層準で一時的な増加を示すことがわかった。A・C-3地点は方形周溝墓の周溝にあたるが、A・C-2地点ではその他の溝状遺構の存在が推定される。

また、A・C地区で検出された3基の方形周溝墓の時期は、古墳時代前期から中期とされる<sup>31</sup>。一方B地区の堅穴住居址の時期は古墳時代前期以降平安時代までである<sup>32</sup>。このことから、当遺跡の自然堤防状の微高地は、少なくとも古墳時代前期までには形成されていたことがわかる。そして、こうした微高地上が居住域となり、またその縁辺部が墓域となったのであろう。河川の堆積作用がやや安定化した古墳時代前期以降に、水害に対して比較的安全な微高地上が、当時の人々の居住の場として選定されたようである。

さらに、当地域より弥生時代の土器片が出土していることから、付近に集落址などの存在する可能性が指摘されている<sup>33</sup>が、こうした居住域は、当遺跡とその西側の和戸の集落が立地する微高地上に展開している。遺跡の分布調査によると、こうした微高地上には、これまでのところ地藏堂遺跡(縄文中期・古墳・奈良)を始めとして、上土器(弥生後期・古墳・中近世)、起田(古墳・奈良・中近世)、八枚畑A(古墳・平安~中近世)、龜田(古墳・平安~中近世)、北田(古墳・平安~中近世)、久保田(古墳・平安)、満々下(平安~中近世)、石川(中近世)、横田(中近世)、八枚畑B(中近世)、北村(中近世)、長沢(中近世)、そして川田館跡(中近世)などの各集落址が確認されている<sup>34</sup>。また、微高地の縁辺部や後背低地と旧河道との境界部には、太神さん塚古墳、琵琶塚古墳、在原塚古墳、富士塚古墳など今は消滅してしまった古墳や川田瓦窯址(飛鳥~奈良)、上土器の瓦窯址(奈良)が分布している<sup>35</sup>。

このように、甲府市西部の平等川右岸地域には数多くの遺跡の存在が確認されているが、かかる地域の遺跡の分布と微高地との関係や環境の変化については、稿を改めて検討することにしたい。

註

- 1) ここでは、地層の堆積環境の変化について検討する。  
外山秀一(1989)「遺跡の立地環境の復原—滋賀、比留田法田遺跡・湯之部遺跡を例に—」帝京大学山梨文化財研究所研究報告 1
- 2) a 高木勇夫・中山正民(1983)「甲府盆地西部地域の地形」日本大学文学部自然科学研究所研究紀要 18  
b 高木勇夫(1985)『条里地域の自然環境』古今書院  
c 中山正民・高木勇夫(1987)「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」東北地理 39
- 3) 高木・中山(1983)によると上位氾濫原。前掲2) a
- 4) 須藤 賢・谷岡武雄(1951)「甲斐条里の諸問題」地理学評論 24
- 5) 10cmコンター図は、本来1/1,000の地図を用いて区画一筆ごとの標高を参考に作成すべきである。しかしながら、当地域においては当該図を欠くため、ここでは1/2,500の国土基本図を用いて作成した。従ってある程度の精度を欠くことは否めないが、それは当地域のおおよその微起伏の状態を示していると考えられる。
- 6) 坂本美夫・中山誠二(1989)『桜井畑(B地区)—山梨県立青少年会館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』山梨県教育委員会・山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 50
- 7) 藤原宏志(1976)「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」考古学と自然科学 9
- 8) 坂本美夫(1989)「桜井畑遺跡」山梨考古 27
- 9) 前掲8)
- 10) 前掲6)
- 11) 前掲8)
- 12) 前掲6)
- 13) 前掲6)
- 14) a 田代 孝・榎原功一・宮沢公雄(1988)「上土器遺跡発掘調査報告」甲府市市史編さん委員会『甲府市史研究』6  
b 萩原三雄・数野雅彦(1990)「市域の遺跡分布状況」甲府市市史編さん委員会役所『甲府市史 史料編 1 原始 古代 中世』  
c 田代 孝・信藤祐仁(1990)「奈良・平安時代の遺跡」前掲14) b
- 15) a 内田裕一(1988)「川田瓦窯跡の出土瓦」春日居町教育委員会『寺本廃寺』  
b 田代 孝・榎原功一(1988)「甲府市川田館跡調査報告」甲府市市史編さん委員会『甲府市史研究』5 前掲14) b

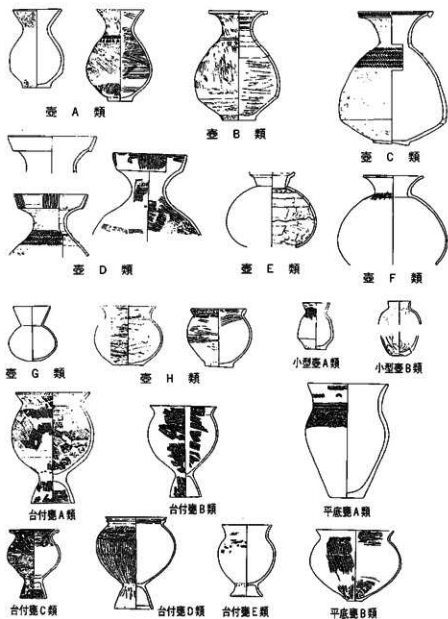
(山梨文化財研究所 外山秀一)

## 第2節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、前期の方形に区画された墳墓群の一部が発見されている。まず、出土遺物からこれらの墳墓の造営された時期について検討し、次に甲府盆地全体の中でこれらの遺構の存在意味について概観したい。

### 1. 土器の編年

弥生時代末から古墳時代前期の遺跡は近年県内でも調査例が増加し、これらの土器編年も進められてきている〔坂本1984、中山1986〕。この他遺跡単位での分析も行なわれ、時期区分や、盆地内部での地域差などについても論究されている〔臼居1985、山下1988〕。以前筆者は甲府盆地を中心に弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相の変化について検討を加え、1. 壺E類・F類・(G類)の出現、2. S字台付壺に伴う煮沸形態の変化、3. 高坏B・C類の出現、4. 小型高坏、器台、小型丸底土器などの小型精製土器群の出現などの煮沸・貯蔵形態の器形変化と以前には存在しなかった新たな器種の出現による土器様相の転換を古式土器の成立としてとらえた(分類は第25図に対応)。これらの土器様相の転換を促した社会的変化が即定型化した古墳出現等の政治的变化と結びつくとは考えられないが、古墳出現前後の集落や墳墓などの前後関係を探るタイムスケールとしての有効性は現在でも否定することはできない。



第25図 甲府盆地の弥生後期後葉～古墳初頭土器分類



第26図

弥生後期後葉～古墳初頭土器分類(2)

以上のような編年観を前提にしてみると本遺跡の低墳墓内の出土遺物は、いずれも古式土器としての内容を備えており、おおむね4世紀後半から5世紀中葉までの土器群と判断される。しかし、今回の調査で得られた遺物は墳墓内出土遺物という性格上器種の上からも、量の上からも非常に少なく、本遺跡出土遺物だけで編年を組み立てることはできない。そこで、甲府盆地全体の編年に基づいてこれらの土器についての編年的位置付けを行ってみたい。編年の軸としては「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」〔中山1986〕にそって記述するものとする。以下、土器分類の表現は原則としてこの論文中のものを使用し、本遺跡で分類を行なったものについては器種の前に本遺跡名を冠して「桜井畑壺A類」というように分けて記載したい。

甲府盆地の須恵器導入以前の古式土器については京原期段階と西田期段階の大きく2時期に分けられ、土器様相上の変化が認められる。編年の基準となるS字台付甕の変遷から各時期の中にはさらに古相と新相を示す土器群が存在するが、これらの細分については現段階の資料分析からは明確な線引きは困難な状況にある。

京原期段階とした土器群は盆地内では京原遺跡、久保屋敷遺跡（韮崎市）、坂井南遺跡（韮崎市）などの出土土器を指標としている。器種は、壺B・D・E・F・G・H類、小型壺B類、台付甕A・B・C・D・E類、平底甕B類、高環B・D類、器台A・B・C類、小型丸底土器A類、片口土器A類、鉢A類、甌A・B類、蓋B類、小型手捏ね土器などで構成され、それ以前の段階の土器群と大きな隔たりを見せている。この時期の煮沸形態は、台付甕D類が甕全体の5～7割をしめるようになり、残りの部分を単純口縁の台付甕や折り返し口縁をもつ台付甕が補っている。京原期以前の段階で煮沸形態の主流をしめていた台付甕A類（有刻口縁）はごくわずか残存するが、刻みもこの段階ではへら状工具で浅く刻まれていることが多く、刻みは形骸化・消滅の方向をたどる。該期の台付甕D類は、S字状口縁部の屈曲が鋭く、肩部に横走るハケ目の特徴としている。口縁端部の形態は、先端が尖り気味となるものから次第に丸味をもつようになる点で、新旧2時期に細分される内容をもっている。壺はそれ以前に多く認められたA・B類が減少し、替わってE・F類が主体をなすようになる。東海地方西部の欠山式の高環に出自をもつ高環B類は該期に普遍的に認められるが、次期には脚部形態が変化する。小型精製土器群のなかでも小型高環と器台については出土例も多いが、小型丸底土器については極めて少なく、むしろ西田期に普遍化する器種といえる。

京原期段階の土器群に後出する西田期段階の土器群は、姥塚遺跡41号住（御坂町）、西田遺跡B-2号住（塩山市）出土土器などを指標とする。壺B・D・E・F・G・H、台付甕A・B・C・D類、高環C・D・E・F類、器台A・D類、小型丸底土器A・B類、碗B・C類、鉢A類、甌A類、小型手捏ね土器などによって構成される。煮沸形態は依然として台付甕D類が主体を占めるが、口縁部S字状の屈曲が次第に崩れ緩やかとなり、肩部を横走るハケ目が消失化する。京原期段階に肩部にあった胴部最大径が胴部中心位へ下がり、長筒化していく傾向をもつ。貯蔵形態である壺は、京原期に存在したD2・D3類が消失し、壺F類が増加する。高環はB類が消失し、替わって脚部が柱状化するF類が出現する。以上の点をふまえて、桜井畑の出土資料についての分析

を行ってみよう。桜井畑遺跡の壺は、A～F類に分類されるが、大きくは単純口縁壺、二重口縁壺、長頸壺の3つに分けられる。桜井畑壺A類は、頸部が「く」の字状に屈曲し、長胴の胴部を特徴としている。同類の壺は、京原遺跡4号住（境川村）、西田遺跡A区1号方形周溝墓（塩山市）などで出土例が存在する。京原期新～西田期古に比定される時期のものと考えられる。

桜井畑壺B類は、二重口縁部に棒状浮文をもつ大型の壺である。このような特徴をもつ壺は、弥生時代後期後葉から存在し、古式土師器のなかでも古相の京原期まで残存する。口縁部の文様は、棒状の粘土紐を平行して貼りつけるタイプと平行沈線を経方向に施すタイプが存在するが両者の間に時代的な変遷は認められず、同時に併存している。桜井畑遺跡出土例は、口縁部外側に折り返し口縁状に隆帯をめぐらせている点で特異な存在であるが、京原期段階では坂井南遺跡（葦崎市）、上野遺跡（三珠町）1号方形周溝墓等で出土例が存在する。

桜井畑壺C類は細く絞れた頸部と外方に大きく開いた二重口縁を特徴とした壺で、上野遺跡1号方形周溝墓中に出土例がみられるのみで、集落内出土土器の中にはこれまで類例をみない。

桜井畑壺D類はC類と比べ頸部が大きく球形を呈する二重口縁壺である。二重口縁の作り方は、直立した頸部の端部を外方に90度折り曲げ、その上部の面に口縁となる粘土帯を接合している。直立頸部をもつこれらの二重口縁壺は京原期にすでに出現すると考えられるが、桜井畑1号低墳墓や上野遺跡1号方形周溝墓などの壺と比較してやや後出する形態と思われる。類例は姥塚遺跡（御坂町）41号住居址などに存在する。

桜井畑壺E類はB類同様幅広い二重口縁を特徴としているが、口縁部に文様などは施されていない。弥生時代後期後葉から京原期にかけて認められる壺である。

桜井畑壺F類は口縁部が肩部から屈曲する長頸壺で、底部が丸底ないしやや凹む。これらの壺は東海地方西部の欠山期の壺型に系譜が求められ、甲府盆地をはじめ関東地方にも広く分布が見られる土器である。県内では、一城林遺跡（三珠町）、上の平遺跡（中道町）、坂井南遺跡、姥塚遺跡などで出土例が認められ、京原期から西田期に特徴的な形態である。これまでの発見例では京原期のものは口縁部がやや短く、西田期に向けて一層長頸化の傾向を示している。

桜井畑高環A類は、脚部が欠損しており全体の形態は不明であるが、環部は外方に大きく開き、下部に明瞭な稜をもち有段となる。環部の形態は京原期に特徴的な高環B類にきわめて類似するが、屈曲部の稜が有段で明確となり、西田期以降の高環に通じる特徴も有している。また、脚部との接合に環部中央最下部から突き出た突起をもつ点もより後出的な製作技法といえる。脚部の形態は、柱状で下部が大きく開く形態と推定される。

桜井畑高環B類は柱状の脚部を有し、環部下半部に有段の稜をもつ高環で、これまでの発見例では京原期には見られず、西田期に限定されるものである。高環のこのような柱状化現象はおそらく畿内布留式期の高環の特徴をつよく踏襲しているもので、時期決定の指標ともなる資料といえる。

桜井畑高環C類は脚部が朝顔状に開き、その下部において有段となるもので、環部が下半部で屈折する。このような高環の特徴は西田期より次の段階の高環の特徴と考えられ、西田期段階の最終末あるいは次期のものと考えられる。

小型丸底の壺形土器は小型精製土器群と言われる器種のなかでも最も遅く出現、普及する土器でこれまでの調査例では京原期に属するものは非常に少ない。京原期の集落である坂井南遺跡では小型丸底の鉢形土器が多く出土しており、これらが西田期に形態変化をおこしたのか、西田期に入って独自に出現したのかが問題である。しかし、いずれにしても桜井畑遺跡出土の小型壺の形態は、盆地内では西田期に特徴的な器種といえよう。

本遺跡の方形低墳墓は各周溝内からの出土遺物の在り方から判断するかぎり3基が同時期に築造されたものではなく、数時期に及ぶものであると考えられる。新旧関係は1号墳墓が最も古く、続いて2号墳、次に3号墳が作られる。特に1号墳と3号墳との間の新旧関係は周溝同士の間隔関係によっても明らかにされている。

1号墳は桜井畑壺B類・C類・F類のほか台付壺、高環、鉢などの破片が出土している。これらの土器群は盆地内の編年では京原期に属するものと考えられる。とくに壺形態にみる上野遺跡1号方形周溝墓内出土例との類似点は本時期の段階でも古相として捉えられるものである。

2号墳は桜井畑壺A類・D類・F類によって構成されている。二重口縁壺の特徴は1号墳出土壺とは明らかに後出的な要素をもち、京原期新相から西田期古相に比定されると考えられる。

3号墳は桜井畑高環A類・B類・C類、小型壺などが出土しているが、これらの土器群は西田期のなかでも新相の内容をもつものと考えられる。

## 2. 遺構

### 1) 名称の問題

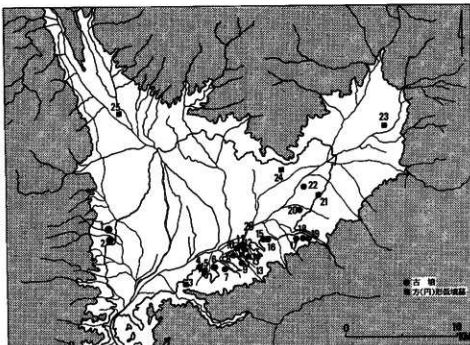
方形の溝を四周に巡らした弥生時代の墳墓に対して方形周溝墓という名称が付けられたのは1965年のことである。以来、全国各地で同様の墳墓が発見されてきているが、この中で遺存状況の良いものは、溝に囲まれた台状部に低い盛り土をもち、本来は方形に区画された土盛墳であることが明らかにされてきた。このような状況の中、墳墓の名称についてもいくつかの呼称が存在する。第一は、墳墓の平面形態を重視し、方形で区画されることに主眼をおく呼び名として、「方形周溝墓」[大場1965]、区画墓[佐原1979]、方形区画墓[寺沢1986]（報文では古墳時代の墳墓についての名称）などがある。第二に、築造当時の本来の立体的な形態を重視した名称として、「低墳丘墓」[都出1986]、「方形盛土墓」[田代1987]などが付けられている。

一方、弥生時代のこれらの墳墓に系譜をもつ墓制形態は前方後円墳などの定型化した古墳出現以降も継続的に造営されている事実が次第に明らかになりつつある。これらの墳墓については、弥生時代以来の名称を使用する立場の研究者もいるが[石部1980]、「従来にない政治的・社会体制の出現（古墳時代）以後のもの」と用語として厳格に区別する立場から方形周溝墓という名称の存在を否定し、「古墳」とする研究者もいる[田中1984]。またこれらの墳墓の群集性に着目した「群小区画墓」[渡辺1983・85]などは千葉県内では、古墳時代から平安時代の始めまで残存することなども明らかにされてきている。

以上のように研究者の視点によって様々な名称が与えられているが、墳墓本来の形態である低い土盛をされた墳墓であることを重視し、ここでは「方（円）形低墳墓」という名称を使用したい。

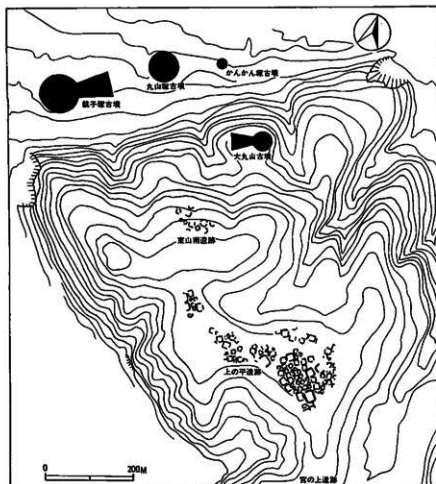
定型化した古墳の出現以降にもこれらの墳墓と群集性は受け継がれ継続的に残存していく事実があるが、これらに葬られた被葬者と巨大古墳の被葬者との関係は、多分にその地域での政治的状況によって古墳時代の間にも微妙に変化していったと考えられる。とりわけ、在地首長と畿内政権との同盟関係を持つ4世紀後半の段階と、畿内政権による地方の直接的支配を確立する5世紀後半の段階では、系譜的な低墳墓の存在意義は大きく異なっていると推定されよう。

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 六科山古墳  | 14. 上の平遺跡   |
| 2. 物見塚古墳  | 馬場山1号墳      |
| 3. 上野遺跡   | 馬場山2号墳      |
| 一風丘陵遺跡    | 壺塚古墳        |
| 4. 大塚古墳   | 八代鏡子塚古墳     |
| 5. 馬場原塚古墳 | 壺塚古墳        |
| 6. 王塚古墳   | 20. 孤塚古墳    |
| 7. 三層院古墳  | 21. 姥塚遺跡    |
| 8. 小早沢古墳  | 22. 亀甲塚古墳   |
| 9. 天神山古墳  | 23. 西田遺跡    |
| 10. 鏡子塚古墳 | 24. 桜井畑遺跡   |
| 11. 丸山塚古墳 | 25. 坂井南遺跡   |
| 12. 大丸山古墳 | 26. かんかん塚古墳 |
| 13. 東山南遺跡 |             |



第27図

甲府盆地内前期主要古墳及び方（円）形低墳墓



第28図  
東山古墳群と上の平遺跡

したがって、ここでは古墳時代に継続するこれらの形態の墳墓を「古墳」として一括してしまうのではなく、弥生時代以来の在地の墳墓形態としての名称を残し、定型化した古墳との関わりを各時期できめ細かく分析していく立場をとりたい。

## 2) 甲府盆地の方形低墳墓

現在山梨県内では方形低墳墓と言われるような墳墓は、甲府盆地およびその周辺地域にのみ発見されている。その遺跡数は14におよぶ。主な遺跡としては、盆地南部では中道町上の平遺跡、宮の上遺跡、立石遺跡、東山南遺跡、三珠町一条氏館跡遺跡、上野遺跡、盆地東部では御坂町姥塚遺跡、一宮町田村遺跡、盆地北部では塩山市西田遺跡、敷島町金の尾遺跡、荳崎市坂井南遺跡などが存在する。以下それらの時期的な位置付けと概要について、記述したい。

### ①上の平遺跡（第28図）

甲府盆地南東縁に連なる曽根丘陵のほぼ中央部、標高330mの台地上にのる。遺跡北側の丘陵先端部には、大丸山古墳が存在し、さらにこの丘陵下には全長169mの前方後円墳である鏡子塚古墳、直径69mの円墳丸山塚古墳、さらにその東にかんかん塚（茶塚）古墳等を含む前期古墳が展開する地域であり、東山古墳群の総称でよばれる。甲府盆地に臨み、しかも多くの前期古墳が集中するこの地域に、定型化した古墳が出現する直前の段階の墓域が発見されたのは、1979年のことであった。以後5回にわたる調査で124基もの方形墳墓群が発見され、墓域はさらに南の宮の上遺跡にも及んでいることが明らかになった。

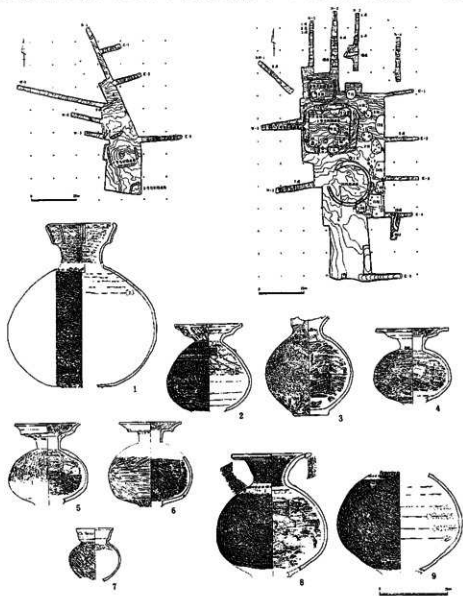
上の平方形墳墓群は、標高340.2メートルの三角点が設置されている東山山頂部の南方100mにある丘陵くびれ部から東へ向かってのびる平坦面に存在する。遺構が確認できる面は、地表下わずかに40～50cm程の浅い面であるが、周溝によって囲まれた台状部に盛り土及び埋葬主体部が確認されたものは一例もない。しかし、台状部や

周溝内部から検出された副葬品と考えられるガラス製の玉、周溝内に追葬された合せ口壺棺、墓前祭あるいは供献用の土器などわずかな資料から、墓としての残影を窺うことができる。

墳墓の平面形は、方形ないし長方形を呈するが、短軸と長軸の比率は1対1.3より開くものではなく正方形に近いプランを持つ。周溝は全周するものは全くなく、コーナーに一カ所以上の陸橋（ブリッジ）を有する。中でも一カ所のコーナーにのみブリッジを持つタイプが全体の90パーセントをうまわる。これらのブリッジは、墓道から墓の内部を結ぶ「道」として機能していたものであろう。規模は、10～15m程の周溝をめぐらすものが多く、台状部の面積も50～100㎡の規模が最も多い。最大の1号方形周溝墓は、長軸30m、短軸24mを測り、方台部面積も400㎡と他を圧している。

筆者は、この上の平に存在する方形低墳墓群を大きく四つの墓群に分け、各墓群内部の単位構成を分析する中で、同一丘陵上あるいはそれを上回る中道地域の幾つかの集落が、一か所に集約的に造墓行為を行なって集団墓を形成したと考え、古墳出現前段階における土着の政治的な勢力の拡大と、部族国家に匹敵するこれまでより広域的な村落間の結合という、地域内部での社会的変容を想定した〔中山1989a〕。この墓域内では、造墓活動の末期において集団内の被葬者の階層的格差は一層拡大し、集団の首長である族長層の急速な成長を読み取ることができる。

上の平遺跡は、出土土器から3世紀代から4世紀中葉にかけての極めて限定された時期に造墓活動が行なわれ、周辺に巨大な前方後円墳が築かれた時期には、ほぼその造墓は終息していたと考えられる。他方この遺跡から北



第29図  
上野遺跡と出土土器



に200m程隔てた東山南遺跡では、古墳出現以降の時期（5世紀代）に比定される同様の方（円）形低墳墓の存在が明らかにされており、形態的に見て巨大古墳が築造される一角での系譜的な造墓活動として注目される。

#### ②東山南遺跡

遺跡の詳細については、正式な報告書が出されていないため不明な部分が多いが、8～15mあまりの規模の方形及び円形の低墳墓が11基発見されている。

#### ③上野遺跡（第29図）

笛吹川と釜無川の合流する甲府盆地の西端の曾根丘陵上、標高約305mの地点に立地する。遺跡の南側には、御坂山系に連なる山麓が迫り、遺跡付近は甲府盆地にわずかに迫り出す小台地状を呈する。上野遺跡から一段下がった台地には弥生時代後期後葉の方形低墳墓群が確認された一条氏館跡遺跡が知られ〔三珠町教育委員会1988〕、一連の台地上の墓域の移動が理解できる。

上野遺跡では、一条氏館跡遺跡の墓域とほぼ同時期の住居址9軒他に、古墳時代前期の住居址5軒、方形低墳墓5基、円形低墳墓1基が確認されている。5基の方形墳墓からは一条氏館跡遺跡に時期的に連続する土器群が出土し、円形周溝墓はこれより100年程後出のものだと判断される。

この墓群のなかでも注目されるのが、1号墓及び円形低墳墓である。

1号墓は、南北22×東西24mのはば方形を呈し、ブリッジが南側周溝部の中央部からやや西に偏って存在する。幅約3m程のブリッジ両端の周溝端部は、周溝外側に向かってやや張り出すように造り出されており、いわゆる「前方後方形周溝墓」に類似した形状を示す。この様な形態は、古墳出現期において各県で類例が増加しており、長野県では、田村原遺跡2号墳〔登丘村教育委員会1974〕、滝の峯1号・2号墳〔佐久市教育委員会1986〕、埼玉県塚本山33号墳〔埼玉県教育委員会1977〕、千葉県諏訪台2号墳〔上総国分寺台遺跡調査団1975〕、持塚6号墳〔上総国分寺台遺跡調査団1976～82〕、群馬県鈴の宮B4号墳〔高崎市教育委員会1978〕などに類似する。

出土土器は周溝内より壺、甕、高環等が豊富に出土し、特に壺のバリエーションは非常に多形である。1は東海地方東部の大廓式の系列、2は東海地方西部のいわゆるバレススタイルの壺に系譜を持ちながらも、口縁部の形態は純粋にその地方で出土する土器とは違い、変化している。その意味では関東地方に分布する伊勢湾型の壺と同様に複数の地域の土器の折衷型といえるかもしれない。4～6は畿内型の直立する頸部と二重口縁を特徴とする壺型土器である。7は口縁部形態が北陸系の土器に類似する。3及び8・9は東海地方東部地域に系譜を持つ。これらの土器群の内3及び8・9のような東海東部の影響は前時代にも認められ、必ずしも外来系の土器として位置付けることはできないが、総体として前時代では顕著でなかった地域からの外来系の土器群を主体としている点で注目されよう。

1号墓は規模、形状、立地のうえからも弥生時代後期後葉の集団墓から一歩抜き出た族長層の墓と見ることができ。

同台地の1号墓南には、円形低墳墓が1基存在する。墓の規模は直径19～20mを測り、幅1.5～2mの周溝をめぐらす。周溝は全周せず、西側に向かって開口するようなブリッジが残されている。墳丘及び埋葬主体部は削平され発見されていない。

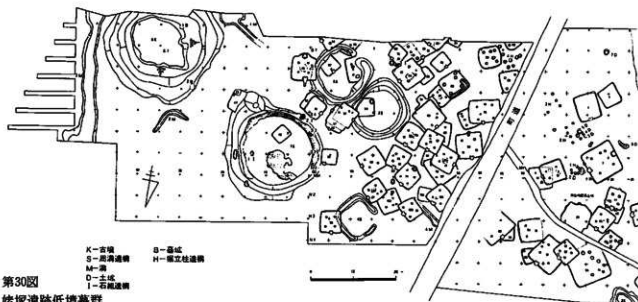
周溝内の出土土器は、高環と口縁部が外反する輪型土器で、5世紀中葉に位置付けられる。

#### ④姥塚遺跡（第30図）

甲府盆地東部の南東部金川扇状地に近い標高307m前後の西緩斜面に位置し、北西約2kmの地点に笛吹川が流れる。この金川扇状地には6～7世紀の群集墳が数多く存在していたと考えられ、現在でも四ツ塚古墳群、錦生古墳群、塩田古墳群等が知られる。また、姥塚遺跡に隣接して日本でも有数の横穴式石室規模を誇る姥塚古墳が存在する。

姥塚遺跡の調査においては、4基の周溝墓と4基の無名墳が発見されているが、古墳時代前期の墳墓は1～4号周溝状遺構と4号墳と報告されている墳墓群である。

4基の周溝墓の内3号墓については不明であるが、他は一辺ないし径が10m程の小墳墓で、出土土器及び他の



第30図

姥塚遺跡低墳墓群

遺構との切り合い関係から古墳時代中期後葉から後期初頭に位置付けられている。

墳丘を残す無名墳の内3基は、横穴式石室導入以後の墳墓であるが、4号墳のみはこれより古相を示す。周溝を含む墳墓の規模は28mで不整形円形を呈する。墳丘は1mの高さで残存し、台状部の直径20.5mを測る。横穴式石室をもたない点や出土遺物の古いものに大廓式の系譜を持つ壺型土器が出土していることを考慮すると4世紀代に築造された可能性もある。

これらの墳墓を見るかぎり、同扇状地の群集墳を後期のみで帰属させてしまうのは危険といわなければならない。姥塚遺跡では古墳時代前期の段階に住居址23軒が発見されており、これらの農業共同体の一定の階層が方形、円形の小墳墓を造り出している。後期になるとこの姥塚遺跡及び隣接する二の宮遺跡での集落規模は急激に増大し、これに対応するように横穴式石室を持つ群集墳が形成される。この歴史的展開の背景に、鉄器等の農耕具の普及によって扇状地の急速な開発→生産力の向上→新興勢力の台頭という図式を認める研究者も多いが、その地域的な基盤は前期の段階に形成されていたと見るべきである。

#### ⑤西田遺跡

本遺跡は甲府盆地の北東部の塩山市内に位置し、笛吹川の支流の一つ重川右岸の沖積地上標高364m前後に立地する。これまで2回にわたる調査で、弥生時代後期の住居址1軒のほか、古墳時代前期の住居址57軒、方形周溝墓5基、土壇2基、溝5本が検出されている。

1次調査区A区とC区において発見された方形低墳墓はいずれも一辺約9～13m程の規模で、溝の幅は0.6～3.5mを測る。方台部に主体部と考えられる土壇が確認されたのは、A区1号墓のみであるが、副葬品等は検出されていない。

周溝内からの出土土器は、壺、甕、椀、高坏、器台などがあり、古墳時代前期のなかでも小型精製土器群が出現する時期以降と考えられる。

この地域では古墳時代前期～後期を通じて傑出した古墳は築造されておらず、弥生時代以来の方形周溝墓が群在している意味で興味深い。

#### ⑥坂井南遺跡

甲府盆地の北西部韮崎市内の遺跡で、七里ヶ岩台地上の南西端、標高450mに位置する。七里ヶ岩台地は、八ヶ岳泥流を基盤にその東西を流れる塩川と釜無川によって形成された舌状台地で、八ヶ岳山麓から甲府盆地に向けて浸食崖が続く。

本遺跡は古墳時代を主体とした遺跡で古墳時代前期の住居址76軒と方形周溝墓4基が確認されている。墓域は明らかに生活空間と分離し、集落と小谷を隔てて北側の微高地上に展開する。

方形周溝墓の形態は1コーナーにブリッジを有するタイプで、周溝規模は10～18mを測る。1号墓の台状部に

土壌が存在するが主体部と断定されるものはない。出土土器は溝内からS字甕の一部があるのみで詳細な時期判断はできない。

西田遺跡同様この地域にも前期古墳は知られておらず、墓制の上では中道方面を中心とした盆地南部とは地域的に大きな差異を認めることができる。

### 3) 本遺跡との編年的対応関係

桜井畑遺跡の方形低墳墓から出土した土器群については上記で明らかにしてきたが、甲府盆地内の同様の墳墓との編年的対応関係は表のとおりである。京原期とした段階以前の弥生時代後期後葉から末葉にかけての土器編年は、住吉期から六科丘期への推移が明らかにされている〔中山1986〕。詳細は論文中に譲るが、該期の土器編年については大まかには住吉期→六科丘期→京原期→西田期の4期に分けられる。

甲府盆地の中で発見されている方形低墳墓群の中で現在最も古い例は、敷島町金の尾遺跡の弥生遺時代後期前半に比定されるものがあるが、造墓活動が最も盛んに行なわれるのは弥生時代後期後葉から末葉にかけて（住吉期～六科丘期）の時期で、中道町東山を中心に造墓活動が展開された上の平遺跡などが、その最も盛行した時期の所産といえる。

上の平遺跡では住吉期にすでに墓域形成が開始されており、六科丘期に隆盛期を迎える。1号墓の周溝内から出土した土器は、二重口縁に縦列沈線文を施した大型壺で、東海東部の大廓式の壺とも類似し、先の壺D類に比定される内容をもつ。また、37号墓出土壺は桜井畑遺跡F類に共通した長頸壺であり、この遺跡での造墓活動の最終段階を示す資料として重要である。この時期は甲府盆地に前方後円墳が出現する前後の時期に対比される。上の平遺跡での造墓活動については、決して無秩序に墓域が拡大したのではなく、各墓群を構成する小単位群で同時並行的に進行し、一定の集団ごとに選地された地点に造墓を行なっているように見える。したがって、方形低墳墓を主体とした群集性の強い墓域構成は、集団内にきわめて整然とした規制が働き、制度化されていたと推

遺 跡	弥 生 時 代		古 墳 時 代	
	中 期	後 期	前 期	中 期
金の尾遺跡		← →		
田村遺跡		■		
一条氏館跡		← →		
上野遺跡			← →	●
住吉遺跡		■		
口開遺跡		■		
上の平遺跡		← →		
東山南遺跡				← →
地塚遺跡			●	← →
西田遺跡			← →	
桜井畑遺跡			←	→

← → 墓群の形成時期 ■ 方形低墳墓 ● 円形低墳墓

第31図

方(円)低墳墓の編年的位置

定される。また、1号墓に代表されるような大規模な低墳墓が、各墓群の造墓活動の中で最終段階に出現していることは、この地域を中心とした地域共同体の中での傑出した首長層の出現を暗示している。

上野遺跡1号墓は、その出土土器から京原期の古段階に位置付けられ、円形周溝を除く周辺の方形周溝墓についても同様の編年的位置付けがされる。上野遺跡では、六科丘期以前の一条氏館跡遺跡の墓域から京原期になると一段高い台地上に墓域が移動し、墳形・規模・出土土器の差から上の平遺跡同様の首長層の出現を認めることができる。本遺跡1号墓は、東海方面の外來系の土器群を主体にしている点特徴的であるが、旧墓域を意識的に変更している部分で、在地のなかで成長した首長の墓と見ることができよう。

今回調査された桜井畑遺跡のなかでも1号墳に関しては、上野遺跡の造営時期とはほぼ同じく、遅くともこの時期には桜井畑遺跡周辺に方形低墳墓を主体とした墓域が形成されていたと判断される。しかしこれらの造営行なった母集団の居住地域については今回の調査では明確にされておらず、今後の周辺の調査に期待される。

他に京原期に位置するものとしては、板井南周溝墓群、姥塚4号墳などがある。

桜井畑遺跡では、2号墳で京原期新～西田期の古段階に比定される二重口縁蓋形土器や長頸蓋が確認され、3号墳で西田期の新段階～次期の高坏及び小型埴型土器が出土することから、1号→2号→3号の順に順次造墓が展開したと推定される。その規模は、2号墳、3号墳ともに上の平遺跡最大の1号墓を上回るもので、被葬者の政治的な地位を反映していると言えよう。とくに、3号墳は南北27.5m、東西33.4mの長方形の平面形態をとり、周溝幅4～6m、深さ1mを測る。周溝は全周するタイプで、ブリッジは認められないが、東西の短軸周溝中央部には方台部から一段低い造り出し状の方形張り出し施設が認められ、特異な存在である。このような類例は群馬県下郷S234、大阪府長原2・4号墳、京都府官の平1号墳などがあり、古墳の造り出し施設との係わりが問題視される。

西田期以降のものには上野遺跡の円形に周溝をめぐらした低墳墓がある。高坏の形態は、二の宮西73号住居址出土土器と極めて類似する。二の宮遺跡では、TK216とされる須恵器の罫が伴件しており、5世紀中葉段階のものとなる。さらに5世紀後葉段階のものとして、東山南遺跡、姥塚遺跡の方形・円形周溝墓群が対比される。

以上、周囲を方形の溝によって区画した低墳墓は、平面形態、群在性、周溝内の遺物出土状況、底部穿孔土器の供献などから、弥生時代からの系譜的な墳墓として継続し、少なくとも古墳時代前期末の段階まで残存した墓制形態と思われる。

このような墳墓群のあり方は、①中道地域の上の平と東山南遺跡、三珠町上野遺跡の様に周辺に定型化した古墳が出現する地域で継承されていくもの、②姥塚遺跡の様に後期群集へと時期的に連続していく地域に存在するもの、③板井南遺跡や西田遺跡の様に古墳時代前期前半で造墓が終結し、それ以降目立った墳墓の造営は見られない地域など、盆地内における地域的生産力の拡大と政治的な基盤によって様々な様相を示すと言える。

#### 4) 古墳出現と方(円)形低墳墓群

弥生時代の方形周溝墓は、集団墓という共同墓地の形をとりながらも、そこに葬られた被葬者は農業共同体内部の構成員すべてのものではなく、一定の階層に限定されたものである。その限定規制の枠は、時代と共に狭まり関東周辺の地域においては、後期前半には特定墓と見るべき墳墓も登場している。これまで知られているかぎり、この甲府盆地では弥生時代に集団墓から独立した形での墳墓は発見されておらず、集団墓内部での規模格差から地域的な身分格差の広がりや首長層の成長を見ることができよう。

上の平遺跡で記述した様に、中道地域では前方後円墳が出現する前段階に成長してきた在地の首長層の出現を認めることができる。同様に上野遺跡でも、京原期の古段階に前方後方型の低墳墓の築造と墓域の変更というこれまでの集団墓とは異なった特定墓に近い性格の墓域が形成されてくる。この甲府盆地内部での首長層の発展と社会全体の変化にみられる第一の飛躍が次期の畿内の色彩の強い「古墳」造営を促した基盤となるものと考えられる。

甲府盆地で最も古いとされる前方後方墳である小平沢古墳の出現は、政治的に第二の飛躍を示すものと言える。この古墳の埋葬主体部は粘土製の構造物とされ、船載斜縁二神二獣鏡の出土、墳丘からは京原期の段階のS字台付甕破片があり、4世紀中葉の造営とされる。この古墳は、上の平1号墓に後続する年代観があるが、出土遺物

からはその決定的な根拠にかける。出現期の前方後方墳の多くが丘陵の先端部に立地する傾向があるのに対し、小平沢古墳は米倉山の先端部よりやや奥まった台地の肩部に位置している。しかも、この位置は谷を挟んで上の平道跡と相對峙するように立地しており、両者の位置関係に強い意図的な配置を認めることができる。小平沢古墳築造は、集団墓からの独立を意味し、その被葬者によって部族連合の首長たる権限を一層強化された姿として見ることができよう。

第三の飛躍というべき畿内型前方後円墳の出現は、畿内政権と直接的に政治的交流を持った証でもあるが、その関係は副葬品や同范鏡の配布などから見られるように未だ畿内王権に対する隷属的關係ではなく、擬制的同族關係に基づいた同盟者としての首長の色彩を強く持っていたといわれる。したがって畿内王権の支配は、盆地の内部にまで浸透した時期とは考えられない。この關係が崩れ、畿内王権が地方政權に対し優位性を強め、地域内部に支配權が及ぶのは、磯貝正義氏によれば“部”の制度導入以後とされ、5世紀後半の雄略天皇の時代には、甲斐の支配者は王権への隷属性の高い甲斐國造に変質したとされる。このような政治状況を勘案して見ると、盆地内部で残存する系譜的な低墳墓は、在地首長の存在意義が絶大な前方後円墳出現期のものと、畿内政權による盆地の直接的支配以後の5世紀後半のものでは性格が異なり、それに葬られた被葬者の内容も質的に同一の存在として単純には把握できない。

#### 5) 系譜的墓制残存の歴史的背景

桜井畑道跡を含め甲府盆地内での方形低墳墓の存在についてのべてきたが、畿内勢力の盆地内への伸張と鏡子塚古墳に代表されるような畿内型の巨大な前方後円墳の出現のなかで、いったい何故にこのような墓制が継続し得たかが問題となる。

前期の段階に残るこのような方形墓の系譜を持つ墳墓と「古式群集墳」について論考を行なった石部氏は、前方後円墳が出現した後までの方形周溝墓やそれに類する墓制が存続する事実をあげたうえで、それが「前方後円墳に代表される首長墓とは、墳墓としての性格も、それを営んだ階層も異なるものであった」とし、古墳社会の階層性にその残存の必然性を説いた〔石部1975・80〕。また、巨大な前方後円墳の成立以後、「社会の一般成員は、人格的にも完全に農業共同体の諸機能を体現する首長への隷属する身分に転落し、余剰生産物と余剰労働を無制限に収奪される無権利の農漁民となった」が、「その日常経営は、以前同様、世帯共同帯を単位として行なわれ、その点では弥生時代と少しも変わりなかった」とも考える。このような前提に立てて氏は、前方後円墳が弥生時代の墓制に起源をもちながらもそれは質を異にする墓制であるのに対し、小型の群集墓は弥生時代以来の共同帯経営の単位集団である世帯共同帯の家長墓であり、本質的な変化は見られないとしている。

他方、5世紀代における古式群集墳の成立については、「階級分化がより激しく進行したと推定される畿内などでは、(中略)首長のミウチとしての一定の身分を保証されて、従来とは異なる厚葬」が現れることを指摘し、「古式群集墳」を「大王などの部民としての身分標識」とみなす見解を提示している〔石部1980〕。

古墳をこのように「国家的身分制度」の表現とはじめて評価したのは、西嶋定生氏である。1961年の「古墳と大和政權」と題する論考のなかで氏は、古墳築造を国家的身分制度の表現とする立場から、群集墳の成立を「首長以外のものに対してカバネをあたえた」ことの反映であるとして、「大和政權の国家秩序」との関わりを強調した。この段階での群集墳は、主に横穴式石室導入以後の後期群集墳を視野においてのものであろうが、西嶋氏はカバネの成立についてはすでに前期古墳の段階に想定されている点で注目される。

近藤義郎氏は「前方後円墳の時代」の中で、古墳成立後間もない時期に首長墳とは認めたい中・小の古墳が首長墳と離れて単独にあるいは群をなして認められるとし、それを「古式小墳」と命名した。古式小墳は「墳域、隔絶、棺、副葬品など首長墳にならない、その構成要素に準じて営まれたもの」とされ、その被葬者と首長者が共通の古墳祭祀に示される同族關係に結ばれた首長権の構成者＝部族機關の分掌者階層という關係の表現であったとされる。したがって、これらの小墳は前方後円墳の築造を行なった首長との擬制的同族關係を示す一つの象徴として築造されたという見解がとられている。しかしながら、氏は列島各地域の古式小墳の被葬者が、大和王権に直接把握され、その結果として小墳の築造を許容された部族首長下の成員であったかどうかは、証明困難なこ

ととしている。

畿内におけるこれらの小古墳と言われるものと甲斐地域における低墳墓が同質のものとして捉えられるとは即座に言いがたいが、大丸山古墳、鏡子塚古墳をはじめとする畿内型の巨大首長墳が形成される中で、弥生時代以来の方形及び円形の低墳墓が継続している背景を探るうえで無視できない視点であると考えられる。

以上の諸説から推論が許されるならば、中道町地域を拠点に甲府盆地に絶大な権力を誇った盟主がその支配の基盤となる生産力を維持・拡大し首長たりえるには、それまでの農業共同体を解体・再編成するのではなく、それを支配機構の中に積極的に組み込むことこそ支配体制確立に最短の方策ではなかったのではなかろうか。前時代からの系譜的な墳墓が完全に消滅するのではなく、古墳時代に向けて残存していく背景には、このような歴史的な必然性が潜んでいるものと考えられる。今後このような視点で、古墳時代の墳墓を捉え直し、弥生時代から古墳時代にかけての集落構造の変化の中に、政治的な支配関係がどのように反映されているのかという問題を検討して行く必要がある。

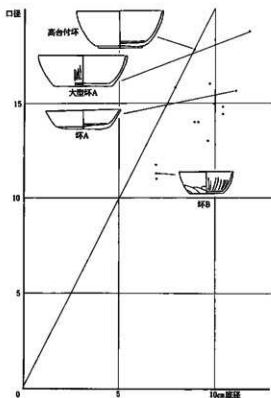
(中山 誠二)

### 第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

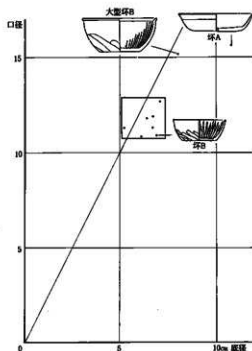
奈良～平安時代の出土土器は、土師器、須恵器、緑釉陶器などが検出されているが、出土量から土師器を中心に編年の位置付けを行ないたい。

#### (1) 土師器の時期

該期の遺構内出土土器は、8世紀～10世紀のものが主体をなし、土師器・須恵器・緑釉陶器などが検出されているが、分類された器種は土師器が最も多く、時間的な推移を明確に捉えることができる。特に「甲斐型環」出現前後での環の形態的变化は本遺跡内の土師器の推移を知るうえで最も大きな指標となる。そこで、ここでは奈良時代の盤状環やそれ以降の甲斐型環の変遷によって、それぞれの遺構の時期について対比を行なっていきたいと思う。本県における土師器の編年はこれまで坂本美夫氏や山下孝司氏による研究が進められているが、坂本氏



第32図 I期環 口径：底径比分布



第33図 II期環 口径：底径比分布

の示した甲斐型環の位置付けに沿って本遺跡内の出土遺物を検討すると、大きく4期の変遷が窺える〔坂本ほか1983〕。

- 第Ⅰ期 …… 盤状環を主体とした時期。
- 第Ⅱ期 …… 甲斐型第1期第1小期の環を主体とする時期。
- 第Ⅲ期 …… 甲斐型第1期第2小期の環を主体とする時期。
- 第Ⅳ期 …… 甲斐型第3期第1小期の環を主体とする時期。

#### 第Ⅰ期

第Ⅰ期を主体とした土器群は、本地区のなかでも1号住居址、1号溝で検出されている。

1号住および1号溝出土の土師器は碗、環A、環B、皿A、大型環A、高台付環、環蓋、鉢B、ロクロ整形の短頸壺、甕A、甕B、甕C、甕D、高環、小型手握ね土器、置きカマド等多器種におよぶ。

環A、環B、大型環A、高台付環など環類の口径：底径比は、環Aでは65～75%、環Bでは約60%、大型環では50～68%と、いずれも口径<底径×2となる。また、法量比から明らかにしたとおり次期以降の甲斐型環と比較して口径、底径の数値がともに大きいことが該期の特徴といえる。

甕はA～D類と多様であるが、特に基本的には肩部が張らずに、胴部が円筒状になる甕が多い。口縁部は外側に強く外反するが、内面に稜をもって外屈する例は極めて少ない。調整技法はハケ調整、ヘラ削り等の手法が認められる。

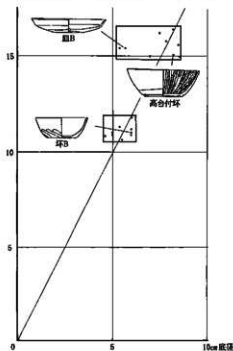
本期の須恵器は所謂「出っ尻」といわれるような高台付環で、県内では8世紀初頭の年代観が与えられている〔坂本1983、山下1986・1989〕。また、県外においても伊場遺跡出土の木簡の干支年代などから8世紀初頭に年代が推定されている〔酒井清治1986〕ほか、このタイプの須恵器に墨書された内容からその使用開始時期の下限が盤亀元（715）年とする説も出されている〔小林清隆1985〕。出土土器から判断する限り1号溝の使用開始年代は8世紀初頭まで遡る可能性が高いが、溝という遺構上の性格から使用年代は土器型式の上では数時期に及ぶと考えられ、8世紀代の奈良時代の中での細分はここでは差し控えたい。

#### 第Ⅱ期

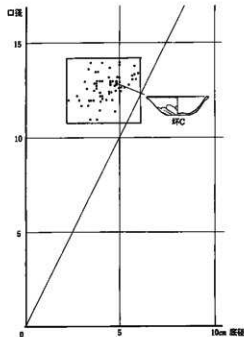
本期に属する土器群は2号住居址出土土器がある。

2号住出土の土師器は、環A、環B、大型環B、高台付環、甕、手握ね土器などが出土している。

環Aの形態・製作技法および法量は、第Ⅰ期とした盤状環の特徴を備えている。環Bの法量は口径11～13cm、高さ4.5～5cmを測り、口径：底径比は44～64%で大半が口径<底径×2に収束する。本期の甲斐型環の特徴は、



第34図 Ⅲ期環 口径：底径比分布



第35図 Ⅳ期環 口径：底径比分布

ロクロ整形の後に外面下半部を斜めへら削り、内面みこみ部から器壁にかけて放射状に暗文が施されるが、本住居址出土の環B 7点の内2点については内面みこみ部に暗文を持ち、みこみ部に暗文をもたず器壁部のみに暗文が施される個体2点、暗文をもたない個体が3点を数える。大型環Bは口縁端部が外屈する形態で、内面器壁部に暗文を有する。この他高台付環の底部破片にもみこみ部暗文を持つものがある。

甲斐型の環の出現期は、これまで8世紀末～9世紀初頭とされてきたが、近年の他県の遺跡での共伴例からその出現期が8世紀第4四半期まで確実に引き上げられつつある状況にある。特に奈良時代末期の長岡京期に限定される蓋Gなどとの共伴を示す例が、奈良県の平城宮京京2条4坊内の井戸から発見されている他（三好美穂女史の教示）、埼玉県岡部町白山遺跡等でも存在することからその蓋然性は極めて高い。これらの甲斐型環は、桜井遺跡での本時期の環より底径が大きく、同類の環のなかでも古相に属すると考えられ、みこみ部から放射状に付けられる暗文もこの時期の特徴をよく示している。

本期の環は、8世紀末の甲斐型環の内容より明らかに新相を示しており、平安時代初頭に位置付けられる。2号住の出土環は数時期に細分される内容を持つが、主体となる甲斐型環の形態から9世紀第1四半期～第2四半期の年代観が与えられよう。

### 第Ⅲ期

7号住居址、1号堀立柱建物址、2号溝、4号溝などが本期に比定される。

これらの遺構から出土した土師器の種類は、小型環A、小型環B、高台付環、皿B、皿C、鉢A、蓋環A、蓋環B、蓋C、蓋D、台付甕等が存在する。

中でも1号堀立柱建物址から出土した小型環は特異な存在として注目されるが、整形および調整技法のうえでは甲斐型の環の製作技法を用いて製作されている。これらのほとんどは灯明用の容器として使用されており、日常食膳具とは異なる目的で利用されたと判断される。本期の環Bは、口径11～12cm、高さ4cm前後に集中し、法量的には極めて安定した器種といえる。他の環と比較しても量的に最も多く、家族構成員の銘々が使用した食膳具として主体をなしていたと考えられる。口径：底径比は42～64%と50%前後を中心にやや幅を持つ。調整技法は第Ⅱ期と共通するが、内面暗文は器壁部のみに施されるものが多い。第Ⅱ期に存在した大型環は本期には消失するが、法量的には口径15cmを超える大きさの器は高台付環で補填されている。

環蓋は縁径が16～18cmを測り、高台付環とセット関係を示すものが多い。蓋環の内面には中央部から放射状に暗文が施されている。

甕はロクロ系の甕と非ロクロ系の甕が存在している。ロクロ系の甕は、非ロクロ系の甕と比較して小振りの個体が主体で、両者の機能が異なっていた可能性が高い。非ロクロ系の甕は、形態的には鉢型のタイプが多く、口縁部は外屈する。調整は外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケが施されている。ロクロ系の甕については、大型甕が8世紀後半に藤井平地域と狭西地域で出現し、古代甲斐国のなかでも巨摩郡では9世紀から10世紀前半まで煮沸形態としてかなり高い比率を保っている〔保坂1988〕。桜井遺跡で出土したロクロ整形の小型甕は、県下ではやはり8世紀後半に出現したとされ、9世紀から10世紀にかけて増加していく傾向にある。このタイプの甕も北巨摩郡下を中心に発見例が多いが、一部は大坪遺跡や二之宮遺跡など山梨郡下でも出土例が知られている。甲府盆地東部地域での同甕の出土例は、二之宮遺跡の11世紀のもの以外明確な時期決定がされている例がないが、今回の調査から9世紀後半代に確実に伴うことが明らかにされた。

また、本期にはロクロ整形の大型鉢が存在するが、この最古の例は鈍塚遺跡29号住出土の8世紀第4四半期であり、本県では以後10世紀前半まで認められる。本遺跡の鉢の製作技法は基本的には甲斐型環の製作技法と共通部分が多く、これら同一工人によって製作された可能性が高い。

本期の土師器の形態的特徴は9世紀第3～第4四半期の特徴を備えており、9世紀後半の土器群と捉えておく。第Ⅳ期

5号住居址、9号溝の出土土器群が本期に比定される。

本期の土師器としては、環C、環D、皿C、皿D、甕B、環蓋B等が存在する。



本期の甲斐型瓦の主体は口縁部が玉縁状となるもので、口径：底径比は20～45%と底径が小さく、前時期の箱型の甲斐型瓦と大きく異なっている。

壺は口縁部が肥厚し、外方に屈曲するもので、内外面にはハケ調整がみとめられる。

本期は、10世紀第3～第4四半期の特徴を備えており、平安時代前期の末葉に位置づけられる。

## (2) 出土瓦について

### A. 各瓦群の時期と生産

A地区で発見された大量の瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦を含めて11種類に及ぶが、それらの組合せ関係は3群に分割される。ここでは各瓦群の製作時期を推定し、製作技法の差などからその生産体制のあり方を探ってみたい。

第1群瓦とした小型瓦は、A地区西側からC地区にかけて出土量が多く、溝の覆土などに散在的に発見される例が多い。遺構との共伴例は1号住床面に本群平瓦が敷かれた状態で発見されており、時期決定の有力な手がかりとなる。1号住居址出土土器は第1期の8世紀代に比定されるが、破片資料が多く細かい時期の規定は困難である。また、本来使用された施設が不明であるため、使用時期を正確に測ることはできないが、本群の瓦のうち平瓦が1号住居内の施設に転用されており、1号住居の共伴から奈良時代に製作されたものであることは推定しうる。この瓦を屋根に葺いた建物ないし施設が、本地域内に存在したとすれば、平安時代前期までは継続していた可能性もあろう。

第2群とした瓦は、その様式から一言町甲斐国分寺で発見されている瓦と極めて類似性が強い。このことは本遺跡に近接する川田古窯址において、これらの寺院に供給するための瓦の生産が行なわれていたことから首肯される。瓦溜め遺構とした中からは、これらの瓦以外共伴遺物もなく、時期決定可能な資料に欠けるが、国分寺との関係から8世紀後葉の瓦と考えられる。ただし、この遺構に近接して発見された素井八葉蓮華文軒丸瓦は、甲斐国分寺の創建以前の建物に葺かれた瓦とされており、佐野勝広氏の編年によれば8世紀初頭に比定される年代観が与えられている。

第3群瓦は、2号住居址のカマドや床面の瓦敷き施設に転用されており、遅くとも9世紀前半には製作されていたと判断される。

ところで、8世紀から9世紀前半という比較的短い時期に製作された本遺跡での瓦は、様式から3つの大きな違いが認められるが、これらの違いは単に時代差供給先の建物によって異なるものなのであろうか。あるいは製作に携わっていた工人集団の差に起因するものなのであろうか。この問題を解く鍵は、第4章第3節の中で観察した各瓦群における製作技法にあろう。

瓦の製作技法と一口に言っても、それに係わる作業工程は原料となる陶土の準備、生瓦製作、焼成に大きく別れているが、瓦が製作された当初においては、窯の維持・管理を除けば各製作者同志が協業・分業した可能性は極めて低く、各製作者それぞれが陶土の準備から焼成までの作業を一貫して行っていたとされる【木立雅明1987】。畿内などの瓦生産の先進地においては、平城宮の瓦葺きの需要と平窯の普及に伴って、次第にそれらの技術や企画も統一され、一貫した協業体制の整備と組織化が行なわれ、政治的に編成されたとされる。しかし、本県の古代瓦生産体制については、その実態に不明部分が多く残されており、今後の研究課題ともなろう。

今回本遺跡で発見された3様式の瓦群は、それぞれに製作技法上の違いが認められるが、3者の共通した技法と相違した技法について整理してみたい。

まず、陶土の準備段階において問題となるのは、陶土そのものの違いと、生瓦製作段階での粘土塊からの切り離しに係わる技法である。前者については、陶土の化学的組成分析が必要であろうが、今回の報告では明らかにできなかった。肉眼観察の上では、1群瓦では、個体差もあるが赤色スコリア状粒子が多量に混入され、その他長石、石英、雲母をわずかに含む。2群瓦では、長石、赤色粒子が多く含まれ、雲母がわずかに混入される。石英の混入状況はそれぞれ異なるが、丸瓦では長石と並んで高い比率で見られる。本群丸瓦には、赤色粒子の多

	長石	石英	雲母	赤色粒子
軒丸瓦 A 類	△	△	△	◎
軒丸瓦 B 類	◎	○	△	○
軒平瓦 A 類	△	△	△	○
丸瓦 A 類	△	△	△	◎
丸瓦 B 類	◎	◎	△	△
丸瓦 C 類	◎	◎	△	◎
	◎	◎	×	△
平瓦 A 類	○	△	△	◎
平瓦 B 類	○	△	△	△
平瓦 C 類	◎	◎	△	△
平瓦 D 類	○	△	△	◎
道具瓦	○	△	△	◎

各瓦に含まれる砂粒の多寡

◎非常に多い ○多い △非常に少ない ×含まない

ものと非常に少ないものがあり、同一形態の瓦の中でも陶土の含有物が大きく異なる場合がある。本群の平瓦では、外面調整時に用いられた離れ砂に長石が多く見られる。3群瓦は平瓦B類を除いて、長石、石英の含有率が非常に高く、雲母、赤色粒子は非常に少ない。平瓦B類は長石以外の鉱物は非常に少ない。以上、各群の瓦毎に含有砂粒の出現傾向が異なっていることが肉眼では観察できる。

粘土塊からの切り離しは、次の段階の木型への粘土巻き付け方法によっても左右されるが、本遺跡出土瓦を通じて粘土の厚い角材から糸によって粘土板を切り取る技法が認められる。糸きりの痕跡は、弧を描いて曲線的になることから、一人の製作者がフリーの糸の両端を持って切り取る方法と考えられ、弓などの工具の使用は認められない【佐原真1972】。この点は、すべてに共通した技法といえる。

次の生瓦製作技法では、第4章で触れたように各群の丸瓦、平瓦ごとに大きな違いが認められるが、ここで取りあげる項目は瓦外面の調整技法、仕上がった粘土円筒を分割する技法など特徴的なものについて再度検討してみよう。

丸瓦における丸瓦面の調整は、A類丸瓦では長軸方向にへう削り、B類丸瓦では長軸方向にナデが施され、なめらかな器面をなす。C類丸瓦では長軸方向に縄目叩きを行なったのち横方向にナデが施され、縄目を消している。また、平瓦の凸面調整は、A類瓦では幅3cm、長さ10cm程の縄を巻き付けた叩き板での縄目叩きが短軸方向に見られ、B類・C類・D類では長軸方向に走る縄目叩きが認められる。D類の縄目は、縄の条および節の大きさが小さいもの、大きいものの2種類が存在する。また、丸瓦における粘土円筒の分割方法は、第4章で記述したようにB類とC類では技術的に大きく異なっており、これに使用された道具もそれぞれ異なっていたと推定される。

焼成上の違いは、第1群瓦では酸化焼成、第2群瓦では酸化焼成と還元焼成の共存、第3群瓦では平瓦B類とした1枚を除いては基本的に還元焼成がされている。

以上の分析から、1群から3群としてとらえた瓦群は、製作技法の上からもそれぞれの群ではほぼ完結性を持ち、異なった製造技術を持つ人たちの手によって製作されたものと考えられる。したがって、同一工人集団による一元的な生産体系とは異なり、いくつかの系譜を引いた複数の造瓦集団が付近に存在した可能性が高い。このことは同時に、瓦の各様式の違いが単に供給先の違いだけを反映するものではないことも意味する。

桜井畑遺跡出土土瓦の特徴

分類	色調	叩き板	焼成	丸瓦面・凸面調整	凹面調整	側面調整	布目1cm当	備考
丸瓦A類	茶褐	無	酸化焰	縦ケズリ	無	面取り	6×6 6×8本	
丸瓦B類	白灰	無	還元焰	縦ナデ	無	面取りしない	8×8 6×10 8×10本	
丸瓦C類	茶褐・青灰	縄目2	酸化焰 還元焰	横ナデ	無	面取りしない	6×7 8×8 15×15本	先端部凹面ケズリ
平瓦A類	茶褐・淡褐	縄目1	酸化焰	無	無	面取り	6×6 6×8本	
平瓦B類	茶褐	縄目3	酸化焰	無	無	面取り	6×7本	
平瓦C類	青灰・黒灰	縄目3	還元焰	無	周辺まれにケズリ	面取り	6×8 8×8本	
平瓦D類	茶褐・青灰・白灰	縄目2	酸化焰 還元焰	無	横ナデ	面取り	6×6 6×8 8×8本	
道具瓦	茶褐・淡褐色	縄目1	酸化焰	無	無	面取り	6×6 6×8本	

ところで、畿内では白鳳時代の窯跡の瓦の分析で、各型式に固有の叩き板、固有の布が対応し、凸面・凹面・側面にもほぼ固有の調整が対応していることから、各製作者がそれぞれの道具を所有し、互生産に携わっていたことが推定されている【木立1987】が、本遺跡の場合でも第2群とした丸瓦C類、平瓦D類などで、外面の調整技法、縄の叩目、内面の布目の粗さの違いや焼成の違いなどが観察され、同じ様式内でも複数の製作者の存在を推定することができる。ただし、これらの出土地が窯跡などの直接生産地に結びついた場所での出土状況を示していないため、同一様式の瓦製作者集団内の構成にこれ以上迫ることはできない。

しかしながら、3群の瓦が製作技術の系譜が異なる工人たちによって作成された事実は、当時の川田古窯址群を含めたこの地域に存在した造瓦体制のあり方を知るうえで極めて重要なことである。先にこれらの瓦が8世紀～9世紀前半に製作されたとしたが、これらの工人集団が同時にこの地域で造瓦活動を展開していたのかどうかについてはまだ疑問が残されている。また、平安期での瓦の全体的な小型化の傾向などを含めて製作技法や瓦の大きさの変容、奈良時代から平安時代の造瓦にかかわる体制の変化などなどについても不明点が多い。今後これらの帰属時期の確定、そして各工人集団と供給先との関わりなどについて同様な視点での厳密な分析を進めて行く必要があろう。

#### B. 小型瓦

本遺跡の出土瓦のうち第1群とした小型瓦群はこれまで県内では出土例が存在せず、初めて発見された様式である。これらの瓦群が、本来どのような建物に使用されたものかについて検討することは、当該遺跡での遺構群の性格を知るうえで一つの手がかりを与えてくれる。

まず、瓦の製作された年代については、先に考察したように奈良時代に限定されるが、使用された建物の使用年代については平安時代まで継続する可能性も否定できない。

奈良時代に製作された小型瓦あるいは超小型瓦といわれる存在は、畿内を中心に西は、広島県宮の前鹿寺・川谷遺跡、東は宮城県多賀城跡などで出土しており、近年各地でその類例が増加しつつある。ところで、小型瓦における“小型”の概念はこれまでのところ極めて感覚的で厳密な規定はないが、毛利光俊彦氏は「基本的に同型

式、すなわち同じ意匠を意識して製作された一群の軒丸の中で、かけ離れて大きい軒瓦を大型軒瓦、小さい軒瓦を小型軒瓦」と定義している〔毛利光1983〕。また、江浦洋氏は奈良県菅原遺跡で発見された大小の瓦のうち、平城宮跡で出土する小型瓦よりさらに小型に製作されたものを「超小型瓦」としてその性格を検討している。全国的な諸例においても瓦の大きさに関する記述は、その出土遺跡内での相対的な比較によって大型、中型、小型の名称が使用されている。本遺跡出土小型瓦の一群も遺跡内の位置付けは相対的には小型となるが、全国的な例から比較すると極めて小さく、先の超小型瓦と限定される大きさ、内容を持つ。

江浦氏によれば、小型瓦、超小型瓦の大きさは感覚的に任意の大きさに製作されたものではなく、規格性に富んだ内容を示すという。菅原遺跡の場合、中型、小型、超小型とした瓦の規格は、中型を3とした場合小型が2の大きさを示す。さらに、超小型としたものは小型瓦の約3分の2にあたることされている。このような関係は、京都市南春日町遺跡出土の大小3種類の瓦でもみられ、中型軒丸瓦第Ⅰ類の直径15.2cmを3としたとき、小型第Ⅱ類の直径11.4cmは2.25の比率を示し、概ね第Ⅰ類の瓦の2/3で製作されたとされる。また、第Ⅱ類瓦を3とした第Ⅴ類は直径7.3cmで比率が1.92を示し、これも概ね2/3の関係で製作されている。これに類似した規格性は、北原虎寺と播磨千本屋敷寺出土瓦の間で認められる他、難波宮や多賀城跡などの出土瓦でも確認されている。以上の傾向から奈良時代の小型瓦は中型瓦などと同じ意匠を以て製作された軒丸瓦も多く、それにとまなう平瓦・丸瓦の量はいずれも中型瓦の2/3の規格で製作された可能性が高いと結論づけている。

本遺跡の出土小型瓦は、同時に出土している第2瓦群、第3瓦群との相関関係において同一の建物に葺かれたものか否か明確ではない。同様の行基式とした第3群瓦でも対応した軒瓦がなく、小型瓦群との関係が不明確である。したがって、本遺跡の小型瓦群は規格の上ではこれと相関的な関係にある同一意匠を持つ瓦はなく、今のところこれらが完結した目的で、単独に利用されたと考えざるを得ない。

それでは、全国的な発見例からどのような建物が小型瓦や超小型瓦を葺いた建物とされているのであろうか。出土状況からいくつかの可能性が示唆されている。平城宮の小型瓦については毛利光氏の論功があるが、それによれば小型瓦は通常の屋根瓦として使用されたのではなく、椽皮葺き等の棟を飾る疊瓦である事が推定され、超小型瓦については「祠堂」等の用途が考えられている。また、播磨千本屋敷寺では、超小型瓦と共伴する形で埴が出土しており、寺院址のなかでも超小型瓦を葺いた特別の小型の建物が想定されている。一方、春日町遺跡では寺院の多くの堂宇のうち塔だけに小型の瓦が葺かれたとされる。以上、小型瓦については江浦氏によれば多様な使用状況が想定され、特定の機能を見いだすことは困難とされる。

本遺跡出土の小型瓦の場合、軒丸瓦・軒平瓦に共伴した形で多くの丸瓦・平瓦の存在が明らかにされており、播磨千本屋敷寺と同様に付近にこれらの小型瓦を葺いた小型の建物が存在したと考えられる。本遺跡第2群瓦と異なり、これらの小型瓦については他の地域の寺院に供給されたとする例はなく、あえて別の場所に供給地を求める根拠は存在しない。また、これらの瓦がA地区西側からC地区にかけて散在して発見されることは、本遺跡内にそれを使用した「祠堂」のような建物が存在したと考えるのが現状で最も妥当と考える。

### (3) A地区での遺構の性格

桜井畑A地区で検出された遺構は、土師器を中心とした遺物から明らかにしたように第Ⅰ期8世紀代、第Ⅱ期9世紀前半、第Ⅲ期9世紀後半、第Ⅳ期10世紀後半の4期に区分され、奈良時代から平安時代前期にかけて断続的に営まれた遺構群である。

住居として捉えた遺構は、桜井畑B地区で確認された同時期の竪穴住居址と比べ、遺構確認面からの掘込みが浅く、平面形態は一方に長い長方形プランを呈する点で大きく異なる。また、内部施設も1号住や2号住のように床面に瓦を敷き詰めたものや、カマドの構築に丸瓦や平瓦を使用したものがあり、B地区の内部施設と異なるのが目立つ。遺物においては、日常的に使用された土器類の他に、鉄滓、瓦、緑釉陶器など一般農民の日常生活に保わる以外の遺物が認められる。土師器の坏の中には灯明容器に使用された個体が多く、本地区の遺物の特徴ともいえる。特に5号住居址(第Ⅳ期)とした小屋状の小竪穴施設内で発見された数多くの灯明皿、緑

軸陶器、琥珀製の玉は、これらが使用された施設が近接した場所に存在したことを暗示している。

庇付きの掘立柱建物址は、2間×4間の比較的大きな建物跡で、甲府盆地内ではこの時期の発見例が少ない遺構である。この建物址の時期は、柱穴覆土内から出土した坏や小型坏により第Ⅲ期とした9世紀後半と推定されるが、この土器群は建物址の廃棄時の儀礼行為に伴う一括遺物と推定されることから、少なくともこれらの土器群より遡る9世紀前半代には使用されていた建物と考えられる。建物の性格を推定できる資料は極めて乏しいが、周辺に散在した小型Ⅴ群や第3Ⅴ群との関連が想定される。また、この建物址の南に位置する2号住居址から「寺」と墨書された坏が出土しており、その同時期性が注目される。庇付きの掘立柱建物址と共に近接する竪穴住居址から「寺」と書かれた墨書が発見された例は、北巨摩郡小瀬沢町前田遺跡で知られ、近接地域に寺院が構成する建物の一つであった可能性も指摘できる。

水路と考えられる溝は、幅2メートルほどの幹線的な意味合いの強い溝が北から南へ走り、これと直行するように東西方向に小水路が分岐する。8世紀代に存在した1号溝はA地区西側を南北方向に蛇行して流下するが、この溝は2号住居によって切られることから、9世紀前半にはすでに埋没していたと考えられる。平安時代の水路施設は、2号～4号、9号、10号溝が存在するが、南北の幹線水路は1号溝→10号溝→9号溝と推移する。平安期に作られたこれらの水路はさらに中世から近世、近代まで改修されながら継続的に使用され、しかも本地域周辺に認められる条里性地割りに方向が一致している点で極めて重要な意味を持つ。この点については本章第1節に譲るが、南北に走る幹線水路とそれに直行する小水路が平安時代前期の9世紀後半には開削されている点は興味深い。今回調査された桜井畑A地区、C地区では、該期の遺構が検出されているのがこの幹線水路より西側に集中している点、遺構群が形成される過程での水路の位置が地割りの役割を果たしていたと推定される。

以上奈良～平安時代の遺構群の概略を述べてきたが、これらの遺構は本遺跡B地区で発見された奈良時代から平安時代の竪穴住居址を主体とした一般集落とは大きく異なったあり方を示している。時期的な推移はあるものの遺構群の特殊性は奈良時代～平安時代前期を通して維持されていると考えられる。この特殊性は、先に掘立柱建物址で触れた様に寺院などの公的な施設が存在したとするのが今のところ最も妥当と考えられ、今後全国的な類例と比較検討する必要がある。

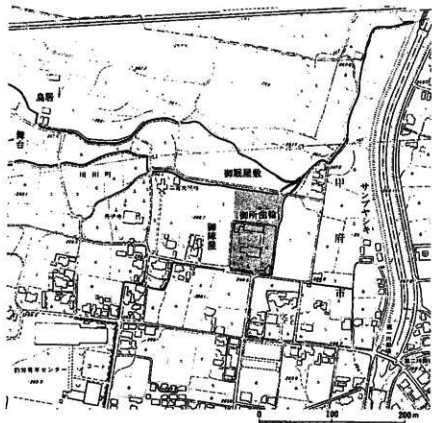
(中山 誠二)

## 第4節 中・近世の遺構と遺物

本遺跡周辺の川田地区は第2章で記述したとおり、甲斐武田氏が永正16年(1519)に古府中の郷園ヶ崎館に移転するまでの約半世紀余りに渡って居を構えた川田館が存在したとされる地域である。その存在について『甲斐国志』は、「信昌に至り跡部ヲ退治シテ河田ノ館ヲ築キ遷之ニヤ」とし、武田信昌がこの館に築造したと推定している。一方、『王代記』には永正11年「武田左京大夫信虎御代河田ニ屋形」との記述も見られ、信虎の代に川田館が築造されたとする考えもある。いずれにしても15世紀後半から16世紀初頭の一時期甲斐の守護の館がこの地域に存在したことは疑いない。付近には今日でも御所曲輪・御殿屋敷・女中屋敷・舞台などの館に関連の深い地名が残されていることから、これまで川田地内の字御所曲輪、二宮神社付近が漠然とその館の推定地とされてきた。しかし、肝腎の川田館跡については文献やそれらの地名、伝承以外に位置やその内容について具体的に知ることのできる資料はなかった。

本遺跡の調査が行われる前年の1987年、これらの問題を解決するために甲府市史編纂委員会は市史編纂事業の一環として、二宮神社東の御所曲輪の一角で考古学的な調査を行っている。この調査の結果、調査地点の北側に土塁状の遺構が明らかにされた他、15～16世紀の土師質土器や陶磁器片が多量に発見されている〔田代・榊原1988〕。調査範囲が小さく、館内の建物跡などの遺構は明確にされなかったが、出土遺物は文献から得られた可能性が補強する内容をもつものでもありと評価される。

今回の桜井畑遺跡の中・近世の遺構は、前章でも明らかにしたように奈良・平安時代の遺構群と同様A地区西側に集中して確認されている。該期の遺構は竪穴状遺構1基、掘立柱建物址1基、土壇基3基、水路状遺構4本



第36図 川田館跡位置図と水路

で、該期の川田館周辺の利用の一端を知るうえで興味深い。

まず水路であるが、中世の時期の遺物を主体的に伴うものは、5号・6号・11号・12号溝がある。これらは基本的には平安期の幹線水路にほぼ並行して開削された11号・12号溝と、これから西に向けて分岐する暗渠状の小水路（5号・6号）に分けられる。出土遺物の主体は、12号溝では13～15世紀前半、11号溝では15～16世紀中葉、5号および6号溝では15～18世紀前半までのものを伴う。

川田館跡と推定される現在の二宮神社北東には3方に分岐された水路が存在し、館推定地の南北および東側の3方向を区画するように配置されている（第36図）。神社北側の2本の水路は西流し、南側の水路はこの微高地南側の谷に向けて数カ所で屈折しながら南西方向に流路がとられている。第22図の周辺の微地形を考慮すると、桜井畑遺跡A地区で発見された水路は、館の南側に流下する水路から分岐したものと考えられ、館周辺の水路配置と、それに付随した下流域での居住や水田経営を配慮した水路配置をとると推定される。しかもこれらの水路は、館築造に伴って初めて開削されたものではなく、少なくとも本遺跡周辺では平安期から存在する水路を改修して使用している点で注目されよう。一方、武田氏の館が藤岡ヶ崎館に移転した以降も、これらの水路が改修されつつ周辺地域の人々によって利用されてきた状況も看取される。

A地区の11・12号溝の西側に検出された中世の土壇墓、堅穴状遺構内の遺物は、1987年の川田館跡調査で検出された土師質土器と極めて類似していることから、これらと時期的にきわめて近接した遺構と考えられる。川田館跡の土師質土器の中でも口径10cmを越える大振の皿は御原氏によれば15世紀代の年代が与えられており、甲斐武田氏が中世の一時期にこの地域に館を構えた時期に一致すると考えられている。今回の調査では検出された遺構は少ないが、当時の館周辺の居住の在り方の検討を喚起する意味で重要な事例となろう。中世都市プランについては藤岡ヶ崎館周辺の研究が近年数野雅彦氏などによって進められているが【数野1989】、それ以前の館とそれをとり囲む都市空間の研究は未だ考古学や地理学の見地からは検討されておらず、今後の大きな研究課題となると考えられる。

(中山 誠二)

## 第6章 ま と め

本報告書は山梨県甲府市東部の和戸から川田地区に展開する桜井畑遺跡の調査報告書で、A・B・Cの3地区の調査区内のB地区の結果については1989年にすでに報告している。本書にかかわるA・C地区は、B地区から200m余り西側に位置し、各時代にわたりB地区とは性格の異なった遺構が検出されている。これらの遺構群は古代から中・近世に至る付近の空間利用を知る上でも極めて貴重な内容をもつと考えられる。ここでは、まとめとして本遺跡の遺構群が提起する問題点のみについて整理しておきたい。

まず、古墳時代前期の低墳墓は、盆地北東地域の政治的位置づけと盆地周辺地域への古墳の拡散を検討する上でも重要な資料となりうる。遺跡の南西にはかつて前方後円墳とされた琵琶塚古墳などの古墳の存在が指摘されており、これらとの関わりの有無についても今後検討する必要がある。また、これらの墳墓の築造を促した集落経営の在り方やこの地域北部に展開する積石塚古墳群成立との関連も課題とされる。

奈良～平安時代の遺構は、これまで検討してきたとおり堅穴住居址を主体とするB地区の一般集落とは異なった特異な内容をもっている。本地域は平安期の『和名抄』に記載される表門郷（うわとのごう）に推定されており、大坪遺跡から出土した「甲斐国山梨郡表門」と書かれた皿の存在からも同郷が存在した蓋然性は高い。律令初期において評の下ノ里は50戸をもって編成され、霊龜元年（715）に郷と改められ、その下に2～3の里を置く郷里制が施行され、さらに天平12年（740）ごろにはこの里が廃止され以後郷制となっている。考古学的調査の蓄積は、この郷の内部構成を検討し、「戸」の実態を明らかにする上で欠くことのできない存在となろう。また、同一郷内の行政的な施設や寺社などの配置を含めた一行政単位の内部構造も問題としてあげられる。

一方、この川田地域は、古墳時代末期以降古代の土器生産や瓦の生産に深くかかわった地域とされている。本遺跡から出土した瓦群は高等の直接生産に結びつく遺構からのものではないが、出土瓦の制作技法の検討から瓦の生産に携わる工人の構成についてひとつの問題点を提起した。

中世では、甲斐武田氏が躰躰ヶ崎へ館を移転する以前の半世紀程を拠点とした川田館が遺跡北東地域に存在し、本遺跡の内容からも館を取り巻く地域の居住の一端を垣間見ることができたと考える。

以上、古墳時代から中・近世にいたる本遺跡の遺構群は、それぞれの時代において極めて重要かつ多岐にわたる問題を提起しているが、筆者自身の力量不足もあってそれぞれの遺構の把握や検討が十分でない部分が多く存在する。これらの問題については、今後付近の調査などの新知見を踏まえて機会ある毎に深めていきたい。

## 参考・引用文献

### ア行

- 足立順司 1987「内耳鍋の研究」『研究紀要』Ⅱ 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
石和町誌編纂委員会 1989 『石和町誌』第一巻  
石部正志 1975「古墳文化論—群集小古墳の展開を中心に—」『日本史を学ぶ』1 原始・古代  
石部正志 1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社  
磯貝正義他 1990『図説山梨県の歴史』 河出書房新社  
伊藤正幸 1989「甲府盆地における十二・十三世紀の土器様相」『山梨考古学論集』Ⅱ 山梨県考古学協会  
日居直元 1985「第V章弥生時代の成果と課題」『六科丘遺跡』 榊町教育委員会  
江浦洋 1982「小型瓦の諸問題」『菅原遺跡発掘調査報告書』  
大阪文化財センター 1978『長原』

### カ行

- 上総国分寺台遺跡調査団 1975『諏訪台古墳群調査概要』  
上総国分寺台遺跡調査団 1976～1982『上総国分寺台遺跡概要』 神奈川県考古同人会 1983『シンポジウム奈良・平安時代の諸問題—相模国と周辺地域の様相』  
木立雅朗 1987「造瓦組織の歴史的発展についての覚え書」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦』 北陸古瓦研究会  
京都府教育委員会 1974『埋蔵文化財発掘調査報告書』  
群馬県教育委員会 1980『下郷』  
甲府市教育委員会 1984『山梨県甲府市大坪遺跡』  
甲府市教育委員会 1986『甲府市の遺跡』 甲府市文化財調査報告4  
五島美術館 1984『江戸のやきもの』  
小林広和・里村晃一 1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年の位置」『信濃』30-2 信濃史学会  
小林広和 1980「上の平遺跡の発掘調査」『日本歴史』384  
小林広和 1987「村の歴史—古代」『武川村誌』 武川村誌編纂室  
小淵沢町教育委員会 1985『前田遺跡』 小淵沢町埋蔵文化財調査報告第3集  
近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』 岩波書店

### サ行

- 埼玉県教育委員会 1977『塚本山古墳群』  
埼玉県教育委員会 1989『白山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財報告第17集  
板井和俊 1988「東日本弥生時代墓制研究の問題点」『東日本の弥生墓制』 第9回三県シンポジウム  
酒井清治 1987「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』第9号 埼玉県歴史資料館  
板本美夫・末木健・堀内真 1983「山梨県」『シンポジウム奈良・平安時代の諸問題—相模国と周辺地域の様相』  
板本美夫 1989「甲斐型環—編年について(1)—」『山梨考古学論集』 山梨県考古学協会  
佐久市教育委員会 1986『叡の峯古墳群』  
佐野勝広 1980「甲斐の古瓦の様相」『丘陵』8号  
佐原真 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58-2  
佐原真 1979「弥生時代の集落」『考古学研究』25-4  
菅原遺跡調査会 1982『菅原遺跡発掘調査報告書』



## 夕行

- 高崎市教育委員会 1978『鈴の宮遺跡』  
田代克巳 1987「方形周溝墓」『弥生文化の研究』8 雄山閣  
田代新史 1984「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して」『古代』77号 早稲田大学考古学会  
田代孝・榑原功一 1988「甲府市川田館跡調査報告」『甲府市史研究』5  
田代孝・榑原功一・宮沢公雄 1988「上土器遺跡発掘調査報告」『甲府市史研究』6  
千葉地遺跡発掘調査団 1982『鎌倉市千葉地遺跡』  
都出比呂志 1986「墳墓」『岩波講座 日本考古学』4 岩波書店  
津田芳男 1989「所謂内耳土器について」『茂原市文化財センター年報No.3』 茂原市文財センター  
寺沢薫 1986「方形区画墓群の変遷と構造」『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所  
豊丘村教育委員会 1974『田村原遺跡』

## ナ行

- 中山誠二 1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会  
中山誠二 1989a「中部・関東地方の弥生集団墓の構成について」『山梨考古学論集』II 山梨県考古学協会  
中山誠二 1989b「甲府盆地の方(円)形低墳墓」シンポジウム『古墳出現の謎—3～5世紀の日本列島と甲斐—』山梨県考古学協会  
中山誠二 1989c「甲府盆地における方形低墳墓残存に関する一考察」『甲斐の成立と地方的展開』 職員正義先生喜寿記念論文集刊行会 角川書店  
新潟県教育委員会 1989『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀II遺跡』  
西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号  
韮崎市教育委員会 1984『山梨県韮崎市坂井南遺跡』

## ハ行

- 藤澤良祐 1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要』V 瀬戸市歴史民族資料館  
保坂康夫 1988「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器をめぐって」『山梨県考古学協会誌』第2号

## マ行

- 三重県埋蔵文化財センター他 1990『緑釉陶器の流れ』  
三珠町教育委員会 1988「一条氏館跡遺跡」  
三珠町教育委員会 1989「上野遺跡」  
毛利光俊彦 1983「平城宮の小型瓦」『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所  
森都夫 1983『瓦と古代寺院』 六興出版  
森都夫 1986『瓦』 ニュー・サイエンス社

## ヤ行

- 山下孝司 1986「奈良時代における甲斐の土器編年」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会  
山下孝司 1989「奈良時代における甲斐國の土器推移と史的背景」『山梨考古学論集』II 山梨県考古学協会  
山梨県教育委員会 1978『山梨県塩山市西田遺跡—第1次発掘調査報告書』  
山梨県教育委員会 1985『笠木地蔵遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第12集

- 山梨県教育委員会 1987『地塚遺跡・地塚古墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第24集  
山梨県教育委員会 1987『二之宮遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第23集  
山梨県教育委員会 1988『金生遺跡 I（中世編）』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第39集  
山梨県教育委員会 1989『桜井畑遺跡（B地区）』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第50集  
山梨県教育委員会西山梨支会 1940『西山梨郡志』（1974復刻）

## ワ行

- 渡辺修一 1983「群小区画墓」の終焉期 —所謂「方形周溝遺構」をどう見るか— 『研究連絡誌』第6号 千葉県埋蔵文化財センター  
1985「群小区画墓」の終焉期(2) —「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討— 『研究連絡紙』第14号

表2 土器観察表

1号低墳墓 (本文14頁、図版20)

図版	種類	形状	寸法 (cm)			調査	出土	焼成	色別	備考
			口径	底径	高さ					
1	土師器	壺	18.0				中や強い	良好	青褐色	内面赤色塗彩
2	土師器	壺	28.0			内面ハケ	中や強い	良好	褐色	口縁部ハケ文
3	土師器	壺			(12.0)		弱い	良好	赤褐色	胎面赤色塗彩 外底赤褐色
4	土師器	甗			(12.0)	外内面ナゲ 外底下ヘラ		良好	褐色	
5	土師器	壺		8.0			中や強い	良好	褐色	胎面赤褐色
6	土師器	鉢				内面ヘラナケ	中や強い	良好	褐色	
7	土師器	高杯		9.0			砂粒多い 中や強い	良好	褐色	
8	土師器	壺		8.4	(20.0)		弱い	良好	赤褐色	外底赤褐色 胎面赤褐色
9	土師器	付 付 壺		9.8		内面ハケ	中や強い	良好	褐色	
10	天目	鉢	12.7	6.5	5.9		脆	良好	赤褐色	大宮 内・外底赤褐色

2号低墳墓 (本文15頁、図版21)

1	土師器	壺	19.0					良好	赤褐色	二重口縁
2	土師器	壺	19.6					良好	赤褐色	二重口縁
3	土師器	壺		5.8		内面ヘラナケ ミダリ内面ハケ		良好	褐色	
4	土師器	壺	9.0					良好	赤褐色	二重口縁 胎面赤褐色
5	土師器	高脚壺	15.3			内面ハケ		良好	赤褐色	
6	土師器		20.0	8.0	20.0	胎面ハケ		良好	赤褐色	二重口縁 胎面赤褐色
7	土師器	高脚壺				内面ヘラ		良好	赤褐色	内面赤褐色
8	土師器	高脚壺	18.0					良好	赤褐色	
9	土師器	壺	18.0	7.0	(21.5)	内内面ハケ		良好	赤褐色	
10	土師器	高脚壺	15.4		(17.5)	内内面ハケ		良好	赤褐色	
11	土師器	壺	17.2	6.6	6.7	外底下ヘラ		良好	赤褐色	胎面赤褐色
12	土師器	内 耳	23.8					良好	赤褐色	
13	土師器	壺	16.4	8.8	2.8			良好	赤褐色	胎面赤褐色
14	土師器	壺						良好	灰色	
15	土師器	壺	11.4	5.0	4.8	外底下ヘラ		良好	褐色	
16	土師器	小壺	16.8					良好	褐色	
17	土師器	高杯?		12.5		内面ハケ		良好	赤褐色	
18	土師器	手 取	5.8	4.5	4.2			良好	赤褐色	胎面赤褐色
22	土師器	壺	12.6	5.4	2.3			良好	赤褐色	胎面赤褐色
23	土師器	壺	10.8	5.0	4.7	内面ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
24	土師器	壺	13.0	7.6	2.7			良好	赤褐色	胎面赤褐色
25	土師器	杯(灯明)	11.3	4.2	4.5	内面赤文		良好	褐色	胎面赤褐色
26	土師器	壺	11.0	5.7	4.5	外底下ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
27	土師器	壺	11.6	4.2	4.3	外底下ヘラ		良好	赤褐色	胎面赤褐色
28	土師器	壺	8.7	4.6	4.8	外底下ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
29	土師器	杯(灯明)	8.0	3.4	3.0	外底下ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
30	土師器	杯(灯明)	8.0	5.0	3.6			良好	赤褐色	胎面赤褐色
31	土師器	壺	11.0	5.0	4.3	外底下ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
32	土師器	壺	10.4	5.0	4.5	外底下ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
33	土師器	壺	11.8					良好	赤褐色	

図版	種類	形状	寸法 (cm)			調査	出土	焼成	色別	備考
			口径	底径	高さ					
34	土師器	壺	15.0			天目部コロナズ		良好	赤褐色	
35	土師器	壺	18.4					良好	赤褐色	
36	土師器	壺	11.7	5.3	3.0			良好	白色	
37	土師器	壺		6.6				良好	赤褐色	
38	土師器	壺	11.0	4.6	2.4			良好	赤褐色	
39	土師器	壺		6.0				良好	赤褐色	
40	土師器	壺		9.4				良好	赤褐色	
41	土師器	壺		9.0				良好	赤褐色	
42	土師器	壺	34.0			内内面ハケ		良好	赤褐色	

3号低墳墓 (本文15頁、図版24)

1	土師器	高杯	21.6			内内面ハケ 外底部下ミダリ		良好	赤褐色	
2	土師器	高杯			(9.0)			良好	褐色	胎面赤褐色
3	土師器	高杯						良好	褐色	胎面赤褐色
4	土師器	高杯	13.5		(10.0)			良好	褐色	
5	土師器	高杯						良好	褐色	
6	土師器	高杯						良好	褐色	
7	土師器	小壺						良好	褐色	
8	土師器	小壺						良好	褐色	
9	土師器	小壺	10.0		9.8			良好	褐色	
10	土師器	小壺	5.8					良好	褐色	
11	土師器	壺						良好	褐色	
12	土師器	壺	13.8		4.8	口部収形		良好	灰色	

1号住居址 (本文21頁、図版25)

1	土師器	壺	14.6	4.5	4.5	外底ヘラナケ		良好	赤褐色	
2	土師器	壺	15.0	8.0	4.0	内内面ナゲ 外底下ヘラ		良好	褐色	胎面赤褐色
3	土師器	壺	16.0			内・外底ナゲ		良好	褐色	
4	土師器	大壺	14.4			中や強い		良好	褐色	
5	土師器	壺?	13.0			内内面ナゲ		良好	褐色	
6	土師器	高杯	18.0					良好	褐色	
7	土師器	壺	18.0					良好	白色	胎面赤褐色
8	土師器	壺	20.8					中や強い	赤褐色	
9	土師器	壺	24.0			外底一帯ナゲ	中や強い	良好	褐色	
10	土師器	壺	24.0			内内面上部ナゲ 外内面下部ナゲ	中や強い	良好	褐色	
11	土師器	壺				内内面ナゲ 外底ヘラナケ	中や強い	良好	褐色	

2号住居址 (本文21頁、図版26)

1	土師器	壺	11.3	6.7	4.7	外底ヘラナケ		良好	褐色	胎面赤褐色
2	土師器	壺	11.6	6.4	4.2	外底ヘラナケ		良好	褐色	
3	土師器	壺	19.4	6.1	4.5	内内面ナゲ 外底ヘラナケ		良好	褐色	
4	土師器	壺	11.8	6.7	4.1	外底ヘラナケ		良好	褐色	
5	土師器	杯(灯明)	11.3	5.2	4.5	外底ヘラナケ 内内面ナゲ		良好	褐色	胎面赤褐色
6	土師器	壺	12.7	7.1	5.0	内内面ナゲ 外底ヘラナケ		良好	褐色	胎面赤褐色
7	土師器	壺	16.8	6.8	4.4	内内面ナゲ 外底ヘラナケ		良好	褐色	胎面赤褐色

No.	種別	形状	法尺 (cm)		具 要	土土	加減	色別	備 考
			口径	高さ					
8	土脚壁	高台付壁	6.5		内装地文	密	良好	褐色	取壊時や出し高台
9	土脚壁	大面壁	15.2	6.1	内装地文 内装ヘラケズリ	密	良好	褐色	取壊ヘラ切
10	土脚壁	壁	15.6	10.9		密	良好	褐色	取壊ヘラ切
11	土脚壁	壁	6.0			密	良好	褐色	取壊ヘラ切
12	土脚壁	平 壁	5.7	4.0	横組筋	密	良好	褐色	取壊ヘラ切
13	土脚壁	壁	7.4		内内面ヘケ	密	良好	赤褐色	取壊木炭炭

### 3号住居址 (本文22頁、図版27)

1	土脚壁	壁			天井部ロケ ケズリ	密	良好	黄褐色	つまみ骨
2	土脚壁	壁	16.0			密	良好	黄褐色	
3	土脚壁	壁	16.5			密	良好	黄褐色	
4	土脚壁	柱	25.0	14.7	内装上層ナゲ 内装下ヘラケズリ	密	良好	茶褐色	
5	土脚壁	壁	20.0		内内面ヘケ	密	良い	褐色	金釘、砂粒等含む
6	土脚壁	柱	26.0		内内面ヘケ	密	良い	褐色	金釘、赤、赤色粒 子、金釘等含む
7	土脚壁	窓カマド	60.0		内内面ヘケ 内内一層横組筋	密	やや悪い	良好	褐色

### 4号住居址 (本文22頁、図版28)

1	土脚壁	壁	5.0		外装ヘラケズリ	やや密	良好	褐色	取壊赤切の上を ヘケ
2	土脚壁	壁	6.0		内装ナゲ	密	良好	褐色	
3	土脚壁	壁	6.0		外装ナゲ	密	良好	褐色	取壊赤切の上を ヘケ
4	土脚壁	壁	3.5		内装ナゲ 外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切の上を ヘケ
5	土脚壁	壁	12.0	3.6	外装上層ヘケ、下 層ナゲ、内装ナゲ	密	良好	褐色	
6	土脚壁	壁	24.0		外、内装ヘケ	やや悪い	良好	褐色	
7	土脚壁	壁	15.0	11.5	外装ナゲ 内装地文	密	良好	褐色	取壊ヘケ
8	土脚壁	壁	6.0		内内面ヘケ	やや悪い	良い	暗褐色	木炭炭
9	土脚壁	壁	5.4		外装部取れ	密	良好	黄褐色	取壊赤切の上を ヘケ

### 5号住居址 (本文22頁、図版29~34)

1	土脚壁	壁(灯明)	12.1	4.1	3.5	外装ヘラケズリ	密	良好	褐色	取壊赤切、ヘケ 煉付壁
2	土脚壁	壁(灯明)	12.0	3.4	3.7	外装下部 ヘラケズリ	密	良好	褐色	取壊赤切、煉付壁
3	土脚壁	壁(灯明)	12.0	4.5	3.7	外装ヘラケズリ	密	良好	赤褐色	取壊ヘケ、煉付壁
4	土脚壁	壁(灯明)	13.0	4.6	3.5	外装ヘラケズリ	密	良好	赤褐色	煉付壁
5	土脚壁	壁(灯明)	12.0	4.7	4.0	外装ヘラケズリ	やや悪い	良好	赤褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
6	土脚壁	壁(灯明)	12.2	4.1	3.3	外装ヘラケズリ	密	良好	褐色	取壊ヘケ、煉付壁
7	土脚壁	壁(灯明)	12.4	4.0	4.2	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
8	土脚壁	壁(灯明)	13.0	4.1	4.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
9	土脚壁	壁(灯明)	13.0	3.7	3.0	外装ヘラケズリ	密	良好	褐色	
10	土脚壁	壁(灯明)	13.2	2.8	4.1	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁

No.	種別	形状	法尺 (cm)		具 要	土土	加減	色別	備 考	
			口径	高さ						
11	土脚壁	壁(灯明)	12.5	3.7	4.1	外装ヘラケズリ	密	良好	赤褐色	煉付壁
12	土脚壁	壁(灯明)	12.0	3.5	3.0	外装ヘラケズリ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
13	土脚壁	壁(灯明)	13.0		3.7	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
14	土脚壁	壁(灯明)	12.6	4.5	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
15	土脚壁	壁(灯明)	12.0	3.0	3.7	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
16	土脚壁	壁(灯明)	12.4	3.0	4.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	やや悪い	良好	黄褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
17	土脚壁	壁(灯明)	12.7	5.0	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
18	土脚壁	壁(灯明)	13.6	6.0	3.5	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
19	土脚壁	壁(灯明)	12.2	4.0	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
20	土脚壁	壁(灯明)	12.4	4.5	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	やや密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
21	土脚壁	壁(灯明)	13.2	4.4	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	やや密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
22	土脚壁	壁(灯明)	12.0	3.6	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
23	土脚壁	壁(灯明)	12.0	4.5	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	やや悪い	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
24	土脚壁	壁(灯明)	(12)	4.0	3.4	外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切赤切ヘケ 煉付壁
25	土脚壁	壁(灯明)	13.0	5.0	3.0	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切 煉付壁
26	土脚壁	壁(灯明)	12.6	4.8	3.7	外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切、煉付壁
27	土脚壁	壁(灯明)	12.7	6.0	3.0	外装ヘケ	密	良好	黄褐色	煉付壁
28	土脚壁	壁(灯明)	13.1	5.7	3.6	内、外装ナゲ	やや密	良好	褐色	取壊赤切赤切 煉付壁
29	土脚壁	壁(灯明)	12.6	4.5	3.7	外装ナゲ	密	良好	褐色	煉付壁
30	土脚壁	壁(灯明)	13.4	6.0	3.3	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切赤切ヘケ 煉付壁
31	土脚壁	壁(灯明)	12.6	5.1	2.8	外装ナゲ	密	良好	褐色	取壊ヘケ、煉付壁
32	土脚壁	壁(灯明)	13.0	3.7	2.4	外装ヘケ	密	良好	褐色	煉付壁
33	土脚壁	壁(灯明)	12.6	5.1	2.8	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	やや密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
34	土脚壁	壁(灯明)	13.0	3.2	2.5	外装ヘケ	密	良好	褐色	煉付壁
35	土脚壁	壁(灯明)	12.0	4.0	2.5	外装ヘケ	密	良好	褐色	煉付壁
36	土脚壁	壁(灯明)	13.0	5.0	3.4	外装ヘケ	密	良好	褐色	煉付壁
37	土脚壁	壁(灯明)	11.5	4.0	3.0	外装ヘケ	密	良好	褐色	煉付壁
38	土脚壁	壁(灯明)	12.4	4.5	2.4	内装ナゲ、外装上 層ナゲ、下部ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切赤切ヘケ 煉付壁
39	土脚壁	壁(灯明)	11.0	3.6	3.2	外装ヘケ	密	良好	褐色	煉付壁
40	土脚壁	壁(灯明)	11.0	3.0	3.5	外装ヘケ	密	良好	黄褐色	煉付壁
41	土脚壁	壁(灯明)	12.5	2.5		密	良好	褐色	取壊ヘケ切 煉付壁	
42	土脚壁	壁(灯明)	13.1	5.0	2.7	外装ヘケ	やや悪い	良好	暗褐色	取壊赤切ヘケ 煉付壁
43	土脚壁	壁(灯明)	12.6	3.3	2.8	外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊ヘケ、煉付壁
44	土脚壁	壁(灯明)	12.0		(2.8)	内装ナゲ	密	良好	褐色	煉付壁
45	土脚壁	壁(灯明)		3.0		外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切赤切ヘケ
46	土脚壁	壁(灯明)		3.5		内装ナゲ 外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切赤切ヘケ 煉付壁
47	土脚壁	壁	11.7	3.0	3.5	外装ヘケ	密	良好	褐色	取壊赤切ヘケ

図号	建物	形状	法量 (m)			構造	土質	傾斜	色調	備考
			口幅	底幅	高さ					
46	土庫	環	13.0	4.5	3.6	外周下部へラ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
48	土庫	環	12.0	2.3	3.6		管	良好	褐色	
49	土庫	環	13.0	3.7	3.8	外周下部へラ	管	良好	褐色	
51	土庫	環	13.0	2.9	3.7	外周へラ	縦 管	良好	褐色	庭前赤切へラ 内庭舗装
52	土庫	環	13.0	4.5	4.0	外周下部へラ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
53	土庫	環	12.6	3.6	3.7	外周下部へラ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
54	土庫	環	11.4	4.8	3.5	外周へラ	管	良好	赤褐色	
55	土庫	環	12.8		(3.7)	外周へラ	管	良好	赤褐色	
56	土庫	環	13.0	4.7	3.8	外周下部へラ	管	良好	褐色	
57	土庫	環	12.6	4.3	4.1	外周下部へラ	管	良好	褐色	庭前へラ
58	土庫	環	12.8	5.5	4.0	外周へラ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
59	土庫	環	12.8	3.8	3.3	外周へラ	やや悪い	良好	赤褐色	
60	土庫	環	13.7	4.6	3.8	外周へラ	管	良好	褐色	
61	土庫	環	13.4			外周へラ	管	良好	褐色	
62	土庫	環	13.2	4.8	4.6	外周へラ	縦 管	良好	褐色	庭前庭前赤切へラ
63	土庫	環	12.8	4.8	3.9	外周へラ	管	良好	褐色	庭前へラ
64	土庫	環	18.0	5.0	3.6	外周へラ	管	良好	赤褐色	
65	土庫	環	14.0	5.0	2.8	外周へラ	管	良好	褐色	
66	土庫	環	13.5	3.9	3.2	外周へラ	やや悪い	良好	褐色	
67	土庫	環	13.5	3.8	2.8	外周へラ	管	良好	褐色	
68	土庫	環	11.7	3.4	2.8	外周へラ	やや悪い	良好	赤褐色	庭前赤切へラ
69	土庫	環	12.8	3.0	3.0	外周へラ	管	良好	褐色	
70	土庫	環	13.4	5.8	2.7	外周へラ	やや悪い	良好	赤褐色	
71	土庫	環	13.2	5.0	2.7	外周下部へラ	管	良好		
72	土庫	環	13.6	3.4	2.8	外周下部へラ	管	良好	褐色	
73	土庫	環	13.0	3.0	2.8	外周下部へラ	管	良好	褐色	
74	土庫	環	12.2		2.9	外周へラ	やや悪い	良好	赤褐色	
75	土庫	環	13.4		2.7	外周下部へラ	やや悪い	良好	赤褐色	
76	土庫	環	13.3	5.7	3.0	外周下部へラ	管	良好	褐色	
77	土庫	環	13.7		(3.8)	外周へラ	管	良好	褐色	
78	土庫	環	13.5		2.8	外周下部へラ	やや悪い	良好	赤褐色	
79	土庫	環	13.0	4.0	3.0	外周へラ	縦 管	良好	赤褐色	
80	雑 草	笹伊草	(14.0)		(5.5)		縦 管	良好	赤褐色	瓦文、ストラク つまる植栽状

### 6号住居址 (本文22頁、図版28)

10	土庫	環	26.0			内周へラ 外周ナテ	やや悪い	良好	褐色	
11	土庫	環	21.0				縦 い	良好	褐色	

### 7号住居址 (本文23頁、図版36・37)

1	土庫	環	11.1	6.2	4.4	外周へラナグリ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
2	土庫	環	16.8	6.9	3.9	外周へラ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
3	土庫	環(付門)	11.2	6.1	4.3	内庭埋文	管	良好	褐色	
4	土庫	環	16.3	6.3	4.8	内庭埋文	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
5	土庫	環	7.4				管	良好	褐色	庭前赤切赤切へラ
6	土庫	環	11.8	7.5	5.8	内庭埋文	管	良好	褐色	庭前へラ
7	土庫	環	11.4	5.7	4.1	外周上ナテ	管	良好	褐色	
8	土庫	環	12.8	6.8	3.6	内庭埋文	管	良好	褐色	
9	土庫	環	11.8	6.2	4.7	内庭埋文	管	良好	褐色	庭前赤切へラ

図号	建物	形状	法量 (m)			構造	土質	傾斜	色調	備考
			口幅	底幅	高さ					
10	土庫	環	11.1	6.6	4.2		管	良好	褐色	
11	土庫	環		8.8		内庭埋文	管	良好	褐色	
12	土庫	環		(5.4)		内庭埋文	管	良好	褐色	庭前へラ
13	土庫	環		8.8			管	良好	褐色	
14	土庫	高台付環	18.2	7.8	6.4	内庭埋文 オコケナグリ	管	良好	赤褐色	庭前上高台
15	雑草	高台付環	10.5				管	良好	灰白色	庭前庭前高台
16	土庫	環					管	良好	褐色	庭前出し高台
17	土庫	環		8.3			管	良好	褐色	
18	土庫	環				内庭埋文	管	良好	褐色	
19	土庫	環	18.0	4.7	4.8	内庭埋文	管	良好	赤褐色	
20	土庫	環	15.8			外周オコケ	管	良好	褐色	
21	土庫	環		8.8		内庭埋文 外周へラ	やや悪い	良好	褐色	
22	土庫	環	20.0		(4.5)		管	良好	褐色	
23	土庫	環	21.8		(4.5)	内周へラ	管	良好	褐色	
24	土庫	環	34.3		(9.5)	内周ナテナハテ 外周へラ	管	良好	赤褐色	
25	土庫	環	24.0		(10.2)	内周へラ	やや悪い	良好	褐色	
26	土庫	環	33.0		(11.5)	内周へラ、内周上 部ナテ、下部へラ	やや悪い	良好	褐色	
27	土庫	環	34.0		(13.0)	内周へラ	やや悪い	良好	褐色	

### 1号溝 (本文24・25頁、図版38~42)

1	土庫	環	25.7		(14.5)	外周へラ	縦 い	良好	褐色	
2	土庫	環	27.0		(9.8)	内周上テナテ 内周下部へラ	やや悪い	良好	褐色	
3	土庫	環	30.0		(13.7)	内周へラ、内周上 部へラ、下部へラ	やや悪い	良好	赤褐色	
4	土庫	環	38.0		(11.8)	内周へラ	やや悪い	良好	褐色	
5	土庫	環	22.7		(16.8)	内周へラ	縦 い	良好	赤褐色	
6	土庫	環	30.0	6.4	20.3	内周上テナテ 内周へラ	縦 い	良好	褐色	庭前木造
7	土庫	環	20.5		(16.8)	内周へラ	やや悪い	良好	褐色	
8	土庫	環	14.8		(7.5)		管	良好	褐色	
9	土庫	環	28.3		(4.0)	内周へラ	管	良好	褐色	
10	土庫	環		11.4		内周へラ	縦 い	良好	赤褐色	
11	土庫	環	24.0		(7.5)	内周ナテ 外周オコケナテ	管	良好	褐色	
12	土庫	環		13.2		内周へラ	縦 い	良好	褐色	庭前木造
13	土庫	環	23.0		(14.2)	内周へラ	管	良好	赤褐色	
14	土庫	環	34.0		(8.0)	外周へラ	やや悪い	良好	褐色	
15	土庫	環		9.6		内周へラ	縦 い	良好	褐色	庭前木造
16	土庫	環		9.9		外周へラ	やや悪い	良好	褐色	庭前へラ
17	土庫	環	18.0	8.6	6.2	内周ナテ 外周ナテ	管	良好	赤褐色	庭前へラ
18	土庫	環	15.8	8.6	5.1	内周埋ナテ	管	良好	褐色	庭前へラ
19	土庫	環	11.0	7.0	3.6		管	良好	褐色	庭前へラ
20	土庫	環	17.6	12.6	5.6	内周ナテ	管	良好	褐色	庭前赤切へラ
21	土庫	環	11.0	(7.4)	4.4	内庭埋文 外周下部へラ				
22	土庫	環	18.0	11.8	6.4	内周ナテ	管	良好	褐色	庭前へラ
23	土庫	環	11.4	7.0	4.6	内庭埋文 外周下部へラ	管	良好	赤褐色	庭前赤切へラ

図例	種類	形状	断面 (cm)		調査	地土	構造	色質	備考	
			口徑	高さ						
24	土師器	皿				密	良好	茶褐色	つまみ	
25	土師器	皿	18.9			密	良好	赤褐色		
26	土師器	皿	18.0			密	良好	褐色		
27	土師器	皿	18.9		(3.2) 天井部コケナズリ		良好			
28	土師器	杯	8.6			密	良好	赤褐色	底部へラ 割り出し高台	
29	土師器	杯	17.0	9.0	7.0	内面ナテ 外面コケナ	密	良好	褐色	底縁ホリ 割り出し高台
30	須恵器	杯	11.5			コケナズリ	密	良好	灰色	高台
31	須恵器	杯	12.0			コケナズリ	密	良好	青灰色	高台
32	土師器	杯	18.0				密	良好	褐色	
33	須恵器	皿	21.2				密	良好	青灰色	
34	鉄 物	皿	11.0	5.5	5.0		密	良好	黒紫色	
35										
36	土師器	皿	19.0	9.0	2.3		やや粗い	良好	赤褐色	底部ナテ、へラ
37	土師器	杯	15.0	10.0	2.5	外面ナテ	密	良好	褐色	底部へラ切り
38	土師器	杯	14.4	10.5	2.5	内面コケナ、外面上 部コケナ下へラ	密	良好	褐色	底縁ホリ、へラ
39	土師器	杯	14.0	9.2	3.1		密	良好	褐色	
40	土師器	杯	14.8	10.5	3.3		密	良好	褐色	
41	土師器	杯	14.0	9.0	4.0		やや粗い	良好	黄褐色	底部へラ
42	土師器	杯	13.0	8.7	3.2		密	良好	褐色	
43	土師器	杯	14.8	10.2	2.7		密	良好	茶褐色	底部へラ
44	土師器	杯	15.6	11.2	4.0	内外面ナテ	密	良好	褐色	底部へラ切り
45	土師器	杯	14.0				密	良好	赤褐色	
46	土師器	杯	(16.0)				密	良好	茶褐色	
47	土師器	杯	12.0			外面へラ	やや粗い	良好	褐色	
48	土師器	杯	14.0			外面へラ	密	良好	暗褐色	
49	土師器	杯	15.0			外面へラ	密	良好	暗褐色	
50	土師器	皿	13.0		5.3	外面へラ	やや粗い	良好	赤褐色	
51	土師器	鉢	20.0		11.4	外面へラ	密	良好	青褐色	
52	土師器	平 皿	4.2	3.2	4.2	内外面へラ	粗い	良好	褐色	
53	土師器	平 皿	5.2	5.0	3.7	内外面へラ	密	良好	茶褐色	底縁ホリ
54	土師器	平 皿	4.5	4.0	3.1	内外面部ナテ 外面へラ	やや粗い	良好	褐色	底縁ホリ
55	土師器	高 鉢	10.0			外面へラ	密	良好	褐色	
56	土 師	蓋カマド	26.7			内外面ハケ	粗い	良好	褐色	

## 2号溝 (本文25頁、図版43・44)

1	土師器	皿	16.4	(8.2)	2.0	外面下へラ	密	良好	暗褐色	底部へラ、貫筋	
2	土師器	皿	16.0	8.5	3.2		粗密	密	良好	赤褐色	
3	土師器	皿	16.4	8.7	2.8		粗密	密	良好	暗褐色	底部へラ切 有筋
4	土師器	皿	15.0	7.8	2.6		密	良好	褐色	底縁部赤褐色 有筋	
5	土師器	杯	10.0	4.6	2.5	内面ナテ、外面上 部ナテ、下へラ	密	良好	褐色	底縁部赤褐色へラ	
6	土師器	杯	(16.3)	(5.4)	4.3		密	良好	褐色		
7	土師器	杯	10.0	5.5	4.1	外面へラ	粗密	良好	褐色	底部へラ	
8	土師器	杯	11.3	6.4	4.0	内面陶文 外面ナテ	密	良好	褐色	底縁部赤褐色へラ	
9	土師器	杯	11.0	5.0	4.0	外面へラ	密	良好	褐色	底部へラ	
10	土師器	杯	11.0	6.0	4.3	外面下へラ	粗密	良好	褐色	底縁ホリ	

図例	種類	形状	断面 (cm)			調査	地土	構造	色質	備考
			口徑	底径	高さ					
11	土師器	杯	11.0	6.0	4.3	外面へラ	密	良好	赤褐色	底縁部赤褐色へラ
12	土師器	杯	11.0	5.0	4.5	外面へラ	密	良好	赤褐色	底縁部赤褐色へラ
13	土師器	杯	11.2	6.0	4.0	内面ナテ、外面上 部ナテ、下へラ	密	良好	褐色	底縁部赤褐色へラ
14	土師器	杯	11.8	6.0	4.3	内面ナテ、外面上 部ナテ、下へラ	密	良好	褐色	底縁部赤褐色へラ
15	土師器	杯	15.6	8.5	6.3	コケナ	密	良好	褐色	底縁部出し高台
16	土師器	杯	16.1	8.2	5.4	内面陶文、外面上 部ナテ、下へラ	密	良好	褐色	底縁部出し高台
17	土師器	杯	15.0	7.0	5.4		密	良好	褐色	底縁部出し高台
18	土師器	杯	16.2	7.5	6.0		密	良好	褐色	底縁部出し高台
19	土師器	皿	17.4				密	良好	褐色	つまみ欠損
20	須恵器	皿	22.0			天井部コケナ	密	良好	灰色	
21	土師器	合付蓋	12.8	10.0	17.8	内面下へラ 外面へラ	やや粗い	やや粗密	褐色	
22	土師器	鉢	34.0	10.0	10.7	内面ナテ 外面コケナズリ	密	良好	褐色	底縁部出し高台
23	土師器	皿	27.0		(9.0)	内面へラ	粗い	良好	暗褐色	
24	土師器	鉢	34.0		(10.0)	内面へラ、外面上 部ナテ、下へラ	粗い	良好	褐色	

## 4号溝 (本文26頁、図版45)

1	土師器	杯	18.0	6.0	3.4	外面下へラ	密	良好	黄褐色	有筋
2	須恵器	杯	8.0				粗密	密	青灰色	底縁部赤褐色
3	土師器	杯	8.6				密	良好	褐色	底部へラ
4	土師器	杯	6.0			外面へラ	密	良好	褐色	底縁部赤褐色へラ
5	土師器	杯	5.0			外面下へラ	密	良好	黄褐色	底縁部赤褐色へラ

## 5号溝 (本文36~38頁、図版46~51)

1	土師器	灯(灯)	10.0	5.0	6.0	外面下へラ 内面陶文	密	良好	褐色	底縁部赤褐色へラ 深付蓋
2	土師器	灯(灯)	12.0	7.1	2.7	コケナ成形	密	良好	淡褐色	底縁部赤褐色 深付蓋
3	土師器	皿	10.0	6.6	2.0	コケナ成形	密	良好	淡褐色	底縁部赤褐色
4	土師器	皿	10.0	5.2	2.2	コケナ成形	密	良好	淡褐色	
5	土師器	皿	10.0	6.0	2.4		密	良好	黒褐色	底縁部赤褐色 金銀箔付
6	土師器	皿	12.2	6.5	2.5	コケナ成形	密	良好	淡褐色	
7	土師器	皿	14.0	8.0	2.7	コケナ成形	密	良好	茶褐色	
8	土師器	皿	10.4	5.4	2.4	コケナ成形	密	良好	黄褐色	底縁部赤褐色
9	鉄 物	皿	12.0	8.5	2.8	コケナ成形	密	良好	鉄褐色	付高台
10	鉄 物	皿			高さ 5.0					底縁部 古伊万里?
11	鉄 物	磁器皿	11.0	7.0	2.7		密	良好	緑褐色	瀬戸大瓶、印文
12	鉄 物	皿	13.7	7.4	2.6	コケナ成形	密	良好	暗褐色	深付高台
13	鉄 物	皿			高さ 4.5		密	良好	淡褐色	
14	鉄 物	皿			高さ 4.5		密	良好	淡紫色	古伊万里?
15	鉄 物	蓋			高さ 5.0		密	良好	淡褐色	古伊万里?
16	鉄 物	蓋	7.0			コケナズリ	密	良好	淡褐色	底縁部赤褐色へラ 有筋
17	鉄 物	蓋	8.0				密	良好	暗褐色	瀬戸大瓶、印文
18	志 野	皿	12.0	7.4	2.3		密	良好	灰白色	
19	志 野	皿								
20	志 野	皿	6.2							
21	志 野	皿	6.0				密	良好	灰白色	割込高台

図号	樹形	図形	注量 (cm)			調 整	土 法	成 績	色 質	備 考
			口径	樹高	高さ					
22	球	球	7.0				密	良好	茶褐色	
23	球	球	12.0 (7.8)	(5.5)			密	良好	黄褐色	雪害、凍害1
24	球	球	14.0	(5.0)			密	良好	黄褐色	大落葉
25	球	球	集合径 4.7				密	良好	黄褐色	
26	球	球	12.0	(4.4)			密	良好	黄 茶	雪害1区
27	球	球	集合径 5.0	4.0			密	良好	黄 茶	大落葉
28	アノ輪	輪	集合径 5.1	(5.0)	ロクロ成形		密	良好	緑褐色	オロ茶調
29	アノ輪	輪	集合径 5.0	(5.0)	ロクロ成形		密	良好	緑褐色	オロ茶調
30	アノ輪	輪	集合径 5.0	(5.0)	ロクロ成形		密	良好	緑褐色	オロ茶調
31	球	球	集合径 4.5	(3.8)			密	良好	黄褐色	
32	球	球	集合径 5.0				密	良好	黄褐色	
33	球	球	5.5				密	良好	黄褐色	割り出し適合
34	球	球	8.0	(3.8)			密	良好	黄 茶	大落葉
35	球	片口	15.0	(8.0)			密	良好	黄 茶	大落
36	球	樹形鉢	20.5				密	良好	黄 茶	落葉
37	常 緑 葉	(40.0)					密	良好	黄 茶	うるしによる落葉
38	常 緑 葉	(44.0)					密	良好	黄褐色	
39	球	球	15.0				密	良好	白 色	落葉
40	球	球	集合径 21.0				密	良好	灰 色	
41	球	球					密	良好	白 色	落葉
42	土俵型	樹形鉢	18.7				密	良好	茶褐色	
43	球	樹形鉢	17.0				密	良好	灰 色	
44	球	樹形鉢	9.8				密	良好	黄褐色	落葉(落葉鉢)
45	球	樹形鉢	15.0				やや密い	良好	灰 色	
46	球	樹形鉢	8.8				やや密い	良好	黄褐色	大落
47	土俵型	樹形鉢	24.8				密	良好	黄褐色	
48	有葉樹	23.0	22.5	10.7			密	良好	灰 色	
49	土俵型	内 耳	20.0	24.3	8.6		やや密い	良好	黄褐色	
50	土俵型	内 耳	20.2	28.3	8.6	内側ナゲ	やや密い	良好	黄 色	
51	土俵型	内 耳	23.0	30.0	6.1		やや密い	良好	黄褐色	
52	土俵型	内 耳	20.0	28.2	7.2		やや密い	良好	黄褐色	
53	土俵型	内 耳	28.1				密	良好	黄褐色	
54	土俵型	内 耳	26.0				密	良好	黄褐色	
55	土俵型	内 耳	28.8				密	良好	灰褐色	
56	土俵型	内 耳	17.0				密い	良好	黄褐色	
57	土俵型	内 耳	26.0	28.9	11.2	落葉樹	密	良好	黄褐色	
58	土俵型	内 耳	26.6				密	良好	黄褐色	
59	土俵型	内 耳	29.6	26.0	6.7		密	良好	黄褐色	
60	土俵型	内 耳	29.0	28.0	8.5		密	良好	黄褐色	
61	土俵型	樹形鉢	23.0				やや密い	良好	黄褐色	
62	土俵型	樹形鉢	28.0	(24.0)	8.0		やや密い	良好	黄褐色	
63	土俵型	樹形鉢	22.0			ナゲ成形	やや密い	良好	黄 色	

### 6号溝 (本文38頁、図版52)

1	土俵型	鉢	12.2	6.5	2.9	やや密い	良好	黄褐色	落葉鉢切り
2	球	球	12.0			密	良好	黄褐色	
3	球	球	4.8			密	良好	黄 色	落葉(落葉鉢)
4	球	球	6.0			密	良好	白 色	落葉

### 9号溝 (本文26頁、図版53・54)

1	土俵型	環(灯明)	13.0	5.2	3.4	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
---	-----	-------	------	-----	-----	--------------------	---	----	-----	-------------------

図号	樹形	図形	注量 (cm)			調 整	土 法	成 績	色 質	備 考
			口径	樹高	高さ					
2	土俵型	環(灯明)	13.4	5.1	3.2	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
3	土俵型	環(灯明)	12.7	4.6	3.8	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	黄 色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
4	土俵型	球	14.6	5.2	3.2	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
5	土俵型	球	14.4	4.7	3.8	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	内落 落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
6	土俵型	球	15.0	5.6	4.7	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	
7	土俵型	球	14.2	4.2	4.5	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	
8	土俵型	球	14.6	5.4	4.4	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉鉢切り
9	土俵型	球	12.9	4.4	2.4	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
10	土俵型	球	15.0	(5.8)	(3.0)	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	
11	土俵型	球	6.5	(4.5)	内側上ナゲ	密	良好	茶褐色		
12	土俵型	球	13.0	5.0	3.7	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉鉢切り→
13	土俵型	球	12.4	3.8	3.8	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
14	土俵型	鉢	12.0	3.7	1.8	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
15	土俵型	鉢	13.4	5.2	2.4	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
16	土俵型	鉢	12.3	2.7	2.4	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢切り)→ 挿し木
17	土俵型	鉢	12.8	3.5	2.5	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	
18	土俵型	鉢	13.0	4.7	2.8	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	茶褐色	
19	土俵型	鉢	27.0			内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	黄褐色	
20	土俵型	鉢	19.0				密	良好	茶褐色	
21	土俵型	片口鉢	24.0				やや密い	良好	黄 色	
22	常 緑 葉	鉢					密	良好	黄褐色	
23	落葉樹	球	19.0	(13.0)	(7.0)	ロクロ成形	密	良好	灰 色	適合
24	落葉樹	球	11.0				密	良好	灰 色	適合
25	落葉樹	球	18.6				密	良好	黄褐色	適合
26	球	球	9.6				密	良好	灰白色	

### 10号溝 (本文27頁、図版52)

6	土俵型	球	11.4	6.4	4.4	内側上ナゲ、下へナゲ 内側ナゲ	密	良好	黄 色	
7	常 緑 葉	鉢	28.0				密	良好	黄褐色	
8	球	球				8区画	密	良好		

### 11号溝 (本文38頁、図版55~57)

1	土俵型	鉢	14.0	7.5	2.8	ロクロ成形	密	良好	黄褐色	落葉(落葉鉢)
2	土俵型	鉢	14.0	7.3	2.8	ロクロ成形	密	良好	黄褐色	落葉(落葉鉢)
3	土俵型	鉢	13.0	7.2	2.8	ロクロ成形	密	良好	黄褐色	落葉(落葉鉢)
4	土俵型	鉢	8.5	5.0	2.0	ロクロ成形	密	良好	茶褐色	落葉(落葉鉢)
5	土俵型	鉢	8.0	5.0	1.8	ロクロ成形	密	良好	黄褐色	落葉(落葉鉢)
6	土俵型	鉢	9.3	4.0	2.3	ロクロ成形	密	良好	黄 色	落葉(落葉鉢)
7	土俵型	鉢	7.0	3.0	2.0	ロクロ成形	密	良好	黄 色	落葉(落葉鉢)
8	土俵型	鉢	12.4	6.0	2.0		やや密い	良好	灰白色	落葉(落葉鉢)
9	土俵型	鉢	11.0	6.0	2.0		密	良好	黄褐色	
10	土俵型	鉢	7.0	3.6	1.7		密	良好	黄褐色	落葉(落葉鉢)

図号	種別	形状	寸法 (m)		調査	樹土	樹皮	色調	備考
			口径	高さ					
11	土脚壁	瓦	18.0	(3.5)	ワケロ成形	密	良好	赤褐色	
12	土脚壁	瓦	18.0		ワケロ成形	密	良好	赤褐色	
13	土脚壁	瓦	21.2		ワケロ成形	密	良好	赤褐色	
14	瓦	瓦	6.8			密	良好	赤褐色	大塚
15	瓦	瓦	10.6	2.4		密	良好	赤褐色	大塚
16	瓦	瓦	(12.8)			密	良好	赤褐色	大塚
17	瓦	瓦	(11.4)			密	良好	赤褐色	大塚
18	瓦	瓦	10.8	8.0	2.4	密	良好	赤褐色	大塚
19	瓦	瓦	(12.8)			密	良好	赤褐色	大塚
20	瓦	瓦	6.8			密	良好	赤褐色	大塚
21	土脚壁	すり鉢	17.2			密	良好	褐色	
22	土脚壁	内耳	26.0	24.5	9.2	密	良好	黒褐色	
23	土脚壁	内耳	27.2	22.6	10.4	密	良好	褐色	
24	土脚壁	内耳	28.0			密	良好	黒褐色	
25	土脚壁	内耳	21.5			やや密	良好	褐色	
26	土脚壁	内耳	29.4	28.7	9.5	やや密	良好	黒褐色	
27	土脚壁	内耳	26.5	20.4	11.4	密	良好	褐色	
28	土脚壁	内耳	28.6			やや密	良好	黒褐色	
29	土脚壁	内耳	23.4			密	良好	黒褐色	
30	土脚壁	内耳	24.0			密	良好	黒褐色	
31	土脚壁	すり鉢	14.4			密	良好	赤褐色	

#### 12号溝 (本文39頁、図版54)

1	土脚壁	瓦	14.0	7.2	2.9	内外瓦ロケ成形	やや密	良好	褐色	底層赤褐色
2	土脚壁	瓦	14.0	7.4	2.4	内外瓦ナゲ	やや密	良好	褐色	底層赤褐色
3	土脚壁	瓦	14.0	8.0	2.6	内外瓦ナゲ	やや密	良好	褐色	底層赤褐色
4	土脚壁	瓦	8.8	5.0	1.7	内外瓦ナゲ	やや密	良好	褐色	底層赤褐色
5	白	四角	5.6			密	良好	白色		
6	青	瓦	6.8			密	良好	灰白色		
7	土脚壁	内耳	20.0			内外瓦ナゲ	やや密	良好	褐色	

#### 1号堀立建物址 (本文23~24頁、図版58・59)

1	土脚壁	瓦(灯明)	6.9	3.8	2.5	内外ナゲ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
2	土脚壁	瓦(灯明)	6.9	4.1	2.5	内外ナゲ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
3	土脚壁	瓦(灯明)	8.8	4.1	2.6	外周上階煉瓦層	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
4	土脚壁	瓦(灯明)	7.8	4.3	2.6	内外ナゲ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
5	土脚壁	瓦(灯明)	7.5	4.5	2.5	内外ナゲ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
6	土脚壁	瓦(灯明)	7.3	4.6	3.0	内外ナゲ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色
7	土脚壁	瓦(灯明)	6.3	3.8	2.5	外周ヘラ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色ヘラ
8	土脚壁	瓦(灯明)	6.3	5.4	2.7	外周上階煉瓦層	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
9	土脚壁	瓦(灯明)	5.8	5.7	2.8	ワケロ成形	密	良好	赤褐色	底層赤褐色 煉瓦層
10	土脚壁	瓦(灯明)	10.8	5.0	4.1	内周短文 内周ナゲ	密	良好	褐色	底層ヘラ、煉瓦層
11	土脚壁	瓦(灯明)	(11.8)		(3.5)	内周ナゲ	密	良好	赤褐色	煉瓦層
12	土脚壁	瓦(灯明)	9.3	3.7	2.6	外周ヘラ	密	良好	赤褐色	底層ヘラ、煉瓦層

図号	種別	形状	寸法 (m)			調査	樹土	樹皮	色調	備考
			口径	縦径	高さ					
13	土脚壁	瓦	(10.2)	6.3	4.2	内周ナゲ 外周下階煉瓦ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ
14	土脚壁	瓦	(11.4)	(8.0)	4.6	内周ナゲ 外周下階ヘラ	密	良好	褐色	
15	土脚壁	瓦(灯明)	(7.0)	(4.3)	1.8		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
16	土脚壁	瓦(灯明)	(6.0)	(3.7)	1.6		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
17	土脚壁	瓦	11.8	(6.0)	4.6	内周ナゲ、外周上 部ナゲ、下階ヘラ	密	良好	褐色	
18	土脚壁	瓦	11.2			内周ナゲ、外周上 部ナゲ、下階ヘラ	密	良好	褐色	
19	土脚壁	瓦	11.0	5.7	4.4	内周短文 外周下階ヘラ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色
20	土脚壁	瓦(灯明)	6.7	(1.4)		内周短文	密	良好	赤褐色	底層赤褐色
21	土脚壁	瓦	11.7	5.4	3.6	内周ナゲ、外周上 部ナゲ、下階ヘラ	密	良好	赤褐色	底層赤褐色ヘラ
22	土脚壁	瓦	10.6		(4.3)	内周ナゲ、外周上 部ナゲ、下階ヘラ	密	良好	褐色	
23	土脚壁	瓦(灯明)	11.2	6.4	4.5	内周短文 外周下階ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
24	土脚壁	瓦(灯明)	(11.4)	(6.0)	(4.5)	外周下階ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
25	土脚壁	瓦(灯明)	11.4	5.8	4.5	外周下階ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
26	土脚壁	瓦(灯明)	(11.0)	(6.5)	(4.3)	外周ヘラ煉瓦	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
27	土脚壁	瓦(灯明)	(10.8)	5.4	(4.4)	外周下階ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
28	土脚壁	瓦(灯明)	11.0	6.3	4.5	内周ナゲ、外周上 部ナゲ、下階ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
29	土脚壁	瓦(灯明)	12.0	6.4	4.5	外周ナゲ	密	良好	褐色	底層ヘラ、煉瓦層
30	土脚壁	瓦(灯明)	(11.4)	(6.3)	4.1	外周下階ヘラ煉瓦	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
31	土脚壁	瓦(灯明)	(10.8)	4.6	(4.4)	外周下階ヘラ	密	良好	褐色	底層赤褐色ヘラ 煉瓦層
32	土脚壁	瓦(灯明)	(11.2)		(3.5)	内周ナゲ、外周上 部ナゲ、下階ヘラ	密	良好	褐色	煉瓦層

#### 4号土壇 (本文15・16頁、図版60)

12	土脚壁	瓦	22.0			内外壁ハケ	やや密	良好	褐色	
13	土脚壁	合行集					やや密	良好	褐色	

#### 1号墓 (本文39頁、図版60)

10	土脚壁	瓦	12.0	6.3	2.8	ワケロ成形	密	良好	赤褐色	
11	土脚壁	瓦	12.6	6.5	2.8	ワケロ成形	密	良好	赤褐色	

#### 1号竪穴 (本文39頁、図版60)

1	土脚壁	瓦	6.1	3.5	1.4		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
2	土脚壁	瓦	6.8	3.6	1.4		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
3	土脚壁	瓦	7.0	3.0	1.3		密	良好	赤褐色	
4	土脚壁	瓦	8.5	4.5	2.0		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
5	土脚壁	瓦	8.5	4.5	2.0		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
6	土脚壁	瓦	8.5	3.0	1.3		密	良好	赤褐色	
7	土脚壁	瓦	11.0	6.4	2.7		密	良好	赤褐色	
8	土脚壁	瓦	11.3	6.0	2.6		密	良好	赤褐色	底層赤褐色
9	土脚壁	内耳	27.4	23.4	11.3		密	良好	赤褐色	平盤



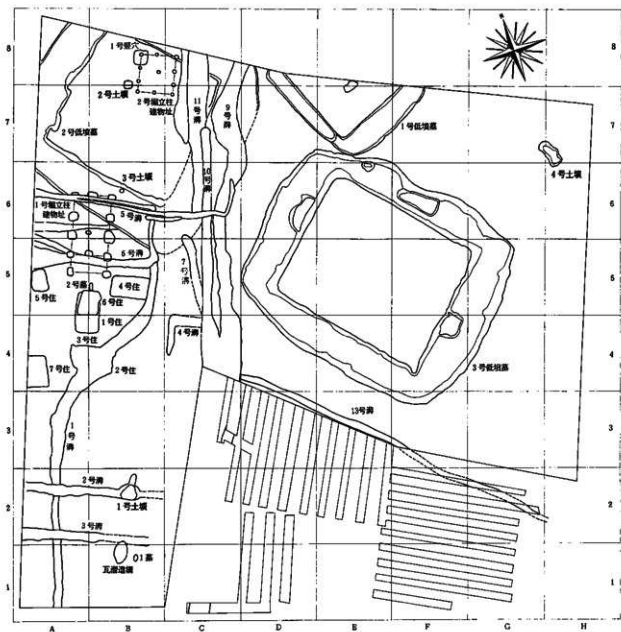
A地区遺構外出土土器 (図版61)

種別	種類	図号	径目 (mm)		製 業	胎土	焼成	色調	備 考
			口径	底径					
1	陶文	瓦片							
2	陶文	瓦片							
3	陶文	瓦片							
6	土師器	杯	10.0	4.8	4.5		密	灰好	茶褐色
7	土師器	杯	12.0	5.0	5.0	外裾下へラ	密	灰好	褐色
8	土師器	杯	11.0	5.0	4.9	外裾下へラ	やや密	灰好	褐色
9	土師器	杯	15.4		4.6	内内面ナデ	やや密	灰好	褐色
10	土師器	皿	20.0		3.0				
11	土師器	杯(灯明)	9.0	5.4	3.0	内内面ナデ	密	灰好	褐色
12	土師器	杯(灯明)	11.4	5.6	4.1	内面陶文 内面ナデ	密	灰好	褐色
15	鉄胎	磁片	12.0				密	灰好	黒褐色

C地区出土土器 (本文40頁、図版62)

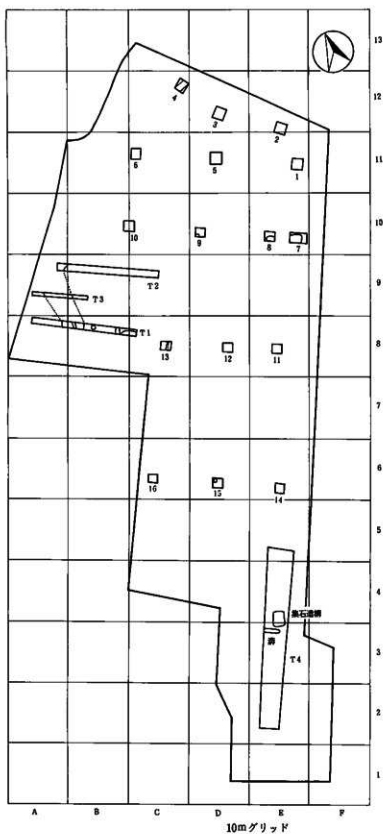
1	陶器	蓋		5.0	(4.0)			密	灰好		1号集石
2	陶器	蓋	15.0					密	灰好		
3	陶器	蓋	11.0	真公儀 5.5	1.8			密	灰好	黒色	
4	陶器	蓋	14.0	9.0	13.5			密	灰好	黒褐色	
6	土師器	皿	5.0					密	灰好	褐色	第4試掘区
7	土師器	杯	12.0					密	灰好	褐色	第1試掘区
8	土師器	杯		4.0				密	灰好	褐色	第3トレンチ
9	土師器	皿	13.0					密	灰好	褐色	第2トレンチ
11	土師器	杯		5.0				密	灰好	褐色	第1試掘区
12	土師器	瓦片						密	灰好	褐色	第2トレンチ
13	土師器	高杯						密	灰好	褐色	第4試掘区
14	鉄胎	陶		真公儀 5.5				密	灰好	黒褐色	表掘
15	土師器	皿	17.0			内面ナデ	やや密	灰好	褐色	第4トレンチ	
16	陶器	磁片	12.0					密	灰好	灰色	表掘
17	土師器	磁片	17.5							第3トレンチ	
18	土師器	磁片	14.0							第3試掘区	
19	土師器	内 瓦	25.7					密	灰好	褐色	第1試掘区

## 圖 版



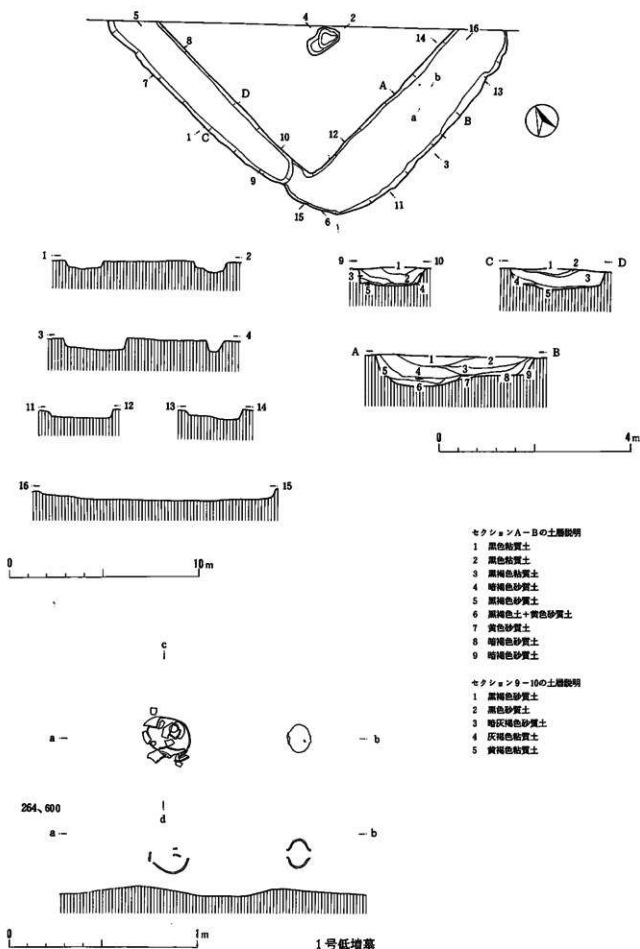
A地区遺構配置図

10mグリッド



C地区試掘坑位置図



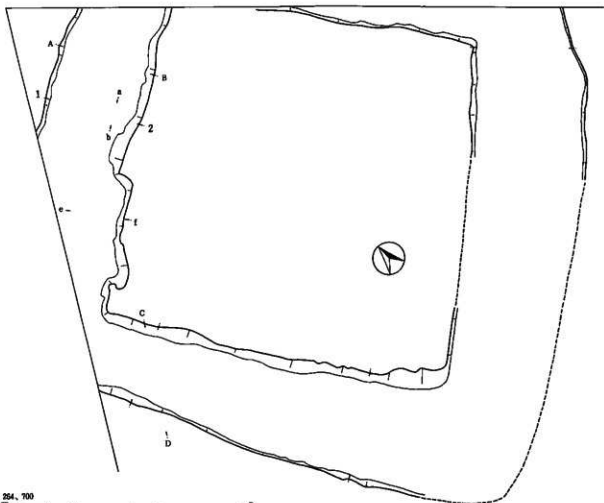


セクションA-Bの土層説明

- 1 黒色粘質土
- 2 黒色粘質土
- 3 黒褐色粘質土
- 4 暗褐色砂質土
- 5 黒褐色砂質土
- 6 黒褐色土+黄色砂質土
- 7 黄色砂質土
- 8 暗褐色砂質土
- 9 暗褐色砂質土

セクション9-10の土層説明

- 1 黒褐色砂質土
- 2 黒色粘質土
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 黄褐色粘質土



254.600 m

e-



セクション A-Bの土層説明

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1層 暗褐色砂質土 | 6層 赤褐色粘質土  |
| 2層 黒褐色砂質土 | 7層 黒褐色粘質土  |
| 3層 灰褐色砂質土 | 8層 灰褐色粘質土  |
| 4層 灰色粘質土  | 9層 黄色粘質土   |
| 5層 黒褐色粘質土 | 10層 暗褐色粘質土 |

セクション C-Dの土層説明

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1層 灰褐色粘質土 | 10層 黒色粘質土  |
| 2層 赤褐色砂質土 | 11層 赤褐色砂質土 |
| 3層 暗褐色粘質土 | 12層 黒褐色粘質土 |
| 4層 暗褐色粘質土 | 13層 灰褐色粘質土 |
| 5層 暗褐色粘質土 | 14層 暗褐色粘質土 |
| 6層 黒褐色土   | 15層 暗褐色粘質土 |
| 7層 暗褐色粘質土 | 16層 黒色土    |
| 8層 暗褐色粘質土 | 17層 暗褐色粘質土 |
| 9層 暗褐色粘質土 |            |



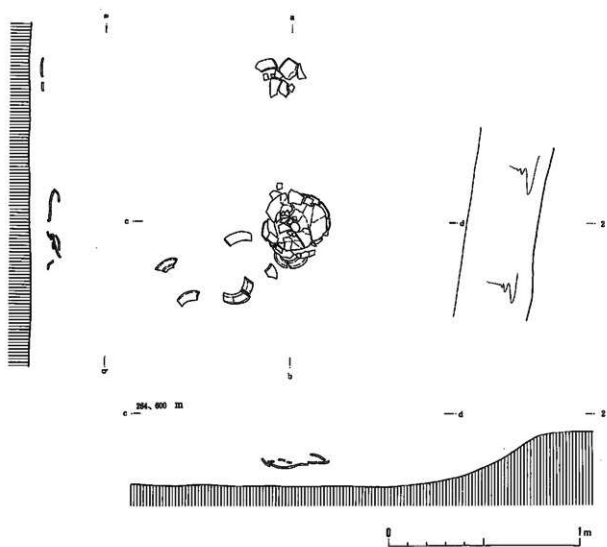
f-



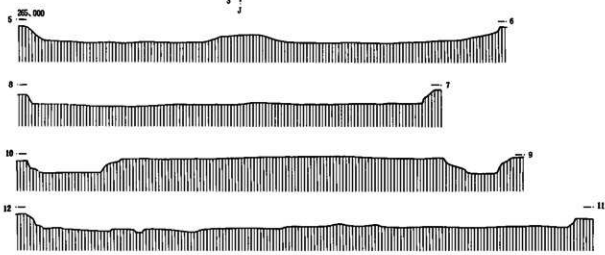
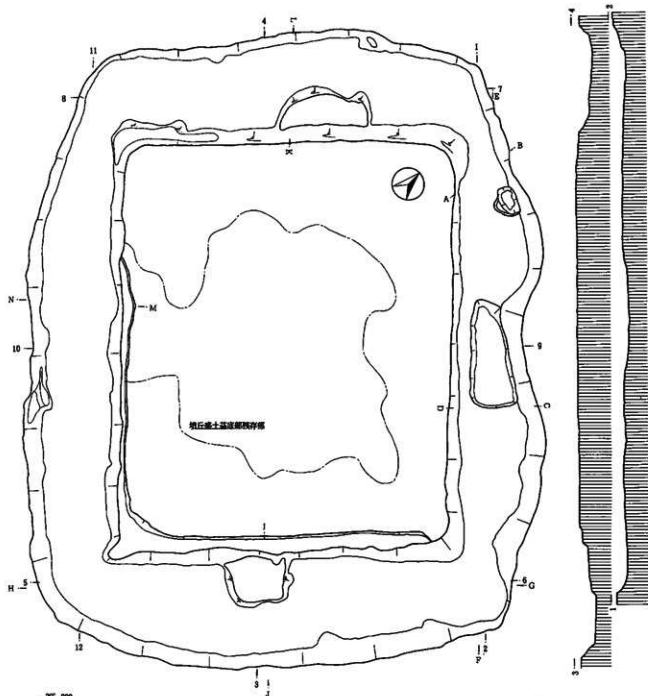
2号低墳墓



f-

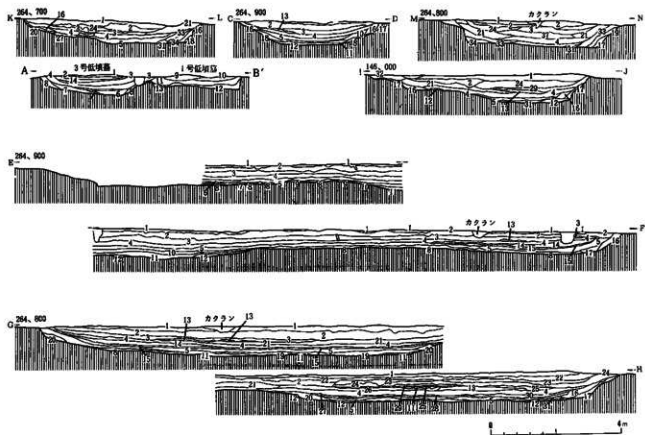


2号低墳墓遺物出土狀況



3号低墳墓

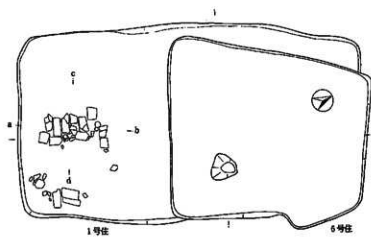




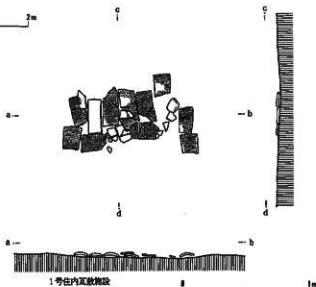
セクション C-D E-F G-H I-J K-L M-Nの土層説明

1層 暗褐色砂質土+黒色土	16層 暗灰色砂質土	31層 黒色粘質土
2 黒褐色砂質土	17 暗黄色砂質土	32 黒色砂質土+黄色砂質土
3 黒褐色砂質土	18 灰色砂質土	33 黒褐色砂質土
4 黒色砂質土	19 黒褐色砂質土+黄色粘質土	34 黒褐色砂質土+黄色砂質土
5 灰褐色粘質土+黄色粘質土	20 暗黄褐色砂質土	35 灰色粗粒砂質土
6 暗褐色砂質土	21 黒褐色砂質土	36 黒褐色粗粒砂質土
7 黒褐色粘質土	22 暗褐色粘質土	37 暗褐色粘質土
8 黄褐色砂質土	23 黒色土+黄色土	
9 黄色砂質土	24 暗褐色砂質土	
10 黒褐色粘質土	25 黄灰色粘質土	
11 暗黄褐色粘質土	26 暗褐色砂質土	
12 黄褐色粘質土	27 灰褐色粘質土	
13 黄色砂質土	28 茶褐色粘質土	
14 暗灰褐色粘り質土	29 暗褐色粘質土	
15 黒色粘質土	30 黒色粘質土	

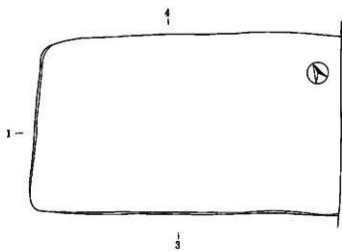
3号低墳墓セクション図



1号·6号住



1号住内瓦敷施設



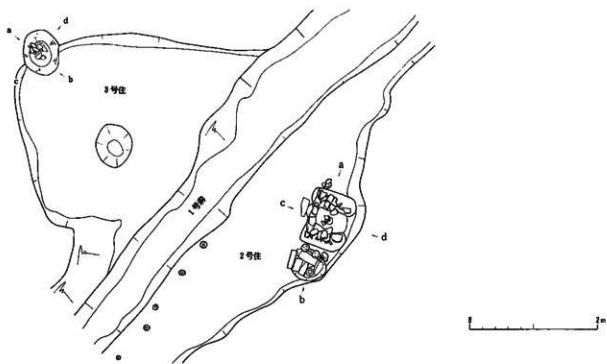
4号住



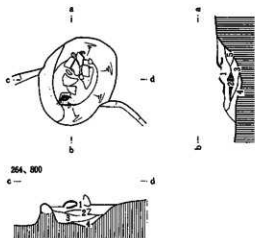
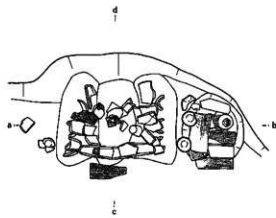
1号住

1号·4号·6号住居址



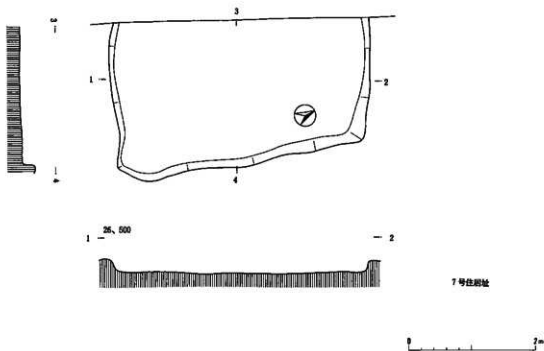
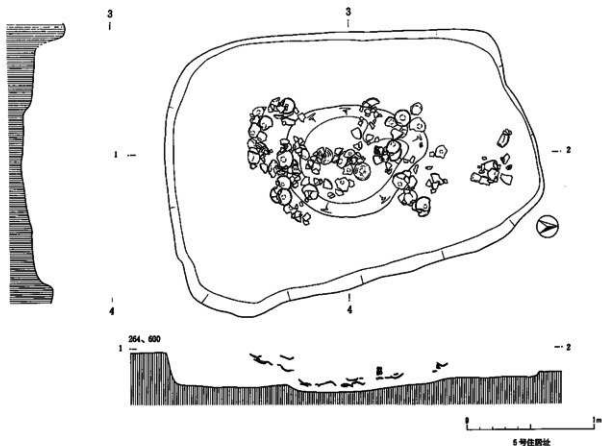


- 1層 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 明褐色土
- 4 明黄褐色土
- 5 暗黄褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 黒褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 暗黄褐色土

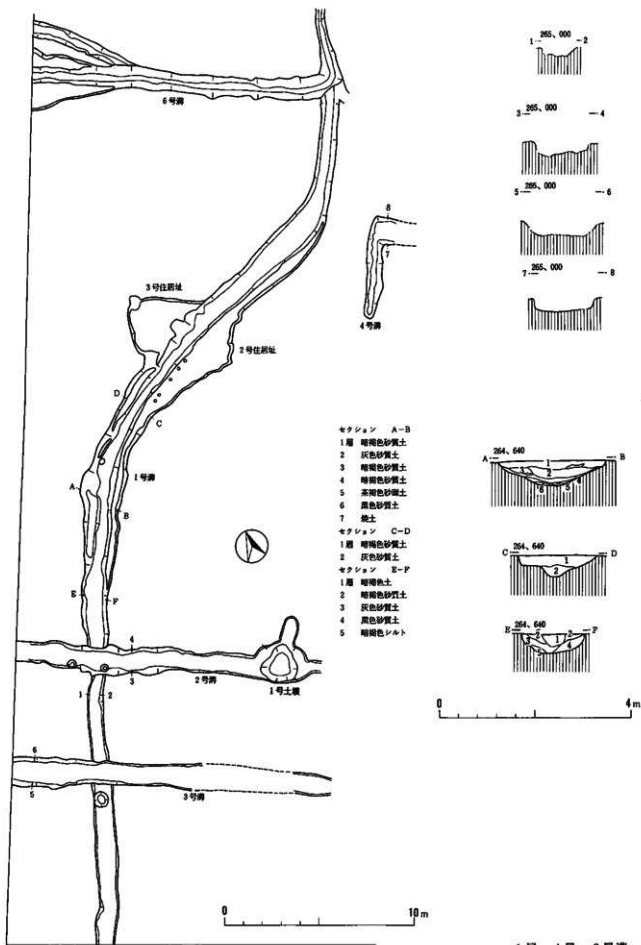


- 1層 焼土+暗灰褐色土
- 2 焼土
- 3 暗褐色土砂質上
- 4 暗褐色土、粘質上
- 5 焼土+暗褐色砂質上

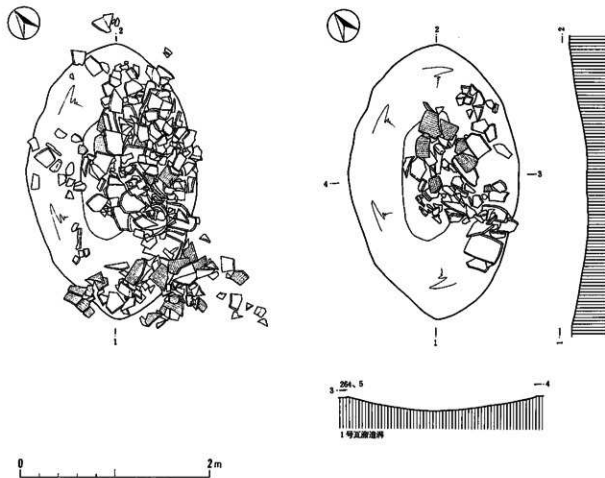
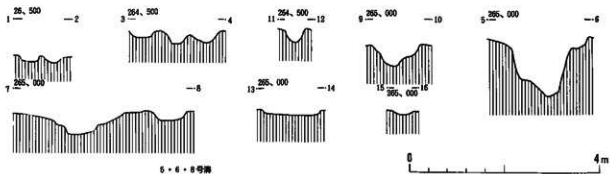
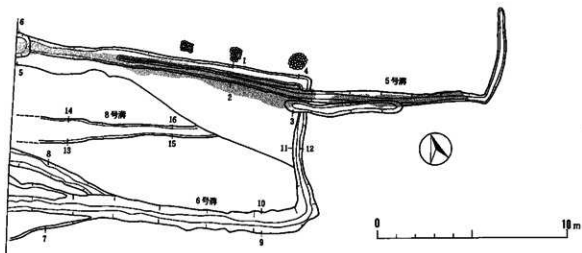
2号・3号住居およびカマド



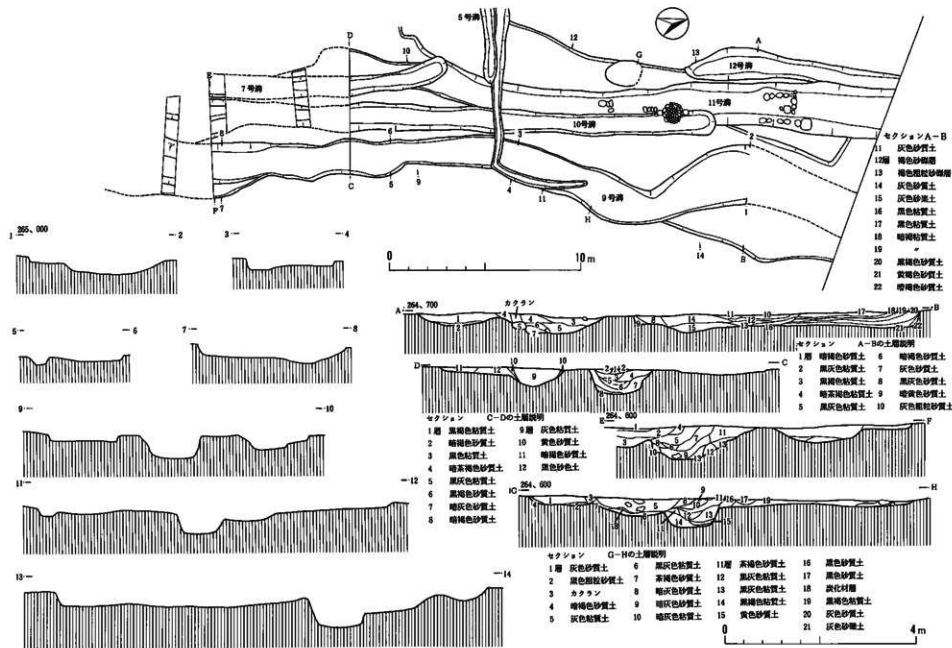
5・7号住居址



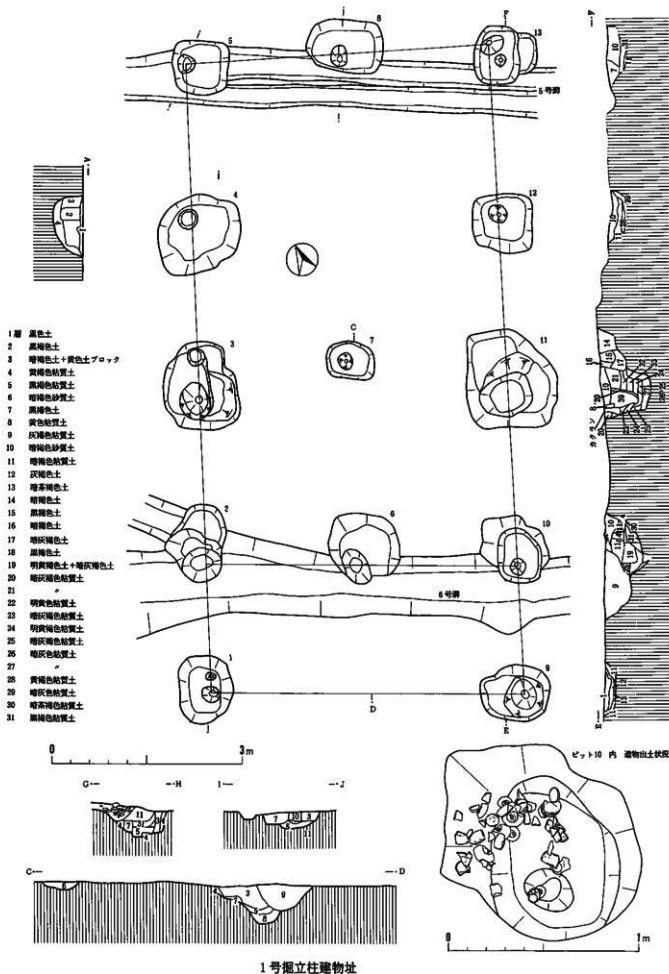
1号~4号・6号溝



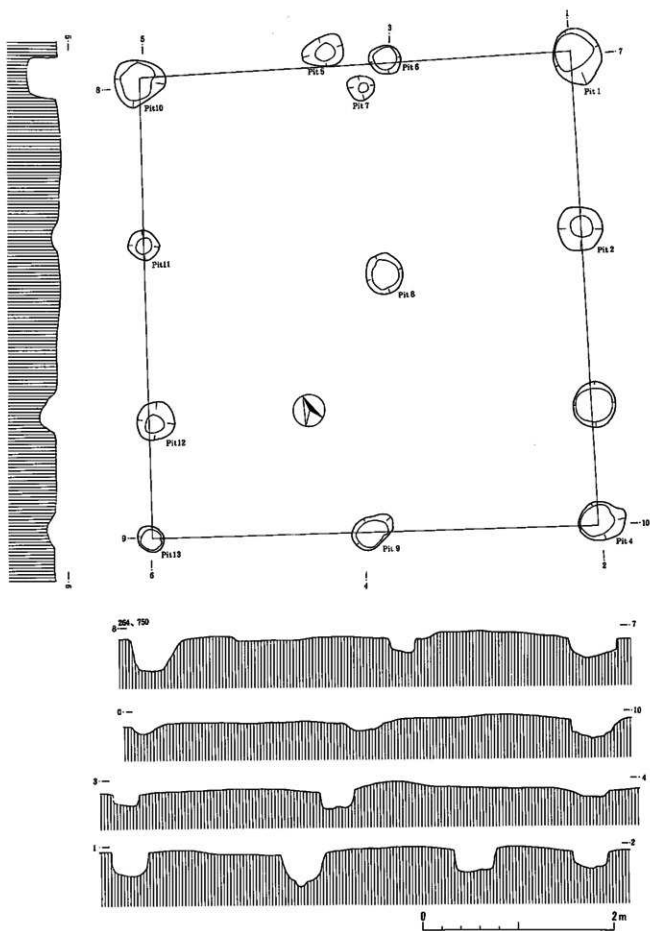
5号・6号・8号溝・1号瓦溜遺構



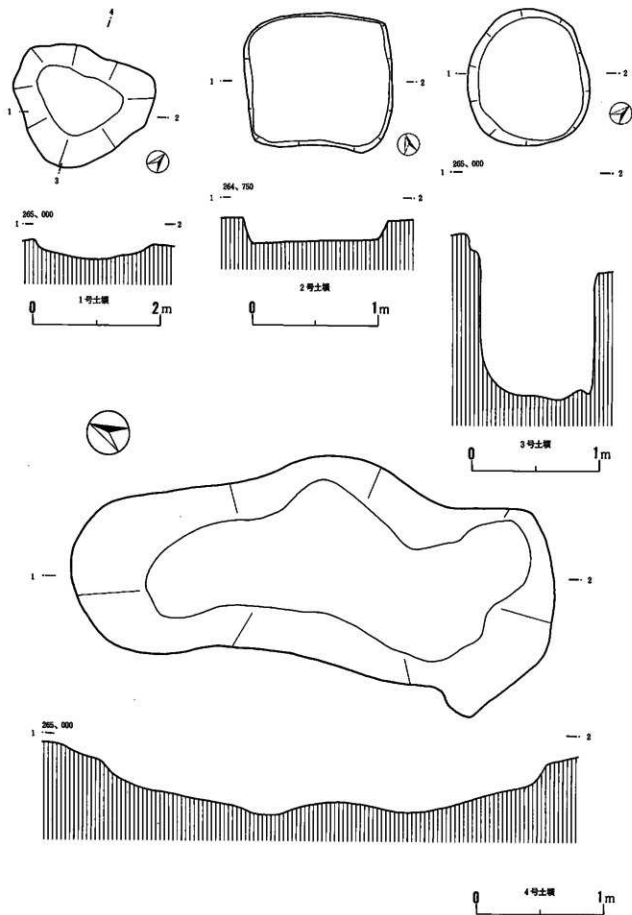
7号・9号～12号溝



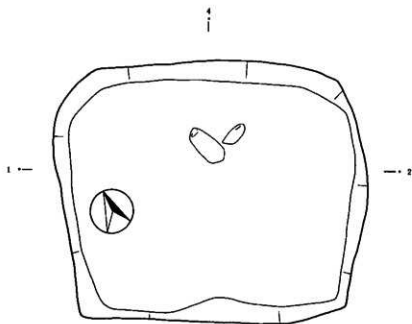




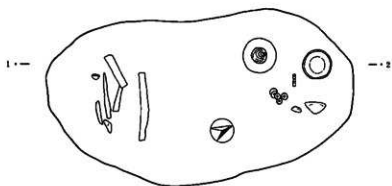
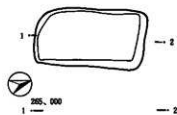
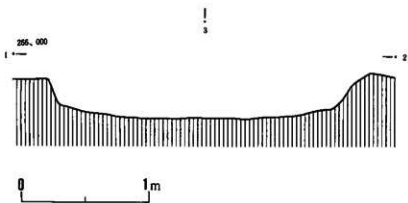
2号掘立柱建物址



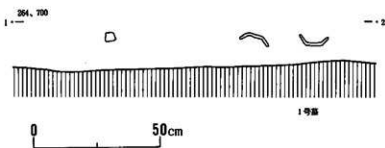
1号~4号土坑



1号墓穴



2号墓

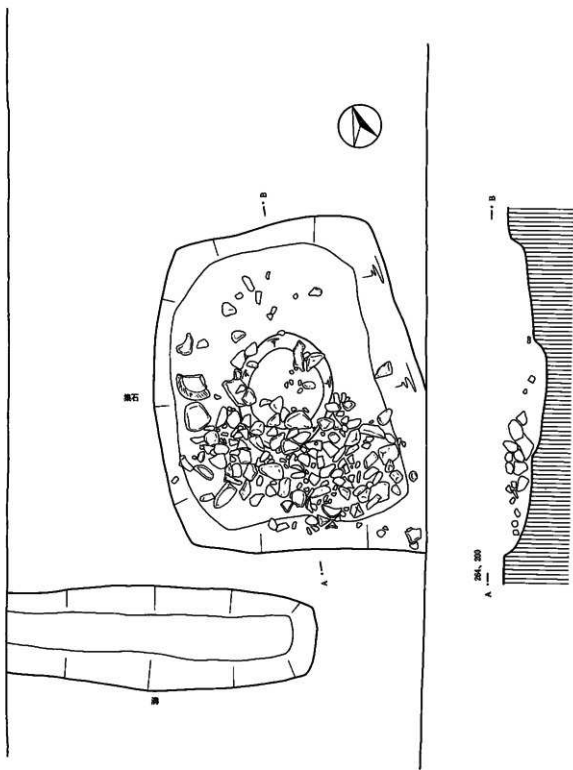


3号墓



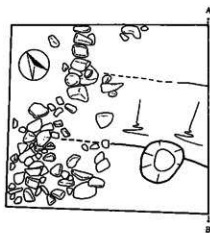
3号墓

1号墓穴·1号~3号墓

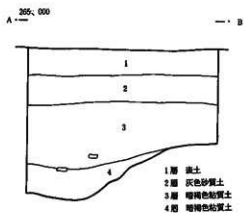


C地区集石遺構及び溝状遺構

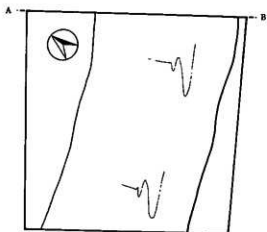
0 1m



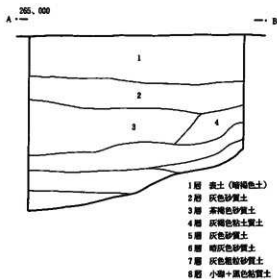
第1試掘坑



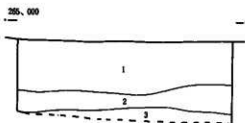
- 1層 黄土
- 2層 灰色砂質土
- 3層 暗褐色粘質土
- 4層 暗褐色粘質土



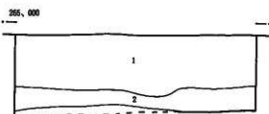
第4試掘坑



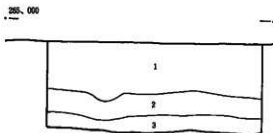
- 1層 黄土 (暗褐色土)
- 2層 灰色砂質土
- 3層 赤褐色粘質土
- 4層 灰色粘土質土
- 5層 灰色砂質土
- 6層 暗灰色砂質土
- 7層 灰色無粘砂質土
- 8層 小礫+黒色粘質土



第3試掘坑 セクション

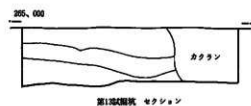


第5試掘坑 セクション



第10試掘坑 セクション

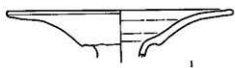
- 第3 5 10 試掘坑土層説明
- 1層 黄土
  - 2層 灰色砂質土
  - 3層 黒褐色粘質土



第12試掘坑 セクション



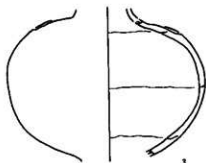
C地区試掘坑及びセクション図



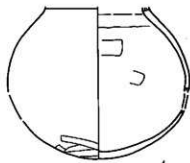
1



2



3



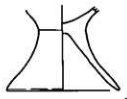
4



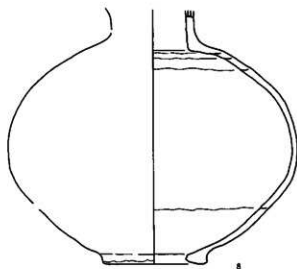
5



6



7



8



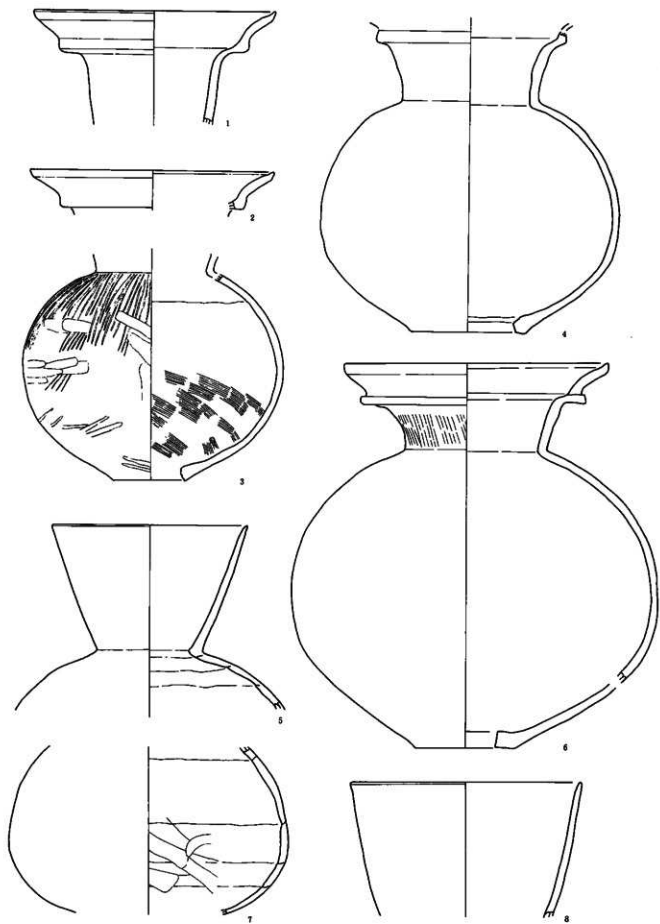
9



10

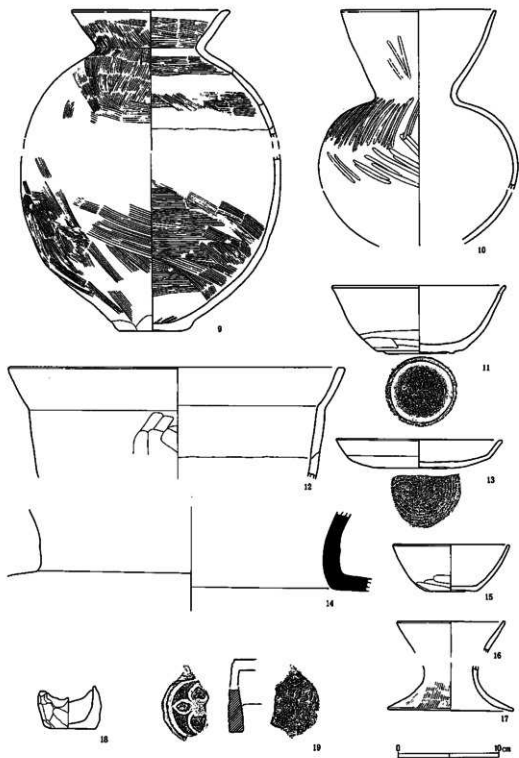


1号低填墓出土土器



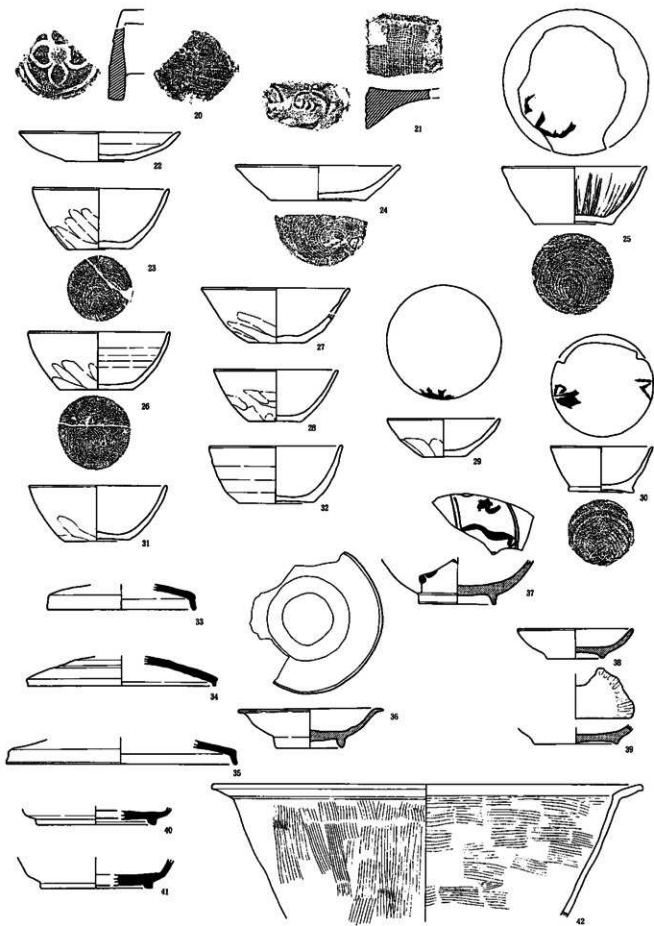
0 10 cm

2号低墳墓出土土器(1)



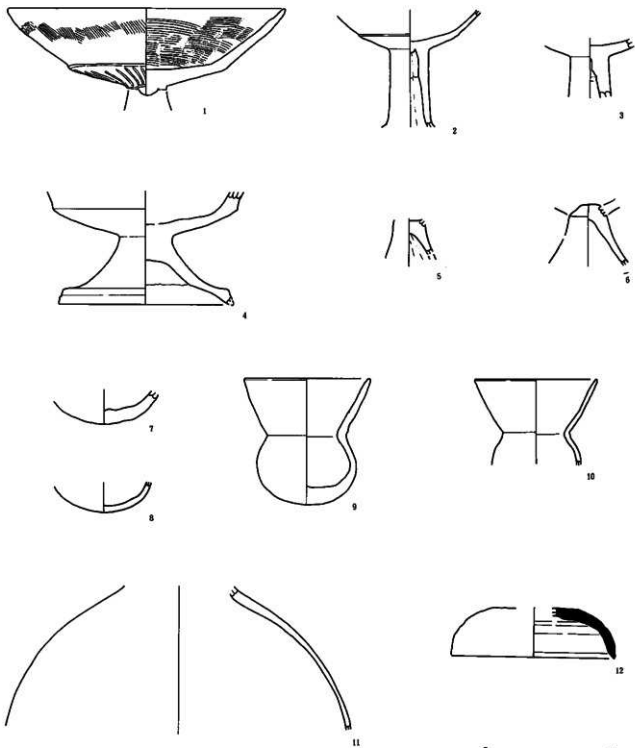
2号低墳墓出土土器(2)



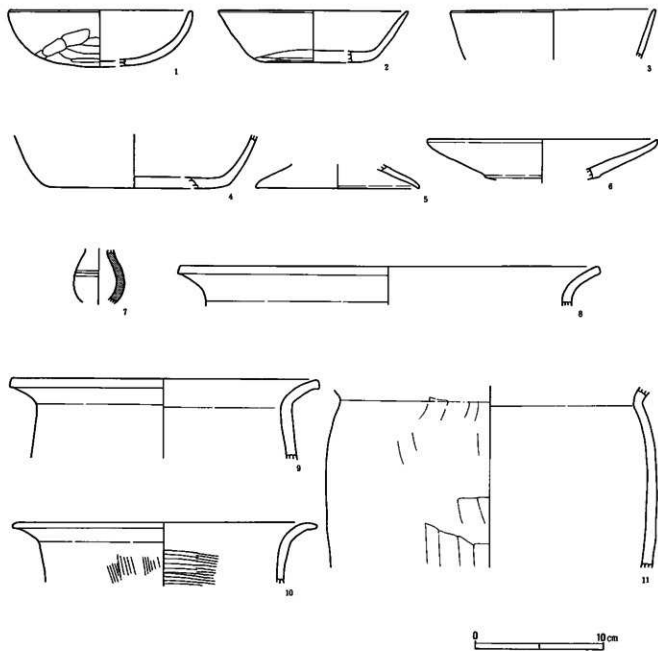


2号低墳墓出土土器(3)

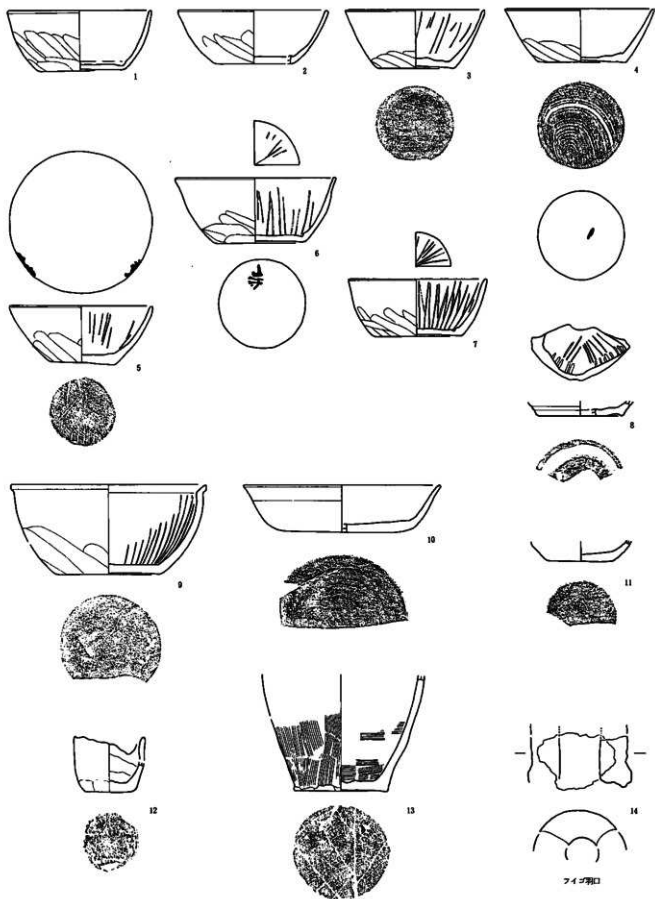
0 10cm



3号低墳墓出土土器

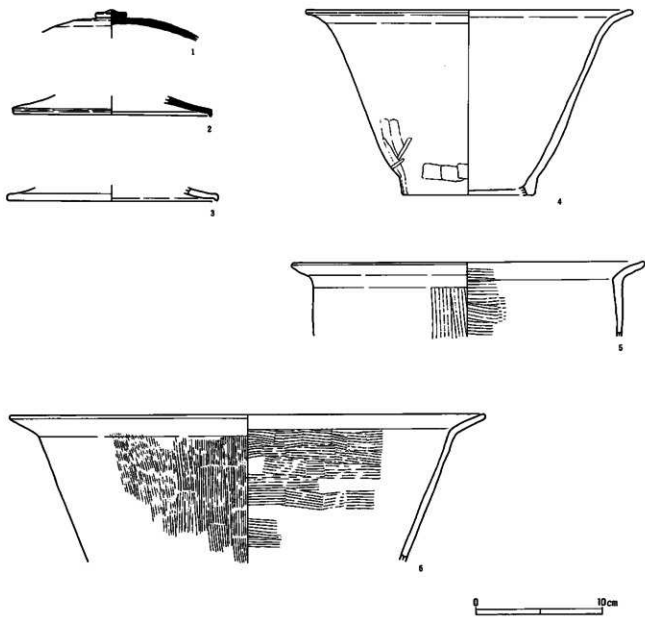


1号住居址出土土器

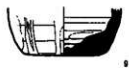
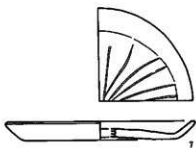
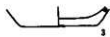


2号住居址出土遺物

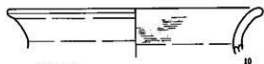
0 10 cm



3号住居址出土土器



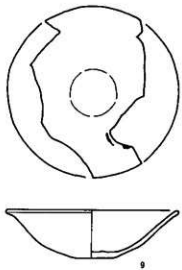
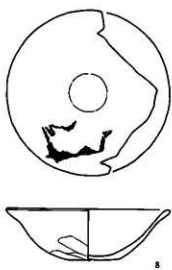
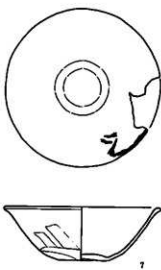
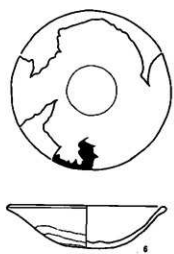
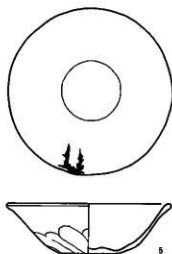
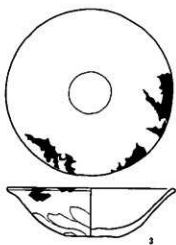
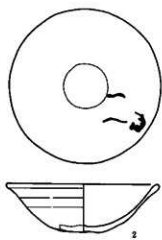
4号住居址



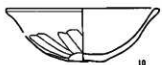
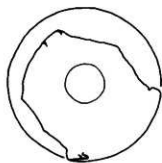
6号住居址

11

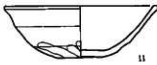




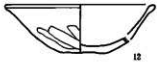
5号住居址出土土器(1)



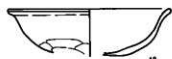
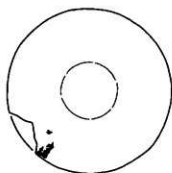
10



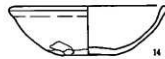
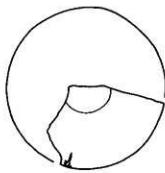
11



12



13



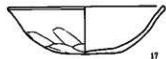
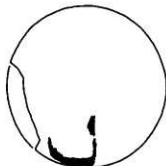
14



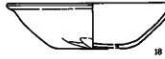
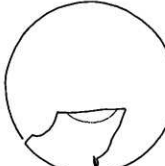
15



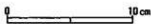
16



17

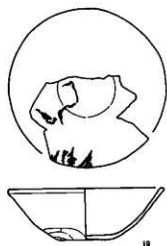


18

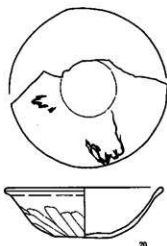


5号住居址出土土器(2)





19



20



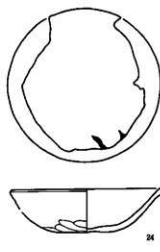
21



22



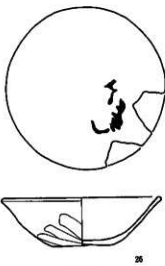
23



24



25



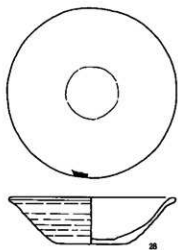
26



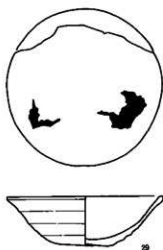
27



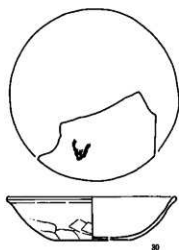
5号住居址出土土器(3)



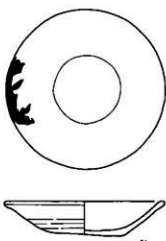
28



29



30



31



32



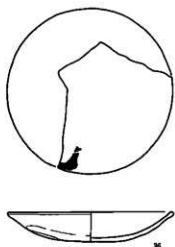
33



34



35



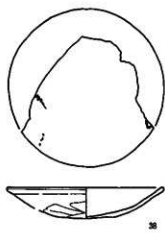
36

5号住居址出土土器(4)

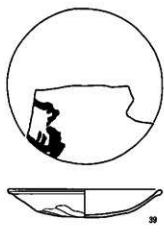




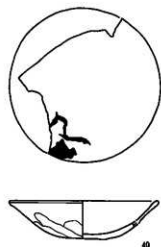
37



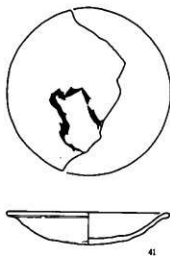
38



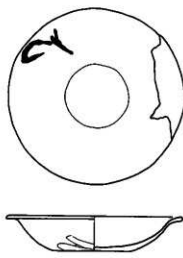
39



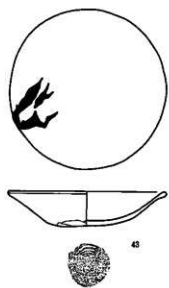
40



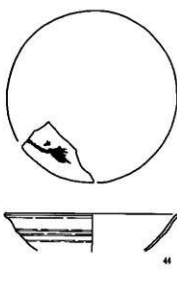
41



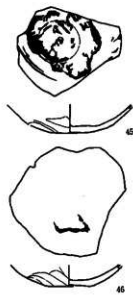
42



45



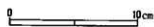
46



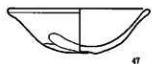
47



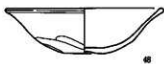
48



5号住居址出土土器(5)



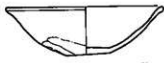
47



48



49



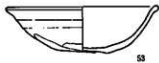
50



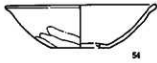
51



52



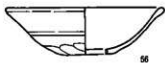
53



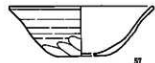
54



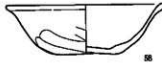
55



56



57



58



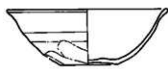
59



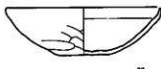
60



61



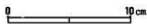
62



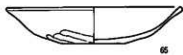
63



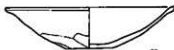
64



5号住居址出土土器(6)



65



66



67



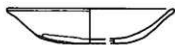
68



69



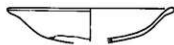
70



71



72



73



74



75



76



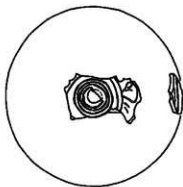
77



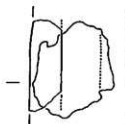
78



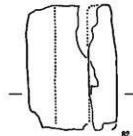
79



80



81



82

フイゴ形口

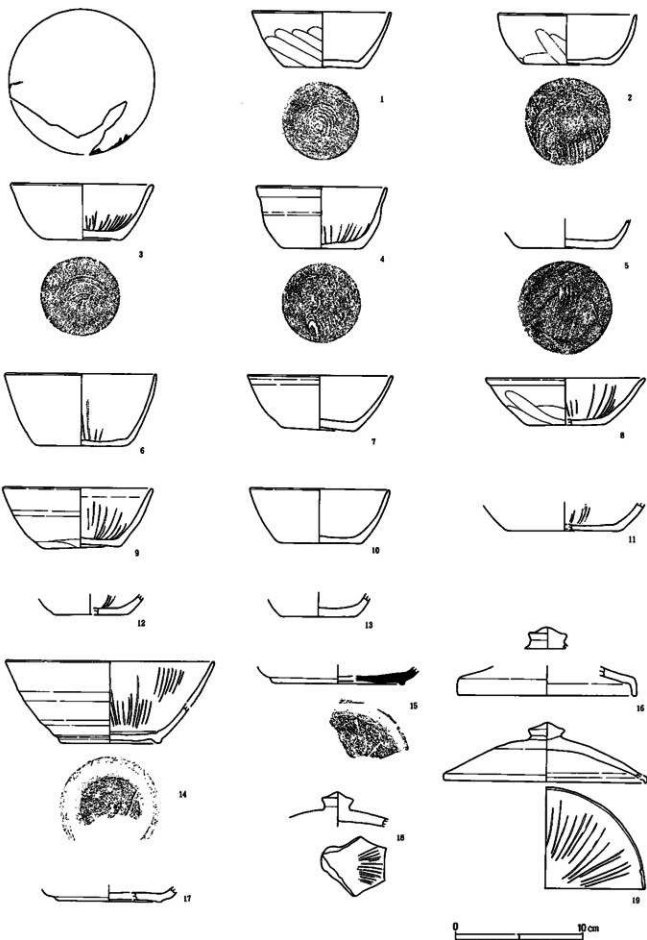


83

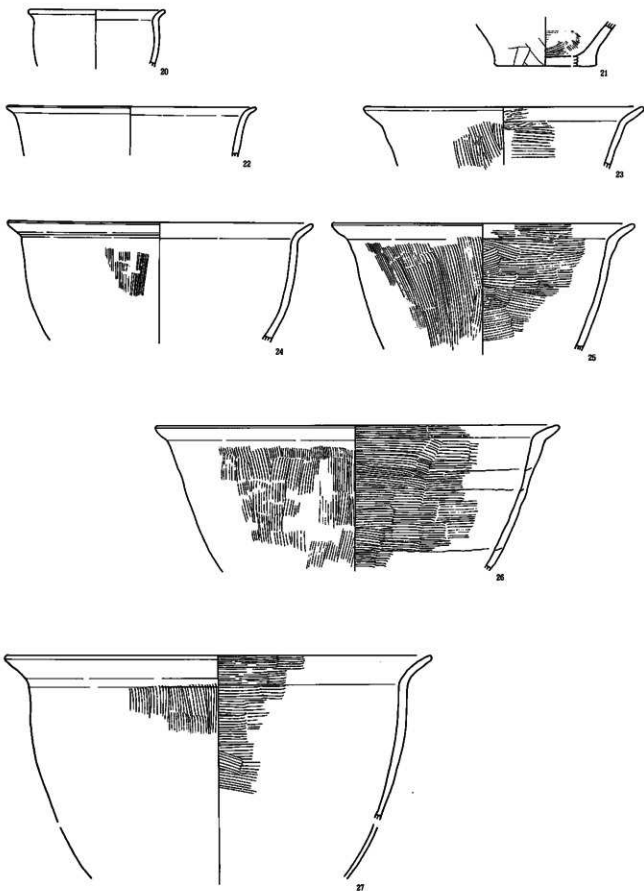
琥珀製小玉



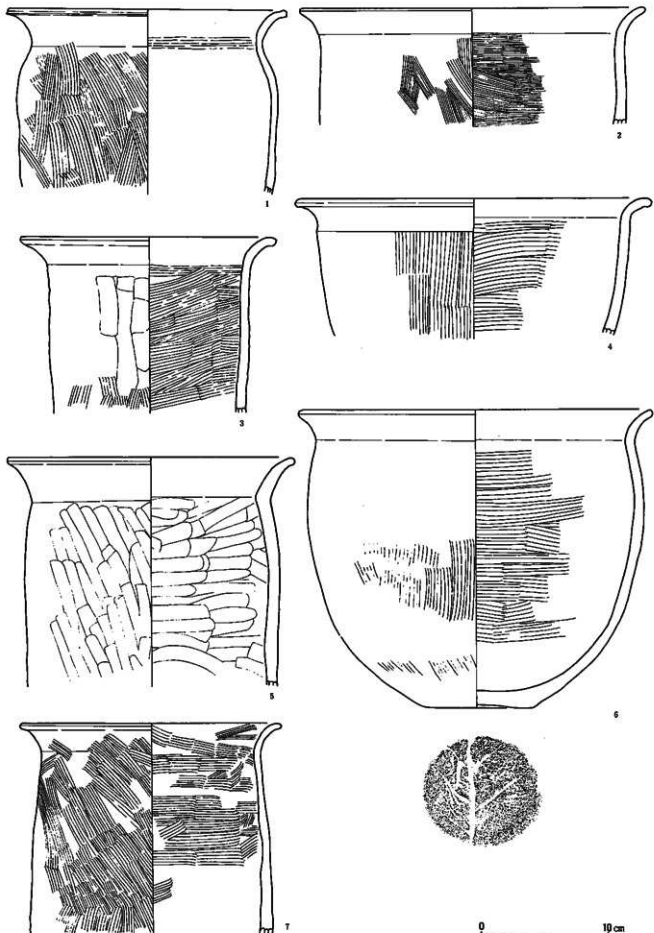
5号住居址出土土器(7)



7号住居址出土土器(1)

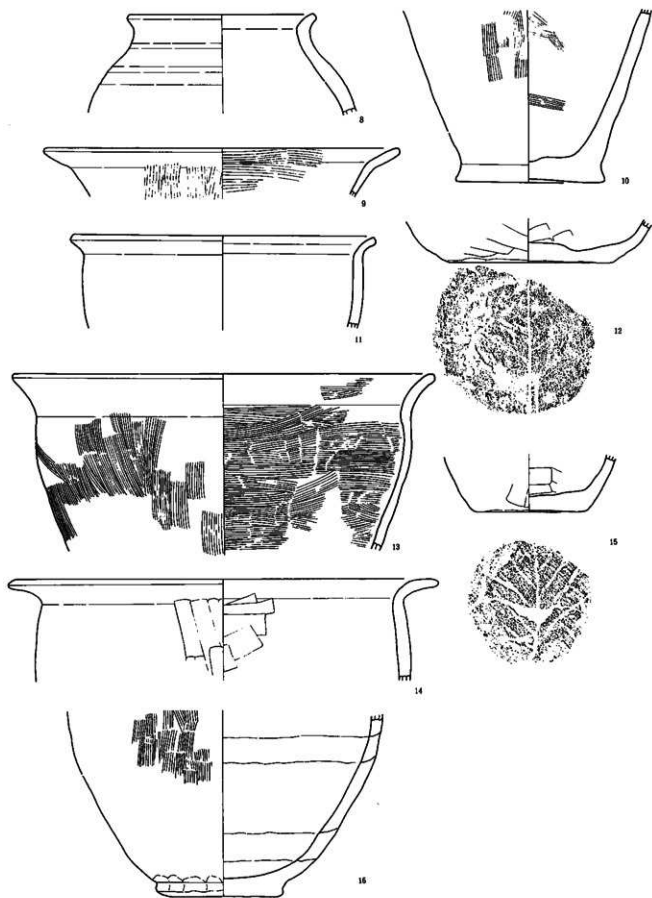


7号住居址出土土器 (2)

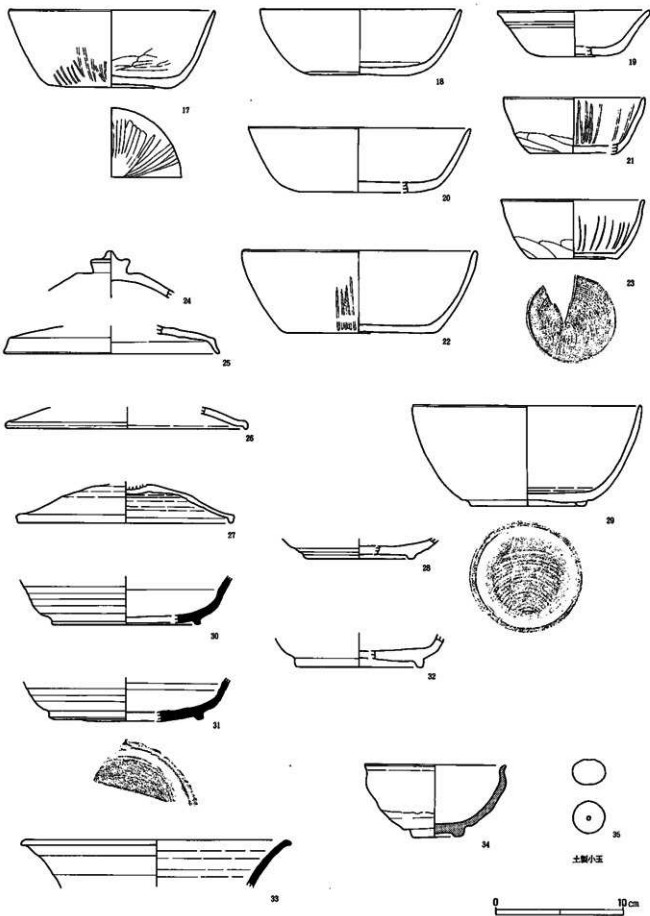


1号溝出土土器(1)

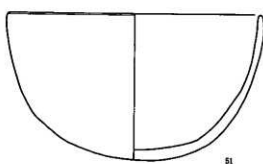
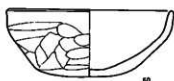
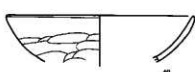
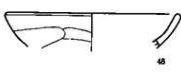
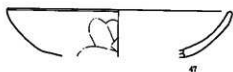
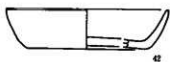
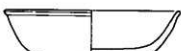
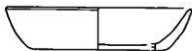
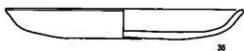




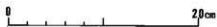
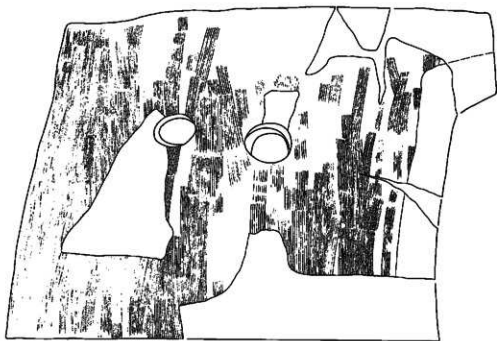
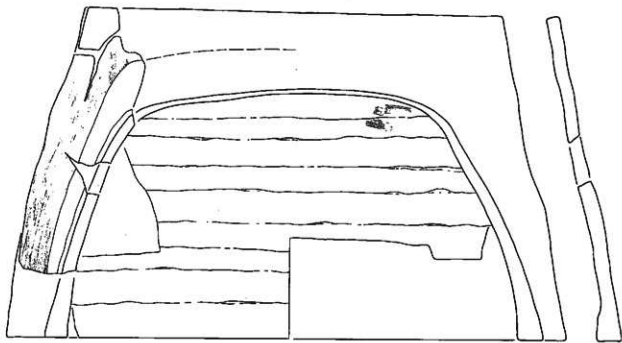
1号溝出土土器(2)



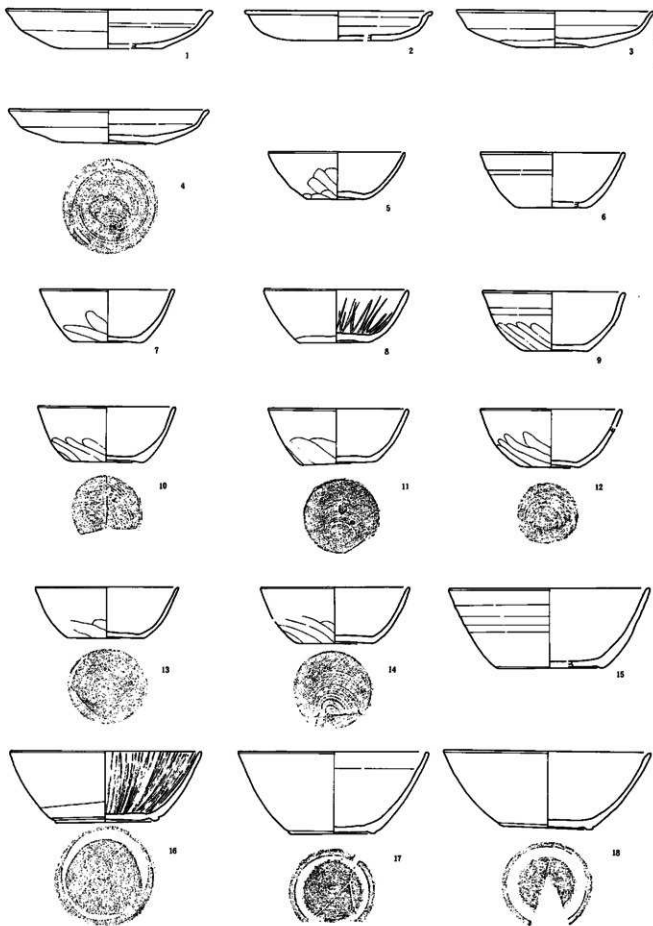
1号溝出土土器(3)



1号溝出土土器(4)

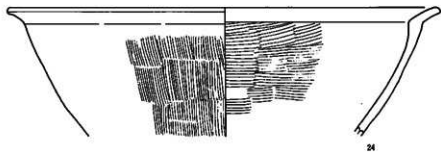
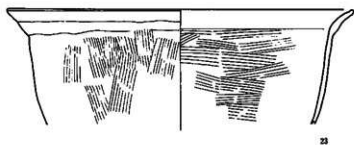
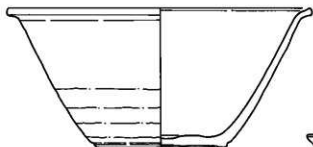
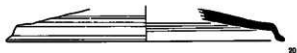
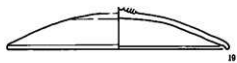


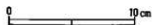
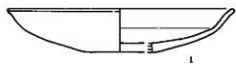
1号溝出土匱カマド



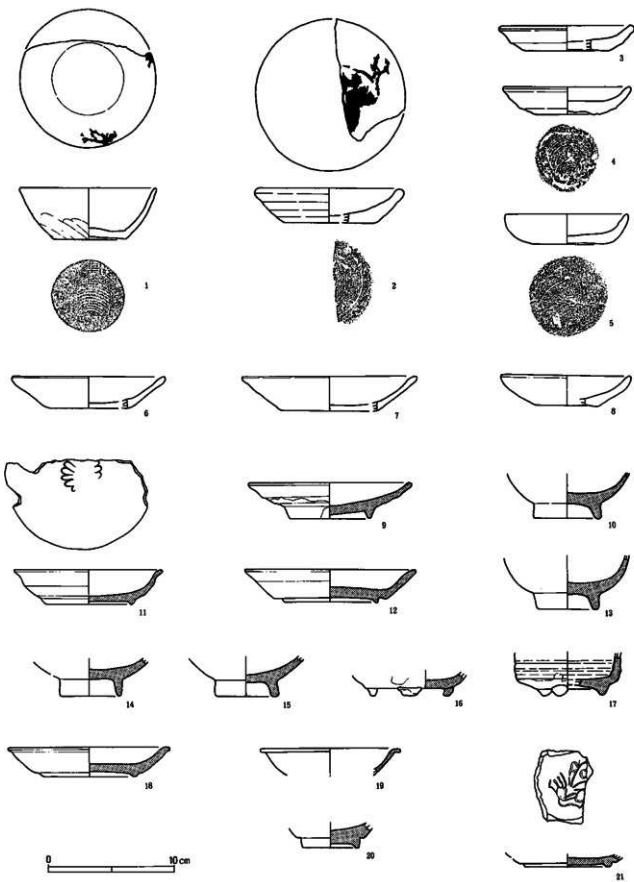
2号溝出土土器 (I)

0 10 cm



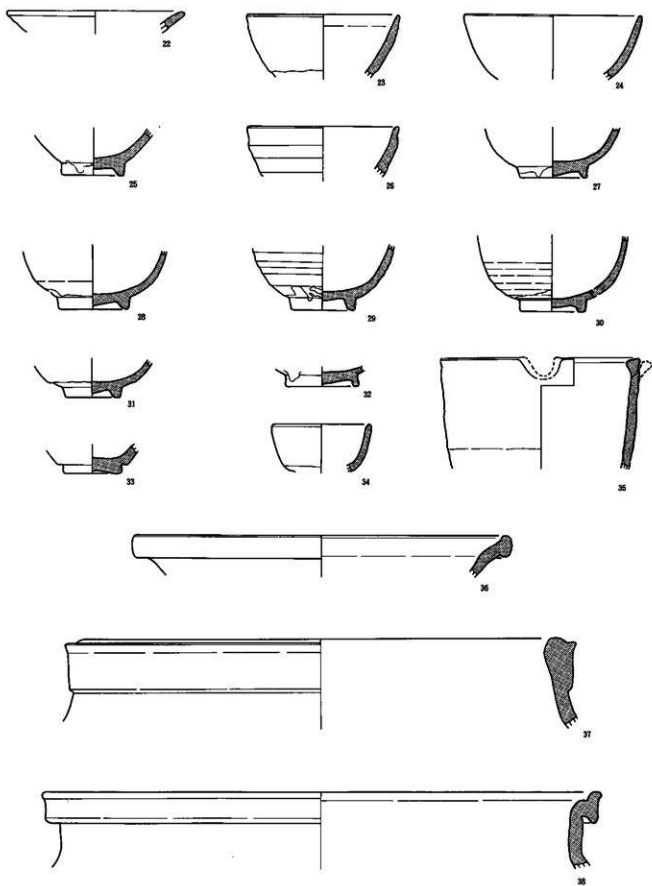


4号薄出土土器



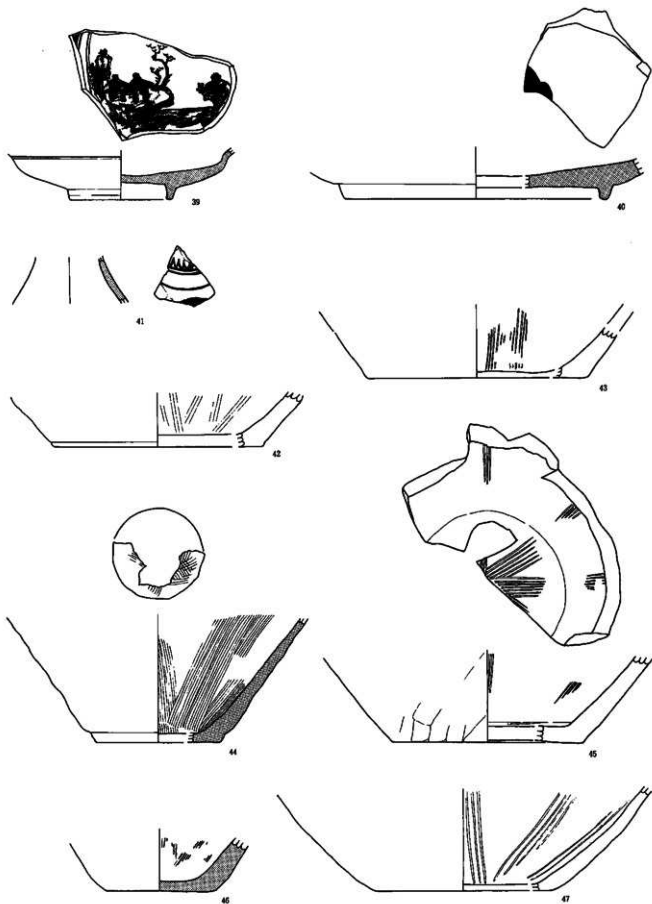
5号溝出土土器 (1)



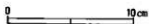
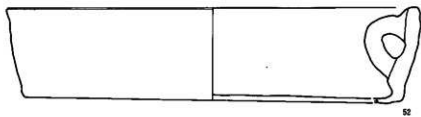
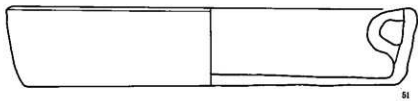
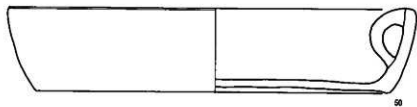
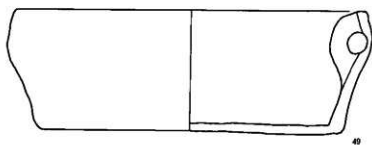
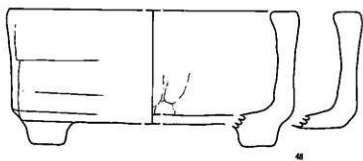


5号溝出土土器(2)

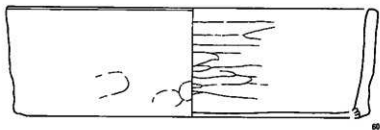
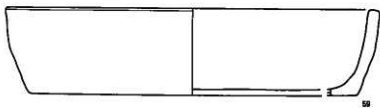
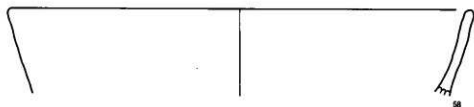
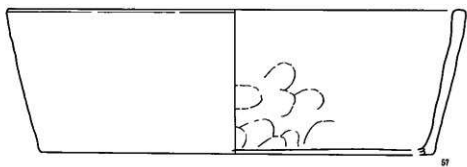
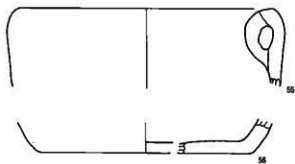
0 10 cm



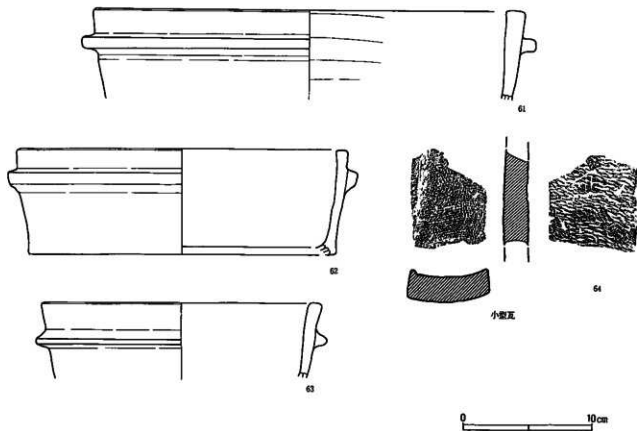
5号沟出土土器(3)



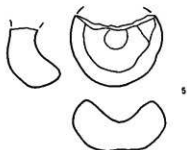
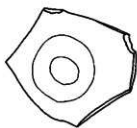
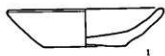
5号溝出土土器(4)



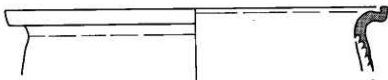
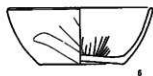
5号溝出土土器(5)



5号溝出土土器 (6)



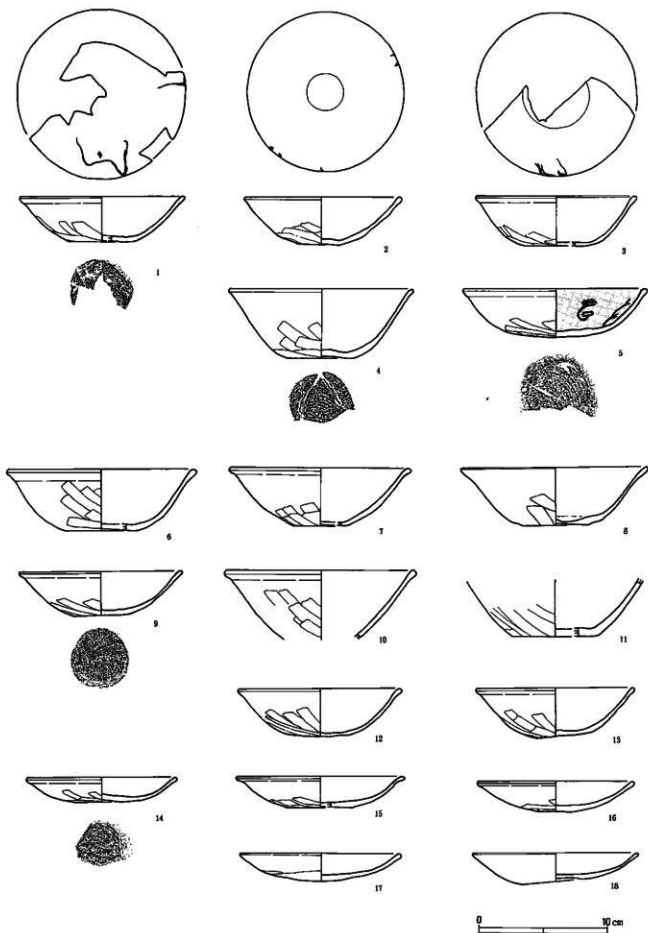
6号溝



10号溝



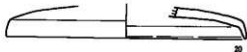
6号溝・10号溝出土遺物



9号溝出土土器 (1)



19



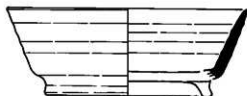
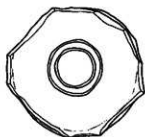
20



21



22



25



24

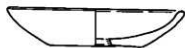


26



26

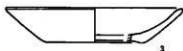
9号清出土土器 (2)



1



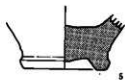
2



3



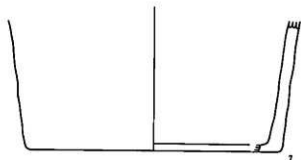
4



5



6



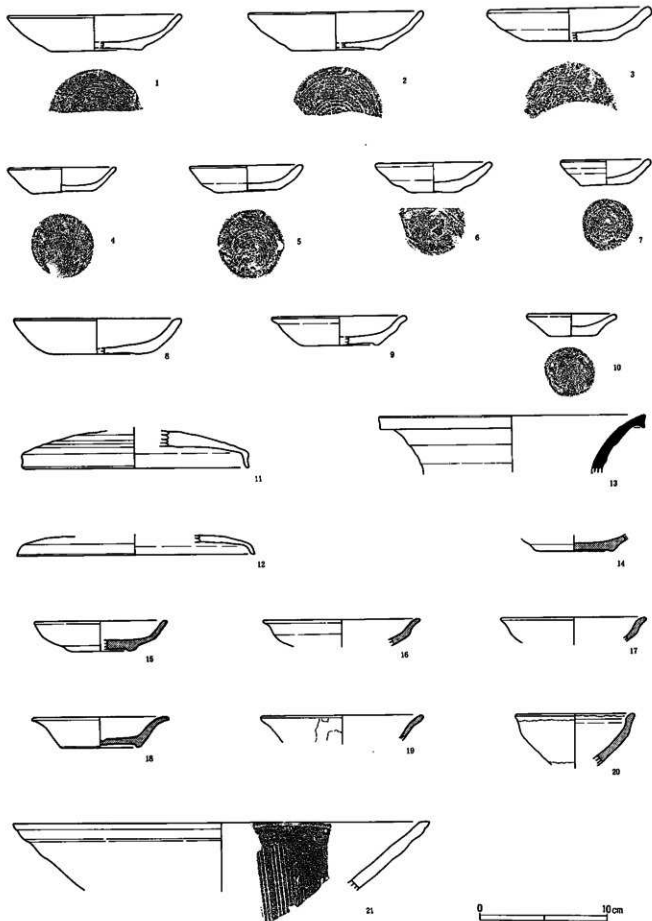
7

12号清

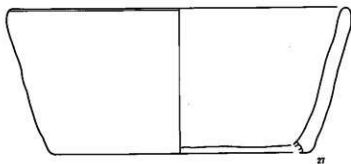
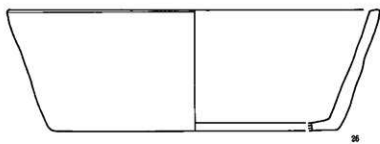
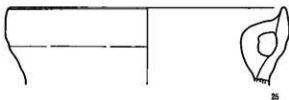
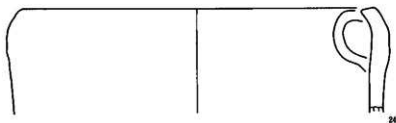
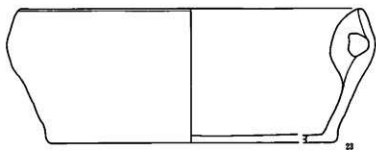
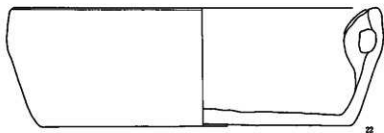


9号清・12号清出土土器

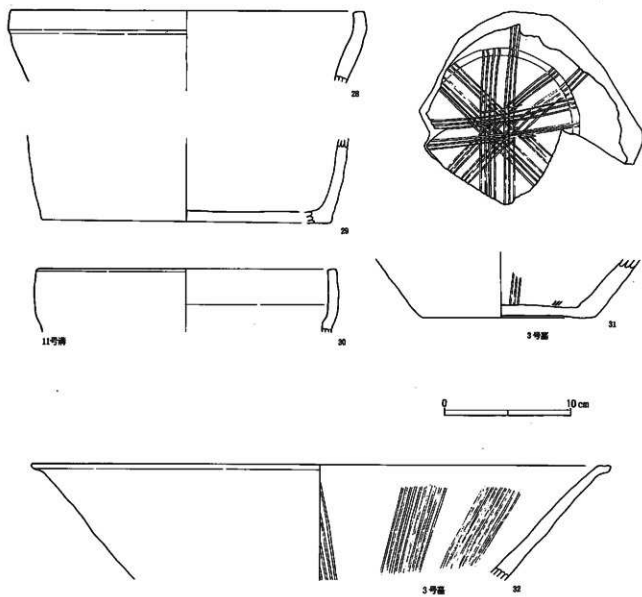




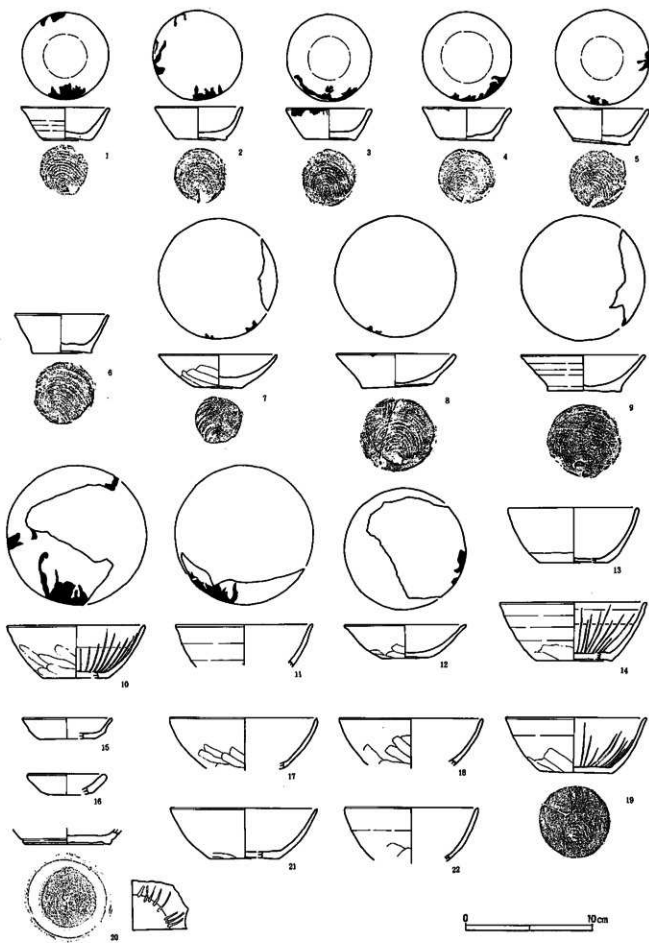
11号溝出土土器 (1)



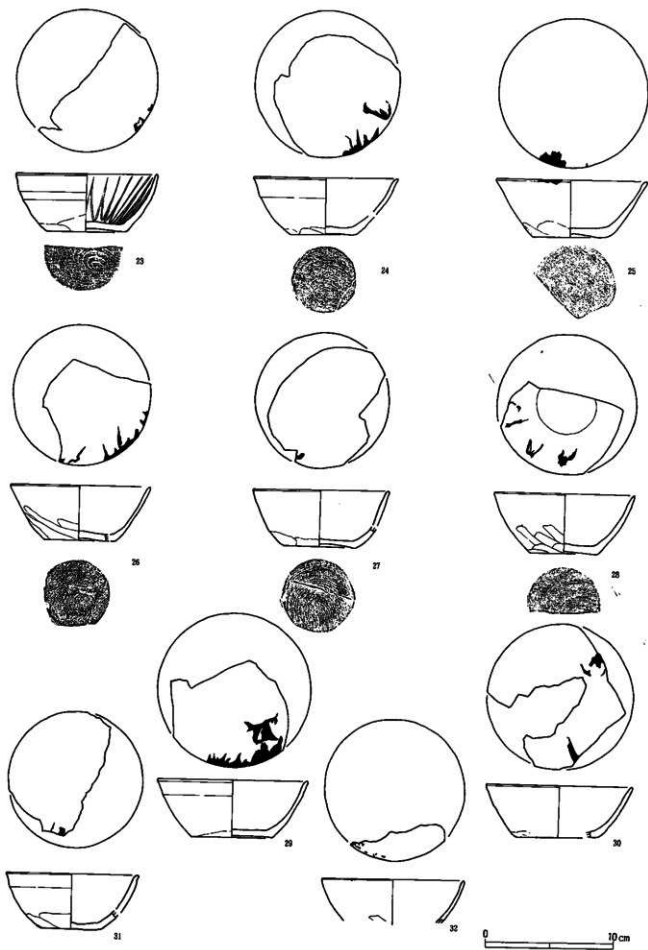
11号清出土土器 (2)



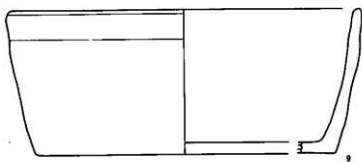
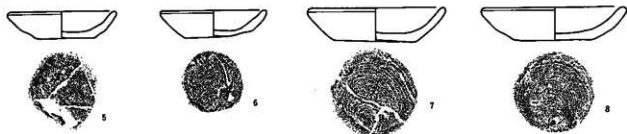
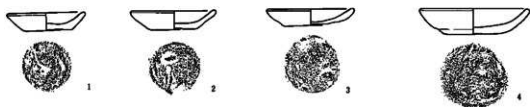
11号沟·3号墓出土土器(3)



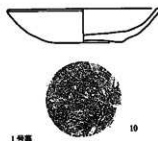
1号据立柱遗址出土土器(1)



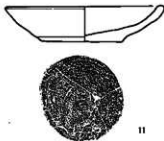
1号掘立柱建物址 出土土器(2)



1号窑穴



1号墓

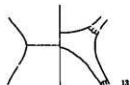


11



4号土坑

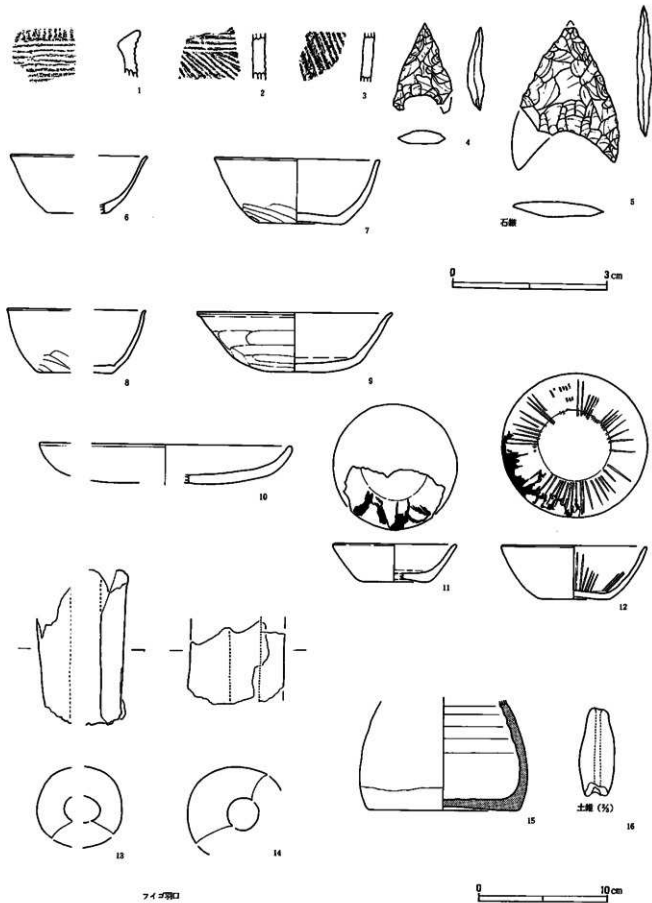
12



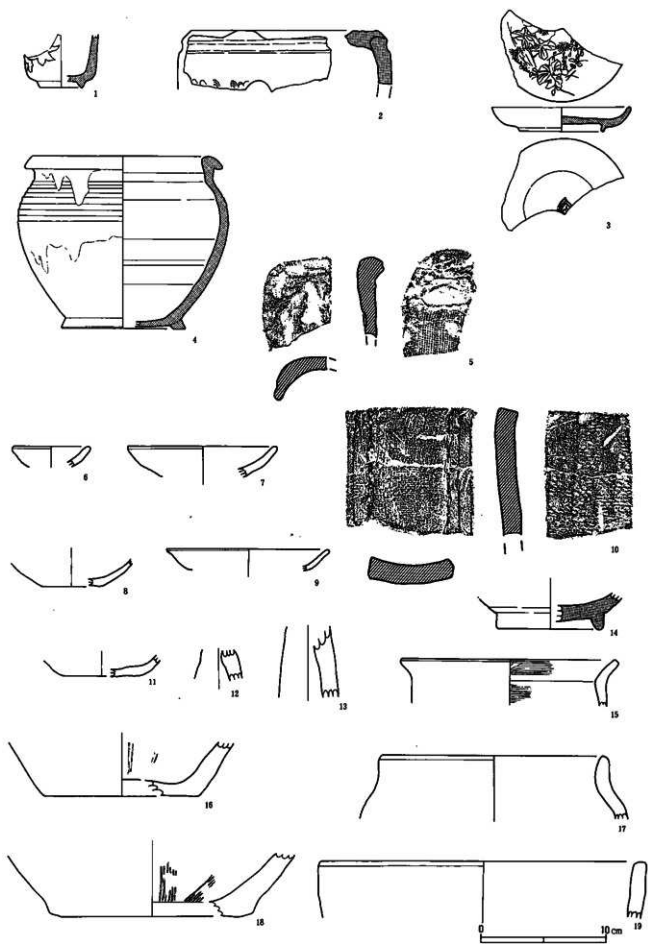
13

1号窑穴·1号墓·4号土坑出土土器



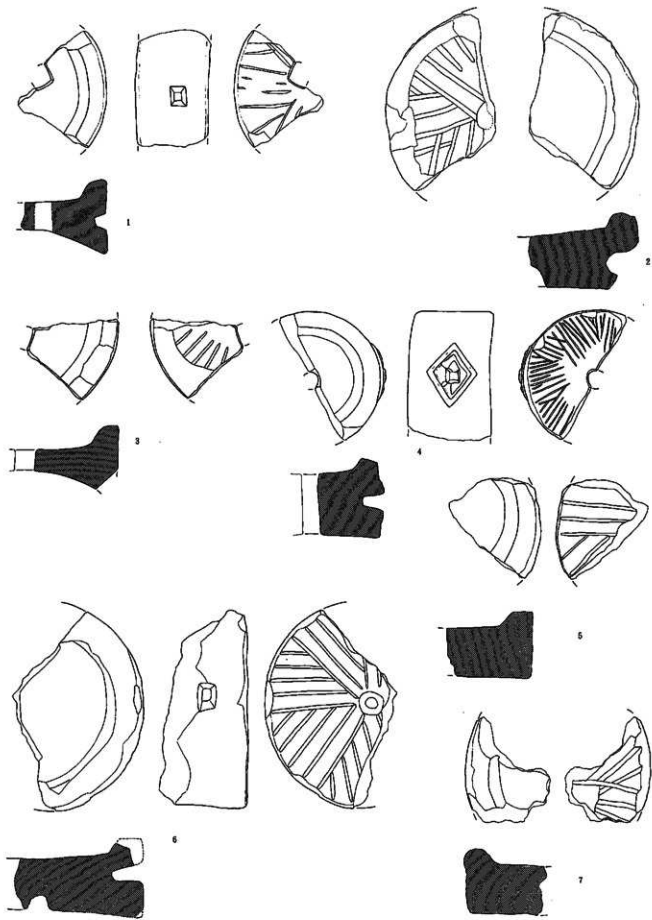


A地区遺構外出土遺物



C地区出土遗物





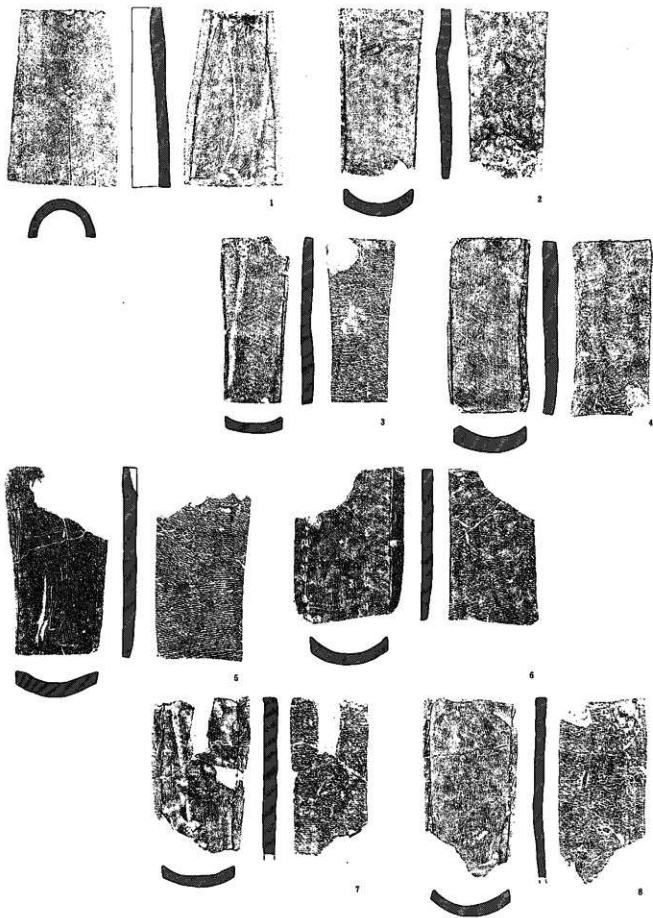
C地区1号集石内出土石臼



1~8 1号溝  
9 2号住跡址

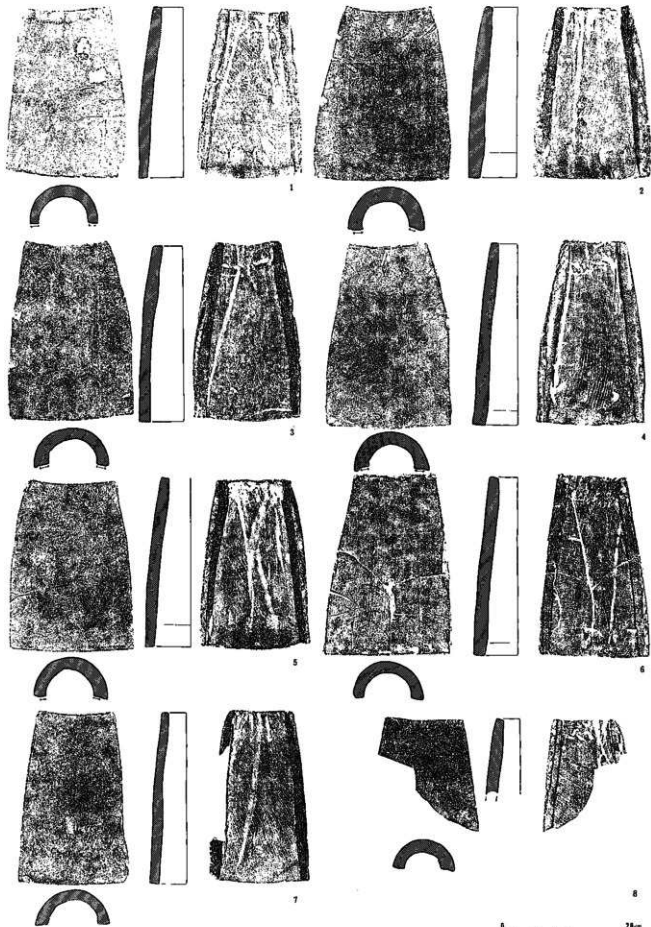
小型瓦

0 20cm

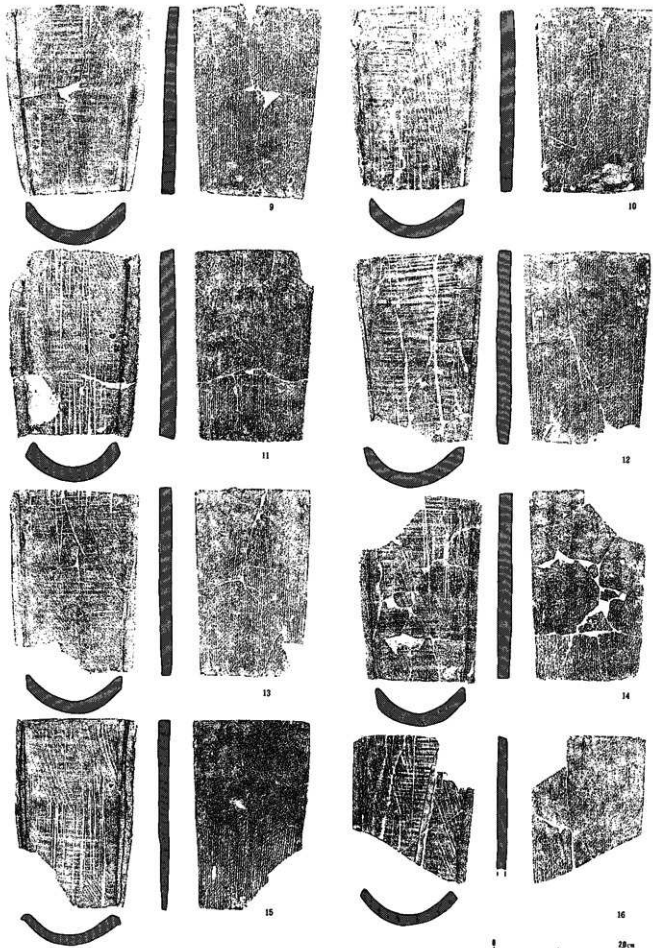


1号住居址出土瓦 (1)

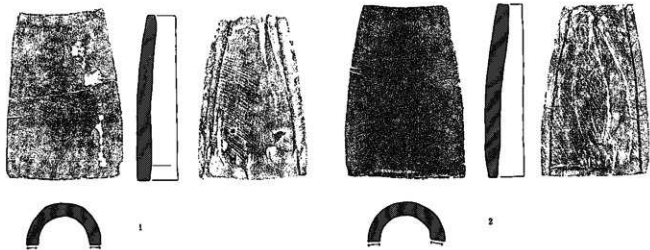
0 20cm



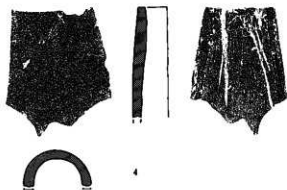
2号住居址出土瓦(1)



2号住居址出土瓦(2)



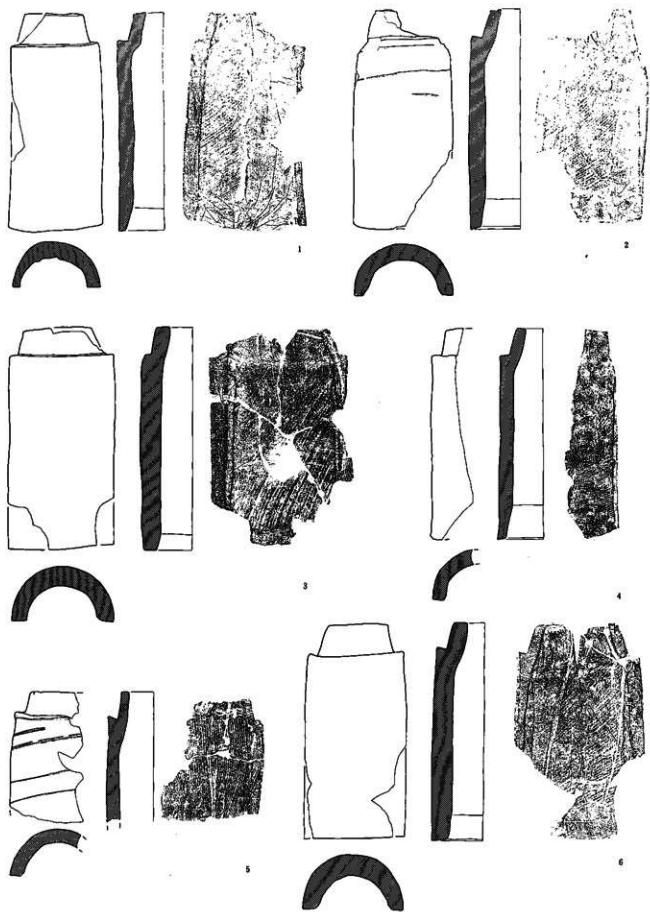
7号住居址出土瓦



3号住居址出土瓦

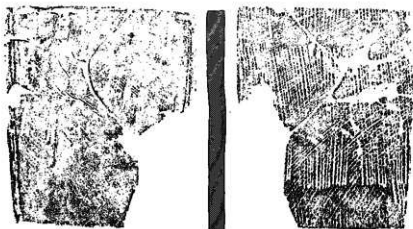


3号住居址·7号住居址出土瓦

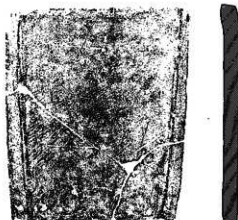


瓦溜遺構出土瓦 (1)

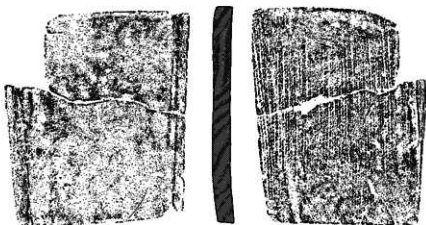
0 20cm



7



8



9



瓦溜遺構出土瓦 (2)







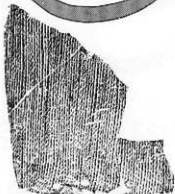
瓦溜遺構出土瓦 (3)



13



14



15



16

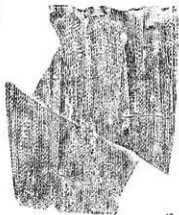
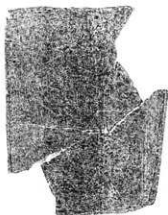


瓦溜遺構出土瓦 (4)





17



18



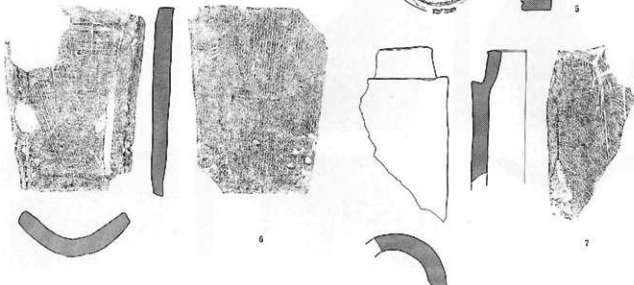
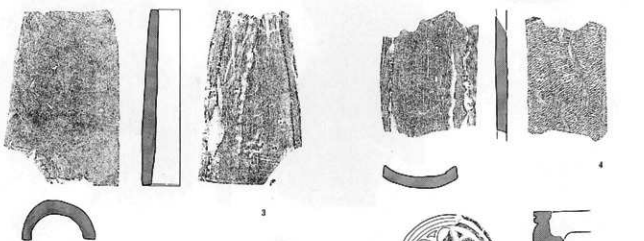
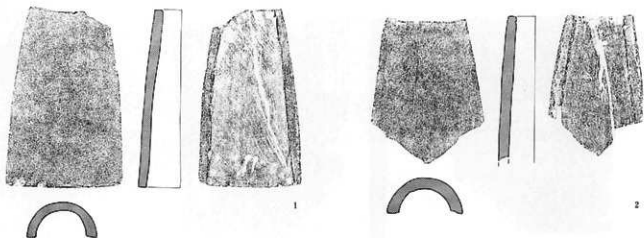
19



20



瓦溜遺構出土瓦 (5)



1・2-2号溝 3-4号溝 4・6-2号底輪窟  
5-A-3グリット 7-次土

0 20.00

出土瓦



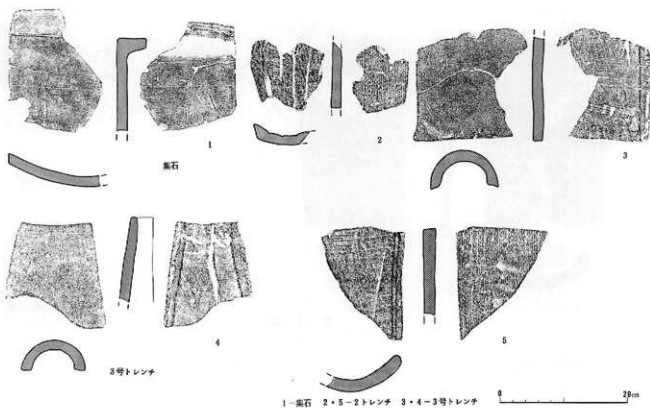
2



1

出土瓦





C地区出土瓦

1 嘉祐通寶



2 元豐通寶



3 元祐通寶



4 開元通寶



5 咸平元寶



6 元祐通寶



7 元豐通寶



8 治平元寶



9 皇宋通寶



10 洪武通寶



11 元祐通寶



12 洪武通寶



13 聖道元寶



14 〇〇〇寶



15 元豐通寶



16 開元通寶



17 永樂通寶



18 元祐通寶



1~6 1号墓  
7~9 2号墓  
10~12 1号溝  
13~15 2号沟  
16~18 "

中世出土錢



桜井堀遺跡

遺跡周辺航空写真





1. 1号·3号低筑基  
5号·9~12号溝



2. 1号·3号低筑基



3. 1号低筑基主体部  
4. 1号低筑基  
查出土状况



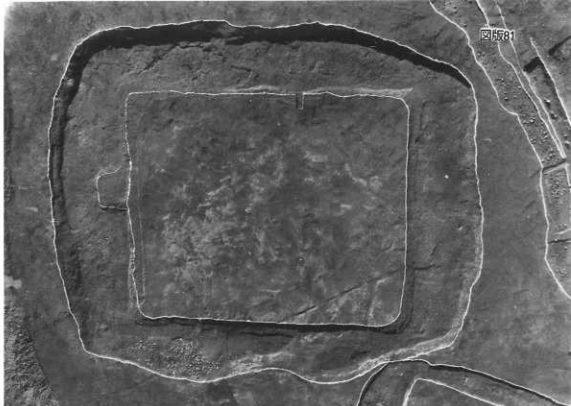
1. 2号低墳墓  
北東コーナー



2. 2号低墳墓周溝内  
遺物出土状況



3. 3号低墳墓東周溝  
内遺出し施設



1. 3号低坟墓

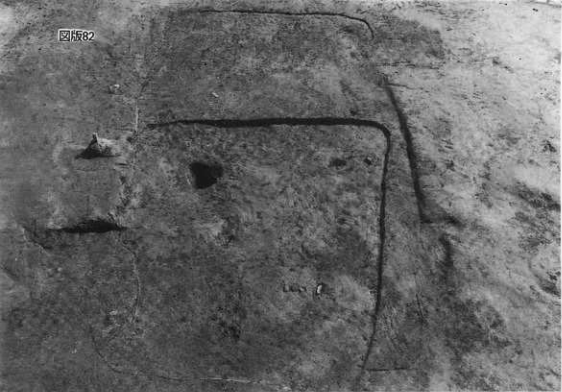


2. 3号低坟墓北周沟  
堆積狀況



3. 3号低坟墓周沟内  
遺物出土狀況





1. 1号·6号住居址



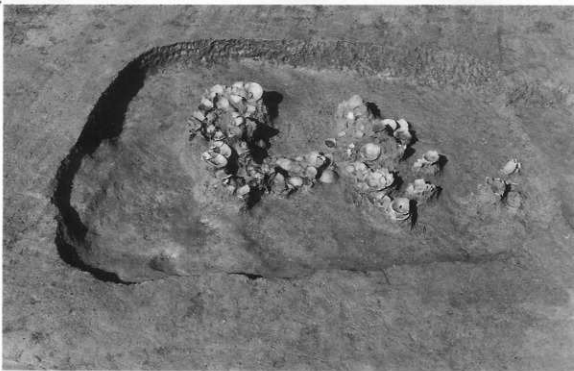
2. 4号住居址



3. 2号·3号住居址



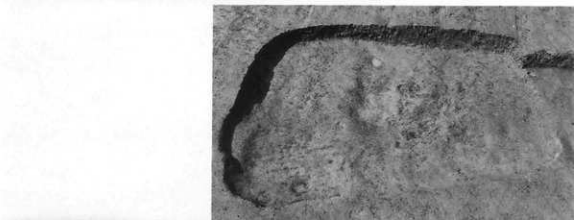
1. 2号住居址 カマド  
2. 3号住居址 カマド



3. 5号住居址遺物  
出土状況



4. 5号住居址遺物  
出土状況



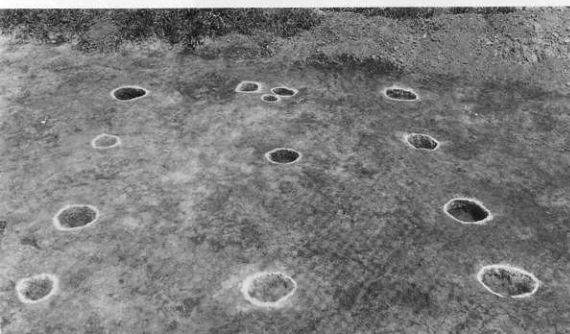
5. 5号住居址完掘



1. 1号掘立柱建物址



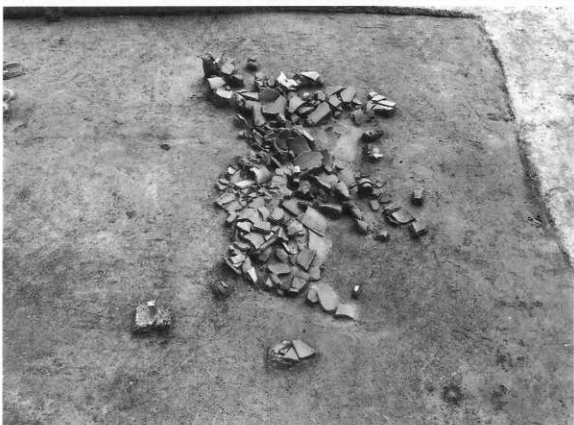
2. 1号掘立柱建物址  
ピット内土器一括  
出土状況



3. 2号掘立柱建物址



1. 瓦溜遺構（西から）



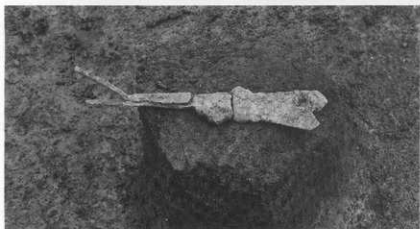
2. 瓦溜遺構（北から）



3. 2号土壇



1. 1号~3号溝

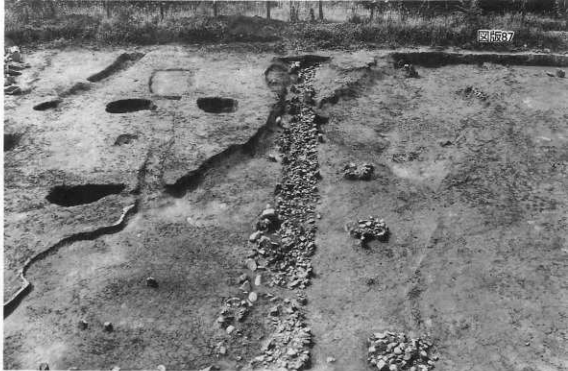


2. 1号溝、金銅製品  
出土状況



3. 1号溝と2号・  
3号住

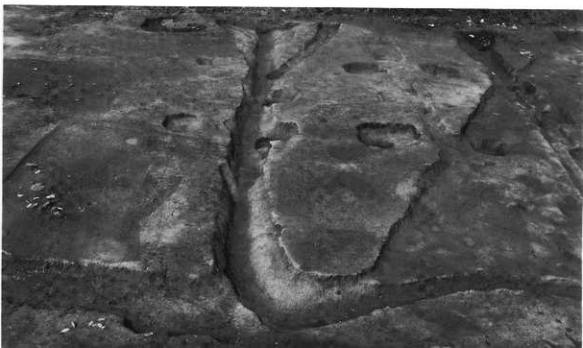




1. 5号溝（東から）



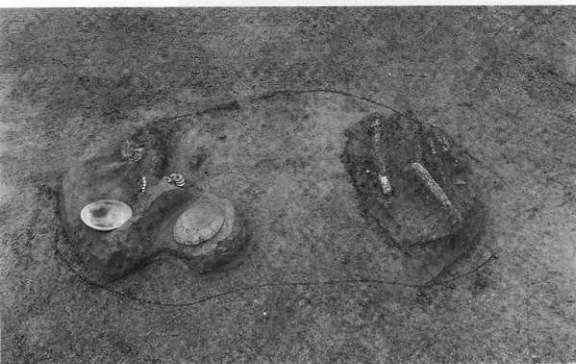
2. 5号溝（西から）

3. 5号溝内耳土器  
出土状況

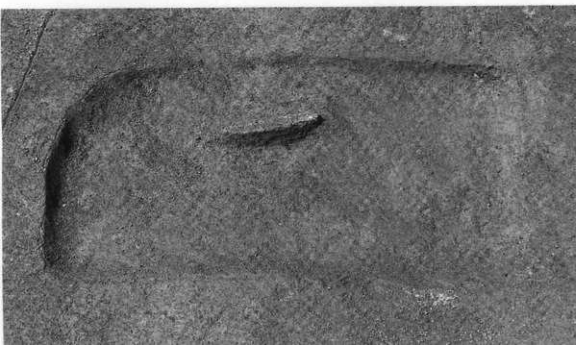
4. 6号溝



1. 9号~12号溝



2. 1号墓



3. 2号墓

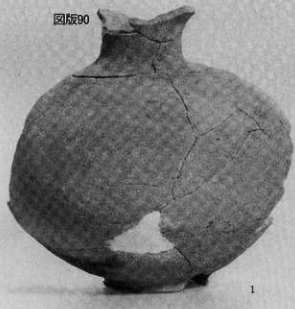


1. 1号整穴

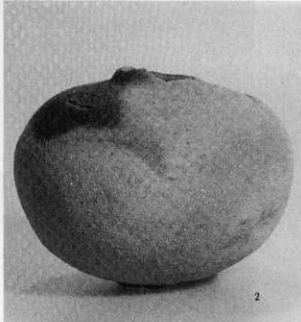


2. C地区第4トレンチ

3. C地区  
築石遺構と溝



1



2

1号低墳墓(1~8)  
3・5~8は混入品



3



4



5



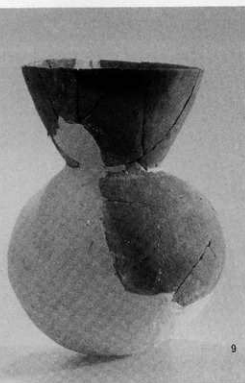
6



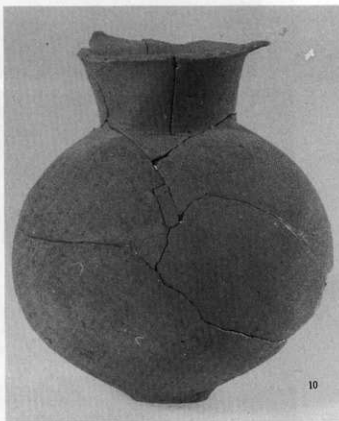
7



8

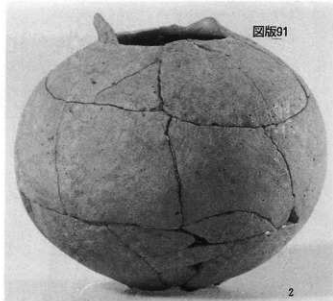


9



10

2号低墳墓(9・10)



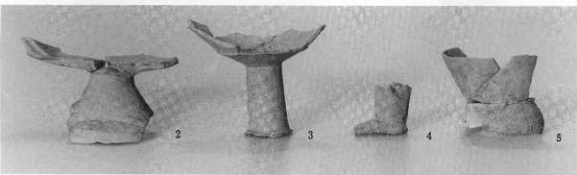
2号低墳墓  
(6~16は混入品)





1

3号低墳墓  
(1~7)

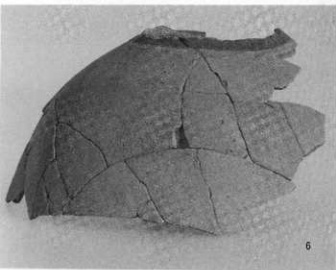


2

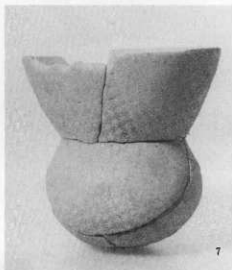
3

4

5



6



7



8



9

1号住居址  
(8~11)



10



11

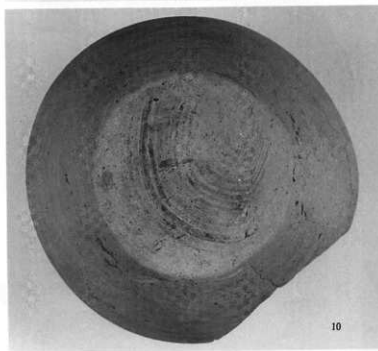
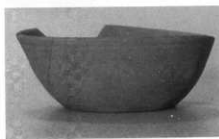
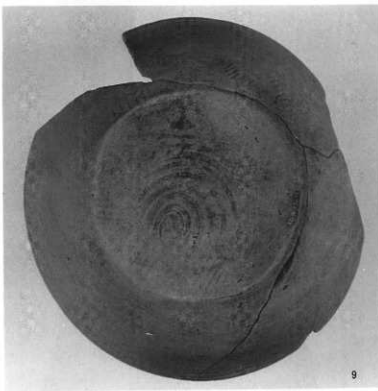


12

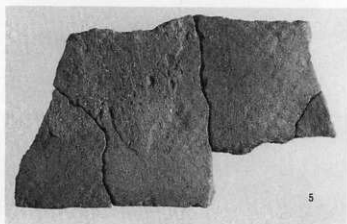
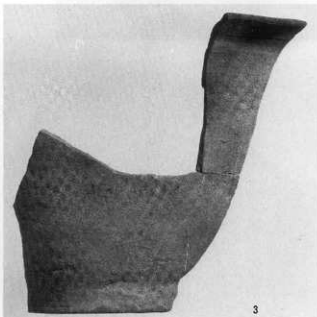
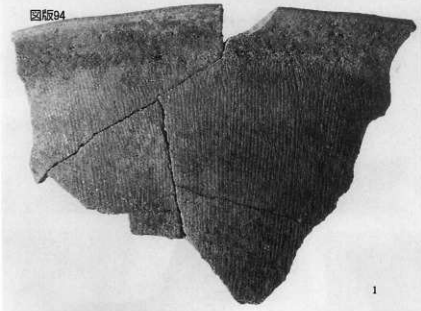


13

2号住居址  
(12・13)

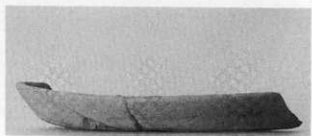


3号住  
(1~3・5)

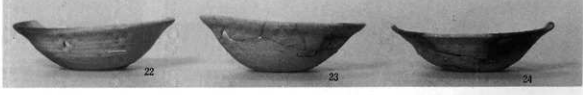
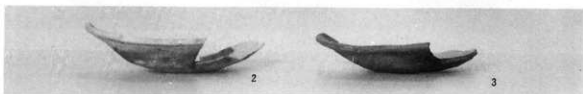
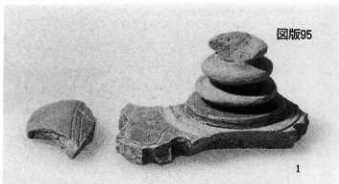


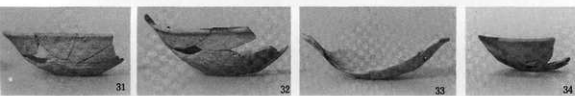
4号住

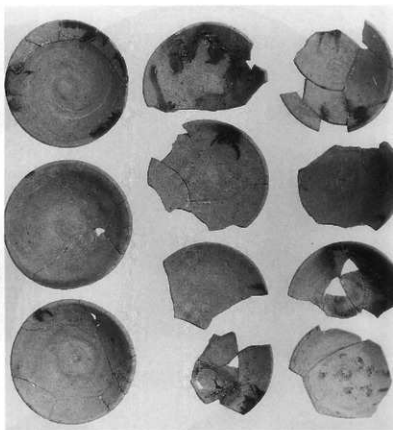
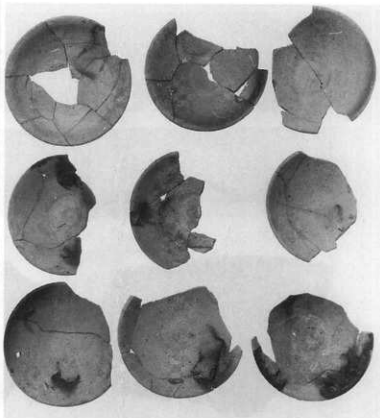
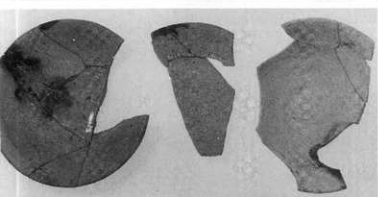
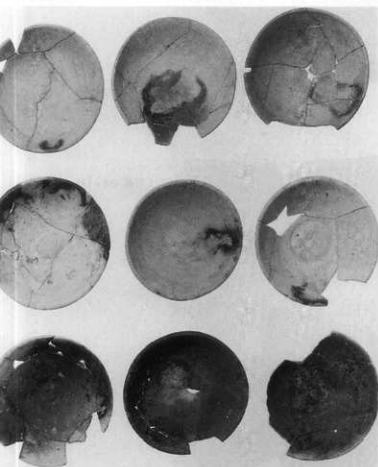
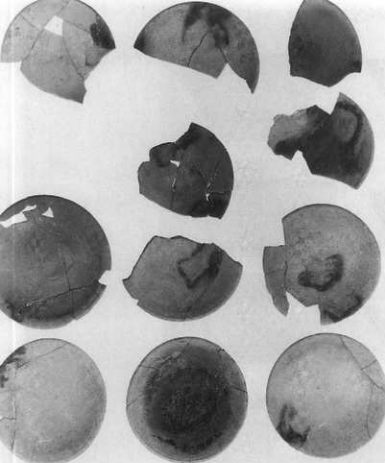
置カマド

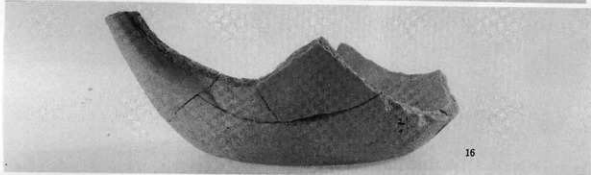
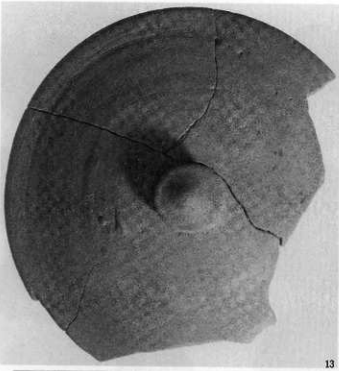
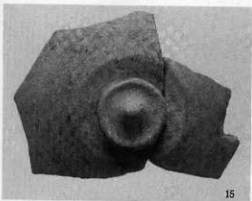
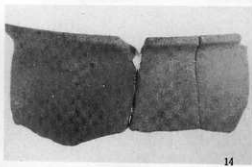
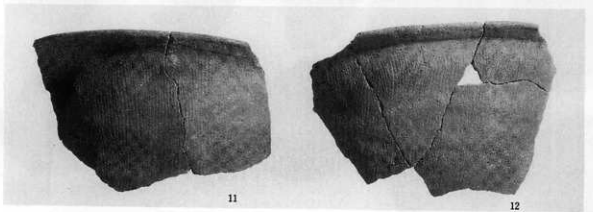
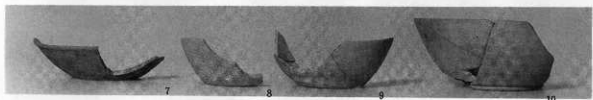






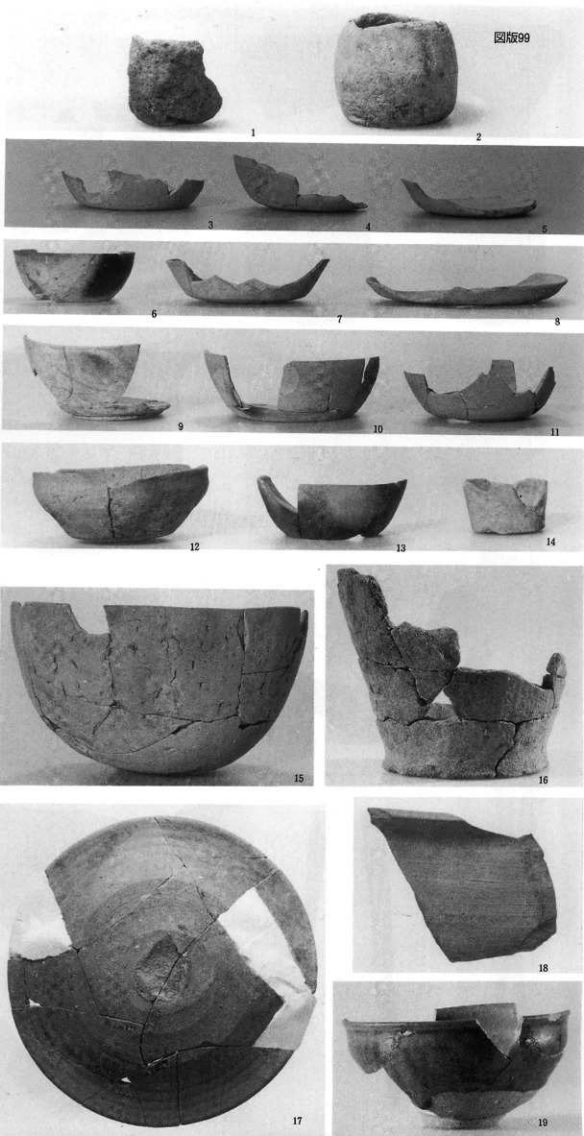




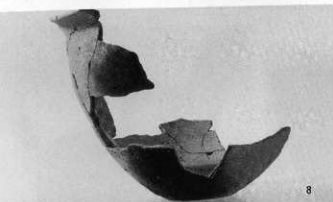
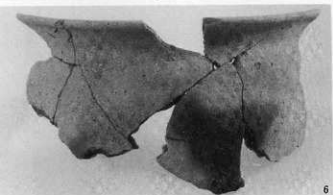
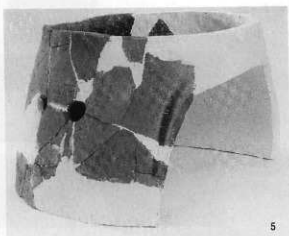
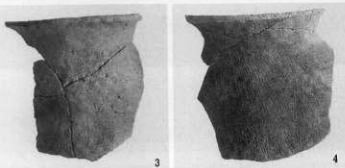
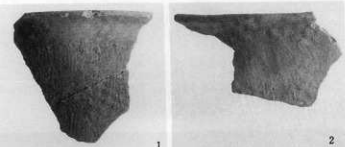


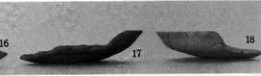
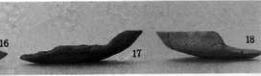
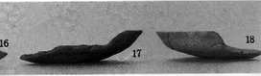
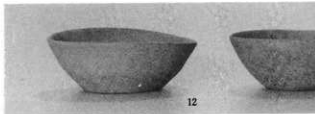
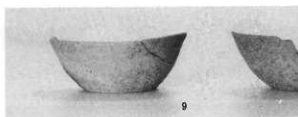
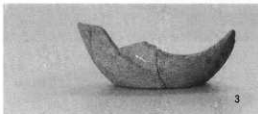
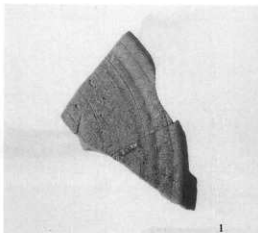
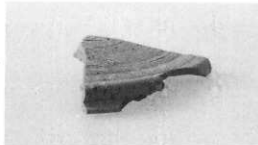
1号溝  
(1~19)  
19は混入品

図版99



1号溝  
(1~12)







1



2



3

2号低墳墓  
(4·5)



4



5



6



7



8

5号溝 (6~12)



9



10



11



12



13



14



15

2号低墳墓  
(13~19)



16



17



18

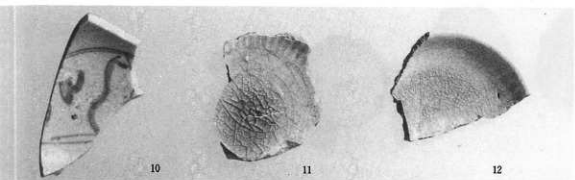
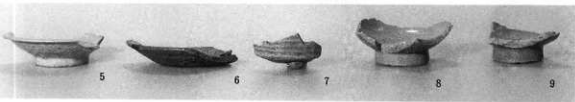


19

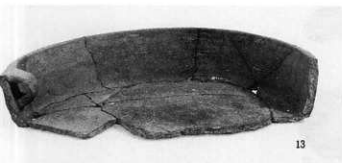




5号清  
(1~9)



2号低墳墓南清  
(10~12)

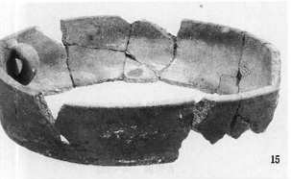


13

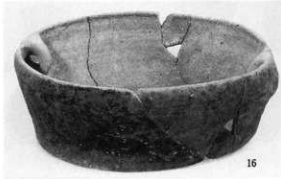


14

5号清 (13~20)



15



16



17



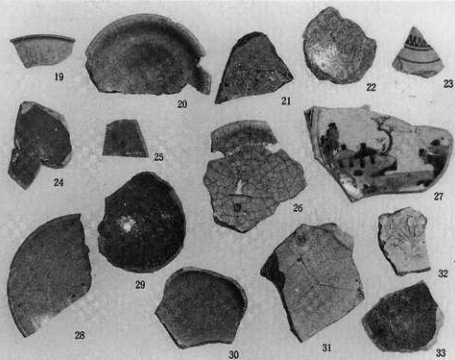
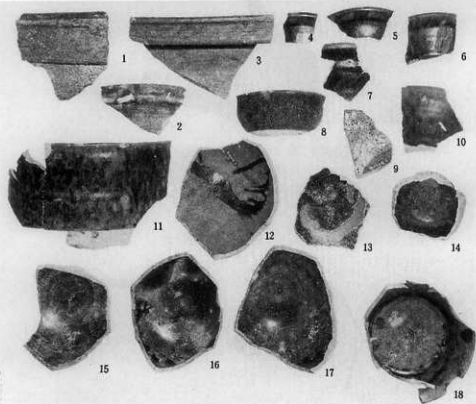
18



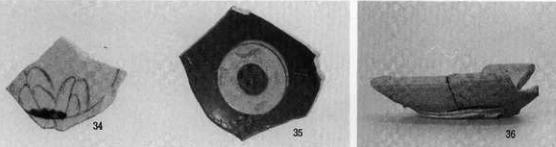
19

20

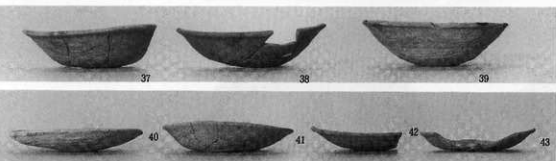
5号溝 (1~33)



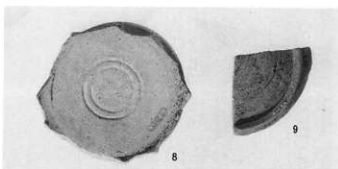
6号溝 (34~36)



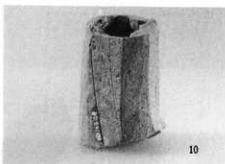
9号溝 (37~43)



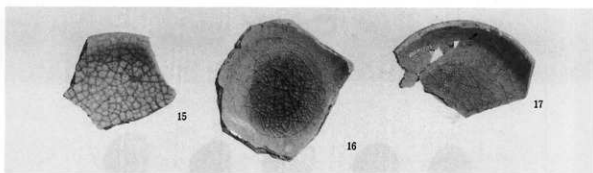
9号溝 (1~9)



10号溝 (10~11)

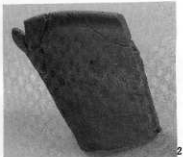


11号溝 (12~23)



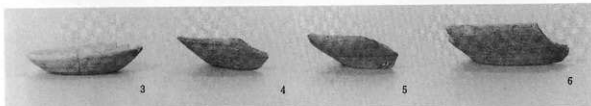


1



2

11号溝 (1)  
3号墓 (2)



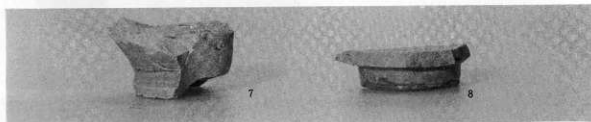
3

4

5

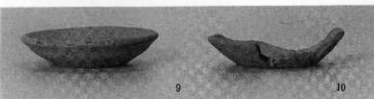
6

12号溝  
(3~8)



7

8



9

10



11

1号壑穴  
(9~18)



12

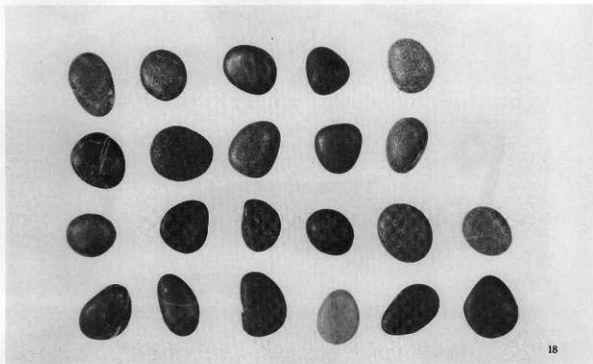
13

14

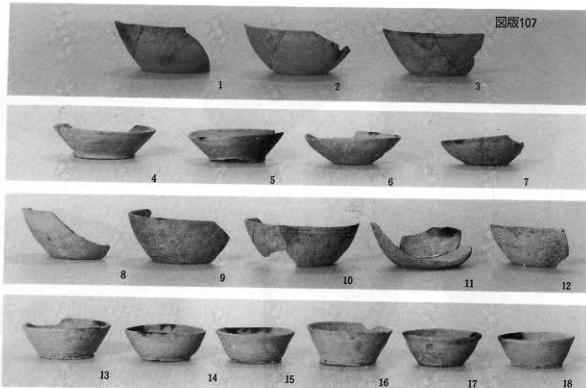
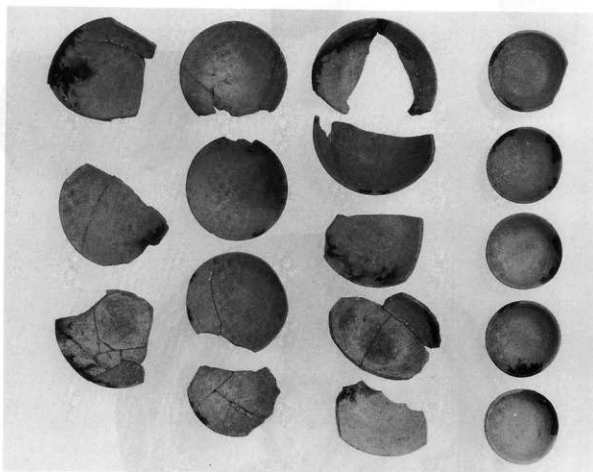
15

16

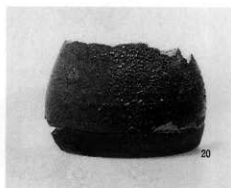
17



18

1号掘立柱  
(1~18)1号掘立柱  
灯明环 (上から)

A-4 グリッド土罐 (19)





1



2



3

2号低墳墓  
(2・3・5)



4



5

1号住(4)



6

A-3グリフ(6)



7



8



9

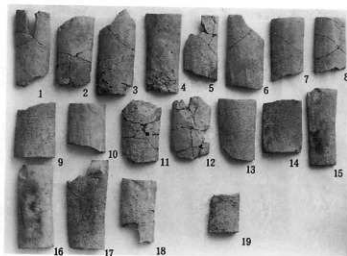


10



11

1号墓  
(7~11)



1号住出土瓦(1~19)

平瓦凸面



平瓦凹面



21 22

2号住出土瓦(20~22) 平瓦凸面 丸瓦丸瓦面



2号住出土瓦 平瓦凹面 丸瓦裏面



23 24 25 26 27 28 29 30

2号住出土瓦(24~26)

9号溝出土瓦(23)

1号溝出土瓦(27, 29, 30)



平瓦凹面・丸瓦裏面

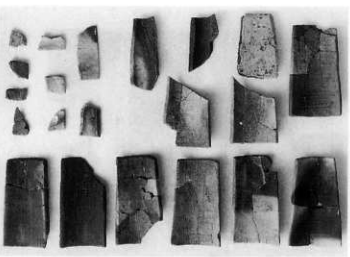
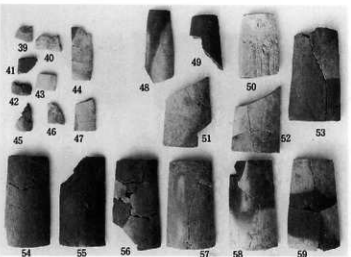


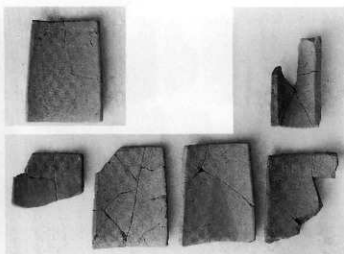
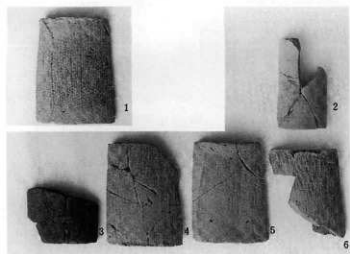
31 32 33 34 35 36 37 38

2号出土瓦(31~38) 丸瓦丸瓦面

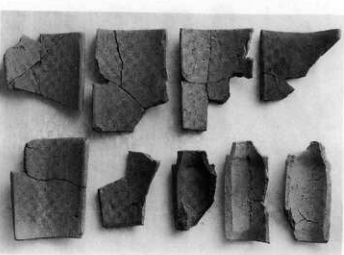
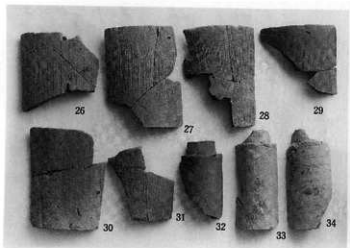
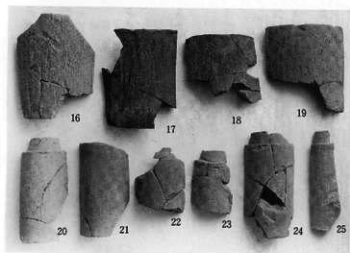
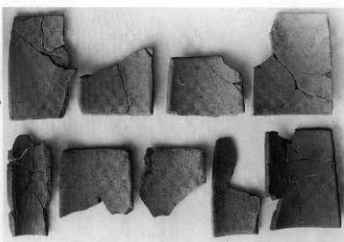
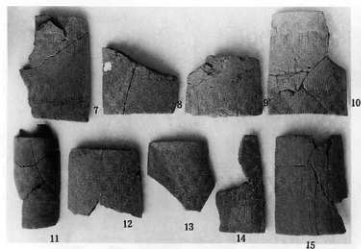


丸瓦裏面





瓦片遺跡





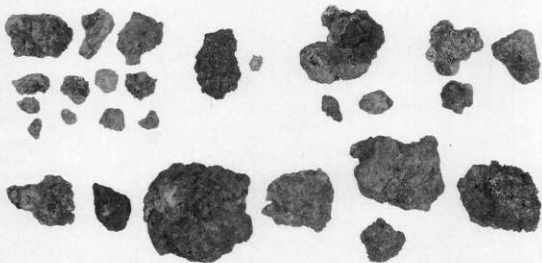
鉄製品及び鉄滓



2号住

B地区15住

4号住



1号溝



1号土塊

7号住

5号溝



平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第54集

**桜井畑遺跡A・C地区**

甲府勤労者総合福祉センター建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会

山梨県商工労働部

印刷所 興映南堂印刷所

